

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 XIII

燕木遺跡

2018

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 XIII

かぶら ぎ
蕪木 遺跡

2018

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 49 号は新潟市と福島県いわき市を結ぶ主要幹線道路で、沿線市町村と新潟市を結び、日常生活や地域経済を支える重要な基盤道路としての役割を果たしています。しかし、阿賀野市街地での幅員減少等の問題を抱え、近年の著しい交通量の増加に十分な対応ができないおらず、結果、生活環境に悪影響を与える交通上の様々な問題が生じています。

これらの諸問題の解消と都市機能活性化のため、阿賀野市六野瀬から同市下黒瀬を結ぶ延長 13.7km の阿賀野バイパスの建設が計画されました。

本書は阿賀野バイパス建設に先立ち、2014 年度と 2015 年度に実施した兼木遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、古墳時代から現在に至る長い期間、人々が活動した痕跡を見つけ出すことができました。このうち中心となる時期は古代（9世紀代）です。複数棟の掘立柱建物からなる集落で、建物の中には、廂を含めた面積が 140m² を超える大型のものがありました。これほど大きな建物は一般集落ではみられないことから、郡（沼垂郡）に関連する施設、または当地で勢力を持つ有力者の居宅であった可能性があります。

今回の調査成果が、地域の古代史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解を深める契機となれば幸いです。

この調査に関して多大な御支援と御協力をいただいた阿賀野市教育委員会並びに地元住民の方々、そして発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2018 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 池田 幸博

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県阿賀野市大字福越字熊本 1,974 ほかに所在する熊木（かぶらぎ）遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の読みは当初「かぶらぎ」として登録された。その後、地元住民の呼称から「かぶぎ」に変更したが、本書作成段階で、新潟県教育委員会（以下、県教委）と関係機関との調整を経て、阿賀野市での小字の読み「かぶらぎ」とすることを決着した。
- 2 この調査は、一般国道 49 号阿賀野バイパス建設事業に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国造事務所（以下、国交省）から県教委が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委の依頼を受けた公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が 2014 年度と 2015 年度に実施した。2014 年度の発掘調査、整理作業及び関連諸工事等の一部業務は株式会社帆苅組が、2015 年度の発掘調査、整理作業及び関連諸工事等は株式会社ノガミに委託した。発掘調査面積は 6,963m²（2014 年度：5,915m²、2015 年度：1,048m²）である。
- 4 出土品及び調査に係る資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 5 遺物の注記は、調査年度（2014 年度、2015 年度）の下二桁「14」「15」と熊木遺跡の略称「カブキ」を組み合わせて「14 カブキ」「15 カブキ」を頭に付し、出土地点（グリッド）、遺構名・層位を併記した。
- 6 本文の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 遺構番号は、種別に関わりなく通し番号とし、調査年度間での重複を避けるため 2014 年度調査の番号は一桁から三桁番号までとし、2015 年度調査は四桁番号（1,000 番以降）を使った。なお、整理作業の過程で欠番としたものもある。
- 8 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、第 VI 章を除き巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既存の地図を使用した場合は、それそれにその出典を記した。
- 10 調査成果の一部は、現地説明会（2014 年 10 月 18 日開催）、発掘調査報告会（2016 年 10 月 23 日開催）、新潟県埋蔵文化財センター冬季企画展「発掘！新潟の遺跡 2016－特集・縄文～室町時代の阿賀野－」、埋文事業団年報（2014・2015 年度）、広報紙「埋文にいがた」No.94 で公表しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 古地磁気分析については酒井英男氏（富山大学理学部）に依頼し、分析結果を第 VI 章に掲載させていただいた。
- 12 自然科学分析は、放射性炭素年代測定・骨同定・樹種同定を株式会社パレオ・ラボに、黒褐色固体物の赤外分光分析をパリノ・サーヴェイエ株式会社にそれぞれ委託し、その結果を第 VI 章に掲載した。
- 13 第 VI 章以外の執筆は鈴木俊成・荒川隆史（以上、埋文事業団）、石橋夏樹・村上章久・高橋 均（以上、株式会社帆苅組）が以下の分担で行った。なお、編集は鈴木俊成・石橋夏樹が行った。
 - 鈴木 第 I 章 1・2B ②・2C ②③、第 V 章 1・2・3、第 VII 章 3
 - 石橋 第 I 章 2C ①・2D、第 II 章 1・2、第 IV 章 2A・3、第 VII 章 1・2
 - 村上 第 I 章 2A・2B ①、第 III 章 1・2・3・4、第 IV 章 1・2C・E・F
 - 荒川 第 IV 章 2B
 - 高橋 第 IV 章 2D
- 14 発構図のトレース及び挿図・図版の作成は有限会社不二出版に委託した。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、相羽重徳氏・阿賀野川土地改良区・ト部厚志氏から多くの御教示・御協力をいたいた。ここに記して厚く感謝申し上げる。
- 16 図書館等（著作権法第 31 条第 1 項に規定する図書館等をいう）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	3
A 試掘調査	3
B 本発掘調査	4
1) 2014（平成 26）年度調査	4
2) 2015（平成 27）年度調査	6
C 整理作業	6
D 調査・整理体制	7
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9
1 地理的環境	9
A 阿賀野市の地勢	9
B 阿賀野川の変遷	9
2 歴史的環境	14
第Ⅲ章 調査の概要	18
1 グリッドと調査区の設定	18
2 層 序	18
3 旧地形と遺跡の立地	19
4 本書の記述方針	21
A 遺 構	21
B 遺 物	21
第Ⅳ章 2014（平成 26）年度調査	22
1 遺構・遺物の検出状況	22
2 遺 構	22
A 分 類	22
B 掘立柱建物	24
C 土 坑	25
D 井 戸	29
E 溝	29
F 性格不明遺構	33
G 噴 砂	35
3 遺 物	36
A 分 類	36
B 遺構出土遺物	38
C 遺構外出土遺物	43

第V章 2015（平成27）年度調査	44
1 遺構・遺物の検出状況	44
2 遺構	44
A 分類	44
B 土坑	44
C 溝	46
D 堀	49
E 道路状遺構	49
F ピット	50
3 遺物	50
A 分類	50
B 遺構出土遺物	50
C 遺構外出土遺物	52
第VI章 自然科学分析	53
1 放射性炭素年代測定	53
A 試料と方法	53
B 結果	54
C 考察	56
2 SK206から出土した焼骨	57
A 試料と方法	57
B 結果と考察	57
3 木製品の樹種同定	58
A 試料と方法	58
B 結果	58
C 考察	59
4 黒褐色固形物	59
A 試料	59
B 分析方法	59
1) 赤外線分光分析の原理	59
2) 赤外線吸収スペクトルの測定	60
C 結果および考察	60
5 阿賀野市蕪木遺跡で認められた噴砂の磁化研究	62
A 残留磁化と年代推定	62
B 蕪木遺跡で認められた噴砂と研究試料	63
C 磁化研究	64
D 磁化方向と地磁気年代の検討	65
E まとめ	66
第VII章 まとめ	67
1 中世以降の遺跡	67
2 古代遺構の時期と変遷	73
3 遺跡の評価	76

『引用・参考文献』	78
『観察表』	82

挿図目次

第 1 図 薦木遺跡の位置	2	第 25 図 歴年較正結果（1）	55
第 2 図 阿賀野バイパスと遺跡の位置	2	第 26 図 歴年較正結果（2）	56
第 3 図 試掘トレンチ位置図	3	第 27 図 SK206出土の焼けた人骨	57
第 4 図 各年度の調査区位置図	4	第 28 図 薦木遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真	58
第 5 図 造構調査風景	4	第 29 図 FT-IR スペクトル	61
第 6 図 下層トレンチ位置図	5	第 30 図 黒褐色固体物（150）	61
第 7 図 26-9T 下層調査風景	5	第 31 図 薦木遺跡の位置と磁化調査の様子	62
第 8 図 26-8T 下層の層序調査	5	第 32 図 (a) 磁化・地磁気の偏角・伏角と強度 (b) 地磁気の過去 2000 年間での変化 (c) 拡大シミュネット上での 北陸地域の地磁気変化	63
第 9 図 調査区埋め戻し作業	6	第 33 図 噴砂試料の採取箇所	63
第 10 図 造構図作成作業	7	第 34 図 site1-6 の噴砂試料の NRM の方向	64
第 11 図 土器実測作業	7	第 35 図 代表的なザイダーベルト図	64
第 12 図 近隣遺跡と旧河道	10	第 36 図 site1, 2 (噴砂 5), site3 ~ 5 (噴砂 4), site6 (噴砂 3) の磁化方向と北陸の 地磁気変化	65
第 13 図 旧河道の変遷	10	第 37 図 site6,7 の試料採取状況	65
第 14 図 周辺の自然地形と古代の遺跡分布図	11	第 38 図 古代の造構分布図	68
第 15 図 遺跡周辺の航空写真	17	第 39 図 中～近世の造構分布図	69
第 16 図 グリッド設定と調査区	20	第 40 図 近・現代の造構分布図	70
第 17 図 基本土層柱状図	20	第 41 図 薦木遺跡周辺の旧地割	72
第 18 図 造構の平面・断面形態の分類	22	第 42 図 檢出造構と旧地割	72
第 19 図 造構埋土の堆積形状の分類	22	第 43 図 身舎面積の比較	74
第 20 図 挖立柱建物の分類	23		
第 21 図 挖立柱建物の計測位置	23		
第 22 国 火葬土坑の施設各部名稱	27		
第 23 国 噴砂	36		
第 24 国 古代の土器分類図	37		

表目次

第 1 表 周辺の古代遺跡一覧表	12	第 5 表 噴砂の磁化的測定結果	65
第 2 表 測定試料および処理	53	第 6 表 噴砂 3 (site7) の磁化	65
第 3 表 放射性炭素年代測定および歴年較正の結果		第 7 表 阿賀野川以北の主な古代掘立柱建物一覧表	
	54		75
第 4 表 樹種同定結果	58		

図版目次

【図面図版】	
図版 1 調査範囲図	
図版 2 II-A・B区、I-C・D区 平面図	
図版 3 造構分割図(1)	図版 26 2014年度調査 造構(12) SD9・13・ 15・20・22・23・25・33・34・35・37・ 147・148・188、SX8・42、P380
図版 4 造構分割図(2)	図版 27 2014年度調査 造構(13) SD2・3・4・7・ 12・24・219・224・396・400、SX11・ 16・18・31
図版 5 造構分割図(3)	図版 28 2014年度調査 造構(14) SX39・42・ 44・149・150・216・217、SD9、410
図版 6 造構分割図(4)	図版 29 2014年度調査 造構(15) 噴砂3~6
図版 7 造構分割図(5)	図版 30 2015年度調査 造構(1) SK1304・ 1321・1322・1336・1355(P1・P2)・ 1575
図版 8 造構分割図(6)	図版 31 2015年度調査 造構(2) SK1576・ 1577・1578・1579・1580、SD1301・ 1302・1303・1308、P1519
図版 9 造構分割図(7)	図版 32 2015年度調査 造構(3) SD1307・ 1309・1310・1323・1325・1358・ 1378・1379
図版 10 造構分割図(8)	図版 33 2015年度調査 造構(4) SD1149、 P1460・1520・1534・1535・1536・ 1557・1568、SA1581
図版 11 造構分割図(9)	図版 34 2015年度調査 造構(5) SF1356(SK1・ 2・3・4・5、SD1)
図版 12 造構分割図(10)	図版 35 2015年度調査 造構(6) P1311・1312・ 1313・1314・1316・1317・1319・ 1320・1324・1362・1375
図版 13 造構分割図(11)	図版 36 2014年度調査 遺物(1) SB1(SD21・ 32・110)
図版 14 2014年度調査 基本土層 (26-8T・9T・11T、SD9)	図版 37 2014年度調査 遺物(2) SB1(P49A・ 57・68A・422)、SB2(P85・87・89、 SD111)、SB3(P187)、SB4(P378)、 SK27・40・183・220
図版 15 2014年度調査 造構(1) SB1	図版 38 2014年度調査 遺物(3) SK221・222・ 310・385、SD20・23・24・25、SX8
図版 16 2014年度調査 造構(2) SB1(SD32)	図版 39 2014年度調査 遺物(4) SX11・16・ 31・39・44、P76・121・136・170・ 361・362・373・410・416・423
図版 17 2014年度調査 造構(3) SB1(P60・ 61・63B・65・66・67・68A・69・70・ 71・73・74・75・80・230・232・390)、 P62・68B・114	図版 40 2014年度調査 遺物(5) 造構外、木製品 ほか
図版 18 2014年度調査 造構(4) SB1(P48B・ 49A・51・52・53・54・55・56・57・ 59・64・200・422、SD21・110)、SB3 (P201)、P48A・49B・172・176・426	図版 41 2014年度調査 遺物(6) 木製品、石製品、 鉄製品ほか
図版 19 2014年度調査 造構(5) SB2(P81・ 82・83A・84・85・86・89・93、SD111)	図版 42 2015年度調査 遺物(1) SK1321・ 1322・1336・1355、SD1301・1303・ 1307・1308・1309
図版 20 2014年度調査 造構(6) SB2(P87・ 88・90・91A・92・125・187・189)、 SB3(P190・196・199・201・202・ 205)、SB1(P200)、P91B・160・416	
図版 21 2014年度調査 造構(7) SB4(P371・ 377・378・380)、SB5(P369・374・ 376・379)	
図版 22 2014年度調査 造構(8) SK19・26・ 27・30・40・100・183・221・222・ P358、SX11	
図版 23 2014年度調査 造構(9) SK206・210・ 220・223・310、SD209・219	
図版 24 2014年度調査 造構(10) SK243・246・ 251・267・385・394・395・398	
図版 25 2014年度調査 造構(11) SE225、 SK359・428、SD2・4・5・10・35	

図版 43	2015 年度調査 遺物 (2) SD1149・ 1309・1310・1358、SF1356、P1316・ 1324・1573、造構外、土製品、金属製品	図版 64	2014 年度調査 造構 (17) SE225、SD3・5・ 35、SK428
【写真図版】		図版 65	2014 年度調査 造構 (18) SD2・3・4・7・ 9・10・13・15・20、SX11
図版 44	2014 年度調査 調査区遺景、調査区全景	図版 66	2014 年度調査 造構 (19) SD22・23・ 24・25・33・34・35・37、SX16
図版 45	2014 年度調査 SB1・2・3・4・5、噴砂 3	図版 67	2014 年度調査 造構 (20) SD12・38・ 147・148・188・219・396・400、SX11
図版 46	2014 年度調査 SK206、SE225	図版 68	2014 年度調査 造構 (21) SX8・18・42、 SD10・37
図版 47	2014 年度調査 古代土器集合写真、P114 出土アスファルト塊 (150)	図版 69	2014 年度調査 造構 (22) SX31・39・ 44・149・216・217
図版 48	2014 年度調査 造構 (1) SB1 (P66・ 70・71・80)	図版 70	2014 年度調査 造構 (23) SX150、 P114・410、噴砂 3
図版 49	2014 年度調査 造構 (2) SB1 (P61・ 63A・67・68A・390)、P62・63B・ 68B・114・425・430	図版 71	2014 年度調査 造構 (24) 噴砂 4・5・6
図版 50	2014 年度調査 造構 (3) SB1 (P52・ 53・54・57・230・232・422)、P172・ 423	図版 72	2014 年度調査 造構 (25) 噴砂 3・4・5 (site1 ~ 7)
図版 51	2014 年度調査 造構 (4) SB1 (P49A・ 55・59・64・69・73・74・75)、P49B	図版 73	2015 年度調査 調査区遺景、調査区全景
図版 52	2014 年度調査 造構 (5) SB1 (P48B・ 51・56・60・65・200・358・390)、 P47・48A・62・201、噴砂 4	図版 74	2015 年度調査 造構 (1) SK1304・ 1322・1336
図版 53	2014 年度調査 造構 (6) SB1 (SD21・ 32・110)	図版 75	2015 年度調査 造構 (2) SK1336・ 1355・1575、P1334・1335
図版 54	2014 年度調査 造構 (7) SB2 (P81・ 82・87・93)	図版 76	2015 年度調査 造構 (3) SK1576・ 1577・1578・1579、P1500・1519
図版 55	2014 年度調査 造構 (8) SB2 (P83A・ 84・85・86・91A・92)、P83B・91B・ 416	図版 77	2015 年度調査 造構 (4) SK1580、 SD1149・1301・1302・1303
図版 56	2014 年度調査 造構 (9) SB2 (P88・ 89・90・125、SD111)、SB3 (P187・ 201)	図版 78	2015 年度調査 造構 (5) SD1301・ 1302・1303
図版 57	2014 年度調査 造構 (10) SB3 (P189・ 190・199・205)	図版 79	2015 年度調査 造構 (6) SD1303・1307
図版 58	2014 年度調査 造構 (11) SB3 (P196・ 202)、SB4 (P377・380)	図版 80	2015 年度調査 造構 (7) SD1307・ 1308・1309・1376
図版 59	2014 年度調査 造構 (12) SB4 (P371・ 378)、SB5 (P369・374・376・379)、 SK19	図版 81	2015 年度調査 造構 (8) SD1308・ 1309・1310
図版 60	2014 年度調査 造構 (13) SK26・27・ 30・40・100・210、SD209	図版 82	2015 年度調査 造構 (9) SD1323・ 1325・1358・1379
図版 61	2014 年度調査 造構 (14) SK183・206・ 220・221・222・310、P358	図版 83	2015 年度調査 造構 (10) SD1379・ 1149、SA1581
図版 62	2014 年度調査 造構 (15) SK223・246・ 251・267・359	図版 84	2015 年度調査 造構 (11) SA1581、 SK1577、P1535
図版 63	2014 年度調査 造構 (16) SK385・394・ 395・398、SD2	図版 85	2015 年度調査 造構 (12) SF1356
		図版 86	2015 年度調査 造構 (13) SF1356、 P1311
		図版 87	2015 年度調査 造構 (14) P1312・ 1313・1314
		図版 88	2015 年度調査 造構 (15) P1314・ 1316・1317・1319
		図版 89	2015 年度調査 造構 (16) P1319・ 1320・1362

図版 90	2015 年度調査 遺構 (17) P1375・ 1324、噴砂 1・2	170・361・362・373・410・416・423
図版 91	2014 年度調査 遺物 (1) SB1 (SD32)	図版 95 2014 年度調査 遺物 (5) 遺構外、木製品
図版 92	2014 年度調査 遺物 (2) SB1 (P49A・ 57・68A・422, SD21・32・110), SB2 (P85・ 89, SD111), SB3 (P187), SB4 (P378)	図版 96 2014 年度調査 遺物 (6) 石製品、鉄製品 ほか
図版 93	2014 年度調査 遺物 (3) SB2 (P87), SK27・40・183・220・221・222・310・ 385, SD20・23・24・25	図版 97 2015 年度調査 遺物 (1) SK1321・ 1322・1336・1355
図版 94	2014 年度調査 遺物 (4) SD25, SX8・ 11・16・31・39・44, P76・121・136・	1301・1303・1307・1308・1309・ 1310・1358, SF1356, P1316・1324・ 1573、遺構外、土製品、金属製品

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道 49 号は、太平洋側の福島県いわき市から日本海側の新潟市を結ぶ物流・文化交流の大動脈で、新潟県内においては、新潟市と沿線市町村の相互交流を支える幹線道路であるとともに、生活道路としても重要である。2011 年 3 月発生の東日本大震災では避難路として、また救援物資の輸送路として大きな役割を果たした。

阿賀野市街地を通過する国道は幅員が狭く、その交通量（阿賀野市保田から同市中央町間 19,800 台/日、うち大型車 13.1%【国交省新潟国道事務所「阿賀野バイパス事業資料 2014」】）に対応できず、交通渋滞や騒音、交通事故などの都市機能や生活環境に与える影響が問題となっている。これらの諸問題を解決するため「一般国道 49 号安田バイパス」（阿賀野市六野瀬～同市寺社間 5.6km）と「一般国道 49 号水原バイパス」（阿賀野市寺社～同市下黒瀬間 8.1km）が計画された（第 2 図）。

2004 年 4 月に東蒲原郡安田町・京ヶ瀬村・水原町・笠神村の 4 町村が合併し阿賀野市（人口約 48,000 人）が誕生した。この合併で前記の二つのバイパスを合わせて「阿賀野バイパス」と呼称することとなつた【国交省新潟国道事務所パンフレット 2006】。このうち、安田バイパスについては 2006 年までに暫定 2 車線が供用されている。水原バイパスは 1999（平成 11）年 3 月に都市計画決定、2000 年 4 月に事業化、2003 年度には用地買収に着手した。

事業進展に伴い国交省は県教委に事業地内の遺跡の有無を照会した（2003（平成 15）年 3 月）。これを受けて県教委は平成 15 年 3 月 27 日付け教文第 1319 号で、埋文事業団に遺跡分布調査を依頼した。分布調査は水原町寺社から京ヶ瀬村下黒瀬間 8.1km を 2003 年 12 月に実施し、23か所で古代を中心とした土器を探集した。この分布調査結果から埋文事業団は、水原バイパス事業地内には周知遺跡は存在しないものの約 470,000m²において試掘調査が必要であると県教委に報告した。

遺跡の有無を知るための試掘調査は、県教委の依頼を受けた埋文事業団が 2005（平成 17）年～2012（平成 24）年にかけて断続的に実施した。蘆木遺跡に係る試掘調査は 2009（平成 21）年度・2010（平成 22）年度に実施し、13,325m²の本発掘調査が必要であることを報告した。

本発掘調査は 2014（平成 26）年度・2015（平成 27）年度の 2 年間にわたり実施した。平成 26 年度調査は、平成 26 年 3 月 31 日付け教文第 1582 号の 2 で調査依頼のあった境塚遺跡の調査期間短縮に伴うものであった。境塚遺跡の調査は当初、上層（中世）と下層（绳文）の 2 面調査を想定していたが、下層の遺構・遺物が検出できなかつたことから調査期間が大幅に短縮されたため、国交省と県教委の協議で、蘆木遺跡の新潟市寄り（北側）を急遽調査することとなつた。国交省は平成 26 年 7 月 2 日付け国北整新調第 26 号で県教委に調査依頼し、県教委はこれを受けて実際の調査を平成 26 年 7 月 9 日付け教文第 496 号の 2 で埋文事業団に依頼した。埋文事業団は平成 26 年 7 月 28 日～11 月 30 日に 5,915m²の本発掘調査を実施した。平成 27 年度調査は残りの遺跡南側部分で、平成 26 年度中に国交省と県教委との間で協議が整い、平成 27 年度当初から境塚遺跡の調査体制内での調査計画が立てられた。国交省は平成 27 年 3 月 2 日付け国北整新調第 38 号で県教委に調査依頼し、県教委はこれを受けて実際の調査を平成 27 年



第1図 熊木遺跡の位置
(国土地理院発行 平成17年「新潟」1:200,000原図に加筆)



第2図 阿賀野バイパスと遺跡の位置
(国土地理院発行 平成17年「新潟」、平成9年「新津」1:50,000原図に加筆)

3月12日付け教文第1476号の2で埋文事業団に依頼した。埋文事業団は平成27年9月7日～11月17日に熊本遺跡の残り1,048m²の本発掘調査を実施した。

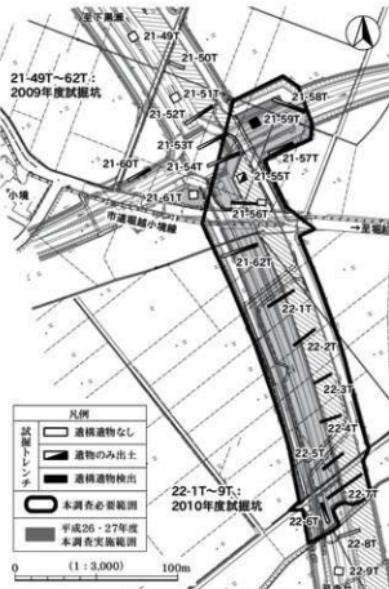
2 調 査 経 過

A 試 堀 調 査

熊本遺跡に関する試掘調査は、埋文事業団が2009（平成21）年度・2010（平成22）年度の2か年にわたり行った。調査期間は、2009年5月18日～6月17日の23日間、2010年6月3日～6月17日の11日間である。調査地点は、一般国道49号阿賀野バイパス用地である福田集落近くの福島潟西部幹線用水路から小里川間である（第2図）。試掘調査は、調査対象地に調査坑（試掘トレンチ：略号T）を任意に設定し、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行い遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。2009年度は50,715m²を調査対象面積とし、63か所に試掘トレンチを設定した（21-1T～62T、20-124T再試掘）。実質調査面積は2,065.4m²で、試掘率は4.1%である。2010年度は29,163m²を調査対象面積とし、26か所に試掘トレンチを設定した（22-1T～26T）。実質調査面積は907.7m²で、試掘率は3.1%である。

調査の結果、福田集落北西側、小境集落東側、市道南耕堀越線の北側の大きく3つの範囲で遺構・遺物を検出した。このうち福田集落北西側は、2008年度の試掘調査で新発見した石船戸東遺跡の範囲拡大である。また、市道南耕堀越線（第2図）の北側は向野遺跡として登録したが、2014（平成26）年度の再試掘調査の内容から本発掘調査は不要とされた〔佐藤2015〕。熊本遺跡は、市道堀越小境線を挟んだ21-55～59T・62T、22-1～7Tの区域で（第3図）、22-1～7Tでは表土直下から土坑・溝・ピットなどを検出し、遺構の分布密度が比較的高い。遺物は古代の土器類・須恵器を主体とし、このほかは中世の青磁・珠洲焼などが少量出土した。

以上から、熊本遺跡は21-55～59・62T、22-1～7Tの範囲とし、本発掘調査必要面積は13,325m²とした。



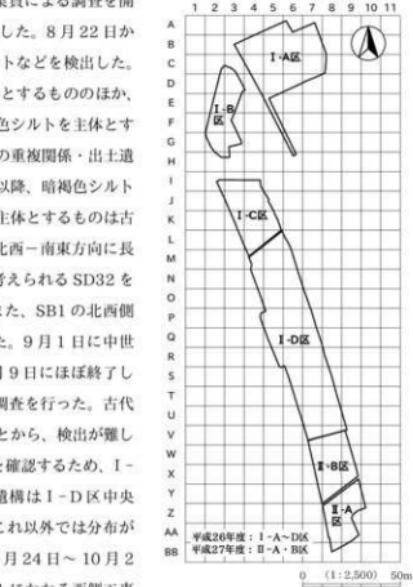
第3図 試掘トレンチ位置図

B 本発掘調査

1) 2014(平成26)年度調査

本発掘調査は、2014(平成26)年7月28日～11月30日と2015(平成27)年9月7日～11月17日の2か年にわたって行った。

2014年度の調査区は市道堀越小境線と工事用道路により4つに分断されるため、これらを境に北からI-A区・I-B区・I-C区・I-D区と便宜的に分けた(第4図)。7月28日～8月25日にバックホーによる表土掘削を行った。8月19日から作業員による調査を開始した。人力による調査はI-D区から開始した。8月22日から本格的に遺構検出を行い、土坑・溝・ピットなどを検出した。遺構埋土は灰色シルト、暗褐色シルトを主体とするものほか、地山層である基本土層IV層に類似した灰黄褐色シルトを主体とするものを確認した。埋土は基本土層及び遺構の重複関係・出土遺物から、灰色シルトを主体とするものは近世以降、暗褐色シルトを主体とするものは中世、灰黄褐色シルトを主体とするものは古代に属するものと考えた。8月29日には、北西～南東方向に長軸を持つ掘立柱建物SB1・SB1の雨落溝と考えられるSD32を検出した。いずれも埋土は古代に属する。また、SB1の北西側は西側工事用道路下へ延びることを確認した。9月1日に中世遺構の掘削を開始し、中世の遺構調査は9月9日にはほぼ終了した。9月10日から古代遺構の検出を中心に調査を行った。古代の遺構については、埋土が地山に類似することから、検出が難しかった。このため、遺構の見落としがないかを確認するため、I-D区全面を再精査した。この結果、古代の遺構はI-D区中央のP～Rグリッドラインにかけて集中し、これ以外では分布が極端に希薄となる状況を確認した。また、9月24日～10月2日にI-C・D区の境を走る工事用道路、SB1にかかる西側工事用道路の撤去及び表土掘削を開始した。古代遺構の調査は9月29日から本格的に行なった。掘立柱建物はSB1・SB2の2棟を検出した。新旧関係は、SB2→SB1であることを確認し、特にSB1は桁行長15mを超える大型建物であることが明らかとなった。建物の柱穴は、最初に5～10cm平面的に掘り下げ、柱痕跡を確認し、図面・写真等の記録後、柱痕の完掘を行なった。柱の埋土は調査区の全体写真撮影が終了した後、柱穴を断ち割り、図面・写真に記録し完掘した。また、SB1



第4図 各年度の調査区位置図

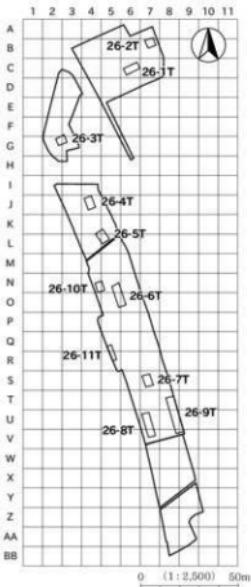


第5図 遺構調査風景

に付随する SD32・110 からは、土師器・須恵器が多量に出土した。出土遺物の年代観から、古代遺構は9世紀第3四半期が主体であると考えた。このほか、調査区では地震液状化の痕跡である噴砂を検出し、砂脈はいずれも東西方向に延びることを確認した。噴砂は SB1-P66 を貫き、中世に属する SD22 に切られることから、地震は古代以降、中世以前の間に起こったものと推定された。地震痕跡については、新潟大学災害・復興科学研究所のト部厚志准教授に現地で適時御指導を頂いた。I-A・B・C区の調査は I-D 区の調査と並行して、I-A・B 区は 9 月 18 日～9 月 24 日、I-C 区は 10 月 15 日～10 月 23 日を中心に行つた。I-A～C 区は地形が落ち込む地点にあたり、I-C 区で溝・ビットなどを少数検出したが、遺構の分布は極端に希薄であった。

現地説明会は 10 月 18 日に開催し、95 名の見学者が訪れた。10 月 29 日、11 月 7 日に航空写真撮影及び高所作業車による調査区の全体撮影を行つた。11 月 12 日、県教委が終了確認をした。その後、下層における遺構・遺物の有無の把握を目的に、調査区全域を対象に 11 か所のトレーニングを設定して調査を行つた(第 6～8 図)。

調査期間は 11 月 10 日～11 月 30 日である。この結果、いずれのトレーニングからも遺構・遺物の出土は認められなかつた。IV 層以下には V～X 層の堆積が認められ、黄橙色・灰白色・青灰色の砂・シルトの互層となる(第 17 図)。X 層は暗赤褐色～青灰色の砂層で、径 1～10cm 程度の円礫を多量に含む。V～X 層は堆積状況から河川堆積層と考えられ、層厚 1.2～1.3m を測る。また、複数のトレーニングで地震液状化の痕跡である噴砂を検出した。特に 26-9T では、幅約 50cm の噴砂を検出し、これを境に北側では大規模な土層の陥没を確認した(図版 14)。また、地震の年代を特定するため、各トレーニングから土壤サンプルを採取し、検出した炭化物について放射性炭素年代測定を行つた。11 月 30 日、富山大学理学部の酒井英男教授が訪れ、地磁気法による年代測定のサンプルを採取した。すべての調査は 11 月 30 日に終了した。



第 6 図 下層トレーニング位置図



第 7 図 26-9T 下層調査風景



第 8 図 26-8T 下層の層序調査

2) 2015(平成27)年度調査

2015年度の調査は2014年度調査区の南側隣接地でV～BBグリッドラインの範囲である。調査区には7Zから9Xにかけて農道が存在し、農道から南側をII-A区、北側をII-B区と便宜的に呼称した(第4図)。9月7日以降、現場事務所造成や資器材の搬入を行い、9月9日にはバックホーによる調査区の表土掘削に着手した。9月14日にはII-B区の表土掘削が終了した地区から遺構検出作業を行い、順序確認用のトレンチ調査も必要な地点で随時実施(9月14日～10月17日)していく。II-B区の遺構検出が1/3ほど終了したところで、南西隅から掘立柱建物を構成すると思われる埋土が灰褐色の柱穴や上端幅2mほどの東西方向の溝(SD1309)、2014年度調査で検出した上端幅1mほどの南北方向の溝(SD1149)などが検出され、溝埋土上部からは古代の土器も出土した。II-A区の9Z、8・9AA・BBの河川跡と思われた斜面地は、表土除去作業の過程で地山を大きく掘削していることが判明し、掘削範囲が現代の水田区画と一致した。9月18日にはII-B区の遺構検出作業が終了し、柱穴らしきプランを多数検出したが、この中には擾乱や柱穴にならないものも多く含まれていた。遺構掘削が本格化したのは9月19日以降である。II-A区南側の河川跡と考えた範囲の埋土からは、古代の遺物と近世以降の遺物が層位的上下関係を持たずに出土した。また、最下層では耕運機の刃が出土するなど、河川跡の斜面を利用した近・現代の水田造営が明らかとなった。そして、その造成に伴う掘削が思いのほか大きかったことで、古代河川の落ち口を明らかにできなかった。10月5日からはII-A区とII-B区境の農道の撤去作業を開始し、東西方向の溝や波板状底部を持つ道路状遺構等を検出した。農道下は調査区で唯一、近・現代の削平が少ないところで、遺構の掘り込み位置や切り合い関係を知る上で重要なため慎重に調査した。また、II-A区の溝(SD1301)埋土上層から馬の左歯列が出土したが、個体が大きいことから近世以降と考えられた。11月6日には県教委の終了確認を得て、11月12日に遺構完掘状態の航空写真を撮影し、11月17日に現地での調査は終了した。その後、11月末までに調査区の埋め戻しや農道の復旧を行った(第9図)。



第9図 調査区埋め戻し作業

C 整理作業

2014年度は本発掘調査と並行して遺物の洗浄・注記を現場事務所で行った。本発掘調査終了後は、図面・写真的記録類、遺物を株式会社帆苟組整理室に搬入し、遺構図面整理と遺物の接合・実測・撮影を行い、併せて本文の執筆を進めた。

2015年度は本発掘調査と並行して遺物の洗浄・注記を現場事務所で行った。12月～3月末は図面・写真的記録類、遺物を株式会社ノガミ整理室に搬入し、図面修正・写真整理、遺構台帳、遺物観察表などの基礎整理を行った。

2017年度は報告書刊行に向けての整理作業で、2か年にわたる本発掘調査の遺構の図面・写真図版のほか、遺物の図面・写真図版の作成や原稿の執筆を行った(第10・11図)。各種図面図版及び挿図を含む



第10図 遺構図作成作業



第11図 土器実測作業

本文の編集作業は、有限会社不二出版に遺構測量データ・遺構原図・遺物実測図・本文テキストデータ・挿図原図とそれらのレイアウト図を支給して委託し、印刷用データで納品を受けた。印刷は株式会社ワイザップに印刷用データを支給して印刷製本し、報告書を刊行した。

D 調査・整理体制

試掘調査

調査期間 2009年5月18日～6月17日 2010年6月3日～6月17日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調 査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 木村正昭（事務局長）

管 理 斎藤 栄（總務課長）

庶 務 長谷川靖（總務課班長）2009年度

松原健二（總務課班長）2010年度

調査総括 藤巻正信（調査課長）

調査担当 田海義正（試掘・確認担当課長代理）

調査員 岩野義昭（調査課主任調査員）2009年度

2014（平成26）年度 本発掘調査

調査期間 2014年7月28日～11月30日

整理期間 2014年12月1日～2015年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）

調 査 公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 木村正昭（事務局長）

管 理 熊倉宏二（總務課長）

庶 務 仲川国博（總務課班長）

調査総括 高橋 保（調査課長）

調査担当 荒川隆史（専門調査員）

2 調査経過

支援組織 株式会社帆苅組

現場代理人 伊藤 聰（株式会社 帆苅組 埋蔵文化財調査室）

調査員 村上章久（ 同 ）

高橋 均（ 同 ）

石橋夏樹（ 同 ）

補助員 佐藤直美 大瀧明美 佐藤由紀 伊藤麻美 渡部由江 坂口理恵 田中加代子

2015（平成27）年度 本発掘調査

調査期間 2015年9月7日～11月17日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）

調査 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 土肥 茂（事務局長）

管理 松田 祐（総務課長）

庶務 仲川国博（総務課班長）

調査総括 鈴木俊成（調査課長）

監理 沢田 敦（担当課長代理）

調査組織 株式会社ノガミ

現場代理人 伊藤正紀（株式会社 ノガミ 埋蔵文化財調査部）

調査担当 秋山泰利（ 同 ）

調査員 大越直樹（ 同 ）

整理作業

調査期間 2017年4月3日～2018年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 池田幸博）

調査 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 清野一善（事務局長）

管理 松田 祐（総務課長）

庶務 星野美奈（総務課班長）

調査総括 沢田 敦（調査課長）

調査担当 鈴木俊成（調査課班長）

支援組織 株式会社帆苅組

調査員 石橋夏樹（株式会社 帆苅組 埋蔵文化財調査室）

補助員 伊藤麻美

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

A 阿賀野市の地勢

熊木遺跡は阿賀野市堀越字熊木 1,974 ほかに所在する。遺跡は越後平野東部に位置し、周辺の現況は水田である。阿賀野市は、2004（平成16）年4月1日に京ヶ瀬村・笛神村・水原町・安田町の4町村が合併して誕生した。市域面積は19,274m²で、四方を新潟市・新発田市・阿賀町・五泉市と接する。

阿賀野市の地勢は、五頭連峰・笛神丘陵・新潟平野・阿賀野川によって構成される。熊木遺跡の東に位置する五頭連峰は、北から金鈴山（888.4m）・松平山（953.9m）・五頭山（912.5m）・菱ヶ岳（973.5m）・宝珠山（559m）と、南北約20kmに連なる山塊である。中でも五頭山は809年に弘法大師によって開山したと伝わり、中世には修験の地として信仰の対象とされてきた〔中野1968〕。五頭連峰の西麓には笛神丘陵が南北約18kmに及び、五頭連峰と丘陵の間には低地帯（村替低地）が存在するため両者は隔てられている。笛神丘陵は五頭連峰から流れ出た河川によって分断されている。平野部に進出した荒川川・折居川・大荒川・安野川・都辺田川は合流・分岐しながら福島潟と阿賀野川へ注ぎ込む。これらの河川は近世以降の改修工事によって、以前の河道と変わっているが、各河川の氾濫原では水量に比例した河道脇の自然堤防が残されている。また福島潟は1754（宝曆4）年以降に干拓が開始され、最終的に1966（昭和41）年から始まった国営干拓工事によって現在の姿となった。現在も残る東西5kmの環状微高地は、干拓前の浜堤と考えられる（第14図）。

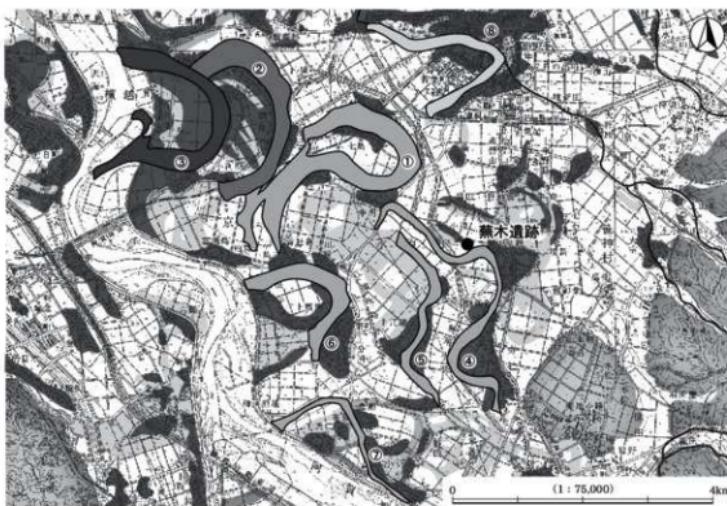
阿賀野川は日本最大級の水量を誇る一級河川である。栃木県と福島県の境にある荒海山に源を発し、山間部を北上、五泉市馬下付近から越後平野に出て、当地域を通過して日本海へと至る。河口では砂丘列の影響により出口が狭くなっているため、洪水時には氾濫を起こしやすい。これによって河道は移動し、旧河道は痕跡として現在に至っている。特に山間部から平野部へと進出した直後の阿賀野川右岸及び阿賀野川一草出川間では、蛇行した旧河道の痕跡を数多く確認できる。また、自然堤防が複雑に発達していることもそれを裏付けている。洪水災害を招きやすかった阿賀野川は近世以降に治水工事が行われ、現河道は1915（大正4）年から開始された改修工事によって直線化されたものである〔建設省北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所 1988〕。

B 阿賀野川の変遷

阿賀野川の旧河道は現地表面に多く残されており、遺跡の立地・景観を復元する上で旧河道の年代を明らかにすることは重要である。現地表面で確認できる旧河道は、明瞭であるものほど新しいと考えられる。言い方を替えれば、古い河道であるほど痕跡は薄く、埋没して現地表面で確認できないものも数多く存在するはずである。また当然ながら人工的な改変による埋没や削平、あるいは消滅といったことも想定される。なお、明瞭な旧河道同士で切り合い関係がみられるものがあり、その場合は新旧が把握できる。これらの観点から阿賀野川の河道変遷を検討した文献は数多く存在し、いくつかの旧河道についておおよそ年代が判明している。ここでは代表的な文献を概観するとともに、各河道の年代についてまとめてみた



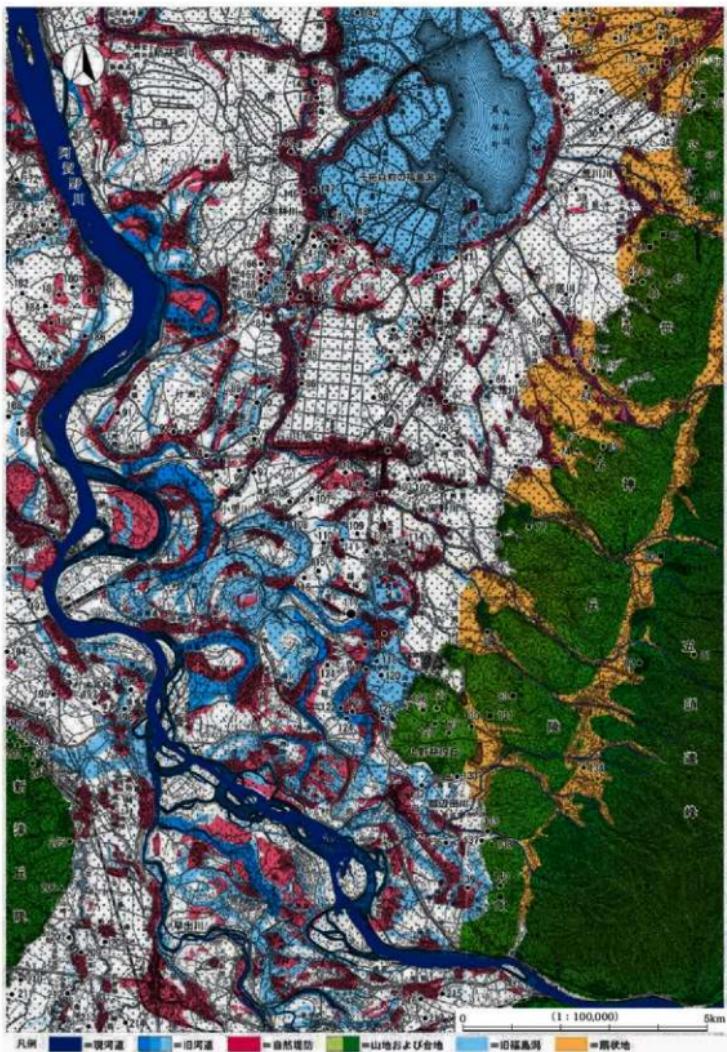
第12図 近隣遺跡と旧河道



① 近世以前 ② 正保元年以前 ③ 1647 年以前～1911 年 ④ 平安期～ ⑤ 平安～源氏以前 ⑥ 1645 年以前～1737 年 ⑦ 1645 年以前～1761 年 ⑧ 不明

第13図 旧河道の変遷

(新潟県教育委員会 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『山口野中遺跡Ⅱ』を改変、凡例は第14回参照)



第14図 周辺の自然地形と古代の遺跡分布図

(大日本帝国陸地測量部発行 大正3年「荒川」大正8年「新発田」「新潟」「荒川」「信濃川」「阿賀野川」「信濃川・荒川・越後川」と大矢雅彦・加藤泰彦 1984『阿賀野川水系地形分類図 説明書』より地形分類を合成・改変。河川については大日本帝国陸地測量部発行 大正3年「出島」「松ヶ瀬」大正15年「水庭」「新津」1:25,000、地理調査所発行 昭和23年「天王」1:25,000、国土地理院発行 平成11年「新潟」「新津」「新発田」「津川」1:50,000を参考にした。)

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	吹切	33	ヲテ	64	妙子	96	村前東A	128	上野林L	160	里飯野
2	中谷内	34	杉林	65	児久	97	山口	129	上野林M	161	上船田
3	六反谷内C	35	高山寺跡	66	下福岡	98	永室	130	上野林C	162	池田B
4	六反谷内B	36	周星敷跡	67	唐若	99	空堀	131	手川賀鉄跡	163	池田A
5	六反谷内E	37	寺山麓	68	六反田	100	水原御跡	132	宮ノ腰	164	山腹野神田A
6	広面	38	源詠の平堤宮跡	69	斐下	101	庚町	133	羽根A	165	根曾根A
7	柳田B	39	熊の鳴	70	諏訪田	102	四ツ塙員の原跡	134	ツバタB	166	大夫脛
8	松木本	40	一本松	71	卯ノ堀	103	中島	135	蘿松林	167	山腹野神田B
9	早坂	41	宮前	72	上山屋	104	葡萄島	136	八百町	168	並瀬
10	上舟根	42	堤下B	73	酒見寺跡A	105	下金田	137	山下B	169	根曾根B
11	福島	43	堤上	74	中ノ沢宮跡	106	山口野中	138	五箇沢御跡	170	高森
12	大坪	44	堤上宮跡	75	女登金屋原	107	三辺船跡	139	北郷	171	綱内
13	びきくびく	45	砥石代官跡	76	御沢寺跡群	108	堆塚	140	新削	172	直り山A
14	倒持	46	道崎宮跡	77	金星山中	109	大坪南	141	不開山	173	松山・山岡
15	八幡野	47	未明	78	田町	110	新町	142	法烏屋A	174	中山
16	朝峰	48	小舟根	79	山王田	111	七橋	143	上七地鬼B	175	城山
17	板橋	49	古田	80	多須田鉢鉢窯遺	112	市野山大坪	144	上七地鬼A	176	神明社塗
18	細田	50	中谷内	81	御武	113	久津添	145	通木	177	平山
19	古浦家ノ裏	51	塙田	82	苗岳	114	船出通跡	146	村下	178	船山前
20	古浦宮ノ裏	52	沖ノ舟	83	湯河砂子	115	石船戸東	147	内浦通	179	上の山
21	大面	53	沖ノ舟	84	山鳥屋敷	116	石船戸	148	乳突倉	180	因附A
22	馬鹿尻	53	滑橋	85	千利	117	蘿木	149	一ノ郷	181	松頭寺
23	曾根	54	塙田B	86	土居内西	118	鶴坂北	150	風魔渡	182	江尻
24	前代	55	元星屋	87	轟	119	唐塚	151	中通A	183	山のハサバ
25	志山宮跡	56	高畠	88	村下	120	鶴深岸	152	川東	184	小移上田
26	金坂	57	難波	89	舟出谷内C	121	熊居上山の山	153	中通B	185	宮尻越
27	中川上	58	真木野	90	舟出谷内C	122	花田	154	城の西	186	下尋
28	十町田	59	上西側	91	曾根	123	家通A	155	満津	187	曾我屋所
29	加茂万代舟天櫻	60	前田	92	城跡	124	六九	156	五舟櫻B	188	上郷A
30	切持	61	舟曾根	93	久入川端	125	大坪	157	五舟櫻A	189	上郷B
31	加茂万代舟天櫻	62	宮前	94	道上	126	横峯B	190	上人月	190	居屋敷
32	木食下	63	下一部	95	納日本	127	上野林J	159	間御田	191	寺島

第1表 周辺の古代遺跡一覧表

い。文章中に使用する河道の番号①～⑧は第13図のとおりである¹⁾。

まず、基本文献について触れない。阿賀野川の洪水による被害(川欠け)を記した古文書は多く残されており、中でも近世以降の記録は古絵図と集落名の対比が可能であるため、河道変遷を検討する上で重要である。既知の古文書は各市町村史等でまとめられている[梶本村 1973, 滝日村 1977, 安田町 1997 等]。

旧河道について、具体的な変遷を示したものは、建設省が発行した『阿賀野川水害地形分類図 説明書』[大矢・加藤 1984]がある。河道変遷を明らかにするために(1)表層地質(2)空中写真による地形判読(3)古地図、古文書を利用したと述べられている²⁾。旧河道の中で最も明瞭な痕跡を残す焼山(京ヶ島・七島)付近の3本について、現河道から遠い東から①正徳3(1713)年頃の河道、②宝曆12(1762)年頃の河道、③明治44(1911)年頃の河道と推定し、東から西へと短期間に変遷したと分析している。なお、③については、阿賀野川第1期改修工事(大正年間)によって放棄されたものと解説している。この説明書を軸とし、各市町村史の記述なども含んで総合的に阿賀野川の歴史を著したもののが、『阿賀野川史』[建設省北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所 1988]である。

一方、周辺の遺跡発掘調査報告書の中でも変遷案が示されている。浦部頼之は『阿賀野川水害地形分類図 説明書』で論じられた焼山(京ヶ島・七島)付近の3本の旧河道について考察し、別の見解を示している[浦部 2001]。③については明治44(1911)年としているが、「②については正保の国絵図(17世紀半ば)に①が百津渦として阿賀野川本流から切り離されていることから、少なくとも江戸時代には流路となってい

1) 文章中で扱っている旧河道は紹介した各文献と共通するものもあるが、各著者が説明に用いた番号はそれぞれ異なる。本文では便宜上これらを統一し、①～⑧の番号を付けている。

2) 使用した資料については、(1) 表層地質: 建設省計画局・新潟県 1967『新潟地区的地盤』都市地盤調査報告書大16巻、(2) 空中写真による地形判読: 采米撮影空撮写真など、(3) 古地図、古文書: 明治44(1911)年 陸地測量部の図、正徳3(1713)年の図(市川家文書<安田村誌>)、万治2(1659)年の図(市川家文書<安田村誌>)などが挙げられている。

たと推定できる。①の部分が河道になった時代は明確な資料がなく断定はできないものの、②よりも古い流路であるため、江戸時代より古い時代の流路と考えられる」と報告された。

荒川隆史は浦部頼之が用いた「正保越後国絵図」に加え、「新発田領絵図」と「越後興地全図」を併せて用い、さらに検討を加えている〔荒川ほか2012〕。それによれば「1647（正保4）年「新発田領絵図」では阿賀野川が旧河道③を流れていたことを確認できたため、旧河道①・②が阿賀野川の本流であった時期は正保年間以前であったものと推測される。また、1645（正保2）年「正保越後国絵図」には六日野近くに「百津潟」が描かれ、1816（文化13）年「越後興地全図」にも旧河道①に該当する部分に「古川蹟」と書かれた三日月状の範囲が記されており、旧河道①が阿賀野川の本流からそれで三日月湖になったものが百津潟と考えられる」と報告している。

潮田憲幸はこれまで論じられてきた焼山（京ヶ島・七島）付近の旧河道とは別の南側にある旧河道3本について、焼山付近同様に東から西へ変遷するものとしている〔潮田2014〕。現在は対岸にある深川と水ヶ曾根という地名に注目し、「正保絵図」では深川（上深川）・上福岡・水ヶ曾根が陸続きであり、本図が作成された17世紀半ばの時点では旧河道⑥が本流であったことがわかる。一方19世紀半ばに作成された「天保絵図」では深川（上深川）と上福岡（福岡村）・水ヶ曾根が対岸となっており、この間に河道の変化があったとした。旧河道④・⑤については、⑥よりも古く、④→⑤→⑥の順に変遷するとした。

以上が管見で得られた代表的な文献である。各旧河道の時期幅で見解が異なる部分はみられるが、研究手法として表層地質・空中写真による地形判読・古地図・古文書を利用した点では共通している。今後新しい知見を加えていくには、発掘調査やボーリング調査によって得られた情報を積極的に活用していくことが重要になると思われる。なお、旧河道⑥については、『安田町史』〔安田町 1997〕や『満日郷土史』〔満日郷土史編纂委員会 1977〕にも記述があり、1737（元文二）年6月の洪水で福岡・西岡・水ヶ曾根が川の変動で左岸から右岸になったという。したがって、旧河道⑥の時期幅は1645年以前～1737年といえる。また、同じく『安田町史』に1761（宝曆11）年3月の洪水により千唐仁・布目・鳥嶋が左岸から右岸に移ったとあり、「正保越後国絵図」で左岸にあることが確認できることから、旧河道⑦を比定できる。時期幅は1645年以前～1761年である。

ここでは旧河道④の時期について、これまでの変遷案に阿賀野川・庚塚遺跡での発掘調査成果を付け加えておく。庚塚遺跡は蘿木遺跡から南へ約350mの近距離に位置する古代～中世の遺跡で、西側には明瞭な旧河道④が確認できる（第12図）。2007年に発掘調査が行われ、阿賀野川の旧河道が検出された〔佐藤ほか2009〕。調査区C区を南北に横断する旧河道の東端を検出したものであり、底面から9世紀後半～10世紀初頭の土器が出土している。深さは0.82～1.1mと浅いものの、古代の阿賀野川（又は支流）として報告されている。報告書では詳細は語られていないが、位置的にみて旧河道④に該当する可能性が高いと考えられる。上層で削平を受けていたとされ、対岸にあたる孤塚遺跡では検出されていない。現地表面で確認できる旧河道④は幅50～70mほどであり、阿賀野川の本流としては小規模である。本流ではなく支流であった可能性や、網状流路と形容されるような複数の河道が同時に流れていた可能性もある¹⁾。蘿木遺跡が営まれていた平安時代には、旧河道④が流れていたと考えられる。

最後に、より古い河川について指摘した文献を紹介する。荒木繁雄は、阿賀野市水原館跡・水原代官所

1) 「河道は一般的に扇状地域では網状に、自然堤防地域では蛇行、デルタでは直線状になる」〔(財)河川環境管理財團1998〕とされ、阿賀野川においても旧河道にみられるように、上流側（山間部、馬下付近）ほど網状になっていたと考えられる。

址の発掘調査報告書〔荒木 1977〕の中で、水原市街地を通る旧河道⑧の存在を指摘している。根拠としては水原館跡・水原代官所址の中世面以下の土層から沼沢火山を起源とする火山灰が検出されたこと¹⁾、旧水原高校（現阿賀野高校）体育館建築の際に行われたボーリング調査で河床が見つかったこと²⁾の2点を挙げている。旧河道⑧は現地表面で確認することはできないが、水原市街地が立地する大規模な自然堤防は、安野川が造りだしたとは考えにくく、旧河道⑧を想定することにより理解できる（第8図）。旧河道⑧が流れていた時期は不明であるが、前述の沼沢火山との関連が立証されれば、縄文時代の旧河道となる可能性を持っている。

2 歴史的環境

律令制により定められた地方行政組織は、国一郡一里という単位で組織され、740（天平 12）年には里が廃止され、郷と呼ばれるようになった。当地域は越後國沼垂郡に含まれる。10世紀前半に編纂された「和名類聚抄」によれば、沼垂郡は足羽郷・賀地郷・沼垂郷からなり、郷数から小郡に分類される。沼垂郡は現在の阿賀北地域とする説が一般的だが、その郷配置は足羽郷が北蒲原郡中条町周辺（膚内市）、賀地郷は北蒲原郡の内陸部と加治川流域、沼垂郷は北蒲原郡の海岸部とする説〔小林 1999〕や、中世白河荘、すなわち現阿賀野市城（旧兼神村・旧安田町・旧水原町・旧京ヶ瀬村）を足羽郷に比定する説〔吉田 1902〕があり、郷の比定については、いまだに決着がついていない。なお、郡境についても、北限を荒川とする説〔田中 2005〕や旧中条町とする説〔平川 2005〕などがある。

第1節で述べたように、当地域の地形は近世以降の治水・利水工事により、大きく改変されている。改変前の状況を知るため、以下の資料を基に第14図を合成した。ベースの地図と小河川については、大日本帝國陸地測量部 1911（明治 44）年測図、地形区分については〔大矢・加藤 1984〕や〔国土交通省 北陸地方整備局・国土地理院 2004〕、阿賀野川・早出川など大河川については、国土地理院 1999（平成 11）年発行図を用いた。資料の詳細については、第14図脚注を参照して頂きたい。

遺跡は丘陵と平野部のそれぞれに分布するが、平野部では阿賀野川に近い西側には分布しない。これは古代の河道が現河道より東側にあった傍證となる。遺跡の分布する範囲が当時の河道を考える手がかりとなるであろう。また、平野部の遺跡は阿賀野川とそれ以外の中小河川の自然堤防が発達する場所に集中し、旧地形と合わせて考えることにより、いくつかの集中城を捉えることが可能である。各集中城单位で古代沼垂郡に属する阿賀野川右岸の地域について、発掘調査が実施された遺跡を中心に概観する。

笠神丘陵

笠神丘陵に点在する遺跡は、ほとんどが窯業や製鉄関連の生産遺跡である。特に須恵器生産において、県内最大級の規模を誇る。丘陵は北から真木山・陣ヶ峰（通称本田山）・真光寺山・陣ヶ峰・鳥屋ヶ峰・福永山・久保山・赤坂山と呼ばれるが、窯は北側の真木山・本田山・真光寺山に集中し、空白地帯を挟み久保山に1基存在する（以下、笠神窯）。発掘調査が行われているのは志村山窯跡（25）〔川上 1999b〕・高山寺窯跡（35）〔笠神村 2003〕・岡屋敷窯跡（36）・清見寺窯跡 A（73）〔中川・倉田 1962〕・猿沢2号

1) 沼沢火山は約 5,000 年前に噴火し、多量の軽石が阿賀野川によって当地域まで運ばれたと考えられている〔種葉 1978〕。なお、噴火した年代については、最新の年代測定の結果、紀元前約 3,400 年とされる〔山元 2003〕。

2) ボーリング調査結果を示した図（荒木 1977 第3図）には、水原高校の地点で標高約 -25m に礫層がみつかり、東西に 1km 以上離れた水原高校農場と下金田遺跡をそれぞれ対岸としている。

窯跡(76)[中川ほか1973]など、すべて北側に位置する窯である。製鉄遺跡は窯の分布に類似するが、鳥屋ヶ峰にも若干分布する点が異なる。

窯の時期は志村山窯跡が8世紀前半、高山寺窯跡が8世紀後半～9世紀初頭、岡屋敷窯跡が8世紀後半、清見寺窯跡Aが8世紀末、猿沢2号窯跡が9世紀前半とされる〔小林2004、笛沢2004〕。また、久保山の五輪敷沢窯跡(138)は8世紀後葉～9世紀初頭とされる〔春日2004c・2006〕。笛神丘陵の須恵器生産は8世紀前半に操業が開始され、8世紀後半に最盛期を迎へ、9世紀に入ると佐渡の小泊窯跡群(以下、小泊窯)の台頭により、次第に生産は縮小していくと理解されている。製鉄関連遺跡は窯跡の分布に類似するが、鳥屋ヶ峰にも若干分布する。製鉄遺跡は一般的に土器の出土に乏しく、古代と中世どちらに所属するのか判断が困難である場合が多い。赤坂山の不動院遺跡(141)では安田中学校による発掘調査が行われ、詳細な時期は不明だが須恵器杯蓋・杯などが出土したとされる〔古澤2012〕。

上野林段丘

笛神丘陵の西側にある独立丘は、上野林段丘と呼ばれている。古代の遺跡が複数存在しており、横峯B遺跡(126)〔石川ほか1981〕において発掘調査が行われている。

横峯B遺跡では、時期の異なる竪穴住居2軒が検出されている。1号住居は9世紀後半、2号住居は9世紀末～10世紀末とされる〔春日2004b〕。1号住居からは転用硯が出土している。また、上野林J遺跡(127)では少量の土師器が出土している〔渡辺ほか2004〕。

荒川川以北域(旧福島潟東側)

旧福島潟の東側、荒川川以北の一带は最も遺跡が集中する場所である。また、分布図(第14図)外となる北側にも多く分布する。曾根遺跡(23)〔家田ほか1981・1982、川上1997〕で発掘調査が行われている。

曾根遺跡では、掘立柱建物25棟と井戸9基が検出され、多様な木製品(木簡・畜串・人形・檜扁・舟杏)や円面硯、「郡」「上殿」などの文字を含む墨書土器約240点等が出土した。時期は8世紀前半～9世紀後半である。郡庁や正倉を推定できる建物こそ検出されなかつたが、官衙関連遺跡であると考えられる。また、中小河川を集める福島潟の汀線に立地し、背後には生産遺跡が多数存在する笛神丘陵があり、出土遺物には焼き亞みなどがある須恵器が多数含まれていたことなどから、不良品の選別などを行う流通拠点だったと評価されている〔坂井1996〕。

折居川・大荒川流域(旧福島潟南側)

旧福島潟の南側は折居川と大荒川の氾濫原であり、小規模な自然堤防が複雑に発達している。この一帯には遺跡が多数存在し、発掘調査された遺跡も多い。発久遺跡(65)・下福岡遺跡(66)・前田遺跡(60)・壱本杉遺跡(61)・腰廻遺跡(57)・小曾根遺跡(48)で発掘調査が行われている。

発久遺跡は、須恵器の四足横瓶が出土したこと早くから知られていた遺跡である。調査では柱穴列が検出され、掘立柱建物の存在を示唆する。出土遺物には多量の墨書土器、健兒木簡や曇様木簡など、官衙を想起させる資料が多数出土している〔川上ほか1991〕。下福岡遺跡は発久遺跡の西約200mに位置し、数棟の掘立柱建物が検出されている。時期は9世紀前葉～中葉である。また、隣接する発久遺跡との関連性も指摘されている〔古澤ほか2014、笛神村2003〕。前田遺跡・壱本杉遺跡はともに1996年度には場整備に伴う発掘調査が行われた。前田遺跡では古代の遺物は少量出土したのみだが、壱本杉遺跡では柱根が残る柱建物が1棟検出され、官衙的性格が強いものと指摘されている。遺跡の時期は9世紀後半である〔川上1999a〕。腰廻遺跡は古墳～中世にかけての複合遺跡であり、古代と思われる掘立柱建物が

2棟検出され、木簡なども出土している。「腰廻西遺跡」として報告された地点の時期は8世紀後半～9世紀後半とされ、この地点では古代に属する建物の検出はないが、少量ながら墨書き器が出土している〔川上2002・渡辺ほか2002〕。小曾根遺跡は、旧福島潟の南側汀線である自然堤防上に立地する。建物は検出されなかったが、出土遺物から8世紀後葉～9世紀初頭とされる〔川上1989・春日2004〕。

駒林川流域（旧福島潟南西側）

旧福島潟の西側、安野川と小里川が合流して北上する駒林川流域に集中城が見られる。集中城の中心からは少し外れるが、北側の上土地龟遺跡(143-144)と南側の土店内西遺跡(86)で発掘調査が行われている。

上土地龟遺跡では建物は検出されていないが、溝状造構と炉状造構が検出されている。時期は8世紀後葉～9世紀中葉である〔関ほか1993・相田2004〕。土店内西遺跡では建物は検出されなかったが、時期は9世紀前葉～中葉である〔古澤2005〕。

阿賀野川右岸流域西部（小里川以西）

阿賀野川右岸流域と安野川流域では、自然堤防上に多くの遺跡が分布している。一般国道49号阿賀野バイパスはこの沿岸に建設されるため、多くの遺跡で発掘調査が行われている。蕉木遺跡もその一つである。また、県営灌水防除事業関連での発掘調査も複数回行われている。

ここでは小里川を境に東西に分けて記述する。小里川以西では村下遺跡(88)・村前東A遺跡(96)・柄目木遺跡(95)で発掘調査が行われている。

村下遺跡では方形の区画溝の中に掘立柱建物が15棟検出され、蒲原津との位置関係から何らかの川港的な施設が存在した可能性が指摘されている〔古澤ほか2004〕。時期は8世紀第2四半期～9世紀第1四半期と報告されている。村前東A遺跡では、竪穴状造構1基が検出され、時期は8世紀中頃～9世紀前半と報告されている〔加藤ほか2010〕。柄目木遺跡では複数回の調査が行われているが、各報告書を総合すると、掘立柱建物3棟、竪穴建物8軒が検出されている。時期は8世紀後半～9世紀前半である〔佐藤ほか2010・加藤ほか2013・古澤2014〕。また、町道上遺跡(94)・堀越館跡(219)では古代の遺物のみが出土している〔古澤2002・小田ほか2001〕。

阿賀野川右岸流域及び安野川流域（小里川以東）

小里川以東では山口遺跡(97)・山田野中遺跡(106)・境塚遺跡(108)・三辺稻荷遺跡(107)・庚塚遺跡(119)・鶴深甲遺跡(120)・大坪遺跡(125)等で発掘調査が行われている。

山口遺跡は弥生～中世までの時期幅を持ち、現在までに刊行された報告書によれば、古代は8世紀中頃～9世紀中葉の時期とされる。確実に古代といえる建物は検出されていない〔高橋ほか2010〕。また、2011年度の発掘調査で、全国的にも希少な唐三彩（弦楽器玩具）が出土している〔荒川2011〕。なお、前述した柄目木遺跡と山口遺跡は旧小里川の対岸に位置しており、発掘調査では旧小里川と同じ方向の河道が検出されている。この河道の下層土には弥生～古代の包含層が流れ込んでいることから、古代にも存在した河道といえる。山田野中遺跡では建物の検出はないが、時期は9世紀前葉～中葉とされる〔村上ほか2013〕。境塚遺跡は中世を主体とする遺跡であり、古代に属する建物は掘立柱建物1棟のみである。出土土器は少量だが須恵器の年代は9世紀前半である〔荒川ほか2012〕。前述した庚塚遺跡では阿賀野川の旧河道が検出されている。9世紀後半～10世紀初頭の土器が河底から出土したため、平安時代に存在した河道と報告されている〔佐藤ほか2009〕。鶴深甲遺跡では古代の建物跡は検出されていないが、遺物の時期は9世紀～10世紀初頭である〔高橋ほか2006〕。大坪遺跡では9世紀末～10世紀前葉の土師器焼成遺構が検出されている〔荒川ほか2006〕。三辺稻荷遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・区画溝・井戸・

小鍛冶跡・炭窯が検出され、時期は9世紀後半～10世紀初頭とされる。50点以上の墨書き器が出土していることが注目される〔古澤ほか2014〕。また、水原館跡（100）、下金田遺跡（105）では発掘調査が実施されており、古代の遺物も少量出土している〔川上ほか1977、本間ほか1973〕。

以上、当地域における古代の遺跡を概観した。前述のように坂井秀弥は、福島潟が沼垂郡の中央に位置し、中小河川を集めて阿賀野川とも繋がり、さらに外海へと出られることを重要視した。福島潟の湖岸に立地する曾根遺跡が官衙的な内容を持ち、背後の笠神丘陵に存在する生産遺跡と河川で結ばれることを踏まえ、これらが有機的に関連したものと評価した。この研究成果が当地域の古代史を研究する上で基礎となっており、その後に積み重ねられた発掘調査の成果とも矛盾は生じていない。今回提示した各集中城には官衙関連遺跡が点在し、いずれも笠神丘陵から福島潟へ繋がる河川の流域に立地する。蕉木遺跡は曾根遺跡のような具体性には乏しいが、何らかの形で古代手工業生産の流通・管理に関与した可能性も想定できる。



第15図 遺跡周辺の航空写真

（1948年3月31日 米軍撮影 所蔵：日本地図センター）
□線は蕉木遺跡調査範囲。位置の関係については12・13図参照

第III章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定

蕉木遺跡の阿賀野バイパス建設予定地内における総面積は 13,325m²である。このうち 2014 年度は 5,915m²、2015 年度は 1,048m²の調査を行った。2014 年度の調査区は市道堀越小境線と工事用道路により 4 つに分断されるため、これらを境に北から I-A 区・I-B 区・I-C 区・I-D 区、2015 年度の調査区は用排水路を境に南を II-A 区、北を II-B 区と便宜的に分けた（第 16 図）。

グリッドの設定は、2011 年発生の東日本大震災後の国家座標の X 座標 =201160.000（北緯 37 度 48 分 38.23413 秒）、Y 座標 =63480.000（東経 139 度 13 分 15.44538 秒）を基点（1A 杭）とし、南北・東西それぞれ 10m の方眼を組み、大グリッドとした。大グリッドの呼称は、遺跡を覆う方眼を西から東へ向けて算用数字（1・2・3…）、北から南へ向けてアルファベット（A・B・C…）を付し、これを組み合わせた。両者の組み合わせにより「6K」「7P」のように表示した。小グリッドは大グリッドの中を 2m 四方に 25 分割した。小グリッドには 1～25 の番号を付し、北西隅を 1、南東隅を 25 となるように配列した。グリッドは、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、「6K2」「7P 25」のように表記した。ちなみに 4K1 北西隅は X 座標 =201060.000、Y 座標 =63510.000、8U1 北西隅は X 座標 =200960.000、Y 座標 =63550.000 である。

2 層序

遺跡は阿賀野川右岸の沖積地に立地する。現況は水田で、田面の標高は 9.6～10.4m を測る。調査区は昭和初期の耕地整理・開田により、遺物包含層の大部分が削平されている。このため、基本的には表土直下が遺構検出面となる範囲が大半を占める。基本層序は、下層確認調査により表土から約 2m 下までの土層を確認し、I～X 層に大別して、さらに土層堆積状況に応じて細分した（第 17 図、図版 14）。

I a 層 表土（I a 層）及び耕作土（I a' 層）。層厚約 20cm を測る。

I b 層 灰黄褐色シルト（10YR4/2）～暗灰色シルト（N3/） 水田底土。鉄分を多量に含み、層厚は約 10cm を測る。

II 層 褐灰色シルト（10YR4/1） 近世以降の遺物包含層と考えられる。層厚は約 10～20cm を測り、I-D 区では部分的に IIa・IIb・IIc 層に細分される。黄褐色シルト粒の混入度合いから、黄褐色シルト粒がほとんど含まれないものを IIa 層、黄褐色シルト粒を少量含むものを IIb 層、黄褐色シルト粒を多量に含むものを IIc 層とした。

III 層 明黄褐色シルト（10YR6/8） 層厚は 5～10cm を測り、灰黄褐色シルトを多量に含む。漸移層。

IV 層 黄褐色シルト（10YR5/6） 古代・中世の遺構検出面で、層厚は約 20～50cm を測る。I-A～C 区では還元作用により、青灰色（10BG6/1）となる。部分的に粘質シルトと砂質シルトが互層となることから、上位の粘質シルトを IVa 層、砂質シルトを IVb 層、下位の粘質シルトを IVc 層とした。また、I-D 区では部分的に地震液状化の痕跡である噴砂の影響を受け、粘性

の弱い砂質土層となる。この噴砂の影響を受けた層をIV'層とした。IV'層は暗緑灰色砂質シルト層で、上位は暗褐色シルトを多量に含み、下位では暗褐色シルトを少量含むことから、上位をIV'層、下位IV''層とした。

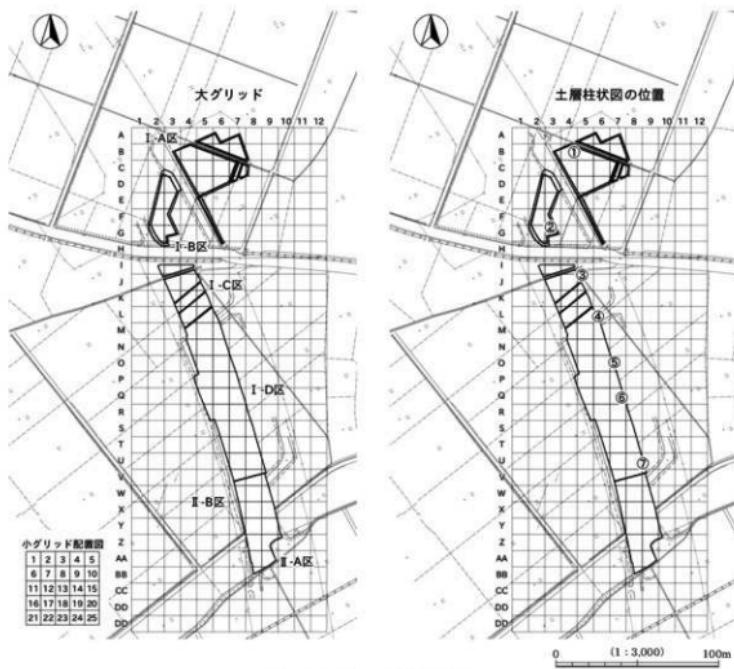
- V 層 黄橙色（10YR8/8）～灰白色シルト（10YR8/1）で、I-A・B区及びI-C区北側では色調が青灰色（10BG6/1）となる。I-A～C区では鉄分を多量に含む。層厚は8～30cmを測る。部分的にV層下位が砂質となることから、上位の粘質シルトをV a層、下位の黄橙色砂質シルトをV b層、灰白色砂質シルトをV c層とした。
- VI 層 灰白色シルト（7.5Y7/1）で、I-A・B区では青灰色シルト（10BG5/1）となる。層厚は約10～60cmを測る。粘性が特に強い上位をVI a層、下位のシルト層をVIb層とした。また、I-D区南側では灰白色～褐色の砂層となる。
- VII 層 灰白色（5Y7/1）～緑灰色シルト（10GY6/1）で、8Tでは橙色～褐灰色の砂層となり、I-A・B区では青灰色シルト（10BG5/1）となる。層厚は5～60cmを測る。基本的に灰白色の粘質シルト層であるが、粘性の強さ、鉄分の含有量、粒径の相違からVIIa～VIId層に細分した。
- VIII 層 砂層で、I-D区に堆積が認められる。基本的に青灰色砂（5BG6/1）であるが、地点により明黄色（2.5Y6/8）、橙色（7.5YR6/6）、緑灰色砂（7.5GY6/1）などの色調となる。層厚は10～80cmを測る。また、色調、粒径、礫の含有量などからVIIIa～VIIIe層に細分した。
- IX 層 緑灰色（5G6/1）～浅黄色シルト（5Y7/3）で、I-A・B区では暗青灰色シルト（10BG4/1）となる。層厚は5～70cmを測る。8Tでは灰白色～青灰色・緑灰色・浅黄色の砂層となり、色調、粒径、礫の含有量などからIXa～IXm層に細分した。
- X 層 暗赤褐色砂（5YR3/6）～青灰色砂（10BG6/1）で、径1～10cmの円礫を多量に含む。調査時にはX層から湧水が認められた。

3 旧地形と遺跡の立地

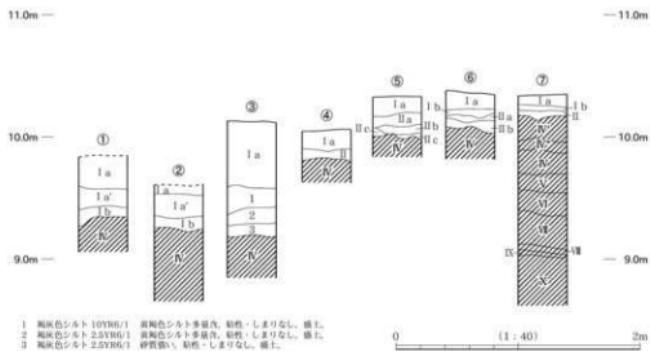
調査区では、下層の確認調査に伴い土層堆積状況を把握することができた。以下では、旧地形と遺跡の立地について述べる。

遺跡周辺の地形は、調査区外の南側に旧河道④の痕跡が認められ（第12・13図）、この旧河道は、庚塚遺跡の調査成果から、古代に機能していたものと推測されている（第Ⅱ章1）。また、福田・小境集落の線辺にも旧河道の痕跡が認められる。現在の水田面もこうした地形の痕跡を残しており、遺跡周辺を見ると、調査区北側・調査区外南側の田面は周囲より一段低くなっている状況が窺える。

古代・中世の遺構検出面であるIV層は、II-A区で標高10～10.9m、I-D区南側の8U付近では標高約10.2m、I-D区中央の6P付近で標高約9.8mを測り、高位面を形成する。これより北側のI-C区4K～5M付近にかけては標高9.5～9.7mと徐々に低くなり、北側へ向かう斜面地形となる。さらに北側のI-A・B区では、標高9.1m～9.2mを測り、高位面との比高は1m以上を測る。I-A・B区のIV層は、水の影響を受けたと考えられ、還元作用により色調が青灰色となる。また、IV～IX層中には、植物の根痕が多量に認められる。こうした状況から、I-A・B区は古代・中世期には湿地が広がる環境であつたことが推測される。遺跡は、北側の低湿地帯と南側の旧河川自然堤防上の微高地に形成されており、旧河川に沿って北西～南東方向に延びるものと推定される。



第16図 グリッド設定と調査区



第17図 基本土層柱状図

4 本書の記述方針

本書では2014年度調査と2015年度調査を第Ⅳ章と第Ⅴ章に分けて記述するが、調査方法や記述の方針、遺構・遺物の分類については共通する。遺構・遺物の説明は本文・観察表・図版・写真図版を用いて行う。遺構は種別ごとに記述し、特徴的な点や他の遺構との関係を中心に述べ、詳細は観察表に記した。遺物も同様に種別ごとに記述しているが、代表的な遺物のみを掲載した。

A 遺構

遺構番号

遺構個々の名称は、遺構の種類記号と番号で表す。遺構の種類記号はSB：掘立柱建物、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、SF：道路状遺構、SA：柵、SX：性格不明遺構、P：ピットとした。また、遺構番号は通し番号で付し、2014年度調査が1～435、2015年度調査は4桁数字を用いた。また、遺構検出時に番号を付けたが、その後の調査で遺構ではないと判断したものについては欠番とした。

図版

遺構の図版は、調査範囲図・分割図・個別図で構成している。調査範囲図は1/1,500、遺構全体図は1/250で表した。分割図は遺構全体図の縮尺を大きくし、分割して表示したもので、遺構をほとんど検出できなかったI-A・B地区を除いた範囲を1/100で10分割して表した。個別図は平面図・断面図・エレベーション図で構成している。掘立柱建物は平面図・エレベーション図を1/100、断面図を1/30で表した。井戸・土坑は平面図・断面図を1/40、出土状況図は1/30で表した。ピットの断面図は1/30、溝は1/40の断面図のみを個別図版に表し、断面ポイントは分割図に示した。断面図の土層の色調は『新版標準土色帖』【小山・竹原1998】に基づいた。写真図版は個別図にある遺構について掲載するよう努めたが、すべてを網羅してはいない。

観察表

遺構の観察表は種別・検出層位・検出位置・規模・出土遺物・切り合い関係などの項目を設定した。遺物の観察表は器種・出土位置・法量・胎土・色調・調整痕など種別に応じた内容を記した。切り合い関係の表記には記号を用い、「<」・「>」・「=」・「≠」で表示した。これは例えば「<P100」はP100が切つていることを示し、「=P100」は同時期、「≠ P100」は重複するものの、新旧が不明なことを示している。

B 遺物

掲載遺物の説明は観察表と本文に記述した。図面図版の縮尺は土器1/3・1/6で表記し、土製品・石製品・木製品・金属製品は2/3・1/2・1/3・1/8で表した。写真図版は基本的に図面図版と同じ縮尺としたが、調整痕や使用痕などは、その部分を拡大したものがある。

第IV章 2014（平成26）年度調査

1 遺構・遺物の検出状況

2014年度の調査では掘立柱建物5棟、土坑30基、井戸1基、溝37条、性格不明遺構12基、ビット121基を検出した。出土遺物は古代を中心として遺構内から出土している。出土量は土器が平箱56箱(内寸:長さ54cm・34cm・10cm)で、そのほかは木製品20点、石製品7点、鉄製品20点、アスファルト塊1点である。出土土器の時期は古代・中世・近世以降のものに大きく分けられるため、検出遺構も各時期に属すると考えられる。遺構の分布はI-D区5・6P・Qに集中し、遺構の重複が多くみられる。また、遺物は遺構間で接合するものが多くみられるが、遺構の新旧関係から同時期の遺構同士で接合したものは少ない。このほか、地震痕跡である砂脈を検出している。以下に遺構種別ごとに記述する。

2 遺構

A 分類

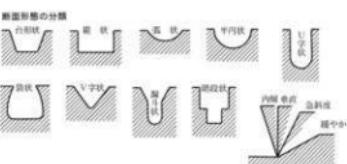
遺構の機能を検討するために平面形態を基本に分類し、遺構番号の前に遺構種別の記号を付することで区別した。掘立柱建物:SB、土坑:SK、溝:SD、井戸:SE、性格不明遺構:SXと分類している。井戸や火葬土坑のように平面形態以外の情報から遺構種別を認定した場合もある。遺構の平面形態・断面形態は和泉A遺跡の分類〔荒川・加藤1999〕、遺構埋土の堆積形状は青田遺跡の分類〔荒川・石丸・猪狩ほか2004〕に倣つた(第18・19図)。

掘立柱建物(SB)

柱穴が一定の間隔で並び、これらが辺となつて方形を形成するものを掘立柱建物〔荒川2012〕とし、可能性のあるものを含め5棟認定した。大型のSB1・2とSB1に隣接するSB3、片方の側柱のみが検出されたSB4・5である。建物型

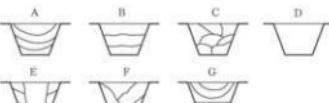
A レンズ状	地盤がレンズ状に堆積する。
B 木芋	地盤が木芋に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 砂層	砂層が一箇所のもの。
E 枕板	枕板と想われる1層が堆積するもの。
F 料石	石の間に堆積するもの。
G 木芋・レンズ	堆土・T字は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

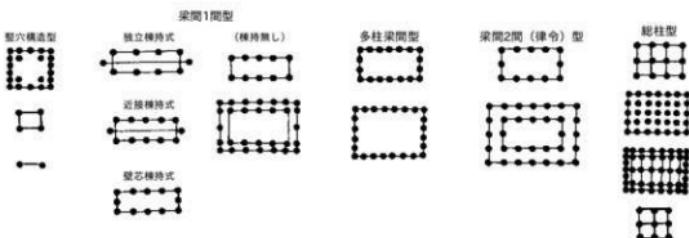
第19図 遺構埋土の堆積形状の分類〔荒川・石丸・猪狩ほか2004〕



六形抜	底部に平面を持ち、縁やかへ急斜面に立ち上がるるもの。
筋鉄	底面に平行面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるものの。
張鉄	底面に平行面を持たない張状で、縁やかへ立ち上がるものの。
半円鉄	底面に平行面を持たない張状で、底面に立ち上がるものの。
U字鉄	地盤の高さよりも深さの方が大きくて、ほぼ垂直に立ち上がるものの。
筋鉄	地盤の高さよりも深さの方が大きくて、内側した後に垂直ない外傾して立ち上がるものの。
V字鉄	底面にV字形を持ち、底面間に立ち上がるものの。
第10号	十字形のU字鉄。上面がV字形の「舟構造」からなるもの。
筋鉄鉄	地盤の立ち上がりをつくるもの。

第18図 遺構の平面・断面形態の分類〔荒川・加藤1999〕





第20図 掘立柱建物の分類〔春日2009〕

式は宮本長二郎の分類に従い、梁間一間型建物（第20図）と総柱建物に分類した。内訳は梁間一間型建物4棟、総柱建物1棟で、所属時期はいずれも古代である。各部位の計測は観察表に記し、計測位置については大坪遺跡に倣った「荒川ほか2006」（第21図）。なお掘立柱建物の組み合わせに使用していないビットは127基に及ぶため、検出できなかった建物が存在する可能性がある。

主 坑 (SK)

検出面での遺構上端の直径が 51cm 以上のも
のを土坑とした。ただし、全体の形状や埋土の堆積状況から直径 51cm に満たないものを土坑とした場合もある。また、火葬土坑と考えられる SK206 もここへ含めた。

井 戸 (SE)

水溜に曲物が設置されていた SE225 を井戸とした。阿賀野市内の中世遺跡では、木製の井戸側や水溜が設置された井戸が数多く検出されており、地域的特徴といえる。

溝 (SD)

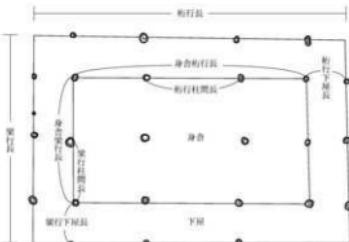
細長く掘り込まれた造構を溝とした。建物の周間に位置し、かつ軸が同一のものは建物に付属する雨落溝とし、ここには含めていない。

ピット (P)

土坑よりも小型で平面形が円形ないしは方形、径50cm以下のものをピットとした。複数を組み合わせて建物と判断できたものはここへ含めていない。

性格不明遺構 (SX)

上記以外の遺構を性格不明遺構とした。遺構の規模・平面形態などに共通性はみられない。



第21図 据立柱建物の計測位置〔荒川ほか2006を改変〕

B 掘立柱建物

SB1 (図版9・15・45・48)

6P、5～7Q、6・7Rに位置する。構成ピットはP200・48B・49A・51・52・53・54・55・56・57・422・59・60・61・390・63B・64・65・66・67・68A・69・358・80・70・71・232・230・73・74・75である。

建物型式は、梁間4間・桁行6間の総柱建物である。ただし、身舎の両方の平側と北西側の妻側の柱の出は中央の柱間より狭いことから、2間×4間の身舎の3辺に廟が付くものと考えられる。また、南東側の妻は両角に柱を持たず、出も狭いことから、2間×1間の廟が凸字状に付属する構造と考えられる。このような平面凸字形の総柱建物は上越市新保遺跡 [石川ほか2001] に類例がある。なお、P53は近接棟持柱と考えられ、この北東隣りの柱を欠いていることから、総柱型に梁間1間型が組み込まれた型式とも考えられる。柱穴の多くは方形の掘方を持ち、柱痕はすべて丸形である。

付属施設として、雨落溝と考えられるSD32・110・21がある。いずれも廟から1m前後離れた位置に平行する。SD32・110は本来一連のものであった可能性が高く、内部から多数の遺物が出土した。

このほか注目されることとしては、液状化による噴砂脈（噴砂4）が当建物のP358・66・390・53と重複する点である。噴砂脈は遺構検出面で大きな地割れとなつて確認できる。しかし、これら3基との重複か所では、噴砂脈が柱痕部の埋土を貫いておらず、掘方埋土を通るもの（P66）や、柱痕部より下部を通過して地上に噴き上がりっていないもの（P358・390）が確認された。以上から、地震の発生時期は建物が構築されていた時期ないし廃絶後間もない頃の可能性が高いと考えられる。

SB2のP86よりSD32が新しいことから、SB1の方がSB2より新しい。また、SB3のP201よりSB1のP200が新しいことから、SB3よりSB1が新しい。

遺物は雨落溝から多く出土しており、特にSD32でまとまっている。出土分布は南東側に偏り、検出面近くの1層から出土が多く、底部に向かって次第に数量を減じる。黒色土器（25～34）や、椀（3～22）を中心とする土師器片約180点、杯（1・2）を含む須恵器片16点、砥石1点（155）が出土している。SD21では北東側に分布が偏り、ほとんどが検出面近くの1層出土である。黒色土器（37）を含む土師器片約50点、須恵器片4点が出土している。SD110は検出面近くの1層出土が多く、黒色土器や、椀（38・39）を含む土師器片約10点と須恵器片7点が出土している。また、遺物が出土している柱穴も多い。ただし小破片のため図化したものは少ない。身舎の柱穴では、P57の掘方埋土（43）やP53・63B・390の柱痕、そしてP54・66・68A（40・41）・71・422（42）の柱痕及び掘方埋土から土師器片、須恵器片、鉄滓（P54）が出土している。そのほかP52の検出面近くから土師器・須恵器片が出土している。廟の柱穴では、P60・64の掘方埋土やP48B・51・55・59・73・74・230・358の柱痕、そしてP56の柱痕及び掘方埋土から土師器片、須恵器片、鉄滓（P230）が少量出土している。そのほか、柱痕・掘方埋土の区別はできないがP49A（44）・65・200から土師器片が出土している。

接合関係では、雨落溝SD32出土の黒色土器椀（25）がP361出土のものと接合した。また、廟の柱穴P64出土の須恵器甕がP361出土品と接合した。

これらの遺物の年代から、建物の時期は9世紀第3四半期と考えられる。

SB2 (図版10・19・45・54)

5・6P、6・7Qに位置する。構成ピットはP92・91A・90・89・125・88・87・86・85・84・83A・

82・81・93 である。P86 と SD32 との重複関係から、SB2 が SB1 より古い。

梁間 1 間、桁行 6 間の梁間一間型建物である。P121・45・124 はおおむね南東平側に平行しており、廂の可能性もある。また、SD111 は北西平側に平行しており、雨落溝の可能性がある。柱穴は方形の掘方を持つものが多く、柱痕は丸形である。

遺物は雨落溝の SD111 の埋土上位から須恵器無台杯（45）、土師器片 4 点が出土している。柱穴では、P86・92 の掘方埋土、P82・89（46）・125 の柱痕、P85・87（57）・90 の柱痕及び掘方埋土から須恵器・土師器片が出土している。特に P85 はまとめて出土しており、黒色土器を含む土師器片約 45 点、杯（48～55）・杯蓋（47）・壺・瓶（56）を含む須恵器片約 20 点が出土している。出土数は掘方埋土からのものが多い。

接合関係では、P82 出土土師器鍋が P152 と、P89 出土須恵器杯（46）が重複する SD24 や SK221・SX16 と、P85 出土須恵器杯（48）が P361 と、P85 出土須恵器杯蓋が SD24 と、P87 出土須恵器甕 1 点（57）が P45 や SK221・SX44 のそれぞれの出土品と接合した。

これらの遺物の年代は 9 世紀中葉と考えられ、SB2 が SB1 を切っていることと時期的に合致している。

SB3（図版 8・20・45・57）

7R に位置する。構成ピットは P199・205・202・201・189・187・190 である。P196 は小規模なものだが、位置関係から伴う可能性がある。

梁間 2 間、桁行 2 間の梁間一間型建物である。ただし、北東平側中央の柱を欠く。SB1 に接し、これと柱通りがおおむね一致する。しかし、P201 が SB1-P200 より古いくことや、SB1 の雨落溝 SD21 が SB2 と重複することから、両者は異なる時期のものと考えられる。遺物は P187（58・59）の掘方埋土、P189・202・205 の柱痕、P201・190 の柱痕及び掘方埋土から須恵器・土師器片が少数出土している。

SB4（図版 8・21・45・58）

5・6R に位置する。構成ピットは P371・378・377・380 である。調査区内に組み合う他の柱穴を確認できないため、梁間 1 間、桁行 3 間の梁間一間型建物の可能性が高い。遺物は P378（60）・380 の柱痕から須恵器・土師器片が少数出土している。そのほか、P371 から土師器片が出土している。

SB5（図版 8・21・45・58）

5・6R、6S に位置する。構成ピットは P369・374・376・379 である。調査区内に組み合う他の柱穴を確認できないため、梁間 1 間、桁行 3 間の梁間一間型建物の可能性が高い。遺物は P369・374・376 の掘方埋土から須恵器・土師器片が数点出土した。

C 土 坑

SK19（図版 12・22・59）

5N に位置する。平面形は円形である。埋土はレンズ状堆積で 2 層に分層した。2 層は炭化物を多量に含み、焼土粒は微量に含む。底面・側壁に被熱の痕跡が認められないため、焼土粒・炭化物は埋土に混入していたものと判断される。底面は平坦、側壁は緩やかに立上がる。遺物は出土しなかった。

SK26（図版 10・22・60）

5P に位置し、SK27 の西側に隣接する。平面形は梢円形である。埋土はレンズ状堆積で 2 層に分層した。灰黄褐色シルトが主体である。1・2 層はいずれも炭化物を含む。底面はやや凹凸、側壁は緩やかに立上がる。遺物は出土しなかった。

SK27 (図版 10・22・60)

5P に位置する。SX11 と重複し、これより古い。平面形は梢円形である。埋土はレンズ状堆積で 2 層に分層した。隣接する SK26 の埋土に類似する。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立上がる。遺物は 1 層からの出土が多く、須恵器片 2 点と小甕 (61) を含む土師器片約 20 点が出土した。

SK30 (図版 10・22・60)

6P に位置する。SD3・SX11 と重複し、これらより古い。平面形は梢円形である。埋土は 2 層に分層し、灰黄褐色シルトが主体である。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立上がる。遺物は須恵器甕片 2 点、土師器片 7 点が 2 層を中心に出土した。確実ではないが須恵器甕は SB2 (P87)・SK221・SX44 出土の須恵器甕 (57) と同一個体の可能性がある。

SK40 (図版 9・22・60)

7Q に位置する。SD24・25 と重複し、これらより古い。底面は凹凸があり、側壁は緩やかに立上がる。埋土は 3 層に分層し、褐灰色シルトが主体である。また、1・2 層は炭化物を含み、特に 1 層に多い。遺物は 1 層から杯 (62)・甕 を含む須恵器片 5 点、黒色土器を含む土師器片約 50 点と近・現代の磁器片 1 点が出土した。接合関係では須恵器甕が重複する SD24 出土のものと接合した。なお、近・現代の磁器は混入の可能性がある。

SK100 (図版 9・22・60)

6Q に位置する。SB1-P66 と重複し、SK100 が古い。平面形は梢円形である。埋土は 2 層に分層し、にぶい黄褐色シルトが主体である。1 层は微細な炭化物を少量含む。底面は平坦で、側壁は急斜度に立上がる。遺物は 1 層から土師器片 3 点が出土した。

SK183 (図版 8・22・61)

6R に位置する。平面形は梢円形で西端は調査の排水溝で壊されている。埋土はレンズ状堆積で 2 層に分層し、1 层は褐色シルトで焼土粒・炭化物を含み比較的厚く、2 層はにぶい黄褐色シルトで比較的薄く堆積する。遺物は 1 层から長胴甕 (65) と小甕 (64) を含む土師器片が出土している。

SK206 (図版 7・23・61)

8S に位置する。重複する SX42 の底面で検出していることから、削平を受けていると考えられる。SX42 の深さは検出面から 10 ~ 20cm である。SK206 の平面形は隅丸長方形の土坑と溝が組み合わさった T 字形を成している。溝は土坑の底面に掘り込まれ、西端から東へ直線的に延び、土坑外へ張り出している。張り出し部の上端は扁状に広がり調査区外へ続く。規模は土坑部分が南北 119 × 東西 80cm、底面の溝は幅 30 × 長さ 130cm、張り出し部の上端は幅 30 ~ 70cm である。土坑の長軸方向は N-10°-W とほぼ北を指す。断面形は箱状で壁面は急斜度に立上がり、深度 25cm を測る。溝は土坑底面より約 5cm の深さで掘りこまれている。土坑東側の壁面と溝の接点は、地山が被熱し赤く硬化している。埋土はブロック状に堆積し、7 層に分層した。1 ~ 5 層は土坑の埋土で、1 层は黄褐色シルト、2 層は灰黄褐色シルト、3・4 層は焼土・炭化物を含むにぶい黄褐色シルト、5 層は焼土塊である。6・7 層は焼成時及びその直後のもので、6 層は炭化粒子層、7 層は焼土・炭化粒子を含むにぶい黄褐色シルトである。5 層とした焼土塊は土坑の北東から南にかけての壁沿いで出土していることから、土坑のすべての壁面は東壁同様に被熱し、崩落した結果、5 層を形成したと推測した。3・4 層からは多量の炭化材、焼土とともに少量の骨片が出土した。骨片は土坑中央よりやや南側に集中し、骨格部位が把握できるものも含まれ、最大で長さ約 6cm のものもあった。分析によりヒトと同定され、まだ乾燥せざ軟組織が付着した状態で高

温の火により焼かれていること、そして、部位は「焼骨あるいは尺骨」(腕)と「腓骨」(脚)の可能性が指摘されている。なお、骨片と炭化材以外の遺物は出土しなかった。出土炭化材は放射性炭素年代測定の結果、13~14世紀頃の年代が得られており、鎌倉時代後期~室町時代の遺構と考えられる(第VI章参照)。

遺構の検出状況から、遺体を荼毘に付した火葬土坑と考えられる[吉澤2013]。火葬土坑は墓そのものではなく、一回の火葬を行うための小型土坑であり、骨は収骨され別の場所に埋葬するため、大半は残っていない。阿賀野市内では同様の調査事例として山口遺跡[高橋ほか2010]と柄目木遺跡[加藤ほか2013]が知られており、県内の事例は石垣義則によりまとめられている[石垣2012]。SK206は本体である隅丸長方形土坑に溝が付属するもので、溝は遺体を焼くときに空気を取り入れ燃焼効率を上げるための通気溝(火通し溝)であると考えられる。前述したように、東壁と溝の直交部は被熱し赤く硬化していたが、これは空気取り入れ口の部分が高温になるためで、他の壁面より焼け方が激しく硬化面が厚く残ったと考えられる。張り出し部が扇状に広がっているのは、空気の取り入れ用の土坑と火葬土坑を通気溝で繋いだ、連結タイプであった可能性も想定できよう(第22図)。また、旧安田町における火葬の民俗事例では遺体が焼き上がるとき骨を拾いやすいように火床の真ん中を鍔で広げ、骨をヤリ穴(通気溝)に集めたとある[山口1997]。SK206では中央の通気溝部分に炭化物が集中し、少量の骨片がみられたことから、民俗例の記述と合致し興味深い。なお、火葬土坑の調査事例では横臥屈膝で北頭西顔に向かって焼かれる場合が多いとされる。これは仏教の思想に基づき、「頭北面西右脇臥」という入滅した釈迦の姿に倣っていると思われる[原田1994・鈴木2005]。SK206の大きさは南北約120cmと小さく、骨片の出土位置は南側に集中する。出土した骨片が原位置を保っているという前提で、頭北面西右脇臥で火葬が行われたと想定すれば、下肢骨の位置にある。分析で同定された骨片は断定されてはいないものの、焼骨・尺骨・腓骨の可能性が指摘されていることから、腕で膝を抱えた横臥屈膝状態を想定しても矛盾はない。

SK210(図版10・23・60)

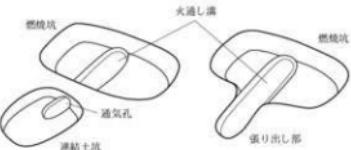
5Pに位置する。SD209と重複し、SK210が新しい。平面形は楕円形である。埋土は褐色土を基調とし、含まれる黄褐色シルトの量で2層に分けた。底面は平坦で側壁は緩やかに立上がる。遺物は出土しなかった。

SK220(図版10・23・61)

5Pに位置する。SD219、SK310と重複し、これらより古い。平面形は方形である。埋土は单層で、にぶい黄褐色シルトが堆積する。底面は平坦で、側壁は緩やかに立上がる。遺物は有台杯(63)・甕を含む須恵器片4点と土師器片3点が出土した。確実ではないが須恵器甕はP87(SB2)、SK221、SX44出土の須恵器甕(57)と同一個体の可能性がある。

SK221(図版9・22・61)

5・6Qに位置する。SB1-P358、SK222・385、SD224と重複し、SB1-P358より古く、これ以外の遺構より新しい。平面形は長方形である。埋土は5層に分層した。1~4層は炭化物を多量に含む。底面は平坦で、側壁は緩やかに立上がる。遺物は1~4層に出土したが1・2層のものが多い。杯・有台杯(66)、甕・甕を含む須恵器片約10点と黒色土器(67・69)、長胴甕(68)を含む土師器片約60点が出土したほ



第22図 火葬土坑の施設各部名称〔篠原2009より〕

か、1層から近世以降の陶磁器片1点が出土した。接合関係では、P87(SB2)出土品(57)やSX11出土品と接合する須恵器甕、SK385、SX16、P89(SB2)、SD24出土品と接合する須恵器杯がある。

SK222 (図版9・22・61)

5Qに位置する。SK221・385と重複し、SK221より古く、SK385より新しい。埋土は3層に分層した。灰黄褐色・にぶい黄褐色シルトなどの暗色系シルトが主体で、SK221のものと色調が類似する。また、いずれの層にも炭化物が含まれる。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立上がる。遺物は1・2層から須恵器片1点と椀(70)・黒色土器を含む土師器椀片7点が出土した。重複しているSK221とは遺物の接合はみられなかった。

SK223 (図版9・23・62)

5Qに位置する。西端は調査区外へ延びる。埋土は4層に分層し、灰黄褐色・にぶい黄褐色シルトなどの暗色系シルトが主体である。底面は平坦で、側壁は緩やかに立上がる。遺物は出土しなかった。

SK243 (図版10・24)

4・5Pに位置する。調査区壁によって分断されているが、平面形からSD435と同一遺構の可能性が高い。同一であった場合は土坑ではなく、溝の一部である。埋土は4層に分層し、灰色系シルトが主体である。遺物は1層から甕を含む須恵器片4点と土師器片1点、近・現代の陶磁器片7点が出土した。近・現代の遺構と考えられる。

SK246 (図版6・24・62)

8Vに位置する。SD9と重複し、これより古い。遺構は噴砂の影響を受けたIV'層を掘り込んで構築されている。埋土は3層に分層し、炭化物・焼土粒を含む。1・2層にはにぶい黄褐色シルト・褐色シルト・黄褐色シルトがブロック状に堆積することから、埋め戻された可能性がある。底面は平坦で、側壁は急斜度に立上がる。遺物は1層から土師器片1点が出土した。

SK251 (図版6・24・62)

8Uに位置し、噴砂の影響を受けたIV'層を掘り込んで構築されている。平面形は梢円形である。埋土は3層に分層したが、1層の黒褐色シルトが主体である。底面は平坦で、側壁は急斜度に立上がる。遺物は1層から須恵器杯片1点、土師器片2点が出土した。

SK267 (図版6・24・62)

7Uに位置する。SX150と重複し、これより古い。平面形は円形である。埋土は2層に分層した。1層は暗褐色シルトとにぶい黄褐色シルトがブロック状に堆積する。埋土堆積状況から、埋め戻された可能性がある。底面は平坦で、側壁は急斜度に立上がる。遺物は1層から土師器片1点が出土した。

SK310 (図版10・23・61)

5Pに位置する。SD219・SK220と重複し、SD19より古く、SK220より新しい。平面形は方形である。埋土は2層に分層し、炭化物を少量含む。底面は平坦で、側壁は緩やかに立上がる。遺物は1・2層から出土し1層からのものが大半である。杯(71)・甕を含む須恵器9点と黒色土器、椀(72)・小甕(73)を含む土師器片約20点が出土した。

SK359 (図版7・25・62)

7Tに位置する。平面形は円形である。断面形は台形状を呈し、深さ60cmを測る。埋土は4層に分層した。1層は暗褐色シルト。2層はオリーブ褐色シルト。3層は暗褐色シルトとオリーブ褐色シルトの混合土。4層は砂質の暗褐色シルトとなる。遺物は4層から黒色土器片1点、1層から土師器片1点が出土している。

また、3層から礫が出土した。

SK385 (図版 9・24・63)

5Qに位置する。SK221・222と重複し、これらより古い。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立上がる。埋土は3層に分層した。黄褐色シルトが主体で、1・2層には炭化物が少量含まれる。遺物は1・2層で出土している。重複するSK221と接合した有台杯(66)・甕を含む須恵器片6点と黒色土器(75)、碗を含む土師器片約30点がある。

SK394 (図版 12・24・63)

4Mに位置する。SK395と重複し、これより新しい。平面形は梢円形である。埋土は4層に分層した。1層は黒褐色シルトで、炭化物を少量含む。2～4層は灰黄褐色シルトが主体となり、いずれも1層と同様の黒褐色シルト含む。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立上がる。遺物は出土しなかった。

SK395 (図版 12・24・63)

4Mに位置する。SK394と重複し、これより古い。平面形は梢円形と推定される。埋土は2層に分層した。いずれも炭化物を含む。底面はやや凹凸があり、側壁は緩やかに立上がる。遺物は出土しなかった。

SK398 (図版 11・24・63)

4Nに位置し、東西方向に延びる砂脈(噴砂5)を切って構築されている。東側はSD435に壊されている。平面形は梢円形である。埋土は3層に分層し、1層は炭化物を多量に含む。また、2・3層は灰黄褐色シルト・黄褐色シルトがブロック状に堆積する。底面は平坦で、側壁は急斜度に立上がる。遺物は出土しなかった。

SK428 (図版 7・25・64)

6Tに位置する。SE225と重複し、これより古い。埋土は3層に分層し、3層は炭化物を多量に含む炭層である。また、黄褐色シルト粒をブロック状に含むことから、埋め戻された可能性がある。底面はやや凹凸があり、側壁は急斜度に立上がる。遺物は出土しなかった。

D 井 戸

SE225 (図版 7・25・64)

6Tに位置する素掘りの井戸で、底面部には曲物の水溜(147)が砂層を掘り下げて設置されていた。平面形は約190cmの円形である。断面形は上部がくびれ、中部でオーバーハングしている。下部はU字状で、深度150cmを測る。埋土は10層に分層した。1～3層は黄褐色シルトブロックを包含するため、人為的に埋めたものと思われる。4～5層も1～3層に比べて少ないが黄褐色シルトを含み、水溜として曲物を設置の際にその外側を埋めた土壌である。

遺物は水溜上部の7層からは2個の大型甕と漆器碗(146)、板状木製品(147～149)が、1層を中心と土師器片6点、瓷器系陶器片1点、砥石(154)が出土した。漆器碗の材質はケヤキで、放射性炭素年代測定の結果13～14世紀頃の年代が出ているため、鎌倉後期～室町時代の造構と考えられる(第VI章参照)。

E 溝

SD2 (図版 11・12・25・27・63・65)

6M・N・Oを南北方向に走る溝と5～7Oを東西方向に走る溝が直交して連結する。底面は南北方向では北へ、東西方向では東へそれぞれ傾斜している。調査時は前者をSD2、後者をSD17として調査を

行なったが、切り合い関係は認められず同一遺構であると判断した。また、SD17の上部には15cm程度の薄い堆積が認められ、調査時はこれをSD6としたが、後に攪乱と判明した。SD3・4・5・393・435と重複し、SD3・393より新しく、SD4・5・435より古い。遺物は6層から須恵器片1点、3層から須恵器片1点、土師器片3点、2層から須恵器片2点と黒色土器を含む土師器片22点、釘1点、1層を中心に須恵器片3点、土師器片約15点、それに近世以降の擂鉢片1点が出土している。接合関係では須恵器甕がSD20・24・SX44の出土品と接合した。

SD3（図版10～12・27・64）

6M～Qを南北方向に走る。底面は起伏があるものの南方向へ傾斜している。SB1-P81、SB1-SD110、SB2-P82、SK30、SD2・4・7・10・12・13・24、SX11、P124・151・158と重複し、SD2・24、SX11より古く、それ以外より新しい。埋土は3層に分層し、灰褐色シルト～明黄褐色シルトを主体とする。底面は平坦で側壁は緩やかに立上がる。遺物は1～3層で須恵器片8点、黒色土器を含む土師器片約55点が出土した。

SD4（図版12・27・65）

4・5・6Nを基本的に東西方向に延びるが、6N6で屈曲している。西端は調査区外へ延び、東端はSD2と重複する地点で先を追えなくなる。底面は東方向に若干傾斜している。SD2・3・10・435、SX18と重複し、SD435、SX18より古く、SD2・3・10より新しい。埋土は3層に分層し、にぶい黄褐色シルトを主体とする。遺物は1層から土師器片2点と釘(160)が出土した。

SD5（図版11・25・64）

6・7Oを北東～南西に走る。SD2と重複し、SD5が新しい。北東端は調査区外へ延び、南西端はSD2と重複する地点から先が追えなくなる。埋土は単層で、灰白色シルトである。土師器片1点が出土した。

SD7（図版10・11・27・65）

5O、5～7Pを東西方向に走る。底面は西方向に傾斜している。SD3・435、SX11と重複し、SD3、SX11より新しく、SD435より古い。埋土は1～5層に分層し、褐色シルトを主体とする。遺物は5層から土師器片2点と近世以降の陶磁器片1点、瓦片2点、1層から土師器片1点が出土した。遺構の年代は近世以降と考えられる。

SD9（図版6・7・14・26・65）

8T～8・9Vを北北西～南南東方向に延び、噴砂の影響を受けたIV'層を掘り込んで構築されている。底面は起伏があるものの、北北西方向へ傾斜している。2015年度調査で検出したSD1149と同一遺構である。また、約4.5m西側にはSD148が存在し、これと平行する。SK246、SD147、SX8・42と重複し、SK246、SD147、SX42より新しく、SX8より古い。埋土は5層に分層し、暗褐色～褐色シルトが主体である。5層から採取した炭化材を用いて放射性炭素年代測定を実施し、11世紀中頃～12世紀後半の年代が出ている（第VI章参照）。底面はやや凹凸があり、側壁は急斜度に立上がる。遺物は1層から須恵器片1点、黒色土器を含む土師器片13点、石製品(157)、2層から土師器片2点が出土している。出土土器は古代に属するが、出土炭化材の放射性年代測定は中世である。

SD10（図版12・25・65・68）

5・6Nを東西方向に走る。SD3・4・435、SX18と重複し、これらより古い。埋土は2層に分層し、にぶい黄褐色シルトを主体とする。遺物は1層から須恵器片2点と2層から土師器片1点が出土している。

SD12 (図版 10・27・67)

5・6P を東西方向に走る。P160・421、SD3 と重複し、P160・421 より新しく、SD3 より古い。埋土は単層で、灰黄褐色シルトである。遺物は土師器片 2 点が出土している。

SD13 (図版 11・26・65)

5・6O を東西方向に走る。西端は不明瞭となり、東端は SD3 に切られている。埋土は単層で、にぶい黄橙色シルトである。遺物は土師器片 2 点が出土している。

SD14 (図版 10)

5・6Q を東北東－西南西方向に走る。西南西端は調査区外へ延びる。SB1-P74、SB2-P89、P388、SD24 と重複し、SD24 より古く、SB1-P74、SB2-P89、P388 より新しい。埋土は 2 層に分層し、灰黄褐色シルトを主体とする。断面形態は弧状で、埋土はレンズ状堆積である。遺物は 2 層から土師器片 1 点、1 層から須恵器片 3 点、土師器片 7 点が出土した。

SD15 (図版 10・26・65)

7P を東西方向に走り、東端は調査区外へ延びる。埋土は単層で、灰黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD20 (図版 8・26・65)

6～8R を東北東－西南西方向に走る。北側には SD22・23・43 が存在し、これらとおおむね平行する。SB1-SD21、SB3-P201・202・205、SB4-P371、SB5-P374、P46・180・203・204 と重複し、SD20 はこれより新しい。埋土は 3 層に分層し、暗褐色～褐色シルトが主体である。底面は平坦だが、6R17・18 付近ではやや凹凸がみられる。側壁は緩やかに立上がる。遺物は比較的多く、1～3 層で出土した。3 層からは須恵器片 1 点、鍋 (77) を含む土師器片約 40 点、釘 (158)、2 層からは杯・甕を含む須恵器片 8 点、灰釉陶器皿 (76)、土師器片約 140 点、鉄滓 (162)、1 层からは鉄滓 2 点が出土した。接合関係では須恵器甕が SD2・24、SX44 の出土品と接合した。

SD22 (図版 8・9・26・66)

5～8R を東北東－西南西方向に走る。7R では、東西方向に延びる砂脈(噴砂 4)を切って構築されている。6R3・8 付近で Y 字状に分岐する。SB1-P49・60、SB4-P380、P238・383、SK1、SD188 と重複し、SK1 より古く、それ以外のものより新しい。埋土は 2 層に分層し、暗褐色シルトが主体である。側壁は急斜度に立上がる。遺物は 1 层から杯・甕を含む須恵器片 4 点、黒色土器を含む土師器片約 50 点が出土した。

SD23 (図版 9・26・66)

5～7Q を東北東－西南西方向に走る。6Q13 付近では南側へ向かって緩やかに湾曲する。SB1-P64・80・232、SB1-SD32、SB2-P91、SB2-SD111、P361、SD25・33 と重複し、SB1・2、P361 より新しく、SD25・33 より古い。埋土は単層で、灰黄褐色シルトが堆積する。また、炭化物を少量含む。側壁は急斜度に立上がる。遺物は杯・甕を含む須恵器片 8 点、耳皿 (78) を含む黒色土器や、椀 (79)・鍋 (80・81) を含む土師器片約 110 点が出土した。

SD24 (図版 10・27・66)

5P、5～7Q を東西方向に走り、両端とも調査区外へ延びる。底面は西方向へ傾斜している。SB1-P74、SB1-SD110、SB2-P85・89、SK40、SD3・14・209、P118・140、SX16・31・44 と重複し、SD24 はこれより新しい。埋土は 3 層に分層し、灰黄褐色シルトを主体とする。遺物は各層で比較的多く出

土している。4層からは須恵器片4点、楕(82)・黒色土器を含む土師器片約45点、3層からは須恵器片7点、土師器片約60点、珠洲焼甕(83)、鉄滓1点、2層からは須恵器片10点、土師器片約100点、1層からは須恵器片17点、土師器片約100点、近・現代の陶磁器片1点が出土した。接合関係では、SD25と接合した須恵器無台杯(88)、SX16の出土品と接合した須恵器杯蓋(99)、須恵器無台杯(100)、土師器小甕(102)、SD2・20、SX44の出土品と接合した須恵器甕がある。

SD25 (図版9・26・66)

7Qを北西-南東方向に走る。SK40、SD23と重複し、SD25はこれらより新しい。埋土は2層に分層し、灰黄褐色シルトを主体とする。遺物は1層から出土している。杯(84~89)を含む須恵器片27点、黒色土器楕(90・91)・長胴甕(92)を含む土師器片約60点、近世以降の陶磁器片2点が出土した。

SD33 (図版9・26・66)

7Qを南北方向に走る。北端は調査区外へと延び、南端は不明瞭となる。SD23と重複し、SD33が新しい。埋土は単層で、にぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SD34 (図版7・26・66)

6・7S-Tを東西方向に走る。西端は調査区外へ延びる。底面は西方向へ傾斜している。SD35と重複し、SD34が新しい。埋土は3層に分層し、黄褐色~黒褐色シルトを主体とする。遺物は1・2層から出土し、2層出土のものは少ない。2層からは土師器片3点と釘1点、1層からは横瓶を含む須恵器片4点、土師器片14点、近世以降の陶磁器片16点、近・現代の瓦1点、砥石1点が出土した。遺構の所属時期は近・現代と考えられる。

SD35 (図版7・26・66)

7・8S、6・7Tを北東-南西方向に走る。底面は南西方向へ傾斜している。埋土は3層に分層し、暗褐色シルトが主体である。側壁は急斜度に立上がる。遺物は2・3層から出土している。3層からは土師器片3点、2層からは灰釉陶器皿(SD20の出土品と接合、76)と須恵器片5点、黒色土器を含む土師器片約30点が出土した。

SD37 (図版7・26・66・68)

7・8T、7Uを東北東-西南西方向に走る。SK341、SX8と重複し、SD37はSK341より新しく、SX8より古い。埋土は2層に分層し、褐色シルトが主体である。側壁は急斜度に立上がる。遺物は出土しなかった。

SD38 (図版9・67)

7Qを東北東-西南西方向に走り、西南西端は調査区外へと延びる。埋土は単層で、にぶい黄橙色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD147 (図版6・26・67)

8V3~5にかけて東北東-西南西方向に走り、8V2で約90度屈曲して北北西-南南東方向に延びる。2014年度の調査区では南端が調査区外へ延びていたが、2015年度調査で検出したSD1379に繋がる。また、溝の東側は噴砂の影響を受けたIV'層を掘り込んで構築されている。SD9・148、P241と重複し、SD148より新しく、SD9、P241より古い。埋土は2層に分層し、上層は暗褐色シルト、下層は黄褐色シルトである。側壁は急斜度に立上がる。遺物は出土しなかった。

SD148 (図版6・7・26・67)

8U・Vを北北西-南南東方向に走る。底面は南南東方向へ若干傾斜している。SD147と重複し、

SD148が古い。埋土は単層で、オリーブ灰色シルトが堆積する。側壁は緩やかに立上がる。遺物は土師器片1点が出土した。

SD188(図版9・26・67)

7Q・Rを北西-南東方向に走る。SD22と重複し、SD188が古い。埋土は単層で、にぶい黄橙色シルトである。遺物は須恵器壺片1点、土師器片2点が出土した。確実ではないが、須恵器壺はSB2の出土品(57)と同一個体の可能性がある。

SD209(図版10・23・60)

4・5P・5Qを北西-南東方向に走る。底面は南東方向へ若干傾斜している。SK210・SD24と重複し、これらよりSD209が古い。埋土は3層に分層し、褐灰色シルトを主体とする。遺物は1層から土師器片1点が出土した。

SD219(図版10・23・27・67)

5P17・18を北北東-南南西方向に約3m走り、5P13で約90度屈曲して西北西-東南東方向に延びる。深度が検出面から約4cmと浅く、西端は不明瞭となる。埋土は単層で、褐灰色シルトが堆積する。断面図の底面は平坦で、側壁は緩やかに立上がる。遺物は1層から須恵器片1点が出土した。

SD224(図版9・27)

6Q・Rを北西-南東方向に走る。SK221と重複し、SD224が古い。埋土は2層に分層した。どちらもブロック状の黄橙色シルトを含むため、人為的に埋められた可能性がある。断面形は半円状で、埋土はレンズ状堆積である。遺物は土師器片1点が1層から出土した。

SD393(図版12)

5・6Mを東西方向に走る。底面は西方向へ傾斜している。P402、SD2・435と重複し、両端をSD2・435に壊され、底面からP402を検出した。埋土は2層に分層し、黄褐色シルトを主体とする。断面形は弧状である。遺物は土師器片1点が1層から出土した。

SD396(図版12・27・67)

4M・Nを北東-南西方向に走る。南西端は調査区外へと延びる。埋土は単層で、黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD400(図版12・13・27・67)

4K・L・Mを北北東-南南西方向に走る。底面は南南西方向へ傾斜している。P407・408と重複し、これらよりSD400が新しい。埋土は単層で、にぶい黄褐色シルトである。遺物は須恵器壺片2点、土師器片3点が出土した。確実ではないが、須恵器壺片のうち1点はSB2出土品(57)と同一個体の可能性がある。

SD435(図版11～13)

2I・J、3I～L、4I～L・N・O、5J～Oに位置する。SK398、P411、SX18、SD2・4・7・10・393と重複し、これらより新しい。断面形状は箱状を呈する。平面形や検出位置からSK243と同一遺構の可能性がある。

F 性格不明遺構

SX8(図版7・26・68)

8Tに位置する。SD9・37・SX42と重複し、SX8がこれらより新しい。平面形は長楕円形で、長径3.84m

を測る。短径は北東側が調査区外へと延びるため不明である。埋土は2層に分層した。1層は暗褐色シルト、2層にはぶい黄褐色シルトである。遺物は2層から横瓶(97)を含む須恵器片3点、白磁皿(94)、青磁碗(95)、砥石(152)、1層から杯(93)を含む須恵器片5点、土師器片30点、珠洲焼片口鉢(96)、釘(159)が出土した。遺物の年代から中世の遺構と考えられる。

SX11 (図版 10・11・27・67)

5・6O・Pに位置する。SK27・30、SD3・7、P81・93・124・161・162・163・165・412・420と重複し、SK27・30、SD3、P81・93・124・161・162・163・165・412・420より新しく、SD7より古い。平面形は不整形で、重複関係にある遺構も多いため規模が把握し難いが、残存部の長径15.70m、短径6.40mを測る。深さは3~19cmと浅い。埋土は単層で、褐灰色シルトである。遺物は有台杯(98)を含む須恵器片15点、黒色土器を含む土師器片60点、近世と考えられる肥前磁器片1点が出土した。

SX16 (図版 10・27・66)

6Q、7P・Qに位置する。SD24、SB2-P84、P121・140と重複し、SD24より古く、SB2-P84、P121・140より新しい。平面形は不整形で、長径6.10mを測る。埋土は単層で、灰黄褐色シルトとIV層土がブロック状に堆積する。また、炭化物を少量含む。底面は凹凸があり、中央付近が約4cm落ち込む。側壁は緩やかに立上がる。遺物は須恵器の杯蓋(99)・杯片11点(100)・甕片9点(101)、土師器の小甕(102)のほか、黒色土器や土師器片約170点が出土した。接合関係では重複するSD24と接合したものが多くみられた(100・102)。また、須恵器無台杯(46)がP89(SB2)、SD24、SK221の出土品と接合した。

SX18 (図版 12・27・68)

5Nに位置する。SD4・10・435と重複し、SD435より古く、SD4・10より新しい。平面形は片側をSD435に壊されているが、残存する形状から円形であったと推測できる。断面形は台形状で、埋土は単層である。遺物は須恵器片1点が1層から出土した。

SX31 (図版 10・27・69)

6P・Qに位置する。SB2-P125、SD24、SX44、P153・431と重複し、SD24より古く、これ以外より新しい。平面形は残存形状から方形と推定される。埋土は3層に分層した。1・2層は焼土塊・焼土粒を含む。遺物は各層で出土しているが、特に焼土粒が集中する付近でまとまっていた。底面はやや凹凸があり、側壁は急斜度に立上がる。遺物は甕2点(103・104)を含む土師器片63点、須恵器片2点が出土した。

SX39 (図版 8・28・69)

7R・7・8Sに位置する。平面形は溝状を呈するが、幅は0.75~2.75mと一定せず不整形である。東端は調査区外へ延びるが、調査区内での長径は8.60mを測る。埋土は単層で、黄褐色シルトである。遺物は杯(105・106)を含む須恵器片5点、土師器片42点が出土した。

SX42 (図版 7・28・68)

8S・Tに位置する。SD9・35、SX8、SK206と重複し、SD9、SX8より古く、SD35、SK206より新しい。遺構の東側が調査区外へ続いたため平面形は不明であるが、長方形あるいは方形と推定される。調査区内の長径は12.25mを測る。埋土は2層に分層した。2層は褐色シルトと黄褐色シルトがブロック状に堆積する。底面は平坦で、側壁は急斜度に立上がる。遺物は2層から土師器片1点、1層から杯を含む須恵器片6点、土師器片32点が出土した。

SX44 (図版 10・28・69)

5・6P・Qに位置する。SD24、SX31と重複し、これらより古い。底面は平坦で、側壁は緩やかに立上がる。埋土は2層に分層し、にぶい黄橙色シルトが主体である。また、いずれも炭化物を微量に含む。遺物は造構北西側に集中して出土しており、特に1層が多い。2層からは楕(109)や黒色土器を含む土師器片約100点、1層からは杯(107)・瓶(108)を含む須恵器片約10点、黒色土器皿(111)、楕(109・110)、長胴甕(112)を含む土師器片約45点が出土した。接合関係では須恵器甕がSD2・20・24の出土品と接合した。

SX149・SX150 (図版 6・28・69・70)

7U・Vに位置する。いずれも北西-南東方向へ溝状に延びるが、底面の凹凸が著しいため溝とは区別した。埋土は単層で、いずれも暗褐色シルトが堆積する。規模・形態・埋土堆積状況から同一の造構と考えられる。SX150はSK267と重複し、SX150が新しい。SX150から土師器片6点、釘(161)が出土した。

SX216 (図版 9・28・69)

5Qに位置する。SX217と重複し、これより新しい。規模・形態は土坑に類似するが、底面の凹凸が著しいことから、土坑とは区別した。平面形は長方形である。埋土は3層に分層し、1層は炭化物を微量に含む。また、1層は灰黄褐色シルトとIV層土由来の黄褐色シルトがブロック状に堆積することから、埋め戻された可能性がある。遺物は出土しなかった。

SX217 (図版 9・28・69)

5Qに位置する。SX216、P387と重複し、SX216より古く、P387より新しい。SX216と同様に規模・形態は土坑に類似するが、底面の凹凸が著しいことから、土坑とは区別した。平面形は不整な方形である。埋土は2層に分層した。土層堆積形態はSX216と類似する。1層は灰黄褐色シルトとIV層土由来の黄褐色シルトがブロック状に堆積することから、埋め戻された可能性がある。遺物は1層から土師器片2点、黒色土器片1点が出土した。

P114 (図版 9・17・70)

6・7Qに位置する。SB1の構成ピットであるP63Bと重複し、P114が古い。埋土は2層に分層した。1層は灰黄褐色シルト、2層にはにぶい黄橙色シルトである。1層を柱痕、2層を掘方埋土と認識できることから、建物の組み合わせは不明だが柱穴であると考えられる。検出面でアスファルト塊(150、第VI章参考)と1層から土師器片1点が出土した。

G 噴砂 (第23図)

造構ではないが、造構検出面(IV層上面)において地震痕跡を検出した。ここでは2014・2015年度調査を合わせて報告する。平面で確認できた地震痕跡は液状化によって地下より噴出したと考えられる砂脈である。これらを噴砂1～6とした。噴砂1・2は2015年度調査で検出し、噴砂3～6は2014年度調査で検出した。噴砂1～6はおおむね東西方向に走る共通性がみられる。また、土層断面の観察では陥没や断層もみられた。

噴砂1 (図版 4・90)

8Y・Zに位置する。南西-北東方向に走る砂脈である。検出範囲は約1.5mと短いことからIV層上面に突き出たわずかな部分を検出したと考えられる。方向から噴砂2と関連する砂脈と考えられる。

噴砂 2 (図版 4・90)

9Yに位置する。検出範囲は約0.7mと短いことからIV'層上面に突き出したわずかな部分を検出したと考えられる。方向から噴砂1と関連する砂脈と考えられる。

噴砂 3 (図版 6・7・14・29・70)

7・8U・Vに位置する。東西方向を蛇行しながら走る砂脈である。断面観察では下層確認調査における最下層のX層より下の供給層からIV層上面にまで影響を及ぼしている様子がみられた。噴砂内においても土質の違いにより、分層を行った結果、5層に認識できた。1～3層はシルト質が強く、4・5層は砂質が強くなっていた。1～4層からそれぞれ炭化物のサンプルを採取し、1層と4層採取のサンプルで年代測定を行った。1層は8世紀後半～9世紀後半、4層は绳文時代前中期～中期前半の年代が出ていた(第VI章参照)。

噴砂 4 (図版 9・14・29・71)

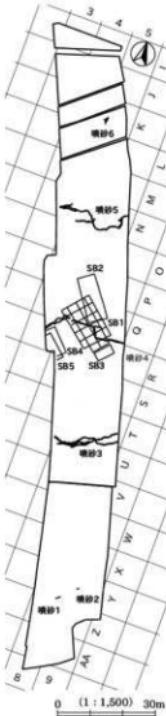
5・6・7R・5・7Sに位置する。東西方向を蛇行しながら走る砂脈である。下層確認調査における断面観察ではVII層より下の層が供給層となっていることを確認した。IV'層まで達した位置から採取した炭化物のサンプルから年代測定を行ったが、近世以降の年代が出ていた(第VI章参照)。供給層がその時代とは考えられないことから、上層からの混入と思われる。

噴砂 5 (図版 11・29・71)

4・5・6Oに位置する。東西方向を蛇行しながら走る砂脈である。

噴砂 6 (図版 13・29・71)

5Lに位置する。南北方向に走る砂脈で、検出した長さは約2mである。他の噴砂に比べると検出範囲が短く方向も異なるが、IV層上面に突き抜けた一部を検出したと考えられる。



第23図 噴砂

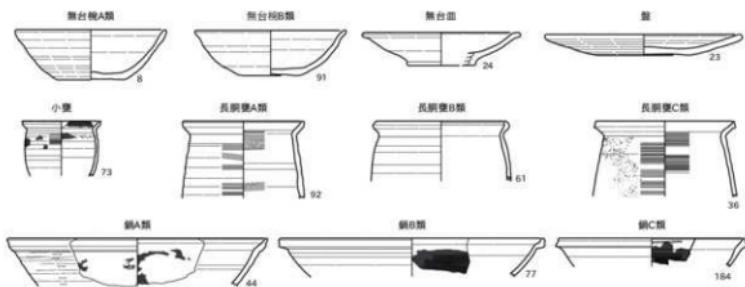
3 遺 物

A 分 類

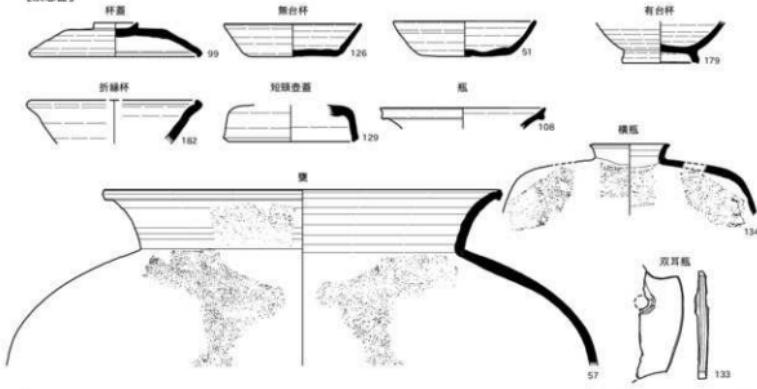
ここでは2014・2015年度調査を併せて、土器の分類について記述する。出土遺物の年代は古墳時代～近・現代と長期間にわたるが、主体となるのは古代であり、器種内の分類も古代に限った。なお、出土遺物の器種分類や年代観については、古代の土器は〔春日編 2004〕、珠洲焼は〔吉岡 1994〕、貿易陶磁の分類は〔山本 2000〕を参考にした。

土師器(黒色土器は後述する)の器種には食膳具の無台椀・無台皿・盤、煮炊具の長胴甕・小甕・鍋がある。無台椀はロクロ成形で、底部の切り離しは回転糸切のみが確認できる。口縁の形状が直線のものをA類、端反のものをB類とした。なお、体部が直線状に開いて立上がるもの(4・121など)はA類に、内湾して立上がるもの(19・91・136など)はB類に多くみられる。法量的には口径11.7～13.4cmと15.7～17.2cmにまとまりがあるが、両類ともに小型・大型品がある。皿と盤は出土点数が少ないので分類していない。長胴甕と小甕は全体を復元できたものではなく、器形全体での区別が難しいので、口径22.4～

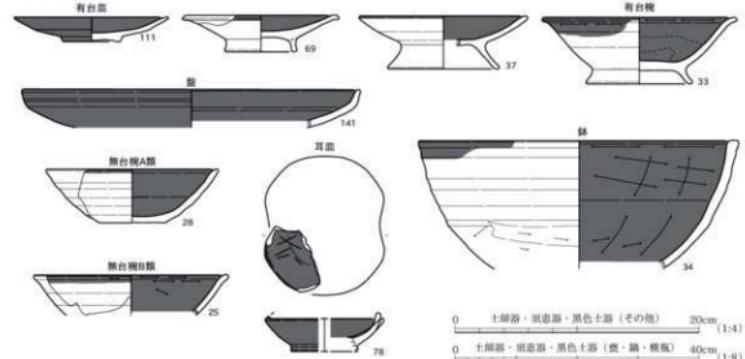
[土器器]



[須恵器]



[黑色土器]



第24図 古代の土器分類図

30.0cm を長胴甕、口径 12.9 ~ 16.8cm を小甕とし、口縁形状により端部を上方へつまみ上げるものと A 類、端部を内側へ折り返すものを B 類、端部の外側に面を作りだすものを C 類とした。鍋は長胴甕の分類に倣い口縁形状により A・B・C としたが C 類 (184 など) は少ない。法量的には口径 29.6 ~ 40.0cm と 42.0 ~ 51.1cm にまとまりがある。A 類は身が深く (113・166・202 など)、B 類は身の浅い (77・191 など) 傾向がある。

須恵器には食膳具の有台杯・無台杯・折縁杯・杯蓋・貯蔵具の甕・短頭壺蓋・双耳瓶・横瓶が存在する。いずれも器種内の細分は行っていない。無台杯は出土数が多く器形復元が可能なものも多いが、法量、器形、調整方法に明確な差がみられないことから分類しなかった。ただし、底部と体部の境が強く屈曲し、直線状に立上がるもの (100・126 など) と内湾状に立上がるもの (1・86 など) がある。底部の切り離し痕はすべて回転ヘラ切りである。また、須恵器の胎土は二種類に識別でき、先行研究に従い、石英・長石を多く含むものを笠神窯産、精良で白色粒子を含むものを小泊窯産と想定した [坂井ほか 1989]。

黒色土器の器種には無台椀・有台椀・有台皿・盤・鉢・耳皿が存在する。基本的には内面のみに黒色処理を施すいわゆる内黒であり、これらが主体を占めるが、有台皿・盤・耳皿には両面に黒色処理を施しているものがみられた。椀において口縁部のみが残存するものは底部が無台か有台か判断できないが、底部のみが残存するものはほとんどが無台であるため、口縁部のみのものもこれに準ずると思われる。この想定を基に無台椀は口縁部の形態により分類し、直縁するものを A 類、端反のものを B 類とした。法量は口径 14.0 ~ 17.3cm であり、多少ばらつきがある。灰釉陶器は皿のみが出土している。

古代の遺物の時期については、須恵器の大半が小泊窯産であり笠神窯産はわずかに混じる程度であることから、越後において在地窯産から小泊窯産へと交代する 9 世紀中葉から後半であると考えられる。

古墳時代の土器は SD1308 から出土した土師器壺 (174) のみである。中世の土器は珠洲焼・瓷器系陶器・青磁・白磁・青白磁が出土した。珠洲焼の器種は片口鉢・甕があり瓷器系陶器は甕のみ、青磁は椀のみ、白磁は皿のみ、青白磁は合子のみである。時期幅は 13 ~ 14 世紀代であると考える。このほか、近世以降の遺物があるが、基本的に報告しない。國化した遺物は近代の磁器 1 点 (208) のみである。以下に各遺構出土遺物について記す。なお、器種内の分類については遺物観察表に記した。

B 遺構出土遺物

SB1 (図版 36・37・91・92)

SD32 (雨落溝) 1・2 は須恵器の無台杯である。どちらも胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。3 ~ 22 は土師器椀である。また、19 ~ 21 は確実ではないが、同一個体の可能性がある。23 は土師器盤である。外面上半はロクロナデ、外面下半と底部はロクロケズリされた後にナデが施される。内面は滑らかに仕上げられている。24 は土師器無台皿である。体部と底部の境で明確に段が付き、底部は厚い。口縁部は端反である。底部は大部分が失われているが、切り離しは回転糸切りの可能性が高い。25 ~ 32 は黒色土器無台椀である。いずれも内面全面と外面口縁部が黒色処理される。33 はほぼ完形の黒色土器有台椀である。口縁は端反である。内面全面と外面口縁部はミガキの後、黒色処理される。内面には放射状の擦痕が顕著である。また、内面に液体が滞留したような痕跡がみられる。34 は黒色土器鉢である。外面上半はロクロナデ、下半は手持ちケズリが施される。内面全面と外面口縁部はミガキの後、黒色処理される。内面にはさらに放射状の擦痕がみられる。35 は土師器小甕の口縁部である。36 は土師器長胴甕の口縁部である。体部の内外面にカキメ、外面ではタタキメもみられるが、タタキ調整

を行った後にカキメを施したと考えられる。155 は縛である。明瞭な使用痕・研磨・擦痕などはみられない。表面に筋状の凹凸があるが、この窪みにも使用痕は確認できない。石材は凝灰岩で、被熱により変色しており（正面は赤化、裏面はスス付着）、亀裂も生じている。なお、側面の線状痕は取り上げ時のガジリである。

SD21（雨落溝）37 は黒色土器の有台皿である。内面はミガキの後、黒色処理が施される。底部中央は内側から力が加えられて円形に欠損しており、意図的に穿孔した可能性がある。

SD110 38 は土師器無台椀である。全体的に風化が著しい。39 は土師器椀の口縁部片である。内面は滑らかに仕上げられている。

P68（柱穴）40・41 は黒色土器椀の口縁部片で、内面の全面と外面の口縁部はミガキの後、黒色処理される。

P422（柱穴）42 は土師器長胴甌の口縁部片である。内外面にカキメがみられる。分類は A 類である。

P57（柱穴）43 は土師器皿の口縁部片である。口縁形状は端反である。底部は欠損する。

P49（柱穴）44 は土師器鍋の口縁部片である。体部の内面にハケメ、外面に横方向のケズリがみられる。また、内外面に炭化物の付着がみられる。

P54（柱穴）163 は鉄滓である。

SB2（図版 37・92）

SD111（雨落溝）45 は須恵器無台杯である。底部と体部の境は明瞭で、立上がりは直線的である。底部は器壁が厚く、口縁端部は細くなる。胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。

P89（柱穴）46 は須恵器無台杯である。薄手で器面の凹凸が著しい。胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。SK221、SD24、SX16 の出土品と接合した。

P85（柱穴）47 は須恵器杯蓋で、口縁端部は内側に短く屈曲する。胎土に石英・長石が多く含まれることから笛神窯産の可能性が高い。48～55 は須恵器杯である。いずれも胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。また、51 は SD24 から出土したものと接合した。56 は須恵器壺・瓶類の底部片である。器面はロクロナデ、高台は貼り付け高台である。高台接地面の内側端部は短くつまみ出される。また高台付近の内外面に黒色付着物がみられる。胎土に石英・長石が多く含まれることから笛神窯産の可能性が高い。

P87（柱穴）57 は須恵器甌である。法量は口径 65.6cm、体部残存径 96.9cm、器高残存 28.9cm を測る。体部から頸部は強く屈曲し、口縁部へは外反して立上がる。頸部断面に接合痕がみられる。頸部外面はタタキメとナデで調整された後、櫛状工具による波状文が施されている。口縁端部は上方と下方へ丸くつまみ出される。頸部から下位の外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具痕がみられる。肩部には杯類を重ね焼きした痕跡が残る。胎土は石英粒が顕著であることから笛神窯産である可能性が高い。

SB3（図版 37・92）58・59 は土師器椀で、柱穴 P187 から出土した。59 は口縁部片で、確実ではないが 58 と同一個体の可能性がある。

SB4（図版 37・92）60 は土師器無台椀の底部片で、柱穴の P378 から出土した。

SK27（図版 37・93）61 は土師器長胴甌の口縁部片である。口縁端部を内側に大きく屈曲させている。

SK40（図版 37・93）62 は須恵器杯の口縁部片である。胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。

SK183（図版 37・93）64 は土師器小甌である。口縁から体部まで残存し、内外面の体部にカキメがみ

られる。65は土師器長胴甌の口縁部片である。風化が著しい。

SK220 (図版 37・93) 63は須恵器有台杯の底部片である。貼り付け高台で、高台内に焼成前についたと考えられる線状痕が数条みられる。胎土には長石・石英粒を多く含むため埴神窯産と考えられる。

SK221 (図版 38・93) 66は3層出土の須恵器有台杯である。内外面はロクロナデだが、底部外面のみケズリで平坦にしており、わずかながら接合痕もみられるため有台杯と判断した。重複するSK385の2層から出土した土器と接合している。67は黒色土器の無台碗で、口縁直下から底部までは細かい幅でロクロケズリを行い、その後、部分的にナデている。内面全面と外面の口縁部はミガキの後、黒色処理される。さらにも内面には放射状の擦痕が確認できる。68は土師器長胴甌の口縁部片である。69は黒色土器の有台皿である。内面の全面と外面の口縁部にミガキと黒色処理が施されている。また、46の須恵器無台杯はSB2の柱穴P89、SD24、SX16の出土品と接合した。

SK222 (図版 38・93) 70は土師器無台椀の底部片である。内面はロクロナデだが、外面は手持ちケズリにより調整され、底部外面には回転糸切り痕が残る。

SK310 (図版 38・93) 71は須恵器杯の口縁部片である。胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。72は土師器無台椀の底部片である。73は土師器小甌である。口縁部から体部が残存する。体部外面にはカキメがみられる。内面にコゲ、外面にススが付着する。

SK385 (図版 38・93) 74は須恵器有台杯の底部片である。内外面に自然釉がかかる。高台部分は接合痕がみられるため、貼り付け高台と判断できる。75は黒色土器椀である。内面の全面と外面の口縁部はミガキの後、黒色処理される。また、内面には放射状の擦痕が確認できる。

SE225 (図版 40・41・95・96) 146～149は水溜(151)内から出土した木製品である。146は漆器椀の体部～底部片で口縁部と高台は欠損する。内面は朱漆、外面は黒漆地に朱漆で文様が描かれる。文様は州浜に竹と桐を描くことから、吉祥文であろう。底径 8.0cm、残存体部で推定径 15.6cm、残存高 5.6cm を測る。材質はケヤキで、放射性炭素年代測定の結果 13～14世紀とされる(第VI章参照)。147・148は板状木製品である。どちらも先端に加工がみられる。149は板状の木製品で、長軸に直交したケビキがみられることから曲物の側板片と考えられる。確実ではないが、151と同一個体の可能性がある。151は底板を外した曲物で、素掘りの井戸最下層(砂層)に水溜として設置されていた。径 86.5cm × 71cm の楕円形で高さ(36.8)cm を測る。蓋部分は内側で幅 13cm、外側で幅 9cm、板厚は側板で 0.6～0.8cm、蓋で 0.4～0.6cm を測る。側板、蓋とともに板目材で作られている。側板は内側、外側と 2 重になっていて、外側に内外 2 重の蓋で留められている。内側の側板は、内面に縱方向、外面に斜め方向にケビキで切り込みを入れて曲げ、板が重なった部分を樹皮で縫じあわせている。側板は内側と外側で縫じあわせ部分を 180°位置を変えて同じ部分に力が集中しないようにしている。縫じあわせ部分は端部を薄くして板厚の調整を図っている。側板は外側と内側の隙間に厚さ約 0.4cm の板材を多量に差し込んで緩みの補強を行っている。外側の側板は上下にズレて上端部が破損している。材質はスギである。154は角柱状を呈する砥石である。上下両端を欠損するが、上端は削れた後も使用された痕跡がある。石材は砂岩である。全体にススが付着している。

SD4 (図版 41・96) 160は断面方形の釘で、頭は折り曲げるが明瞭でない。

SD9 (図版 41・96) 157は用途不明の石製品である。図上の上部は欠損する。側面は球状に成形され、底面は平坦に作られている。球面はいくつかの平坦面を形成することで球状に仕上げられたと思われ、細かな凹凸が残されている。側面・底面ともに研磨痕が確認できる。石材は凝灰岩である。

SD20（図版 38・41・93・96） 76 は灰釉陶器皿の口縁部片である。SD35 出土資料と接合した。内面は全面施釉されているが、外面は内面に比べて釉薬が薄く、下部の一部は露胎であることから上部だけが施釉されていたものと思われる。口縁の形態から K-14 窯式段階のものと考えられ、9世紀前半に比定できる。77 は土師器鍋である。分類は B 類である。内面の体部にハケメがみられる。また内面にコゲの付着がみられる。158 は断面方形の大型釘で、頭は折り曲げている。162 は鉄滓である。

SD23（図版 38・93） 78 は黒色土器の耳皿である。小片であるが、口縁を内側に折り曲げている。この部分の口唇部には、連続する刺突がみられる。器面全体に黒色処理が施され、器壁はやや厚い。79 は土師器無台椀である。分類は A 類である。80・81 は土師器鍋の口縁部片である。分類は 80・81 ともに B 類である。どちらもカキメにより調整されているが、80 は外面体部下部にケズリもみられ、上半にはススが付着する。

SD24（図版 38・93） 82 は土師器無台椀である。風化が著しいが、内外面はロクロナデ、底部の切り離しは回転糸切りと思われる。83 は珠洲焼窯の口縁部片である。II～III期（13世紀第1四半期～第4四半期）の所産と考える。88 は須恵器無台杯で、SD25 の出土品と接合したほか、SB2-P89 の 46 (SK221・SX16 とも接合)、SX16 の 99・100・102 と接合する資料も出土している。

SD25（図版 38・93・94） 84～89 は須恵器無台杯である。84～88 の胎土は精良で白色粒子を含むことから、小泊窯産と考えられる。89 は 84～88 に比べ底部が厚く、胎土に石英を含むことから笛神窯産と考えられる。90・91 は土師器無台椀である。92 は土師器長胴甕である。頸部下位の内外面にカキメがみられる。接合関係では 88 が SD24 の出土品と接合した。

SX8（図版 38・39・41・94・96） 93 は須恵器無台杯である。体部と底部の境は明瞭で口縁部は直線的に立上がる。胎土は精良であることから小泊窯産と考えられる。94 は白磁皿の口縁部片である。口縁は外反し、外面の釉薬は口唇部寄りが若干厚くなる。95 は青磁箇蓮弁文椀の体部片である。椀 II-b 類に比定でき、13世紀前後～13世紀前半の所産と考えられる。96 は珠洲焼片口鉢の口縁部片である。片口が残存し、浅く短めに作りだされている。内面には鉗目がみられ、欠損するが 8 日以上を一単位とする。焼成はやや不良で軟らかく、灰色～灰白色を呈する。III期に比定でき、13世紀第3四半期～第4四半期の所産と考える。97 は須恵器横瓶の体部片である。内面は割れ口に沿って指おさえの痕が残ることから、側面を閉塞していた粘土円盤との接合部に沿って削れたと思われる。外面に格子のタタキメ、内面に同心円状の当て具痕がみられる。152 は砥石で円錐を素材とし、全面が砥面として使用されている。また、正面中央と上面端部には顕著な敲打痕があり、正面上部には弱い敲打痕が残る。砥石の敲打成形と考えておきたい。正面中央は座んだ砥面となっており、やや上方に深い線状痕が残る。石材は凝灰岩である。159 は不明鉄製品としたが、釘の可能性が高い。断面は三角形である。

SX11（図版 39・94） 98 は須恵器有台杯である。貼り付け高台で、高台内はナデで仕上げられるため、底部切り離しは読み取れない。

SX16（図版 39・94） 99 は須恵器杯蓋で、重複関係にある SD24 出土品との接合資料である。内面と断面に墨が少量付着するが、磨痕を伴わないと、硯として用いた可能性は低い。端部は短く屈曲する。100 は須恵器無台杯で、内外面はロクロナデ、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。重複する SD24 及び平成 22 年度試掘調査 2T の II 層の出土品と接合した。101 は須恵器甕の口縁部片である。わずかに残る肩部の外面にタタキメ、内面に同心円状の当て具痕がみられる。102 は土師器小甕の底部片で、内外面をロクロナデ、底部の切り離しは回転糸切りである。重複する SD24 の出土品と接合した。また、

SB2-P89 の 64 や重複する SD24、SK221 からの出土品と接合する資料も出土している。

SX31 (図版 39・94) 103・104 は土師器椀の口縁部片である。103 の口縁端部は外方へ反らせている。

SX39 (図版 39・94) 105 は須恵器無台杯である。胎土に石英・長石を多く含むため箆神窯産と考えられる。106 は須恵器杯の口縁部片で、胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。

SX44 (図版 39・94) 107 は須恵器無台杯である。胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。108 は須恵器瓶の口縁部片である。口縁端部を上方と横方向につまみ出している。胎土の特徴から小泊窯産と考えられる。109 は土師器無台椀である。内外面はロクロナデ、底部の切り離しは風化のため不明である。110 は土師器椀の口縁部片である。111 は黒色土器の有台皿である。内外面ともにミガキの後、黒色処理される。外面の上半部はロクロナデ、下半はケズリ調整である。高台とするには極めて低く作られているが、高台内部までケズリで調整されていることから、意識して作られたと判断し有台とした。112 は土師器長胴甌の口縁部である。内外面にカキメがみられる。

SX150 (図版 41・96) 161 は断面方形の釘で、頭は折り曲げているか不明瞭。

P45 (図版 39・94) 114 は須恵器無台杯の底部片である。P121 の出土品と接合した。

P76 (図版 39・94) 113 は土師器鍋の口縁部片である。分類は A 類である。内外面はロクロナデ、外面下半にはケズリがみられる。また、口縁端部に粘土紐の接合痕がある。

P114 (図版 40・47) 150 はアスファルト塊である。検出面の柱痕部で出土した。自然科学分析により、サンプルの天然アスファルトに似た数値が得られている (第VI章)。ただし、側面形は楕円形を呈し、鍛冶の遺物として知られる楕円形に近似していることから、器内で人工的に溶解された可能性がある。長さ 9.20cm、幅 12.20cm、厚さ 4.45cm、重量 121.4g を測る。

P121 (図版 39・94) 114 は須恵器無台杯の底部片である。内面にはわずかに墨痕がみられるが、磨痕を伴わないため、硯として用いた可能性は低い。胎土に石英を含むことから箆神窯産と考えられる。P45 の出土品と接合した。

P136 (図版 39・94) 115 は土師器椀の底部片である。内面はナデにより平滑に仕上げられるが、外面は体部下半から底部までケズリによって調整される。

P170 (図版 39・94) 116 は須恵器無台杯である。胎土の特徴から小泊窯産と考えられる。117 は土師器椀の口縁部片である。外面にはロクロナデの凹凸が残るが、内面は平滑に仕上げられている。

P361 (図版 39・94) 118 は土師器無台椀で、内外面はロクロナデ、底部の切り離しは回転糸切りである。重複する SB1-SD32 の 25 や SB2-P85 の 48 と接合する資料が出土している。

P362 (図版 39・94) 119 は須恵器杯の口縁部片である。焼成は不良だが胎土の特徴から小泊窯産と考えられる。

P373 (図版 39・94) 120 は須恵器無台杯である。全体的に厚手で、底部は丸みを帯びる。胎土に石英を多く含むことから箆神窯産と考えられる。

P410 (図版 39・94) 121・122 は土師器無台椀である。123 は土師器小甌の口縁部片である。口縁部は受け口状に屈曲し、その内側に炭化物が付着する。

P416 (図版 39・94) 125 は土師器鍋の口縁部片である。口縁端部は外側に面を持つ。

P423 (図版 39・94) 124 は土師器椀の口縁部片である。全体的に風化が著しい。

C 遺構外出土遺物

古代の土器 126・127は須恵器無台杯である。どちらも胎土は精良で白色粒子を含むことから小泊窯産と考えられる。128は須恵器有台杯の底部片である。高台は接合痕がみられるため、貼り付け高台である。また、高台内部を中心に墨痕がみられるが、磨痕を作わないことから硯として使用された可能性は低い。胎土に石英を多く含むことから笠神窯産と考えられる。129は須恵器短頸壺蓋である。口径11cmと小さく、器壁がやや厚い。口縁端部は外面に面を持つ。内面は自然軸がかかり、窓詰の際に逆向きに設置されていたことを示す。130は須恵器壺の口縁部片である。口縁部は直線的に延び、端部のみを外側に短くつまみ出す。胎土は粗く、石英を多く含むことから笠神窯産と考えられる。131は須恵器横瓶である。口縁端部は上方と横向方向につまみ出され、その間は溝状に窪む。132は須恵器壺の口縁部片である。口縁端部が上方と下方につまみ出される。また、外面頸部には櫛描きで波状文が施されるが、その後ナデているため明瞭ではない。133は双耳瓶の耳部片である。上半部の一箇所に穿孔が確認できる。134は須恵器横瓶である。口縁部と胴部がそれぞれ出土し、接合はしないものの胎土が共通することから同一個体と判断した。このほかにもSD9から同一個体と考えられる破片が出土している。口縁の形状は131と似ている。体部は肩部から体部側面にかけて残存し、体部側面の閉塞部分で欠損している。外面は平行タタキ、内面は同心円文がみられる。また、体部は2015年度調査で検出したSD1308の出土品と接合した。

135～137は土師器椀で、135・136は口縁部片、137は底部片である。138～140は黒色土器無台椀で、いずれも内面全面と外面の口縁部にミガキの後、黒色処理され、内面に放射状の擦痕がみられる。141は黒色土器盤である。内外面ともに黒色処理されるが、風化のためかミガキの調整痕はみられない。142・143は土師器長胴甕の口縁部片である。どちらも風化が著しい。144は土師器小甕の底部片である。内外面にロクロナデの凹凸が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りである。

中世の陶磁器 145は青白磁子の身で、蓋受部から底部まで残存する。内面は全面施釉されるが、蓋受部は露胎である。外面は体部に鷄足弁文が施され、上半部のみ施釉される。底部には高台が付く。

石製品 153は砥石で上下両端と側面・裏面を欠損する。砥面には自然面の凹凸が残り、使用頻度が高くなかったことを窺わせる。凝灰岩製である。156は硯で、硯縁のみ残存する。小型であることから携帯用である可能性もあり、おそらく近世以降の所産であろう。石材は粘板岩である。

第V章 2015（平成27）年度調査

1 遺構・遺物の検出状況

調査区中央を中心に遺構を検出している。検出遺構は土坑11基、溝14条、柵1列、道路状遺構1、ピット約200基である。そのほか調査区南端では、旧河道へ向かう傾斜地に近代の階段状に造成した水田跡を検出した。溝は東西方向や南北方向のものが交差している。その交差点では厚い最終堆積土に切り合いでみられないものが多く、機能していた最終段階では、これらの多くが連結していた可能性がある。農業関連の用排水路としての性格が想定できる。柵はSD1309北辺で検出し、一部のピットは溝の最終堆積土を切っているが位置的関係からSD1309との関連を無視することはできないであろう。ピットは調査区中央から北側に分布し、平面形が円形から楕円形の浅くて柱痕のないものが多い。しかし、分布域南端のP1311・1313・1314・1316・1317・1319・1320・1362は平面形が方形で比較的深く、柱痕も確認できることから建物の存在が想定される。

遺物は古代を中心に、主に遺構内から出土している。出土量は土器が平箱5箱（内寸：長さ54cm・34cm・10cm）で、そのほかは土製品（土雞6）、金属製品（銭貨4、刀子1、鉄片1）である。古代以外では中世・近世のものがごくわずかである。掲載遺構のうち、中世の遺物が出土したのはSD1309のわずか1基のみで、そのほかの遺構出土遺物はすべて古代（主に9世紀後半）のものであるが、前記のように溝は同時に機能している可能性があることから時期は中世以降と想定する。

2 遺構

A 分類

「第IV章2A分類」と同じであるが、2015年度調査で新たに検出した道路状遺構と柵を追加した。

道路状遺構（SF）

円形や楕円形の窪みが一定の間隔で並ぶ、いわゆる波板状凹凸面を道路状遺構とした。

柵（SA）

一定の間隔で、ほぼ直線上に並ぶピット群に対し柵を想定した。

B 土坑

SK1304（図版3・30・74）

9Zに位置する。SD1301と重複し、これより新しい。SD1301の埋土1層から近・現代（白歯の大きさから）の馬歯が出土した。溝が埋まりきる直前の窪みに投棄、または置かれたと考えられ、これを切るSK1304は近・現代の構築と考えられる。断面形は半円状だが底部は凹凸が著しく、埋土は褐灰色と浅黄色シルトがブロック状に堆積する短冊的埋土である。遺物は出土していない。

SK1321（図版4・30）

8Y・Zに位置する大型の土坑である。東西方向が長軸であるが、その両端とも後世の削平により消失

している。短軸方向の断面は浅い弧状。埋土はレンズ状堆積で5層に分層した。4層を除き5~10mmの炭化物を少量含んでいる。遺物は土坑北東部に多く出土した。出土層位は2・3・5層を中心とし、須恵器の杯片と横瓶片1点（SK1336出土品170と同一個体か）、土師器鍋（166）、刀子（216）のほか、土師器片約80点が出土した。

SK1322（図版4・30・74）

8Yに位置する。SD1323と重複するが、これより新しい。平面形は円形ないし梢円形と推測されるが、南側の多くのを現代の農業用排水路で破壊されている。断面形は浅い台形状で、底部に起伏がある。埋土は黒味の強い土壤であるが、下層は地山に近い灰色を基調とし、よくしまっている。水平ないしはレンズ状堆積である。同一個体の須恵器杯片2点（167）が3層から、土師器細片3点が2層から出土した。須恵器杯は9世紀後半の所産と考えられる。

SK1336（図版4・30・74・75）

9Yに位置する。P1334・1335と重複するが、これらより古い。平面形は歪な梢円形と推測されるが、北側は現代の農業用排水路で破壊されている。断面形は浅い台形状である。埋土は地山色に近いシルトブロックの単層である。出土遺物は横瓶の大型破片（170）と2個体の須恵器杯（168・169）で、169はへら切り底に墨書き「廣」が確認できる。土師器は甕片7点が出土している。須恵器杯は9世紀中葉から後半の所産と考えられる。

SK1355（図版4・30・75）

9Yに位置する。P1341・1354・SD1308と重複するが、P1341・1354より古くSD1308より新しい。平面形は不整形で上部には1・2層が堆積するが、北西側の底部には、平面が梢円形で断面が台形から弧状の落込み（SK1355-P1）と南東隅に平面が円形で断面が弧状の落込み（SK1355-P2）がある。二つの落込みの埋土は地山に近似した土壤である。遺物のほとんどが2層からの出土である。SK1355-P1の1層出土須恵器無台杯と土坑2層出土品が接合（171）したほか、別個体の杯片3点が土坑2層から出土している。土師器は細片で25点、ほかに土錐（209）がSK1355-P2の2層から出土した。

SK1575（図版6・30・75）

8Vに位置する。平面形は梢円形で断面形は弧状である。埋土はレンズ状堆積で黒褐色土に灰褐色ないし褐色シルトブロックの多少で分層した。2層は褐色シルトブロックではぼ満たされた状態である。遺物は出土していない。

SK1576（図版5・31・76）

8Xに位置する。平面形は円形で断面形は半円状である。埋土は3層からなるレンズ状堆積で、黒褐色土に浅黄橙色シルトブロックが混入する。遺物は出土していない。

SK1577（図版4・31・76）

8Xに位置する。SD1309・P1500・P1519と重複し、SD1309とP1519を切り、P1500に切られている。平面形は円形で断面形は弧状である。埋土は2層からなるレンズ状堆積で、1層には浅黄橙色シルトブロックが目立つ。遺物は出土していない。

SK1578（図版5・31・76）

9W・Xに位置する。東側は調査区外で一部未検出であるが平面形はおむね梢円形と推測する。埋土1層の一部は溝状の擾乱で切られている。断面形は弧状である。埋土は3層からなるレンズ状堆積で、黒色ないし黒褐色土に灰褐色シルトを混合するが、その量は2層で最も多い。遺物は出土していない。

SK1579 (図版 6・31・76)

7V に位置する。平面形は梢円形で断面形は台形であるが底部には起伏がある。埋土は 2 層のレンズ状堆積で、1 層は黒色土と地山に近い浅黄橙色土の細かなブロックが混合している。2 層は浅黄橙色シルトブロックの量が極めて多い。南壁近くで P1537 を検出したが新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK1580 (図版 5・31・77)

9W に位置する。東側半分を SD1149 に切られている。平面形は梢円形で断面形は弧状である。埋土は 2 層からなるレンズ状堆積で、ともに黒褐色の砂礫であるが、1 層には浅黄橙色土の混入が多い。遺物は出土していない。

C 溝

SD1301 (図版 3・31・77・78)

8AA, 9Z・AA に位置する。SK1304・SD1302 と重複し、SK1304 に切られ、SD1302 を切っている。南西→北東方向に延び、北東部は幅が狭くなり、底面はほぼ平坦であるが若干北東方向に傾いている。断面形は両岸が開く弧状ないしは半円状で、埋土はレンズに堆積する。埋土は 8 層に分けたが所によっては確認できない層もある。埋土は総じて若干黒味のある均質な灰褐色から褐灰色シルトで、ブロック土の混入は目立たない。8AA13 の 1 層から近・現代の馬の歯が出土している。また、8AA5 の 7 層から土師器碗を含む土師器片 3 点、8AA9 の 6 層から須恵器壺口縁部片 1 点 (173)、8AA10 の 4 層から古墳時代前期と思われる土師器壺底部片 1 点 (174) が出土している。

SD1302 (図版 3・31・77・78)

8AA, 8・9Z に位置する。東側は SD1303 と併走し、その後、弧を描いて SD1301 を横断し消滅する。SD1303 を切り、SD1301 に切られる。断面形は弧状ないし半円状で、埋土は 2 層に分けたが均質な黒褐色シルトを主体とし、底部付近のみ地山（浅黄橙色砂）の混合が著しい。遺物は出土していない。

SD1303 (図版 3・31・77～79)

8・9Z, 8AA に位置する。SD1302 と重複し、切られる。ほぼ東西方向に走る溝で、約 22.5m 北に位置する SD1309 と平行関係にある。断面形は両岸が開く浅い弧状で、埋土は 2 層に分けたが、色調はそれぞれ地山に近似した砂質シルトである。遺物は 8Z25 の 1 層と 10Z1 捜乱出土品が接合した 9 世紀後半の小泊窯産須恵器無台杯 (175)、8Z23・24 の 2 層から鍋 (176) を含む土師器片 2 点が出土している。

SD1307 (図版 4・32・79・80)

9X・Y・Z に位置する。ほぼ南北方向に走る溝で、南は 9Y, 9Z 境で立上がり、北側の SD1308・1309 に連結して SF1356 と重複する。SF1356 は本溝より古い。幅は SD1308 の南側で 1.6m 前後であるが北側で極端に狭くなり SD1309 手前で再び広くなる。SD1308 の南側での断面形は C-C'・D-D' で弧状、底部に幅 15cm 前後、深さ 20cm 前後の落込み (C-C' 11 層、D-D' 8 層) が存在し、この落込みは溝南端 (B-B' の 8 層か) まで連続する。堆積状況はレンズ状である。なお、8 層には砂礫が多く、11・15 層には細砂が少量含まれる。B-B' の埋土 9～15 層は溝構築以前の土坑埋土とも考えられる。想定される土坑の規模 (9Y24 付近) は南北 2.8m、東西 2m ほどの平面梢円、断面弧状である。残存する埋土はレンズ状堆積で、壁際 (11 層を除く) の各層には地山の黄橙色シルトブロックが混入している。遺物は 2 層から土師器 1 点、3 層から甕を含む土師器片 6 点、7 層から杯を含む須恵器片 3 点と土師器片 9 点、

10層から須恵器片1点と土師器片8点、15層から土師器片約20点が出土した。

そのほか溝の埋土からは土師器片100点以上、須恵器片20点以上が出土している。出土量は9Yが多く、SF1375以北の9Xが少ない。また、出土層位は1～7層で、このうち4～6層からの出土は比較的少ない。接合関係は180が8X23のSD1358-1層出土品と、179が同溝9Y14-2層と8X15-2層そして9Y1のSD1308-1層と8X15のSD1309-1層出土品と、181が同溝の9Y3-5層・9Y8-2層・9Y9-7層・9Y4-5層出土品とみられた。器種には須恵器の杯（177・178）、有台杯（179）、横瓶・甕、黒色土器、土師器の椀・小甕（180）、甕（181）、鍋のほか土鍤（210）がある。

SD1308（図版4・31・80・81）

7～9Yに位置し東西に延びている。重複関係は、8Y3でSD1376と合流しているが、明確な切り合い関係はなく同時期に廃絶したものと考えられる。また8Y6・7で検出したP1525～1529は本溝を切っている。幅は80cm前後で断面形は半円形から台形状。埋土は10層からなるレンズ状堆積であるが、8Y3で分岐し以東は二筋となる。二筋のうち北側のものは9Y1・2で底面に凹凸が増え、この辺で平面を追えなくなるが、南側のものはSD1307に直交し9Y5・10の東側調査区外へ延びる。7Y10の溝北側のテラスは、再び分岐し始めた部分の可能性もあるが明瞭な切り合いは確認できなかった。分岐部分のC-C'においても切り合いは確認できていない。また、A-A'の南側2・9層は溝脇の土手状高まりと考えられ、7層には細砂が少量含まれることから、溝を用排水路、土手状高まりを水田畦畔と考えることもできる。しかし、この高まりは平面的に確認できていない。

出土遺物は土師器片が80点以上、須恵器片が約10点である。出土量は9Y3・7で10点以上と比較的多い。9Y7は溝の南側にSK1355やSK1336などが存在し、そこから流れ込んだ可能性もあるが、遺構間での接合はない。また、出土層位は1層が約50点と最も多く、次いで2・7層と続く。接合関係は184で同溝9Y4-10層と9Y7-5層が、9Y4-10層出土の須恵器杯が9Y7-5層出土品とそれぞれみられた。器種には須恵器の折線杯（182）、横瓶（183）、土師器の椀・長胴甕（186）、鍋（184・185）がある。

SD1309（図版4・5・32・80・81）

7～9Xに位置し東西方向に延び、8X22でSD1376が南に、9X6・7でSD1149が北に向って分岐している。これらは明瞭な切り合い関係をもたず、同時期の廃絶と考えられる。また、P1459を切り、SK1577、P1500～1504・1518・1533～1536・1538・1541・1542・1554に切れ、新旧不明はP1544・1568である。断面形はおむね台形状で一部にテラスを持つ。埋土は4層からなるレンズ状堆積である。SD1149やSD1307と交わる手前（西側）の8X14・19～9X11には、溝のほぼ中央に馬の背状の高まりがあり、造り替えが想定されるが、断面観察で切り合いは確認できていない。なお8X17～19の馬の背南側の底面に狭い間隔で波板状に連続する落込みがあった。この落込みは、後述するSF1356（道路状遺構）と約4mの間隔を持ち並走するが、本溝のものは個々の落込みが細長く不定形で、埋土に小礫を含まざりよりもない。

出土遺物は土師器片が約170点、須恵器片が26点、珠洲焼片が1点、そのほか剝片と礫がそれぞれ1点である。出土量はSD1149とSD1307交点付近の9X7・8・11～13・17に比較的多く、溝西側には少ない。また、出土層位は1～4層で1層に約120点と最も多く、下層に行くに従い数を減じ、最下層の4層はわずか4点（含む190）である。接合関係は細片で図化してないが須恵器壺9X17-1層出土品が9Y11のSD1310-3層出土品と、前記と同一個体の9X7-1層出土品が9Y11-3層出土品とそれぞれみられた。器種には須恵器の杯（188・189）、杯蓋（187）、壺・甕（190）、黒色土器、土師器の椀・甕・

小甕・鍋（191）、珠洲焼の片口鉢（192）がある。

SD1310（図版4・32・81）

8・9Yに位置し南北方向に延び、8Y10でSD1308と連結する。連結部の断面で切り合いがみられることから、両者は同時期の廃絶と考えられる。また、P1331を切っている。幅は最大86cmと比較的狭く、断面形は弧状で埋土は4層からなるレンズ状堆積である。底面は北から南へ傾斜し、主軸方向及び規模は西5mにあるSD1376と近い。8Y10の2層から土師器長胴甕片（194）1点。3層から須恵器片3点。4層から甕底部を含む土師器片26点。9Y11の2層から椀・甕を含む土師器片5点、3層から須恵器片を中心に甕・瓶片が5点、土師器の椀・甕片がそれぞれ1点、9Y6の2層から甕を含む土師器片2点、4層から土師器甕片1点が出土した。接合関係は6層出土の土師器甕片が9X23のSF1356出土品と、9Y11-3層出土の須恵器片が9X18のSF1356-1層とみられた。

SD1323（図版4・32・82）

南北方向に走る長さ2.1mの溝を8Yで検出した。SD1358、SK1322と重複し前者を切り、後者に切られている。幅は最大58cmと狭く、断面形は弧状で、埋土は灰白から浅橙色シルトの単層である。底部は北から南へ傾斜する。遺物は8Y17の1層から鍋を含む土師器片2点、8Y23の1層から土師器片2点と須恵器杯底部1点が出土した。

SD1325（図版4・32・82）

8Yに位置し、北西から南東方向に延びる。平面は南東端手前で長軸に直交する方向に彫れあがる。断面形は弧状で、埋土は総じて地山色に近い土壤である。2層にはシルトブロックが充填し、細砂も微量含まれている。底面は北から南へ傾斜している。遺物は8Y13の2層から土師器片1点、8Y14の2層から土師器片2点が出土した。

SD1358（図版4・32・82）

SD1323と重複する北西-南東方向の溝を8Yで検出した。断面は弧状で、埋土は総じて地山色に近い土壤である。2層には細砂が多量に含まれている。1層から9世紀後葉の小泊窯産の須恵器無台杯2点（195・196）が出土した。

SD1376（図版4・80）

8X・Yに位置し、南北方向に走る。南端はSD1308と北端はSD1309と連結する。3者は連結部断面で切り合いがみられず同時期の廃絶と考えられる。断面形はU字形をなしている。底部にはSD1309に似る間隔の狭い波板状の落込みがある。底面はほぼ平坦であるが北から南に向かい若干傾斜している。遺物は8Y2と8X22の1層からそれぞれ土師器片6点、8X23の2層から同一個体と思われる甕4点を含む土師器片7点が出土した。

SD1378（図版6・32）

2014年度調査区段の7Vで検出したが2014年度調査ではみつかっていない。北西-南東方向に延び、南東端には小さな落込みがある。断面形は浅い弧状で、埋土は暗褐色シルトの単層である。底部には傾斜がない。遺物は出土していない。

SD1379（図版6・32・82・83）

8Vに位置し、SD1149に併走して東西に延びている。2014年度調査のSD147と一連の溝である。断面形は弧状で、埋土は黒色系土壤の2層からなるレンズ状堆積である。遺物は8V18の2層から土師器片1点、1層から同一個体と思われる土師器椀片2点が出土した。

SD1149 (図版5・6・33・83)

8・9V、9W・Xに位置する。2014年度調査のSD9の延長で、南北方向に延びている。南端は9X6・7で東西方向に走るSD1309に合流する。SD1309との新旧関係は断面でみられず、同時期に廃絶を迎えたものと考えられる。またSK1580・P1549を切っている。幅は1~1.45mで、断面はテラスを持つところも一部にはあるが(9W1・6)、おむね台形ないしは半円状である。埋土はレンズ状堆積で3層に分層したが、それぞれ黒味の強い粘質土を主体とし、下層にいくに従い浅黄色土ブロックの量が増す。底部の傾斜は起伏があるものの南から北に10cm前後傾斜する。SD1309合流部の底面は比高25cm前後とSD1149が高い。

最下層3層からは9X1で土師器片3点、2層からは9W11で土師器片3点、9W16で土師器片5点、9X1・2で椀を中心とした土師器片18点、そのほか須恵器片1点、椀を中心とした土師器片10点以上、1層からは9W16で須恵器盤片1点(199)、9X1で黒色土器椀1点(198)、9W21の2層から土師器鍋(197)を含む土師器片約100点と須恵器片4点が出土している。出土量はSD1309連結部近くの9X1・2、9W11、9W21にそれぞれ20点以上の出土があり、ほかと比較して多い。

D 櫛 (図版4・33・83・84)**SA1581** (P1534・P1536・P1519・P1520・P1568・P1557・P1460)

SD1309の北岸に位置するが、櫛を構成するP1534・1536は溝内の最終堆積土を切っていることから、これよりも新しいか溝が埋まりきるまで柱材が残っていたとも考えられる。位置的関係を考慮すると、ある期間SD1309と併存していた可能性が高いと考えておきたい。規模は西端のP1534から東端のP1460まで約12mだが、西側調査区外に延びる可能性もある。柱間隔はP1534→204cm←P1536→206cm←P1519→196cm←P1520→193cm←P1568→195cm←P1557→224cm←P1460でP1557-P1460間を除き200cm前後である。各ピットの平面形は長径26~40cmの梢円形で、底面標高は9.78~10.07mと幅がある。埋土は黒味のある土壌が一般的だが、P1568は灰~褐色の土壌である。堆積状況はレンズ状のものP1534・1536・1520、柱穴(痕)状のものP1519?・1568・1557・1460がある。遺物はP1568の1層(柱痕)から土師器椀片2点が出土したのみである。

E 道路状遺構 (図版4・34・85・86)**SF1356** (-SKI・-SK2・-SK3・-SK4・-SK5・-SD1)

8・9X-Yに位置する。近・現代の削平が著しく記録が充分とはいえないが、可能な限り遺構復元を試みる。検出面はVI層上面である。路床と考えられる波板状遺構検出面は幅約2mの範囲で浅く窪んでいる。路床と考えた窪み底面には、梢円形で埋土に細砂と小礫を含む複数の落込み(波板状遺構)があり、落込み周囲には帶状に酸化鉄の沈着が巡る。窪みには、しめ固められた層厚5cm前後の砂粒と小礫を含む暗褐色土が2枚(4・5層)、さらにその上にしまりのある暗褐色から黒褐色の土壌(1~3層)が20cmほど存在することを、用排水路脇の削平が少ないわずかな範囲(7Y25-9X15)で確認している。このうち1~3層は窪みを越え、かなり広範囲に分布する可能性があるので、道路構築上とは直接関係しないと推測できる。したがって、最終段階の路面は4層上面と考えておきたい。また、隣接するSD1308との切り合いは、4・5層は不明だが、溝が3層を切り2層に覆われている。そして、直交するSD1307はSF1356を切っていることから、本遺構よりも新しいと推測される。

SF1356 として取り上げた遺物は、すべて 1 層からである。前記の所見から 1 ~ 3 層を道路構築土と考えられない以上、以下に示す遺物は道路状遺構に伴わない可能性が高い。須恵器片 8 点、土師器片約 80 点が出土している。このうち楕円形落込み及び浅い窪みが位置する 9X22 ~ 25 の 1 層からは、須恵器片 3 点、土師器片約 40 点が出土している。接合関係は 9Y2 出土の土師器長胴甌 (172) と 9Y7 の SK1355-2 層出土品との間でみられた。

F ピ ッ ト (図版 3 ~ 5・35・86 ~ 90)

約 200 基検出している。ここでは平面形が方形で比較的深く、柱痕も確認できる 8Y・Z、9Y 検出の P1311・1313・1314・1316・1317・1319・1320・1362 と 8X25・8Y5 検出の P1375 を報告する。前者の一群は建物を建てられなかつたが、長軸がおよそ N45°・E 方向の建物の存在が推測される範囲である。底面標高は 9.51 ~ 10.02m とばらつくが、平面形は隅丸方形で長径 43 ~ 35cm、柱痕径 16 ~ 20cm と形状や大きさが似通っている。柱痕は黄灰色、灰黄色、浅黄色、褐灰色などのシルトである。

遺物は 9Y16 の P1316-2 層から土師器椀 3 点、6 層から須恵器杯口縁部 (201) 1 点が、8Y18 の P1324 から土師器鍋 (202)・小甌 (203) のほか土師器片 10 点と剝片 1 点が 1 层から、8X25・8Y5 の P1375 の 3 層から土師器片 1 点、9W21 の P1573 から土師器鍋 (204) が出土した。

3 遺 物 (図版 42・43・96・97)

A 分 類

「第 IV 章 3A 分類」に同じ。

B 遺構出土遺物

SK1321 (図版 42・43・96・97)

164・165 は黒色土器椀である。164 の外面は不明瞭であるが丁寧なヘラ調整により平滑に仕上げている。166 は土師器鍋で、頸部の屈曲は弱く口唇部は上方につまみ上げる。外面体部下半はカキメ調整の後の平行タタキがみられ、ススない炭化物の付着が顕著である。216 は 2 層から出土した刀子で、刃は残るが茎と刃部先端を欠損する。

SK1322 (図版 42・96)

167 は身の比較的浅い須恵器杯で、胎土に白色小粒子が目立つ。小泊窯産。

SK1336 (図版 42・96)

168・169 は回転ヘラ切りの須恵器無台杯で、169 の外面には「廣」の墨書きがみられる。168 の胎土は精緻で小泊窯産、169 は 2mm ほどの長石粒を少量含む。170 は横瓶胴部片で外面は平行タタキの後、カキメ。内面は同心円の当て具痕、端部閉塞に円盤状粘土を接合した痕跡が明瞭である。器面上半にはぶい緑色の自然釉がかかる。

SK1355 (図版 42・43・96・97)

171 は回転ヘラ切り底の須恵器無台杯で、器壁が薄く体部は大きく外方へ開く。胎土は精緻で内面に黒色物の吹き出しが多い小泊窯産である。172 は土師器長胴甌で口縁端部を上方へ大きくつまみ上げている。SF1356 (9Y2) 出土品と接合した。209 は土鍤で SK1355-P2 の 1 層から出土した。

SD1301 (図版 42・97)

173は須恵器甕で口縁部は短く若干外反しながら立上がる。体部外面に平行タタキがみられる。174は古墳時代前期と思われる壺底部である。小さな底部から体部は大きく開いて立上がる。内面及び底部外面はハケ調整、体部外面は底部近くで手持ちのヘラケズリがみられる。胎土には石英・長石の小さな角礫を含む。

SD1303 (図版 42・97)

175は回転ヘラ切り底の須恵器無台杯。小泊窯産。176は土師器鍋の口縁部片で、端部を丸く仕上げ、外面の端部直下には沈線が巡る。

SD1307 (図版 42・43・97)

177・178は須恵器杯で器壁は薄く、体部は開き気味に立上がる。177は2mmほどの石英・長石粒を含む。178は小泊窯産。179は須恵器有台杯で豊付きは高台外縁である。胎土には白色小粒子と少ないが黒色物の吹き出しがみられる小泊窯産である。180は土師器小甕の底部で回転糸切り底。181は土師器長胴甕で口縁端部を上方につまみ上げる。そのほか SD1308 の 184 と同一個体と思われる土師器鍋片が6層から出土している。また、210は土鍤で1層からの出土である。

SD1308 (図版 42・97)

182は須恵器折縁杯で胎土に2mm以下の長石粒が目立ち器面はざらつく。183は頸部の急激な屈曲から横瓶とした。体部外面は格子タタキである。胎土には白色小粒子を含む。小泊窯産か。184・185は土師器鍋で両者とも口縁端部を上方に大きくなめ上げ、外面側の端部を隆線上に強調する。186は土師器長胴甕で口縁端部を上方へ大きくなめ上げ丸くおさめる。

SD1309 (図版 42・43・97)

187は須恵器杯蓋で器面は若干酸化し赤味を帯びる。胎土は精緻だが4mmほどの大型長石粒を少量含んでいる。188・189は須恵器杯で、188の口縁部下の内面には沈線状に窪みが巡る。胎土は精緻で小泊窯産と考えられる。189の器壁は薄く器面に黒色物の吹き出しがみられる小泊窯産である。190は須恵器甕であるが全体が酸化し赤味を帯びる。長石や石英の粒子（小礫）が多く含まれている。191は土師器鍋で口縁部は上方に大きく屈曲し、端部を丸くおさめる。192は珠洲焼の片口鉢で内面には間隔を開けた鉄目が付き、底部には板目痕がみられる。体部外面に部分的な磨面があり、砥石などに二次利用された可能性が高い。

SD1310 (図版 43・97)

193は須恵器杯蓋のつまみ部である。頂部は大きく窪んでいる。194は土師器長胴甕の底部片で回転糸切り底である。

SD1358 (図版 43・97)

195・196は回転ヘラ切り底の須恵器無台杯で、195の体部は若干膨らんで立上がるが、196は開いて直線状である。両者とも胎土は精緻で小泊窯産と思われるが、195の器面は著しく風化している。

SD1149 (図版 43・97)

198は黒色土器楕である。器面は風化しており、不明瞭だが外面の底部及び体部下半は丁寧に調整されている。197は口縁部が大きく屈曲し、端部を上方につまみ上げる土師器鍋である。199の器面は酸化し赤化した須恵器甕体部片で、砥石として二次利用している。砥面は外面と図右側縁の一部である。

SF1356 (図版 43・97)

200 は土師器長胴甕で、口縁は方頭である。211 は土鍤で 9X18 の路床上に盛られた 1 層からの出土である。

ピット (図版 43・97)

201 は 9Y16 の P1316-6 層から出土した須恵器杯で、体部が開いて立上がる。胎土には小泊窯産よりも粒の大きな長石粒を多く含む。203 は土師器小甕で 8Y18 の P1324-1 層から出土した。内外面の口縁から外面体部にかけてススないしは炭化物が付着している。202・204 は土師器鍋で前者は 8Y18 の P1324-1 層、後者は 9W21 の P1573-1 層から出土した。202 は身が深く口縁外面の細い沈線が明瞭である。204 は身の浅いタイプで口縁部は内側に屈曲する。

C 遺構外出土遺物 (図版 43・97)

遺物包含層と考えた黒褐色シルトからは黒色土器、土師器の椀・小甕・甕・鍋を含む土師器片約 100 点、杯を含む須恵器片 16 点が出土している。黒褐色シルト層が確認できたのは農業用排水路脇の 8Y10・13～15・17～19・23、9Y1・2・7・11、9X18 で、他の地区は削平されている。そのほか、調査区南側の擾乱（水田造成土）や表土等から土師器片 200 点以上、須恵器片約 30 点、珠洲焼片 4 点、近世～近・現代陶磁器片約 20 点、その他、砾石 1 点、土鍤 3 点が出土した。

205 は 10Y21 表土出土、206 は 9Z9 摰乱（水田造成土）出土の回転ヘラ切り底の須恵器無台杯で、体部は開いて立上がる。黒色物の吹き出しがみられ、ともに小泊窯産と思われる。207 は瓷器系の甕で内外面はナデられ赤褐色の鉄釉が器面を覆う。胎土に 1mm 以下の石英・長石粒を含む。口縁形態から赤坂山窯産か。208 は受け口状の口縁を持つ肥前系磁器の染め付け鉢で、口唇部は釉をかき取っている。明治期の可能性がある。212～214 は土鍤で、ともに 9AA からの出土している。出土は旧河道の近くで漁労を色濃く示す資料といえよう。215 は 9Y23 の擾乱から出土した銭貨である。4 枚重なっているが腐食が著しく、無理に分離を試みると銭を破壊する恐れがあるので図の状態にしてある。銭名は不明。

第VI章 自然科学分析

1 放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

はじめに

2014 年度調査の熊木遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

A 試料と方法

試料は、炭化材 9 点と木製品 1 点の、合計 10 点である。炭化材は、5R の SD22 の 1 層から 1 点 (No.1: PLD-28303)、5Q の IV' 層から 1 点 (No.2: PLD-28304)、5R の噴砂 4 の 1 点 (No.3: PLD-28305)、5R の IV' 層から 1 点 (No.4: PLD-28306)、8U の噴砂 3 の 1 層から 1 点 (No.5: PLD-28307)、8U の噴砂 3 の 4 層から 2 点 (No.6: PLD-28308, No.7: PLD-28309)、8V の SD9 の 5 層から 1 点 (No.8: PLD-28310)、8S の SK206 から 1 点 (No.10: PLD-28312) である。木製品は、6T の SE225 の曲物内から出土した漆器椀 (146) (No.9: PLD-28311) である。なお、炭化材も木製品も、すべて部位不明で最終形成年輪は残存していなかった。

測定試料の情報、調製データは第 2 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-28303	遺跡名：熊木遺跡 層位：SD22 部位：I 層 試料 No.1	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28304	遺跡名：熊木遺跡 層位：IV' 層 試料 No.2	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28305	遺跡名：熊木遺跡 層位：噴砂 4 試料 No.3	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28306	遺跡名：熊木遺跡 層位：IV' 層 試料 No.4	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28307	遺跡名：熊木遺跡 層位：噴砂 3-1 層 試料 No.5	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28308	遺跡名：熊木遺跡 層位：噴砂 3-4 層 試料 No.6	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28309	遺跡名：熊木遺跡 層位：噴砂 3-4 層 試料 No.7	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28310	遺跡名：熊木遺跡 層位：SD9 試料 No.8	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28311	遺跡名：熊木遺跡 層位：SE225 試料 No.9	種類：生材（ケヤキ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：humid	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 鹽酸：1.2N）
PLD-28312	遺跡名：熊木遺跡 層位：SK206 試料 No.10	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 鹽酸：1.2N）

第 2 表 測定試料および処理

コンパクト AMS (NEC 製 L5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年代を算出した。

B 結 果

第3表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第25・26図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

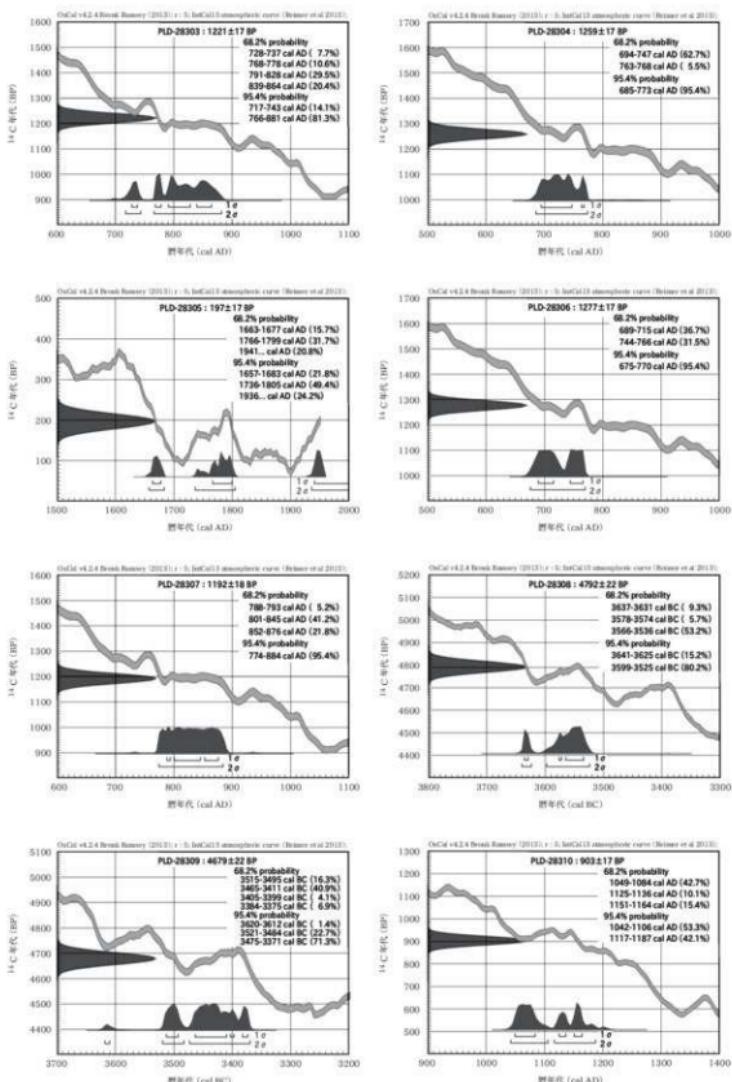
なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

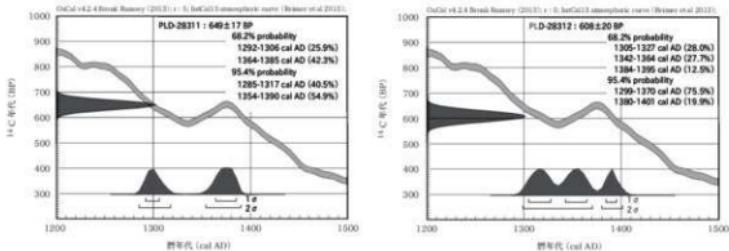
^{14}C 年代の曆年較正には OxCal 4.2 (較正曲線データ: IntCal 13) を使用した。なお、1 σ 曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2 σ 曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-28303 試料 No.1	-23.95 \pm 0.18	1221 \pm 17	1220 \pm 15	728 - 737 cal AD (7.7%) 768 - 778 cal AD (10.6%) 791 - 828 cal AD (29.5%) 839 - 864 cal AD (20.4%)	717 - 743 cal AD (14.1%) 766 - 881 cal AD (81.3%)
PLD-28304 試料 No.2	-23.97 \pm 0.19	1259 \pm 17	1260 \pm 15	694 - 747 cal AD (62.7%) 763 - 768 cal AD (5.5%)	685 - 773 cal AD (95.4%)
PLD-28305 試料 No.3	-22.94 \pm 0.16	197 \pm 17	195 \pm 15	1663 - 1677 cal AD (15.7%) 1766 - 1799 cal AD (31.7%) 1941... cal AD (20.8%)	1657 - 1683 cal AD (21.8%) 1736 - 1805 cal AD (49.4%) 1936... cal AD (24.2%)
PLD-28306 試料 No.4	-23.72 \pm 0.22	1277 \pm 17	1275 \pm 15	689 - 715 cal AD (36.7%) 744 - 756 cal AD (31.5%)	675 - 770 cal AD (95.4%)
PLD-28307 試料 No.5	-26.65 \pm 0.20	1192 \pm 18	1190 \pm 20	788 - 793 cal AD (5.2%) 801 - 845 cal AD (41.2%) 852 - 876 cal AD (21.8%)	774 - 884 cal AD (95.4%)
PLD-28308 試料 No.6	-25.78 \pm 0.30	4792 \pm 22	4790 \pm 20	3637 - 3631 cal BC (9.3%) 3578 - 3574 cal BC (5.7%) 3566 - 3536 cal BC (52.2%)	3641 - 3625 cal BC (15.2%) 3599 - 3525 cal BC (80.2%)
PLD-28309 試料 No.7	-24.20 \pm 0.20	4679 \pm 22	4680 \pm 20	3515 - 3495 cal BC (16.3%) 3495 - 3411 cal BC (40.9%) 3409 - 3399 cal BC (4.4%) 3384 - 3375 cal BC (6.6%)	3620 - 3612 cal BC (1.4%) 3521 - 3484 cal BC (22.7%) 3475 - 3371 cal BC (71.3%)
PLD-28310 試料 No.8	-26.35 \pm 0.14	903 \pm 17	905 \pm 15	1049 - 1084 cal AD (42.7%) 1121 - 1136 cal AD (16.1%) 1151 - 1164 cal AD (15.4%)	1042 - 1106 cal AD (53.3%) 1117 - 1187 cal AD (42.1%)
PLD-28311 試料 No.9	-28.41 \pm 0.18	649 \pm 17	650 \pm 15	1292 - 1306 cal AD (25.9%) 1364 - 1385 cal AD (42.3%)	1285 - 1317 cal AD (40.5%) 1354 - 1390 cal AD (54.9%)
PLD-28312 試料 No.10	-25.02 \pm 0.45	608 \pm 20	610 \pm 20	1305 - 1327 cal AD (28.0%) 1321 - 1344 cal AD (12.5%) 1384 - 1399 cal AD (12.5%)	1299 - 1370 cal AD (75.5%) 1380 - 1401 cal AD (19.9%)

第3表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果



第25圖 歷年校正結果（1）



第 26 図 历年較正結果（2）

C 考 察

以下、各試料の历年較正結果のうち 2σ 历年代範囲（確率 95.4%）に着目して、結果を整理する。なお、繩文時代の土器編年と历年代の対応関係については小林 [2008] を参照した。

蕪木遺跡で 5R の SD22 の 1 層から出土した炭化材 (No.1:PLD-28303) は、717-743 cal AD (14.1%) および 766-881 cal AD (81.3%) であった。これは 8 世紀前半～9 世紀後半で、奈良時代から平安時代前期に相当する。

5Q の IV' 層から出土した炭化材 (No.2 : PLD-28304) は 685-773 cal AD (95.4%)、5R の IV' 層から出土した炭化材 (No.4 : PLD-28306) は 675-770 cal AD (95.4%) であった。この 2 点の历年代は 7 世紀後半～8 世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代に相当する。一方、5R の噴砂 4 の炭化材 (No.3 : PLD-28305) は、1657-1683 cal AD (21.8%)、1736-1805 cal AD (49.4%)、1936 cal AD 以降 (24.2%) であった。これは、17 世紀後半の江戸時代前期もしくは 18 世紀前半～19 世紀初頭の江戸時代中期～後期、20 世紀前半の昭和時代以降に相当する。

8U の噴砂 3 の 1 層から出土した炭化材 (No.5 : PLD-28307) は、774-884 cal AD (95.4%) であった。これは 8 世紀後半～9 世紀後半で、奈良時代から平安時代前期に相当する。8U の噴砂 3 の 4 層から出土した炭化材 (No.6 : PLD-28308) は 3641-3625 cal BC (15.2%) および 3599-3525 cal BC (80.2%) であった。これは繩文時代前期末に相当する。同じく 8U の噴砂 3 の 4 層から出土した炭化材 (No.7 : PLD-28309) は、3620-3612 cal BC (1.4%)、3521-3484 cal BC (22.7%)、3475-3371 cal BC (71.3%) であった。これは繩文時代前期末～中期前半に相当する。

8V の SD9 の 5 層から出土した炭化材 (No.8 : PLD-28310) は、1042-1106 cal AD (53.3%) および 1117-1187 cal AD (42.1%) であった。これは 11 世紀中頃～12 世紀後半で、平安時代中期～後期に相当する。

8S の SK206 から出土した炭化材 (No.10 : PLD-28312) は、1299-1370 cal AD (75.5%) および 1380-1401 cal AD (19.9%) であった。これは 13 世紀末～15 世紀初頭で、鎌倉時代～室町時代に相当する。

6T の SE225 の曲物内から出土した漆器椀 (No.9 : PLD-28311) は、1285-1317 cal AD (40.5%) および 1354-1390 cal AD (54.9%) であった。これは 13 世紀後半～14 世紀末で、鎌倉時代～室町時代に相当する。

試料はすべて最終形成年輪が残存していない炭化材もしくは木製品である。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料はいずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側

にも年輪が存在していたはずであり、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系ー」: 257-269. 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」: 3-20. 日本国第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

2 SK206 から出土した焼骨

株式会社パレオ・ラボ 中村賢太郎

はじめに

新潟県阿賀野市に位置する蕉木遺跡で検出されたSK206 から焼骨が出土した。ここでは骨の同定結果を報告する。

A 試料と方法

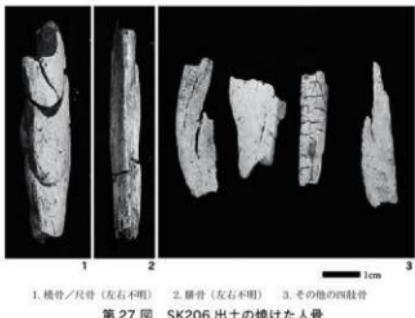
試料は、SK206 から土ごと取りあげられた焼骨 4 ブロックである。なお、SK206 から採取された炭化材の放射性炭素年代測定の結果、13 ~ 15 世紀の年代が得られている。

土ブロックから骨片を選別し、肉眼と実体顕微鏡で観察し、同定した。

B 結果と考察

選別した骨片は 29 点であった。緻密質の組織が粗い特徴からヒトと同定した。部位は、29 点とも四肢骨の破片で、これらのうち桡骨あるいは尺骨（左右不明）と思われる骨片が 1 点と、腓骨（左右不明）と思われる骨片が 1 点見られた。いずれも白くなるまで良く焼けており、取締による亀裂や変形の見られる骨片が多い。

少なくとも、ヒトの上肢と下肢が存在



したと考えられる。骨片の焼け方から考えて、まだ乾燥せず軟組織が付着しているような状態で、高温の火により焼かれたと考えられる。こうした点から、ヒトの遺体が火葬されたと考えられる。

3 木製品の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ 黒沼保子

はじめに

阿賀野市に所在する蕪木遺跡から出土した木製品2点の樹種同定を行った。

A 試料と方法

試料は、中世と考えられる井戸(SE225)から出土した曲物(151)と、漆器(146)である。これらの試料から、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクローラーで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

B 結 果

樹種同定の結果、曲物(151)はスギ、漆器(146)はケヤキであった。結果を第4表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 第28図 1a-1c (No.1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

(2) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科

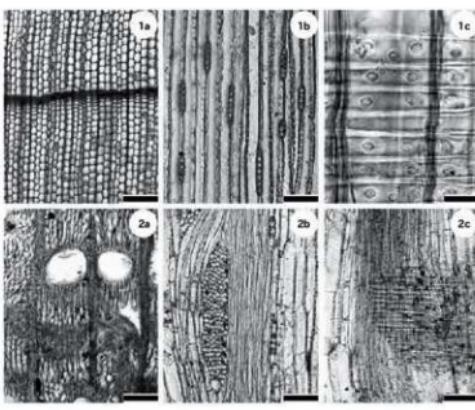
第28図 2a-2c (No.2)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3~5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や溪畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

試料No.	調査区	遺構	種別	樹種	木取り
1	GT14・15・19・20	SE225	曲物	スギ	板目
2	GT14・15・19・20	SE226	漆器	ケヤキ	板本取

第4表 樹種同定結果



1a-1c. スギ (No.1).
2a-2c. ケヤキ (No.2)
a: 横断面 (スケール=250 μm), b: 接線断面 (スケール=100 μm), c: 放射断面 (スケール=1:25 μm, 2:100 μm)

第28図 蕪木遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

C 考 察

曲物（151）はスギであり、木取りは板目であった。曲物には一般的にスギやヒノキなどの針葉樹が多く利用され、新潟県でも容器としての曲物や、井戸側としての曲物でもスギが多用される傾向がある〔伊東・山田編 2012〕。漆器（146）はケヤキであり、木取りは横木取りであった。漆器の木地には、ケヤキやブナ属、トチノキがよく利用され、新潟県内でも同様の傾向を示している〔伊東・山田編 2012〕。したがって、今回の分析結果は周辺遺跡にみられる木材利用傾向とも一致する。

引用・参考文献

- 平井信二（1996）木の大百科、394p、朝倉書店。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p、海青社。

4 黒褐色固体物

パリノ・サーヴェイ株式会社 齊藤紀行

はじめに

蕉木遺跡（新潟県阿賀野市大字堀越字蕉木地内）は、現在の阿賀野川右岸、旧阿賀野川などの河川によって形成された自然堤防上に立地する。本遺跡では、これまでの発掘調査の結果、平安時代（9世紀後半主体）および鎌倉～江戸時代の遺構や遺物が確認されている。

本報告では、蕉木遺跡の発掘調査で出土した黒褐色を呈する固体物（150）の性状の検討を目的として、赤外分光分析を実施した。

A 試 料

試料は、古代の大型建物が検出された範囲にあたる、6Q15 グリッド P114 の検出面から出土した塊状物質（遺物名：黒褐色固体物）である。黒褐色固体物は、歪んだ楕円形を呈し、長径約 12cm、短径約 9cm、高さ約 4.5cm を測る。表面は暗褐色～褐色および灰白色～白色を呈する泥（シルト～粘土）などに覆われるが、内部が露出する部分や裂け目部分の一部について表面の泥を除去した箇所には黒色物が確認され、とくに後者の箇所の黒色物は光沢を有する（第30図）。

本分析では、事前観察の後、上記した黒色物について、予備調査として有機溶剤（クロロホルム）反応の確認を行った結果、溶出することが確かめられた。このことから、アスファルトの可能性があると判断し、赤外分光（FT-IR）分析による性状の検討を行った。

B 分析方法

1) 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物

質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成する分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 cm^{-1} で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることもできる【山田 1986】。

2) 赤外線吸収スペクトルの測定

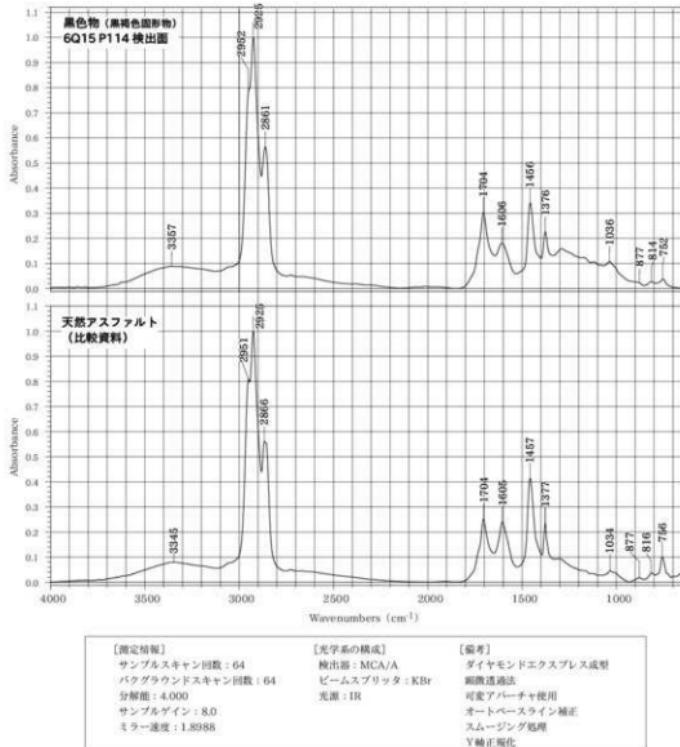
微量採取した試料をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微 FT-IR 装置（サーモエレクトロン（株）製 Nicolet Avatar 370, Nicolet Centaurus）を利用して、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作製した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アバーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。また、測定条件及び各種補正処理の詳細は、FT-IR スペクトルと共に図中に併記している。

C 結果および考察

黒褐色固体物（150）より採取した黒色物の FT-IR スペクトルを第 29 図に示す。また、図中には、比較資料として天然アスファルトの実測スペクトルも併記した。

黒色物の FT-IR スペクトルは、 2952cm^{-1} 、 2925cm^{-1} 、 2861cm^{-1} の強い吸収帯と、 3357cm^{-1} 、 1704cm^{-1} 、 1606cm^{-1} 、 1456cm^{-1} 、 1376cm^{-1} の吸収帯によって特徴付けられた。このうち、 3357cm^{-1} の吸収帯は O-H 伸縮振動、 2952cm^{-1} 、 2925cm^{-1} 、 2861cm^{-1} の吸収帯はメチル基およびメチレン基の C-H 伸縮振動、 1704cm^{-1} の吸収帯は C=O 伸縮振動、 1606cm^{-1} の吸収帯は C=C 伸縮振動または C=O 伸縮振動、 1456cm^{-1} の吸収帯はメチル基およびメチレン基の対称変角振動、 1376cm^{-1} の吸収帯は C-O 伸縮振動あるいは O-H 变角振動と予想される。以上の吸収帯の特徴は、比較資料として示した天然アスファルトと類似することから、黒色物はアスファルトと判断される。

アスファルトは、原油に含まれる炭化水素類の中で最も重質の物質である。日本国内では、青森県から新潟県にかけての日本海沿岸地域において天然アスファルトが産出する。アスファルトの利用については、縄文時代を主体として、石器等の接着や固定、土器の補修等に用いられる事例が多く確認されている。また、【田中 2000】によれば、阿賀北地域では中世の出土遺物や近世以降の民俗資料などから灯明用としてアスファルトが利用されたことが述べられている。今回の試料については利用用途を明らかとはできないが、この点についてはアスファルトの利用痕跡の残る出土遺物の検討などにより明らかになると思われる。



第29図 FT-IRスペクトル



第30図 黒褐色固形物 (150)

引用文献

- 田中耕作, 2000, 古代におけるアスファルトの利用, 石油技術協会誌, 第65巻, 第4号, 314-319.
山田富貴子, 1986, 赤外線吸収スペクトル法, 機器分析のてびき第1集, 化学同人, 1-18.

5 阿賀野市蕪木遺跡で認められた噴砂の磁化研究

酒井英男・石田桃子・泉 吉紀（富山大学理学部）、菅原明日香（青山学院大学文学部）、
ト部厚志（新潟大学災害・復興科学研究所）

はじめに

新潟県阿賀野市に所在する蕪木遺跡は、旧阿賀野川が形成した自然堤防上に立地する（第31図）。国道のバイパス整備に伴って平成26年に、新潟県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が行われ、そして大型掘立柱建物や灰釉陶器等が見つかり、平安時代（9世紀）の都衙に関係した遺跡である可能性が指摘された。また中世の造構・遺物も出土した。

遺跡には、地震時の液状化で形成された噴砂も認められた。本研究では、噴砂について、その磁性を利用して年代を研究した。蕪木遺跡の周囲では、山口野中遺跡や境塚遺跡でも噴砂が確認されており、同様に磁性を用いる年代研究が実施されている〔酒井・木村 2011、酒井ほか 2013〕。



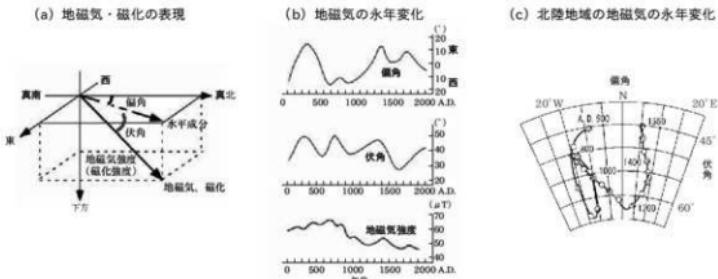
第31図 蕪木遺跡の位置と磁化調査の様子

A 残留磁化と年代推定

土壌や岩石には、磁石になる性質を持つ強磁性粒子が微量含まれている。そして、遺跡の焼土や土器などは焼成時に、また土壌は堆積時に、地磁気の記録となる残留磁化（磁化）を獲得する。地磁気と残留磁化は、第32図（a）の様に、方向（偏角、伏角）と強度で表される。

地磁気は、地球の流体核の運動で生じており、常に変化している。日本では、Hirooka [1971] や Sakai & Hirooka [1986] 等の遺物の磁化研究により、過去2000年間の地磁気の詳細な変化が得られている（第32図（b））。この地磁気変化を利用して、年代が不明な試料の磁化を求めて比較することで年代を推定できる〔酒井ほか 2016〕。また最近、地磁気変化には地域で若干の差異があることが判明してきた。北陸地域では、広岡 [1997] により、第32図（c）に示す A.D.500–1550 年の地磁気変化が求められている。

噴砂は、地震の際に、液状化により地中から土壌と水が隙水圧で上へ噴出してできる。その際、噴砂に含まれる磁性粒子は、自由になり地磁気方向を向いて堆積し、地磁気方向に磁化を獲得すると考えられる。我々は、この様に獲得される噴砂の磁化を用いて噴砂（地震）の年代推定が可能なことを明らかにした〔酒井ほか 1983・2007など〕。本研究では、蕪木遺跡の噴砂の磁化を研究し、北陸地域の地磁気変化と対比して噴砂・古地震の年代を検討した。



(a) : 地磁気・磁化の表現

(b) : 地磁気の永年変化

(主に西南日本の試料による) Hirooka [1971], Sakai&Hirooka [1986] より抜粋加筆。

(c) : 拡大シュミットネット上での北陸地域の地磁気変化 (広岡 [1997] より抜粋加筆)。

B 燕木遺跡で認められた噴砂と研究試料

燕木遺跡では大規模な噴砂脈が3条確認された。第33図に示す噴砂脈(噴砂3, 4, 5)は、約30mの間隔で北から順に位置し東西に伸びており、最大で約25mの長さがあった。

噴砂3は、遺跡の西壁で地表1.6m下から吹き上がっていた。壁面において、噴砂を挟む左右の対応する地層が、上下に約25cmずれていた。これは、液状化による噴砂と共に、地層の東方向への側方流动の影響もあったためと考えられていた。

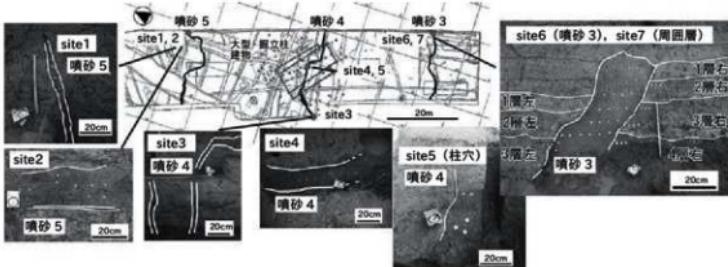
噴砂4は遺跡で最も標高の高地に位置し、地表面から約1m下で約30cm幅に吹き上がっていた。同噴砂は9世紀後半の掘立柱建物SB1の3基の柱穴を貫いていた。

噴砂5は北側に向かって地盤が傾斜する位置にあり、地表約1.5m下から砂が吹き上がっていた。

噴砂3, 5は、中世ないし近世以降の溝によって切られており、それ以前の噴出と考えられていた。

< 噴砂の研究試料 >

試料は、噴砂脈に第33図のsite1-7を設定して採取した。採取には、容量7ccのプラスチックケースを使用した。表層を数cm削り取った噴砂面に打込み器でケースを埋め込み、クリノメーターを用いて磁化の解析に必要な試料面の走向と傾斜角を読み取った。図の様に、噴砂4から3箇所(site3, 4, 5)、



第33図 噴砂試料の採取箇所

噴砂5では2箇所(site1, 2)で、試料を採取した。site5では掘立柱建物SB1の柱穴を貰い噴砂を採取した。噴砂3では、噴砂脈をsite6、噴砂で分断された地層面をsite7とし、左右の面の4層から試料を採取した。

C 磁 化 研 究

試料の自然残留磁化(NRM)をまず測定した。NRMには、様々な要因で二次磁化が付着していることがある、取り除く必要がある。そこでNRM測定後、各試料に交流磁場を加え、磁場を徐々に強くしながら二次磁化を段階的に消磁する段階交流消磁実験を行った。

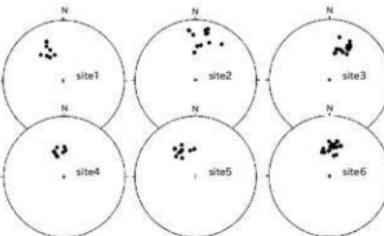
磁化測定と交流消磁実験には、富山大学の超伝導磁力計を使用した。また試料採取の際に磁気コンパスを使用しているので、測定データには、現在の磁北と真北のズレ(現在の偏角)を補正する必要があるが、国土地理院による偏角分布の二次近似式に調査地の緯度・経度を入力して得た、西偏8.1度を補正值として用いた。

自然残留磁化と交流消磁

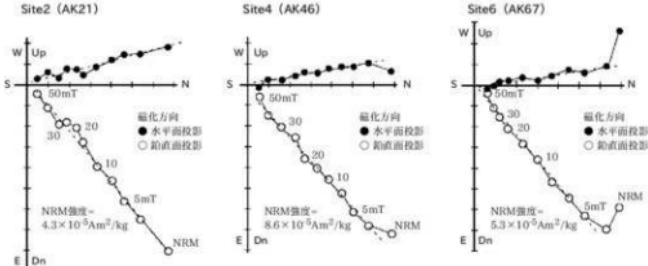
第34図に、site7(堆積層)以外の各サイトの噴砂のNRMをシムミットネット図に示した。多くの試料の磁化は北方向を向き、また各サイトでまとまることから、無木遺跡の噴砂の磁化は形成時の地磁気方向を記録していると考えられた。

NRMを測定後、各サイトの試料について、50mT(ミリテスラ)までの10段階の交流磁場にて消磁を行った。消磁による磁化の変化は、ザイダーベルト図[Zijderveld 1967]で解析した。第35図に代表的な消磁結果を示す。この図では、磁化を水平・鉛直成分に分解して各平面に投影し、磁化の方向と強さの変化を同時に調べることができる。

多くの試料で、図の磁化プロットは原点へ向かっているが、プロットの直線性が良くなく不安定な磁化を示す試料もあった。また、低い消磁の段階でプロットが直線から大きくずれる試料もみられた。各試料について、ザイダーベルト図のプロットに、主成分分析法[Kirshvink 1980]を適用して、安定な磁化方向を求めた。



第34図 site1-6 の噴砂試料のNRMの方向



第35図 代表的なザイダーベルト図

D 磁化方向と地磁気年代の検討

交流消磁で安定な磁化が得られなかった試料を除き、3つの噴砂脈の各サイトから信頼度の高い磁化を持つ試料を選んだ。そしてフィッシャー統計【Fisher 1953】を適用して、各噴砂脈について、磁化方向の平均と95%信頼角(α_{95})を求めた。第5表に、その結果を示している。

噴砂脈とサイト名	試料数	偏角(°)	伏角(°)	磁化の信頼角 α_{95} (°)	磁化強度 (Am ² /kg)
噴砂5 (site1, 2)	8	-14.2	60.9	3.4	4.0×10^{-5}
噴砂4 (site3, 4, 5)	18	-10.3	53.6	3.5	1.01×10^{-4}
噴砂3 (site6)	11	-8.5	49.8	3.9	5.1×10^{-5}

第5表 噴砂の磁化の測定結果

第36図には、噴砂3、4、5の磁化方向を拡大シミュットネット図に示し、A.D.500-1000年の北陸の地磁気変化と比較している。各噴砂の磁化方向を囲む小円は α_{95} の範囲を示し、小さい程データの信頼度が高い。

第36図の磁化と地磁気変化との対比から、噴砂5の年代はA.D.800-950年と推定された。噴砂3(site6)の磁化については、地磁気変化から東方へずれるが、A.D.800-900年頃の方向に近い。噴砂3、5は中世または近世以降の溝で切られており、上記の結果は考古学的見地とも矛盾はない。噴砂4については、A.D.850-1000年頃と推測したが、同噴砂は9世紀後半の掘立柱建物SB1の柱穴を貫いており、調和する年代であった。

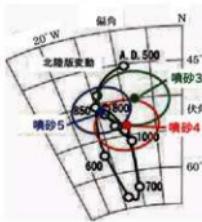
上述の蕉木遺跡の3つの噴砂脈が同時に発生している場合、それらの平均の磁化方向(偏角-11.0°、伏角51.5°)は、A.D.900年頃の地磁気と対応する。この年代に近い新潟で起きた古地震として、A.D.863年に発生した越中・越後地震があり、蕉木遺跡で認められた噴砂は、磁化研究では越中・越後地震で形成された可能性が高いと考えられた。

噴砂脈3のsite7の磁化

site7の試料は、第37図の様に噴砂3に接する両側の堆積層から採取した。噴砂脈の両側では、4層が判別できたが、対応する層は位置(高さ)がずれていた。上から1-4層として層毎に磁化を調べた結果を、第6表にまとめている。磁化方向は、第5表の噴砂3(site6)の磁化方向と違うが、これは、噴砂と周囲土壌の形成年代が異なることが主な理由である。また両側の対応する層の磁化方向も異なっているが、その違いに規則性は見られなかった。噴砂層を挟む上下のすれば、地層が側方流動の影響を受けた痕跡の可能性も指摘されている。これは、磁化データから定量的に研究できるので【酒井ほか2015】、今後の検討課題としたい。

サイト名	層 (n)	試料数	偏角 (°)	伏角 (°)	磁化の信頼角 α_{95} (°)	平均磁化強度 (Am ² /kg)	平均帶偏率 (×10 ⁻⁵ m ² /kg)
site7	1層右	2	5.1	47.5	24.5	1.44×10^{-5}	0.8
	1層左	2	2.6	53.1	18.9	1.94×10^{-5}	0.9
	2層右	2	-7.4	49.0	6.2	3.43×10^{-5}	1.8
	2層左	2	-3.3	40.6	21.1	5.81×10^{-5}	0.7
	3層右	3	-6.6	54.0	6.2	9.26×10^{-5}	6.5
	3層左	4	8.4	50.2	3.7	1.34×10^{-5}	6.3
	4層右	2	6.8	56.4	28.6	2.51×10^{-5}	45.6

第6表 噴砂3(site7)の磁化



第36図 site1, 2 (噴砂4), site3～5 (噴砂4), site6 (噴砂3) の磁化方向と北陸の地磁気変化 (A.D.500-1550)との比較 広岡【1997】より抜粋加筆。)



第37図 site6, 7の試料採取状況

E ま と め

新潟県阿賀野市に所在する熊木遺跡で認められた3条の噴砂脈の年代を、磁化調査により研究した。採取試料の安定な磁化について、過去の地磁気変化と対比した結果、噴砂4、5ではA.D.850~1000年、噴砂3の磁化では、A.D.800~900年の年代が推定された。これらの年代に対応する、新潟県で過去に起きた地震として、A.D.863年の越中・越後地震がある。熊木遺跡の噴砂は越中・越後地震により発生した可能性が高いと考えられる。熊木遺跡の周囲の遺跡でも噴砂が認められており、今後、周辺遺跡での噴砂の磁化研究も含めて、旧阿賀野川流域に影響した古地震の研究を進めることが望まれる。

謝 詞

調査と研究結果の検討にあたって、新潟県埋蔵文化財調査事業団の荒川隆史氏と鈴木俊成氏には大変お世話になった。研究の一部に、新潟大学災害・復興科学研究所共同研究費（2017）および北陸地区国立大学学術研究連携支援研究費を使用した。

参考文献

- Fisher, R.A. (1953) : Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London A, 217, 295-305.
- Hirooka, K. (1971) : Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. and Mineral., 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1997) : 北陸における考古地磁気研究、中・近世の北陸－考古学が語る社会史－、桂書房、560-583.
- Kirschvink, J. L. (1980) : The least-squares line and plane and the analysis of paleomagnetic data, Geophys. J.R. Astr. Soc., 62, 699-718.
- Sakai, H. and Hirooka, K. (1986) : Archaeointensity determinations from western Japan, J. Geomag. Geoelectr., 38, 1323-1329.
- 酒井英男・広岡公夫 (1983) : 古地磁気・岩石磁気からみた断層運動、月刊地球7, 394-398.
- 酒井英男, 伊藤 孝, 菅原明日香 (2007) : 考古地磁気法による古地震の年代推定の研究, 活断層研究27, 活断層研究会, 9-16.
- 酒井英男, 木村克之 (2011) : 新潟県阿賀野市境塚遺跡で認められた噴砂の探査と磁化の研究, 総務省消防防災事業関連遺跡発掘調査報告書III, 境塚遺跡・山口野中遺跡・三辺稻荷遺跡, 阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集, 新潟県阿賀野市教育委員会, 200-205.
- 酒井英男, 名古屋岳秀, 加藤 学 (2013) : 山口野中遺跡で認められた噴砂の磁化の研究, 山口野中遺跡, 新潟県埋蔵文化財調査報告書第248集, 52-57.
- 酒井英男, 泉 吉紀, 木村克之, 伊藤 孝, 鹿島昌也, 加藤由美子 (2015) : 地震による構造の変形の磁化研究からの検証, 情報考古学, 21, 20-27.
- 酒井英男, 広岡公夫, 中島正志, 夏原信義 (2016) : 考古地磁気年代推定法, 考古学と自然科学, 71, 1-18.
- 宇佐美龍夫 (1996) : 新編日本被寄地震総覧, 東京大学出版会, 434pp.
- Zijderveld, J.D.A. (1967) : A.C. demagnetization of rocks-analysis of results, Methods in Paleomagnetism, edited by Collinson, D.W., Creer, K.M. and Runcorn, S.K., New York, Elsevier, 254-286.

第VII章 ま と め

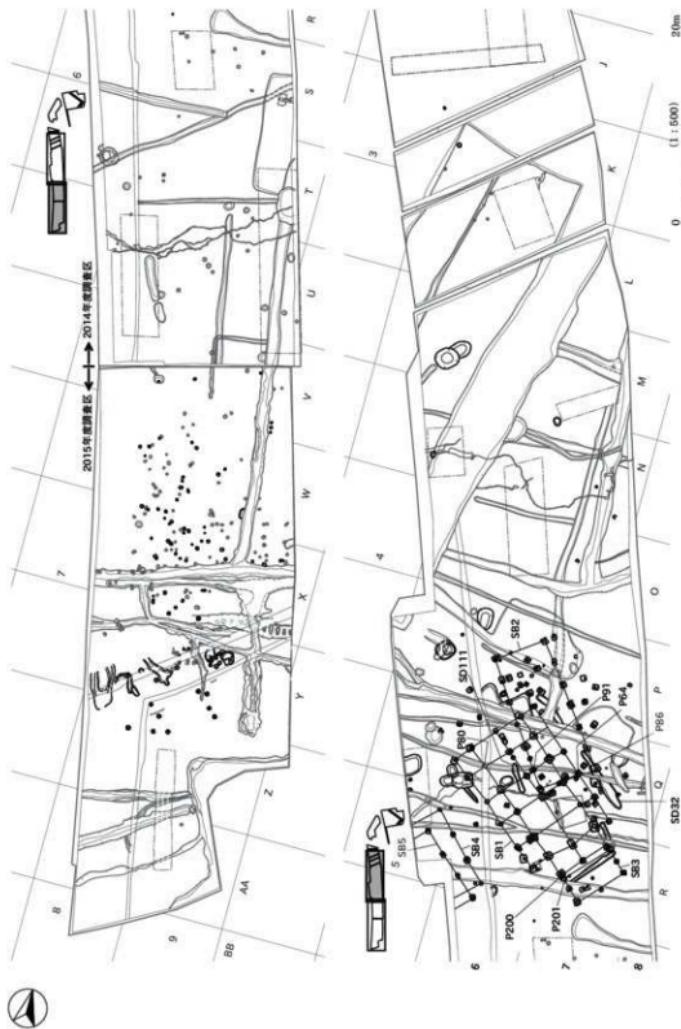
1 中世以降の遺跡

蕉本遺跡では複数の遺構が重複し、近・現代遺物を伴う明らかな擾乱もみられた。出土遺物から遺跡の中心時期は古代であると考えるが、中世、近世、近・現代の遺物も遺構から出土しており、検出した遺構には異なる時期のものが混在している。ここでは検出遺構を古代とそれ以後（中世～近世、近・現代）の遺構に整理し、併せて中世以降の土地利用について検討したい。なお、分離が不可能な中世、近世の遺構を認定するため近・現代遺構についても整理する。

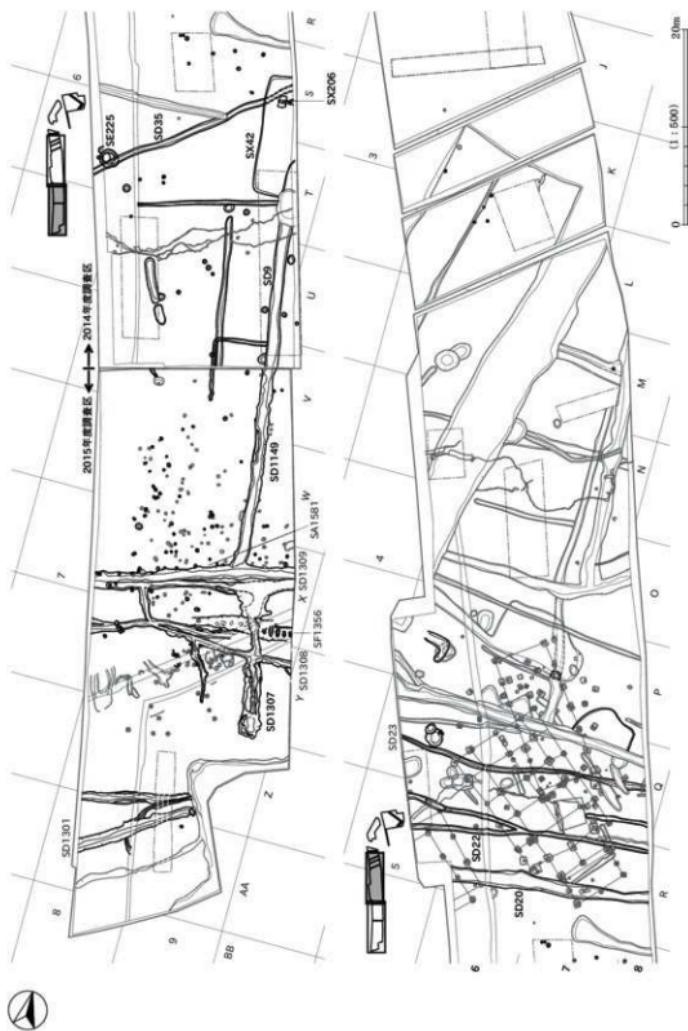
まず、後世の削平と搅拌（①・②）、遺構埋土の特徴（③）、各時期に伴う遺構（④～⑥）について、その状況と調査所見を以下に整理する。

- ① 遺構検出面は表土直下で、本来存在したであろう遺物包含層は削平されている。したがって遺構埋土と包含層を対比して遺構の時期を推定することができない状況にある。
- ② 遺物の接合関係では、重複する遺構同士の接合例が多く認められ（25・46・47・51・66・99・100・102等）、距離が10m以上離れて接合したものも少なくない（57・76・105・106・134等）。極端な例ではSX44出土品と4J22擾乱出土品が接合しており、両者は約60m離れている。このことから遺跡表層は搅拌ないし土壤の移動が大きかったことが窺える。これら表層の大規模な改変は、昭和初期の水田化によると考えられる。
- ③ 遺構埋土の色調には、大きく以下の三種類がある。A類：淡い灰黄褐色系、B類：黒褐色～暗褐色系、C類：灰色～褐灰色系。
- ④ 出土遺物から検出遺構の主体時期は古代で、5～7P～Sの古代の土器を伴った掘立柱建物群から集落と考えられる。また、建物群を切る溝が複数みられ（SD20・22・23・24）、掘立柱建物と軸が全く異なっていることから、建物群とは無関係な後世の遺構が存在することがわかる。
- ⑤ 中世の遺構で確実なものはSE225、SK206があり、これらは出土遺物の放射性炭素年代測定からSE225が13世紀後半～14世紀末、SK206は13世紀末～15世紀初頭である（第VI章参照）。また、前記の中世遺構は他の遺構（SD35、SX8・42）に切れることから、より新しい時期の遺構が存在することがわかる。
- ⑥ 近・現代遺物が少量ながら遺構から出土しており、そのうち、SD7・25・34、SK243は近・現代の遺構の可能性が高い。

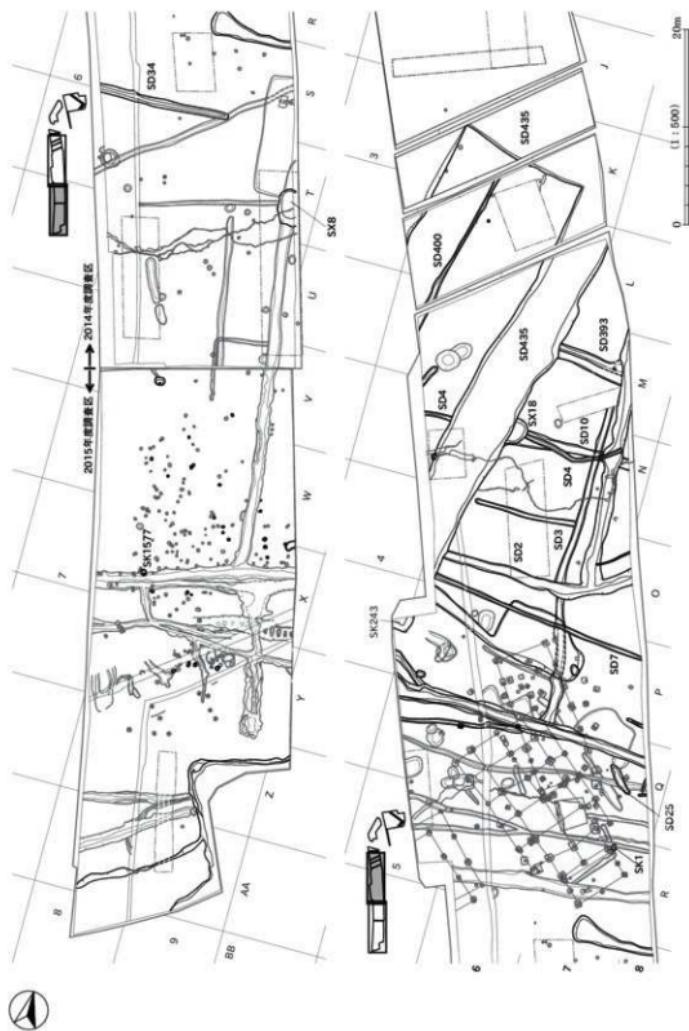
次に前述の調査状況③～⑥を踏まえ、遺構の変遷について考えてみたい。遺構の時期が確実なもの④・⑤と遺構埋土の分類③を組み合わせ、各遺構の時期的な可能性を検討する。遺構埋土の分類は前述の三種類であるが、A類は古代の掘立柱建物群を含めたビットや雨落溝、そしてその周辺の土坑に多い傾向があり、C類は近・現代遺物を伴う遺構に特徴的にみられた。また、中世遺構として確実なSE225、SK206はB類に該当することから、A類を古代、B類を中世、C類を近・現代と推測するが、B類の遺構については近世遺物の出土をみるものや後述する更正図の区画と近いものがあることから、時期については中世～近世の幅を持たせる。埋土分類と遺構の重複関係を確認できる例として、SB1・2とSD23、SD25



第38図 古代の道路分布図



第39図 中～近世の道路分布図



第40図 現代の遺構分布図

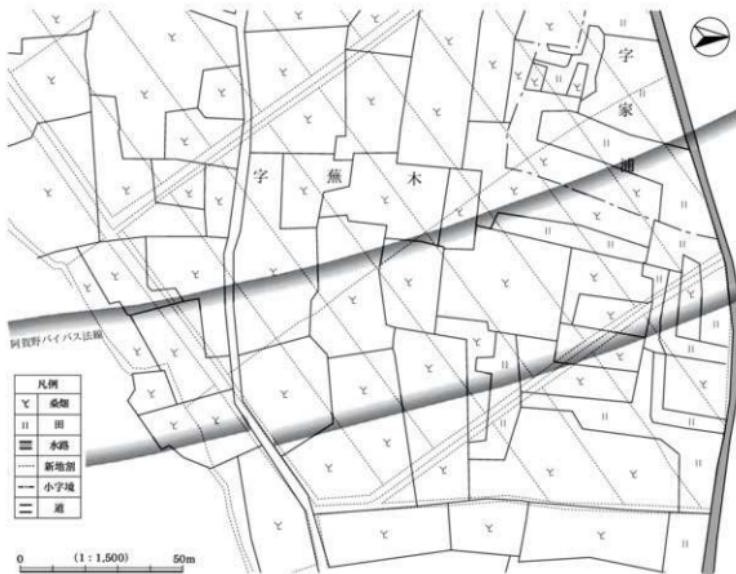
がある。これらの遺構の埋土分類はSB1・2がA類、SD23がB類、SD25はC類である。SB1を構成する柱穴P64・80・232と雨落溝SD32、SB2を構成する柱穴P91と雨落溝SD111はSD23に切られ、SD23はSD25に切られる。

すべての遺構の埋土を分類し、遺構の所属時期を想定したのが第38～40図である。古代の遺構（第38図）のうち建物を中心とする詳細は後述するが、遺構は4～7M～R(I-D区中央)と8・9V～Z(II-A・B区)に集中し、掘立柱建物・土坑・ピットで構成する。そして掘立柱建物はI-D区中央にだけみられる。

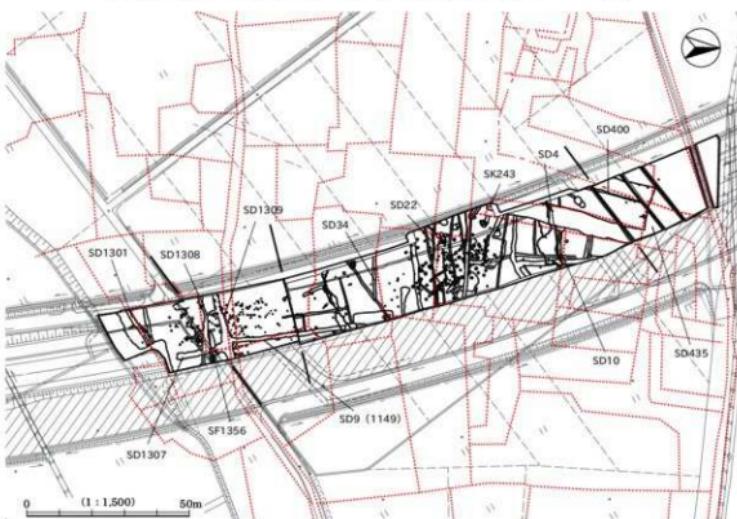
中世～近世の遺構（第39図）はI-D区中央から南側に広がる。井戸SE225が1基みられるものの、遺構の多くは溝であり、火葬土坑SK206が存在することからも集落の縁辺部である可能性が高い。中世遺構の存続期間については、放射性炭素年代測定から13世紀後半～15世紀初頭までの長期間である可能性が示されているが、出土遺物は13～14世紀に収まるので、中心時期も同様と推測する。

近・現代の遺構（第40図）は調査区全体に広がる。これらについては、地図等の記録類との対比を行いたい。熊本遺跡の調査前の地目は水田である。周辺の詳細な地形図で最も古いものは1911（明治44）年に陸地測量部が測量したものであり、そこには遺跡の位置に桑畑の記号がみられる。堀越地区を含め、周辺では明治期以降に養蚕業が盛んであった。しかし、内地食糧生産増進を目的とした開墾助成法が1919（大正8）年に公布された結果、桑畑のほとんどが大正から昭和にかけて水田へと転じた〔水原町1982・1984・1986、村上ほか2013〕。このように明治以降の開発行為からも古代・中世・近世の遺物包含層や本来の遺構検出上面が削平されている可能性は高い。

次に更正図との比較を試みたい。更正図とは「公団」「地籍図」とも呼称し、明治初期に土地への課税を目的として作成された土地台帳の付図の総称〔新潟市2014〕であるとともに、土地の区画（筆界）・地種・地目・面積・字名・地番、あるいは所有者などを示した大縮尺の地図である〔橋本2005〕。堀越地区的更正図（阿賀野川土地改良区保管）は区画を表す実線と小字境を表す一点破線、区画内は一部着色を伴って表現されている。黄色は桑畑、青色は川・水路を示し、区画内で無色の場合は水田を示す。第41図は堀越地区的更正図をトレースし、阿賀野バイパスの法線を加筆したものである。着色部分は記号やトーンに置き換えた。第42図のように検出遺構と重ねると、更正図の区画に一致または近似する箇所がいくつかみられる。ほぼ一致するものとしてSD4・10・22・34・400・435・1301、SK243が挙げられるが、このうちSD34とSK243からは近・現代陶磁器が出土している。また、SD435、SK243に比定できる細長い区画は、更正図の色表記から「水田」と読み取れる。この区画線に限らず、更正図内の水田は細長い区画が多い。SD435、SK243の調査からは、この細長い方形区画が掘り込まれて造られていることが明らかで、古くは新潟市細池遺跡・寺道上遺跡〔小池ほか1994〕で凹地遺構として調査され、能登・健が「掘田」・「掘上田」と区別して「掘込田」と呼称している水田の可能性が高い〔能登1996〕。従来いわれている「掘田」・「掘上田」は、水田に適さない土地を改変し、水田化するために用いられた手法で、全国的にみられ、「低湿な地面、あるいは湖底の泥土を搔き揚げ、嵩上げし、一方、泥土をとった部分は逆に掘り下げられ水面に没する。その水面と残された水田は、ちょうど柳状の特異な景観を構成する」〔菅2003〕ものであるが、前記の「掘込田」は、「掘田」や「掘上田」とは逆に自然堤防上の微高地などの乏水地帯や導水の便が悪い土地を掘削し、湧き水や雨水を溜めて水田とするものである。そのほか中世～近世遺構（第39図）としたSD1149は更正図の区画線と方向・位置が近似し、SF1356は位置がずれるが更正図に記された道と方向が近い。これらは中世ないし近世以降の土地区画を近代まで継承した痕跡ともみられるが、はつきりしない。



第41図 薫木遺跡周辺の旧地割
(「北蒲原郡南部耕地整理組合整理法第十四條第一項該當賃貸価格修正量は號」をトレース・改変)



第42図 検出遺構と旧地割

以上、近・現代遺構としたSD4・10・34・400・435、SK243や中世～近世遺構としたSD22・9(1149)・1301・1307・1308・1309、SF1356は更正図に描かれた区別に比定できる可能性を持ち、後者は上記同様、当時の土地区画を近代まで継承した可能性がある。特にSD435とSK243は更正図に描かれた水田と考えて間違いないだろう。また、前記の遺構を切っているものや、連結する遺構(SD9(1149)・1306～1309など)についても田畠に関連する遺構の可能性が高いと考える。

2 古代遺構の時期と変遷

ここでは遺跡の中心時期である古代の遺構について検討する。まず遺構の時期について述べる。出土土器の主体は食膳具の土師器碗で須恵器の数を圧倒する。須恵器は佐渡小泊窯産が主体を占めているものの、在地産である笛神窯産のものが少量ながら含まれる。阿賀野川以北の須恵器生産は8世紀前葉には開始、8世紀末～9世紀前半に最盛期を迎える。9世紀中頃まで継続されると考えられている〔笛沢2004〕。また、在地窯産主体から小泊窯産主体への移行が9世紀中頃に始まると考えられている〔坂井1991〕。蕉木遺跡の時期はこの移行期であると考えられる。時期的に古い様相としては須恵器無台杯(120)や灰釉陶器皿(76)などがあり、新しい様相としては小泊窯産の有台杯(179)がある。時期幅はおおよそ9世紀代に収まると考えられ、存続時期は短期間であったと思われる。また、遺構一括資料としては、SB1雨落溝であるSD32の出土品があり(1～36)、これらの遺物からSB1の時期は9世紀第3四半期に位置づけられる。

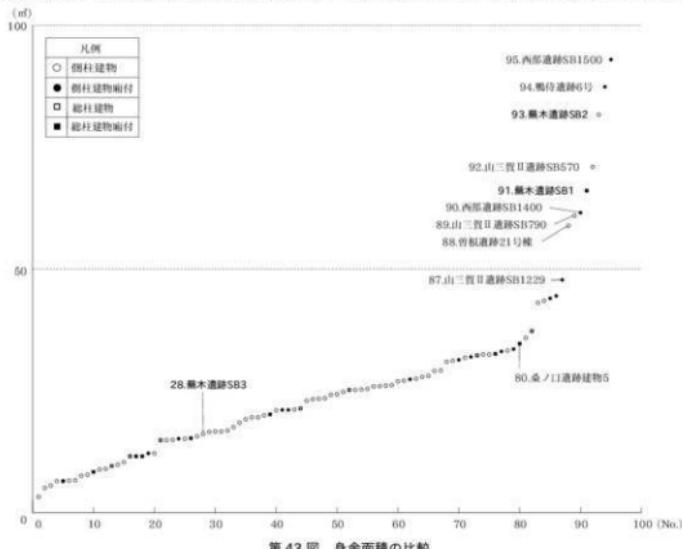
次に建物の変遷について検討する。SB1とSB2、SB1とSB3は確実に重複し、SB4とSB5についても重複する可能性が高い。SB1とSB2の新旧関係は、SB1雨落溝のSD32がSB2柱穴のP86を切っているため、SB2→SB1の変遷が考えられる。同様にSB1とSB3の新旧関係は、SB1柱穴のP200がSB3柱穴のP201を切っているため、SB3→SB1の変遷が考えられる。また建物の主軸方位はSB1がN-49°-W、SB2がN-34°-W、SB3がN-44°-E、SB4がN-44°-W、SB5がN-49°-Wである。SB1とSB5の主軸が一致するため、SB1とSB5、SB2とSB4の組み合わせが想定できる。この組み合わせを時期差と考えたい。調査区内での変遷でしかないため暫定的ではあるが、SB2・3・4→SB1・5と変遷した可能性がある。

SB1とSB2は他の建物に比べ大型であることが注目される。建物の規模は遺跡の性格に関わる重要な要素ではあるが、遺跡の評価は他の遺構や出土遺物など、総合的に検討する必要がある。まず、建物の面積は、SB1が身舎のみで約65m²、廂を含めて約143m²、SB2が約82m²である。これまで報告されている他遺跡の掘立柱建物の面積を比較するため、阿賀野川以北における8世紀前葉～10世紀中葉の掘立柱建物を集成したものが第7表である。比較にあたっては、身舎の面積のみを対象とし、第43図を作成した。このため、廂を含めた面積で比較した場合と結果が異なる建物もみられた。報告書によっては身舎の面積が示されていないものもあるが、その場合は平面図から計測した。第43図から、第1群50m²未満、第2群50m²以上100m²未満に分けることができる。多くが第1群に含まれ、第2群に8棟みられた。第2群には蕉木遺跡のSB1とSB2のほか、西部遺跡SB1400・1500、鶴待遺跡6号建物、山三賀II遺跡SB570・790、曾根遺跡21号棟がある。このうち西部遺跡のSB1400・1500は、屋内から鍛冶炉や地床炉、漆紙文書、漆パレットなどが検出されていることから官衙関連の工房と報告されている〔湯原ほか2010、鈴木2013〕。鶴待遺跡は官衙関連遺跡で、郡司層の居宅の可能性が指摘されている〔吉井

2002]。山三賀II遺跡は当該期の大規模遺跡であるが、その性格は農耕集落と考えられている〔坂井ほか1989〕。その中でSB570・790は比較的規模が大きい。曾根遺跡は多量の墨書き土器、円面鏡、木簡・斎事・人形・舟形・木舟・繪扇などの木製品が出土し、建物配置を含め一般集落とは考えにくい内容であることから、何らかの官衙関連遺跡と推測されている〔坂井1996〕。以上のように第2群に含まれる遺跡は官衙関連遺跡が多いことが指摘できる。ただし、山三賀II遺跡のように農耕集落と理解されている遺跡の建物も含まれ、逆に第1群に官衙関連が指摘されている桑ノ口遺跡〔鶴巻ほか2003〕で中心的な建物とされる建物5が含まれるなど、単純な面積比較では遺跡の性格づけが困難であることも窺える。官衙関連遺跡と認定する他の要素として、建物型式や建物配置なども指摘されている〔坂井2005〕。建物型式は梁間二間の掘立柱建物が律令型と呼称され、重要視されている〔春日2009〕。蕉木遺跡では、SB1が2間×4間の総柱建物に4間×6間の廊が付く。ただし、廊の一辺は2間×1間が凸状に付属する。SB2は1間×6間の梁間一間型建物である。また、SB1・2の柱穴掘方は方形のものが多くみられるが、その向きは不規則である。建物配置については、調査範囲が限定されているため、言及する材料を欠く。

その他、遺跡の性格を示唆する遺物として、灰釉陶器皿(76)のような高級品、墨書き土器(169)や墨痕が認められる須恵器(99・128)、出土例が少ない黒色土器耳皿(78)、遠隔地からの搬入の可能性が高い双耳瓶(133)、漁労を示す土鍤(209～214：中世の可能性もあり)、アスファルト塊(150)があるが、いずれも少量である。

調査状況からは蕉木遺跡の性格は官衙的色彩が濃いが、建物構造等から国に関連する施設と裏付けることはできない。しかし、郡に関連する施設や有力者の居宅である可能性は高いと考えられる。春日真実〔1995〕は古代の集落をA～F類に分類し、それぞれの性格づけを行っている。蕉木遺跡はB類の官衙関連遺跡、もしくはC類の官衙とは直接関連しない有力者の居宅とに該当し、調査状況の分析と合致する。



第43図 身舎面積の比較

番号	所在地	遺跡名	遺跡名	遺跡分類 (括弧内は古記)	面積×平均幅	sondage (af)	sondage (af)	時期	備考
90	利根川上流	西平遠跡	SB1400	梁間一間型	1間×6.4m×4.6m	61.6	14.9	9世紀末～10世紀初葉	sondageは地上復元
95	利根川上流	西平遠跡	SB1500	梁間一間型	1間×6.4m×4.6m	95.0	25.0	9世紀末～10世紀初葉	sondageは地上復元
92	利根川上流	西平遠跡	SB1501	梁間一間型	1間×6.4m×4.6m	27.0	6.8	9世紀末～10世紀初葉	sondageは地上復元
86	利根川上流	西平遠跡	SB2020	梁間一間型	1間×3.8m×4.6m	44.5	9.7	9世紀末～10世紀初葉	sondageは地上復元
74	利根川上流	西平遠跡	SB2100	梁間一間型	1間×4.4m	32.5	32.5	9世紀末～10世紀初葉	sondageは地上復元
23	利根川上流	西平遠跡	SB3050	梁間一間型	1間×2.4m	16.0	15.0	9世紀末～10世紀初葉	
11	利根川上流	西平遠跡	SB3100	梁間一間型	1間×2.4m	8.9	8.9	9世紀末～10世紀初葉	
58	利根川中流	中流低地跡	SB113	柱穴式	2間×3間	26.1	26.1	9世紀末～10世紀初葉	
64	利根川中流	中流低地跡	SB114	柱穴式	2間×3間	43.5	33.0	9世紀末～10世紀初葉	
79	利根川中流	中流低地跡	SB115	柱穴式	2間×3間	12.0	36.0	9世紀末～10世紀初葉	14Cで12世紀後半～13世紀前半
52	利根川中流	中流低地跡	SB116	柱穴式	2間×3間	25.2	25.2	9世紀末～10世紀初葉	14Cで12世紀後半～13世紀前半
94	利根川中流	中流低地跡	SB117	柱穴式	2間×3間	87.4	109.2	9世紀末～10世紀初葉	14Cで12世紀後半～13世紀前半
60	利根川中流	中流低地跡	SB118	柱穴式	2間×3間	27.0	27.0	9世紀末～10世紀初葉	
1	利根川中流	中流低地跡	SB119	柱穴式	1間×1間	3.3	3.3	9世紀末～10世紀初葉	
93	利根川中流	中流低地跡	SB120	柱穴式	2間×3間	26.1	28.1	9世紀末～10世紀初葉	
33	利根川中流	中流低地跡	SB121	柱穴式	2間×3間	24.4	24.4	9世紀末～10世紀初葉	
9	利根川中流	中流低地跡	SB122	柱穴式	2間×3間	7.8	7.8	9世紀末～10世紀初葉	
76	利根川内	和泉山遺跡群(5)	SB123	柱穴式	2間×3間	32.6	42.0	9世紀後半	sondageは地上復元
72	利根川内	和泉山遺跡群(5)	SB124	柱穴式	2間×3間	32.0	45.0	9世紀後半	sondageは地上復元
10	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD11	柱穴式	2間×3間	8.4	12.9	9世紀後半～9世紀前葉	sondageは地上復元 18.2×2間×1.5m
13	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD11B	柱穴式	2間×3間	9.6	13.4	9世紀後半～9世紀前葉	sondageは地上復元 18.2×2間×1.5m
85	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD12	柱穴式	2間×3間	44.0	44.0	9世紀後半～10世紀初葉	sondageは地上復元 18.2×2間×1.5m
55	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD13	柱穴式	2間×3間	25.4	25.4	9世紀後半～10世紀初葉	sondageは地上復元 18.2×2間×1.5m
29	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD15	柱穴式	2間×3間	20.0	20.0	9世紀後半～10世紀初葉	sondageは地上復元 18.2×2間×1.5m
49	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD16	柱穴式	2間×3間	24.2	24.2	9世紀後半～10世紀初葉	sondageは地上復元 18.2×2間×1.5m
77	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD17	柱穴式	2間×3間	33.1	33.4	9世紀後半～10世紀初葉	sondageは地上復元 18.2×2間×1.5m
91	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD19	柱穴式	1間×1間	35.9	35.9	9世紀後半～10世紀初葉	
67	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD10	柱穴式	2間×3間	29.2	29.2	9世紀後半～10世紀初葉	
30	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD11	柱穴式	2間×3間	16.7	16.7	9世紀後半～10世紀初葉	
31	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD12	柱穴式	2間×3間	16.7	16.7	9世紀後半～10世紀初葉	
44	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD13	柱穴式	2間×3間	23.8	23.8	9世紀後半～10世紀初葉	
25	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD14	柱穴式	2間×3間	19.2	19.2	9世紀後半～10世紀初葉	
80	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD16	柱穴式	2間×3間	34.7	74.1	9世紀後半～10世紀前半	sondageは地上復元
78	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD17	柱穴式	2間×4間	33.5	33.5	9世紀後半～10世紀前半	
21	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD17	柱穴式	2間×4間	14.9	14.9	9世紀後半～10世紀前半	
24	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD18	柱穴式	2間×4間	15.2	42.2	9世紀後半～10世紀前半	2間×3間の両面側壁の可逆性あり
47	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD19	柱穴式	2間×4間	25.0	25.0	9世紀後半～10世紀前半	
44	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD20	柱穴式	2間×3間	31.4	21.4	9世紀後半～10世紀前半	
42	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD21	柱穴式	2間×3間	21.1	21.1	9世紀後半～10世紀前半	
29	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD22	柱穴式	2間×3間	33.6	55.1	9世紀後半～10世紀前半	sondageは地上復元
27	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD23	柱穴式	1間×2間	16.7	16.7	9世紀後半～10世紀前半	
26	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD24	柱穴式	2間×2間	16.3	15.3	9世紀後半～10世紀前半	
25	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD25	柱穴式	2間×2間	16.3	16.3	9世紀後半～10世紀前半	
66	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD26	柱穴式	2間×2間	35.1	35.1	9世紀後半～10世紀前半	
45	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD27	柱穴式	2間×2間	23.0	23.0	9世紀後半～10世紀前半	
62	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD28	柱穴式	2間×3間	37.4	49.7	9世紀後半～10世紀前半	sondageは地上復元
25	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD29	柱穴式	1間×2間	15.2	15.2	9世紀後半～10世紀前半	
22	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD30	柱穴式	1間×2間	14.9	14.9	9世紀後半～10世紀前半	
8	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD31	柱穴式	1間×2間	7.6	7.6	9世紀後半～10世紀前半	
11	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD32	柱穴式	2間×2間	11.7	11.7	9世紀後半～10世紀前半	
17	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD32	柱穴式	2間×2間	11.6	11.6	9世紀後半～10世紀前半	
18	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD33	柱穴式	2間×2間	11.6	11.6	9世紀後半～10世紀前半	
75	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD4M13	柱穴式	2間×3間	32.5	32.5	9世紀後半～10世紀前半	
40	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD5	柱穴式	2間×2間	21.0	21.0	9世紀後半～10世紀前半	
63	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD6	柱穴式	2間×2間	27.5	27.5	9世紀後半～10世紀前半	
68	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD7	柱穴式	2間×2間	31.0	31.0	9世紀後半～10世紀前半	
33	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD8	柱穴式	2間×2間	17.7	17.7	9世紀後半～10世紀前半	
49	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD9	柱穴式	2間×3間	31.2	31.2	9世紀後半～10世紀前半	
57	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD10	柱穴式	2間×3間	26.0	26.0	9世紀後半～10世紀前半	
61	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD11	柱穴式	2間×3間	27.1	27.1	9世紀後半～10世紀前半	
83	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD12	柱穴式	2間×3間	43.1	43.1	9世紀後半～10世紀前半	
50	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD13	柱穴式	2間×3間	24.3	24.3	9世紀後半～10世紀前半	
41	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD14	柱穴式	2間×3間	23.8	23.8	9世紀後半～10世紀前半	
17	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD15	柱穴式	2間×3間	31.8	31.8	9世紀後半～10世紀前半	
18	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD16	柱穴式	2間×3間	31.8	31.8	9世紀後半～10世紀前半	
75	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD17	柱穴式	2間×3間	32.5	32.5	9世紀後半～10世紀前半	
40	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD18	柱穴式	2間×2間	21.0	21.0	9世紀後半～10世紀前半	
62	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD19	柱穴式	2間×2間	27.5	27.5	9世紀後半～10世紀前半	
68	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD20	柱穴式	2間×2間	31.0	31.0	9世紀後半～10世紀前半	
33	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD21	柱穴式	2間×2間	17.7	17.7	9世紀後半～10世紀前半	
49	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD22	柱穴式	2間×3間	31.2	31.2	9世紀後半～10世紀前半	
57	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD23	柱穴式	1間×2間	26.0	26.0	9世紀後半～10世紀前半	
61	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD24	柱穴式	2間×3間	27.1	27.1	9世紀後半～10世紀前半	
83	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD25	柱穴式	2間×3間	43.1	43.1	9世紀後半～10世紀前半	
50	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD26	柱穴式	2間×3間	24.3	24.3	9世紀後半～10世紀前半	
41	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD27	柱穴式	2間×3間	20.0	20.0	9世紀後半～10世紀前半	
54	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD28	柱穴式	2間×3間	35.0	35.0	9世紀後半～10世紀前半	
88	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD29	柱穴式	2間×4間	58.9	58.9	9世紀後半～10世紀前半	
36	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD30	柱穴式	2間×3間	19.6	19.6	9世紀後半～10世紀前半	
34	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD31	柱穴式	2間×3間	18.5	18.5	9世紀後半～10世紀前半	
35	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD32	柱穴式	2間×3間	25.2	25.2	9世紀後半～10世紀前半	
72	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD33	柱穴式	2間×3間	27.9	27.9	9世紀後半～10世紀前半	
92	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD34	柱穴式	2間×3間	32.0	32.0	9世紀後半～10世紀前半	
71	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD35	柱穴式	2間×3間	31.8	31.8	9世紀後半～10世紀前半	
89	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD790	柱穴式	2間×4間	61.0	61.0	9世紀後半～10世紀前半	
70	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD870	柱穴式	2間×3間	31.4	37.2	9世紀後半～10世紀前半	sondageは地上復元
59	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD871	柱穴式	2間×3間	26.2	26.2	9世紀後半～10世紀前半	
56	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD1199	柱穴式	2間×3間	25.9	25.9	9世紀後半～10世紀前半	
97	新潟県南魚沼市	城下町遺跡	SD1229	柱穴式	2間×3間	47.8	47.8	9世紀後半～10世紀前半	sondageは地上復元
73	阿賀野川以北	村山遺跡	SD1	柱穴式	2間×3間	33.7	33.7	9世紀後半～10世紀前半	
91	阿賀野川以北	村山遺跡	SD1	柱穴式	2間×2間	66.1	142.6	9世紀後半～10世紀前半	
93	阿賀野川以北	村山遺跡	SD2	梁間一間型	1間×6間	81.7	81.7	9世紀後半～10世紀前半	
28	阿賀野川以北	村山遺跡	SD3	梁間一間型	2間×2間	16.2	16.2	9世紀後半～10世紀前半	
29	阿賀野川以北	村山遺跡	SD4	柱穴式	4間×6間×4.6m	66.1	142.6	9世紀後半～10世紀前半	
4	阿賀野川以北	村山遺跡	SD5	柱穴式	2間×2間	6.5	6.5	9世紀後半～10世紀前半	
32	阿賀野川以北	村山遺跡	SD6	柱穴式	1間×3間	16.0	16.0	9世紀後半～10世紀前半	
6	阿賀野川以北	村山遺跡	SD8	柱穴式	2間×3間	6.6	6.6	9世紀後半～10世紀前半	
3	阿賀野川以北	村山遺跡	SD9	柱穴式	2間×4間	5.6	5.6	9世紀後半～10世紀前半	
20	阿賀野川以北	村山遺跡	SD10	柱穴式	1間×2間	12.2	12.2	9世紀後半～10世紀前半	
14	阿賀野川以北	村山遺跡	SD17	柱穴式	1間×1間	9.9	9.9	9世紀後半～10世紀前半	
43	阿賀野川以北	村山遺跡	SD18	柱穴式	2間×2間	21.2	21.2	9世紀後半～10世紀前半	
37	阿賀野川以北	村山遺跡	SD19	柱穴式	1間×3間	19.6	19.6	9世紀後半～10世紀前半	
7	阿賀野川以北	村山遺跡	SD20	柱穴式	1間×4間	8.4	8.4	9世紀後半～10世紀前半	
2	阿賀野川以北	村山遺跡	SD21	柱穴式	1間×1間	10.4	10.4	9世紀後半～10世紀前半	
2	阿賀野川以北	村山遺跡	SD22	柱穴式	1間×1間	5.1	5.1	9世紀後半～10世紀前半	
5	阿賀野川以北	村山遺跡	SD23	柱穴式	1間×4間×1.5m	6.5	6.5	9世紀後半～10世紀前半	
43	阿賀野川以北	村山遺跡	SD24	柱穴式	1間×1間	9.0	9.0	9世紀後半～10世紀前半	

第7表 阿賀野川以北の主な古代掘立柱建物一覧表

また、そのような視点で捉えた場合、旧河道の自然堤防上に立地していることは注目に値する。古代において内水面交通が重要であったことは既に多くの指摘がなされており[坂井 1996、鶴巻 2007・2015など]、旧河道蛇行部右岸に位置するこの地は内水面交通の要衝であったと思われる。

3 遺跡の評価

熊本遺跡は海岸から約20kmの越後平野東部にあり、平野を南東から北西に流れる阿賀野川の右岸冲積地上に所在している。遺跡付近には阿賀野川及びその支流の河道路が多く残り、熊本遺跡も内陸側にある旧河道の右岸自然堤防上（遺構検出面で標高10.4～9.4m）に立地している。本調査で河道路を検出していないが、遺跡の中心時期である古代には、この河道が流路として機能していたことが阿賀野市庚塚遺跡〔佐藤ほか2009〕の調査成果から判断できる。

出土した遺物は古墳時代・古代・中世・近世と近・現代であるが、大多数は古代で、古墳時代は土師器1点、中世は土器・陶磁器8点、近世～近・現代の陶磁器約300点である。第38～40図で整理した遺構も古代以外では少なく、古墳時代未検出、中世～近世は井戸1・火葬土坑1・土坑12・道路状遺構1・柵1・性格不明遺構6・ピット28、近・現代は土坑6・溝21・性格不明遺構4である。以下、時代ごとに前述までの要点を記し、遺跡の評価をしたい。

近・現代の検出遺構は主に溝である。土地更正図をみると、調査区が桑畠と一部水田であったことがわかる。検出した溝の幾つかは更正図の土地区画と重なることから、これらについては1919（大正8）年の開墾助成法公布以前の区画沿いに設けた水路などといったものが考えられる。また、I-C区、I-D区にある幅6m前後の幅広の溝SD435は水田と表記されている部分と重なり、検出面から約30cm掘り込んで造成していることから掘込田〔能登前掲〕と考えられる。更正図での水田表記は標高の低いグリッドM～Oライン以北にみられ、SD435同様、南北方向に長い辺をとる方形で区画される場合が多く、以南にみる東西方向に長い辺をとる区画と対照的である。導水の管理がままならない地区環境でグリッドM～Oライン以南の微高地は乾燥に強い桑栽培を、以南では低地の湧水や雨水を溜めた掘込田を併用した稲作が行われたのであろう。なお、掘込田造成に伴う掘削土は隣接の畑地嵩上げに利用したことが推測される。

中世～近世のうち、中世の時期については出土遺物や放射性炭素年代測定から13世紀～15世紀の幅がある。遺構の分布はグリッドPライン以南で、前記の近・現代で示した東西方向に長い辺をとる区画が集まる微高地上である。おおむね東西、南北方向に走る溝と井戸・火葬土坑などを検出している。このうち中世に帰属するものは井戸と火葬土坑で、ほかは中世～近世の幅を持たせている。建物は検出していないが、水溜に曲物側板を敷設した井戸SE225は調査区西端での検出で、調査区外の西側に井戸に伴う建物やそれが集合した集落の存在が想定される。また、井戸から北東方向約20mには焼けたヒトの四肢骨が出土した（第VI章2）火葬土坑SK206が存在する。燃料材の放射性炭素年代測定から13世紀末～15世紀初めが得られており、前述の井戸出土の漆器椀（ケヤキ：13世紀後半～14世紀末）やそのほかの出土遺物の年代観よりも若干新しく位置づけた場合は、集落廃絶後の土地利用として興味深い。仮に13世紀代に併存していたとしても、火葬土坑の位置は集落の外れにあたる可能性が高い。検出遺構の多数を占める溝の多くは、中世と限定できない遺構である。断面観察から同時に機能していた溝も多く、近代の更正図の区画に重複するものもあることから、前時代の生産域に関連する水路とも考えられるが、グリッドS～X間に分布する多数のピットや土坑、そしてSD1309沿いの柵SA1581の存在を重視するなら、屋

敷地の区画や道路の側溝などといった性格も想定される。これらについては調査区周辺の調査を待って結論づける課題である。

遺跡の主体である古代は、遺物から9世紀代にさまる。第38図で古代として整理した遺構は、グリッドM～Rを中心一部グリッドX・Yに分布する。前述の更正図の東西を長軸とする区画で構成する範囲にあたり、中世～近世同様、微高地上に収まる。この微高地上に存在する現農道（II-A区とII-B区境）付近の標高が遺構検出面で10.4mと最も高く、旧河道に向かう南端は約50cm減、反対の北側低地（I-C区付近）は1m減の標高9.4mである。これらの高低差は下層に堆積する河川起源の砂礫の標高からも追える（図版14）。前述のとおり調査区のほぼ全域で遺物包含層を含めた表層の削平がみられることを考慮すれば、調査区内における当時の地表の標高差は、現状よりも大きかったと想定される。遺構は掘立柱建物5・土坑23・溝5・ピット172で、このうち建物は北側の低地からの駆け上がり、微高地頂部手前の北緩斜面に集中し、検出状況から建物分布はさらに調査区外の東・西方向に延びるものと思われる。また、調査区南側の8・9YZにおいて、柱穴掘方平面が方形で明瞭な柱痕を持つピットが数基まとまっている。この地区はちょうど微高地頂部にあたり、ほかの古代遺構も比較的集中し遺物も多い。建物を復元できなかつたが、柱穴の規模や並びからSB1・2よりかなり小型の建物が、SB1の軸線と近い形で建っていた可能性があり、古代遺跡の遺構配置や、性格を考えるうえでの課題となる。検出した建物は主軸方向や切合の関係からSB2・3・4→SB1・5の変遷を想定している。このうちSB1は雨落溝SD32出土土器から9世紀第3四半期と考えられ、重複する地震噴砂の磁化研究による時期設定とおおむね整合する（第VI章5）。建物全体がわかるSB1・2の面積は、官衙関連を推測させる大きさである。また、井戸が未検出なことは、共同使用の堅牢な井戸が調査区外の近くに存在することを想像させ、一般村落との違いともみることができる。遺物についても両面黒色の土器や一般集落でみることがない稀少な耳皿（78）・アスファルト塊（150）の出土が注目される。耳皿はSB1・2を切るSD23出土で、埋土の特徴から中世～近世の遺構としたが（第39図）、位置的関係からSB1ないしSB2に伴った遺物と考えたほうがよさそうである。アスファルト塊（第VI章4黒褐色圓形物）はSB1-P63A・Bに切られるP114柱痕部からの出土を示し、蕉木遺跡古代遺構の中でも古く位置づけられる。古代の文献では668（天智7）年「越國が燃える土と燃える水を献上」『日本書紀27卷』とあり、越後の中世～近代には灯明用の油として使用されたことが知られている〔田中2000〕。しかし、蕉木遺跡出土品中にはアスファルト付着や使用痕跡を示すものが多く、使いみちは不明で、これについても課題といえる。一方、建物自体を細かくみると、両建物とも柱筋が直線上に通らず（チドリカ）、柱の掘方平面の向きは不規則、柱穴径にもばらつきがある。そして、SB1の雨落溝（SD32）からは土師器碗を中心に比較的多くの遺物が出土したが、飯村均のいう宴會後の廃棄行為〔飯村2008〕を想起させるほどの量でなく、器種の偏りも明確でない。ひいき目にみてもこの建物で公の活動を頻繁に行ったとは考えづらい。

以上、立地・遺構・遺物についてみてきたが、蕉木遺跡を代表する大型建物群は、その規模や稀少遺物の出土から一般農村集落の建物とは考えにくく、ある程度の社会的地位を持つ有力者の造営によるものと推定される。建物の時期である9世紀中葉～後葉は、郡衙經營の衰退前なので〔中山1994〕、造営には郡の関与も否定できない。しかし、遺物やその出土状況からは、郡としての公的な活動内容を推し量ることができなかった。また、遺物の器種組成では土師器碗が多いものの煮炊具や貯蔵具も定量存在し、極端な偏りはみられない。この状況からは建物や建物群が限定された機能に特化した施設とは想定できず、公の施設というよりは、居宅と考えたほうがよさそうである。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2004 「資料編 第II章 沼重郡（54）上土地龟遺跡」「越後阿賀北地域の古代土器様相」 新潟古代土器研究会
- 青木 学ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第168集 中曾根遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉ほか 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 青田遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史・加藤 学 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第153集 大坪遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2011 「山口遺跡II」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成22年度」(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第232集 墓塚遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第115集 蔡ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯村 均 2008 「土器の系譜—中世土器様式を準備したもの—」『東北学』第16号 東北芸術工科大学東北文化研究センター 柏書房
- 家田順一郎ほか 1981 『豊浦町文化財報告三 曾根遺跡I』 新潟県豊浦町教育委員会
- 家田順一郎ほか 1982 『豊浦町文化財報告四 曾根遺跡II』 新潟県豊浦町教育委員会
- 石垣義則 2012 「中世の火葬土坑について－新潟県及び東北地方を中心に－」『新潟考古』第23号 新潟県考古学会
- 石川智記ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志ほか 1981 『安田町文化財調査報告5 横峯A遺跡 横峯B遺跡』 新潟県安田町教育委員会
- 潮田憲幸 2014 「第VII章総括 第3節まとめ 1) 遺跡の立地について」「細池寺道上遺跡II 第25次調査」 新潟県新潟市教育委員会
- 浦部頼之 2001 「第II章 B. 阿賀野川流域の変遷」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第99集 堀越節跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大矢雅彦・加藤泰彦 1984 「阿賀野川水害地形分類図 説明書」 建設省北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所
- 春日真実 1995 「古代集落の展開－越後を事例として－」『研究紀要』(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2004a 「報告編 第I章 阿賀北地域の環境」「越後阿賀北地域の古代土器様相」 新潟古代土器研究会
- 春日真実 2004b 「資料編 第II章 沼重郡（58）横峯B遺跡」「越後阿賀北地域の古代土器様相」 新潟古代土器研究会
- 春日真実 2004c 「資料編 第II章 沼重郡（34）五輪敷沢窪跡」「越後阿賀北地域の古代土器様相」 新潟古代土器研究会
- 春日真実 2006 「古代越後の集団と地域」「日本海城歴史大系 第二巻 古代篇II」 清文堂
- 春日真実 2009 「越後ににおける古代掘立柱建物」「新潟県の考古学II」 新潟県考古学会
- 春日真実 2017 「古代蒲原郡の施釉陶磁器」「郷土史燕」 第10号
- 春日真実編 2004 「越後阿賀北地域の古代土器様相」 新潟古代土器研究会
(財) 河川環境管理財團 1998 「河道変遷特性に関する研究」

- 加藤 学 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第223集 村前東A遺跡・村前東B遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2010 「柄日本遺跡II」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成21年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第237集 柄日本遺跡II』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川上貞雄ほか 1977 『水原町文化財調査報告6 水原城館址及水原代官所址発掘調査報告書』 新潟県水原町教育委員会
- 川上貞雄 1989 『笹神村文化財調査報告7 小曾根遺跡発掘調査報告書』 新潟県笹神村教育委員会
- 川上貞雄ほか 1991 『笹神村文化財調査報告8 宮久遺跡』 新潟県笹神村教育委員会
- 川上貞雄 1997 『豊浦町文化財報告6 曾根遺跡III』 新潟県豊浦町教育委員会
- 川上貞雄 1999a 『笹神村文化財調査報告9 前田遺跡 壱木杉遺跡』 新潟県笹神村教育委員会
- 川上貞雄 1999b 『豊浦町文化財調査報告7 志村山須恵窯址』 新潟県豊浦町教育委員会
- 川上貞雄 2002 『笹神村文化財調査報告13 腰越遺跡』 新潟県笹神村教育委員会
- 川上貞雄 2003 『福島潟周辺の遺跡から』『五頭郷土文化』第51号
- 川畠 誠 1995 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察—掘立柱建物の平面プランを中心にして—」『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』6
- 建設省北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所 1988 『阿賀野川史-改修60年のあゆみ-』
- 小池義人ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集 細池遺跡 寺道上遺跡』 新潟県教育委員会
- 国土交通省北陸地方整備局・国土地理院 2004 「古地理で探る越後の変遷-荒川・阿賀野川・関川・姫川-」
- 五頭山のおいたち編集委員会 1984 『五頭山のおいたち』 新潟日報事業社
- 小林昌二 1999 「3章1節 国都制の施行」『村上市史 通史編1 原始・古代・中世』 新潟県村上市
- 小林昌二 2010 「古代越後の蒲原・沼垂郡-新潟市西区の四十石遺跡にふれて-」『新潟史学』第63号
- 小林 弘 2004 「報告編 第III章沼垂郡の土器様相 3 五頭山龍宮跡群」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 小山正忠・竹原秀雄 1998 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 坂井秀弥ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀II遺跡』 建設省新潟国道工事事務所・新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号
- 坂井秀弥 1996 「水辺の古代官衙遺跡-越後平野の内水面・舟運・漁業-」『越と古代の北陸-古代王権と交流3』 名著出版
- 坂井秀弥 2005 「國府と郡家」『列島の古代史ひと・もの・こと 3 社会集団と政治組織』 岩波書店
- 荻原真一 2011 「第二部 火葬の受容と展開 第3節 火葬土坑の検討」『中世墓の考古学』 高志書院
- 笹神村 2004 『笹神村史』通史編 新潟県笹神村
- 笹神村 2003 『笹神村史』資料編一 原始・古代・中世 新潟県笹神村
- 笹神村 2002 『笹神村史』資料編五 自然 新潟県笹神村
- 笹沢正史 2004 「報告編 第IV章 各論 1 須恵器生産の概要」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 佐藤友子ほか 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第203集 広塚遺跡 狐塚遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第216集 柄日本遺跡I』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子 2015 「一般国道49号阿賀野バイパス関係」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第260集 平成26年度県内遺跡試掘・確認調査』 新潟県教育委員会
- 塙入亮乗 1999 「きたまくら 北枕」『日本仏教史辞典』今泉淑夫編 吉川弘文館

- 水原町史編さん委員会 1982 『水原町編年史』第三巻 新潟県水原町役場
- 水原町史編さん委員会 1984 『水原町編年史』第四巻 新潟県水原町役場
- 水原町史編さん委員会 1986 『水原町編年史』第五巻 新潟県水原町役場
- 音 豊 2003 「『水辺』の開拓史—近世中期における掘り上げ水田工法の発展とその要因—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 105 集
- 鈴木郁夫 1993 「阿賀野川右岸の沖積面に残る旧流路」『続・新潟のすぐれた自然 地形・地質編』 新潟県環境保健部 環境保全課
- 鈴木郁夫ほか 1975 『下越開発地域土地分類基本調査 新津』 新潟県
- 鈴木俊成 2013 「越後国の官衙と関連遺跡—村上市西部遺跡の工房群を中心に—」『古代東国の考古学① 東国の大古宮術』 高志書院
- 鈴木正崇 2005 「来世紀」「民俗小事典 死と葬送」新谷尚紀・関まゆみ編 吉川弘文館
- 巣本村史編集委員会 1973 『巣本村史』 新潟県巣本村
- 閔 雅之ほか 1993 『上土地龟遺跡』 新潟県豊栄市教育委員会
- 高橋保雄ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 172 集 鶴深甲遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 215 集 山口遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中一穂 2005 「古代の沼垂郡に関する一試論」『環日本海歴史民俗学叢書 12 古代の越後と佐渡』 高志書院
- 田中耕作 2000 「古代におけるアスマルトの利用」『石油技術協会誌』第 65 卷 第 4 号
- 鶴巻康志 2003 『新発田市埋蔵文化財調査報告 第 27 桑ノ口遺跡』 新潟県新発田市教育委員会
- 鶴巻康志 2007 「新潟県における古代・中世の舟航について」『新潟考古学談話会』第 33 号
- 鶴巻康志 2015 「新潟平野の潟に面した古代集落—新潟県曾根遺跡—」『入り海の記憶—知られざる出雲の面影—』 島根県立古代出雲歴史博物館
- 中川成夫・倉田芳郎 1962 『豊浦村文化財報告一 新潟県北蒲原郡における二窯址の調査』 新潟県豊浦村教育委員会
- 中川成夫ほか 1973 『笛神村文化財調査報告 4 猿沢窯址群の調査』 新潟県笛神村教育委員会
- 中野豈任 1968 『白河庄の中世鉱業と修驗』『新潟史学』創刊号
- 樋崎修一郎 2007 『群馬県出土中世火葬構造』『研究紀要 25』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 樋崎修一郎 2008 『群馬県中世火葬構造出土火葬人骨』『研究紀要 26』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新潟県 1986 『新潟県史 通史編 1 原始・古代』
- 新潟県教育委員会 1970 『新潟県文化財調査年報 第十 水原郷』
- 新潟県考古学会編 1999 『新潟県の考古学』 高志書院
- 新潟市歴史文化課歴史資料整備室 2014 「更正図の歴史と保存・活用—横越公文書分類センターの紹介—」『新潟市歴史資料だより』第 19 号
- 能登 健 1996 「中・近世の農業」『考古学による日本歴史 2 産業Ⅰ 獣獵・漁業・農業』 雄山閣
- 橋本直子 2005 『地籍図』『郷土史大辞典 (下)』歴史学会編 朝倉書店
- 原田享二 1994 「『田火葬施設について』『大昔並木Ⅱ・名古屋三ツ矢発掘調査報告書』 下總町教育委員会
- 平川 南 2005 「古代越後国の磐船郡と沼垂郡」『環日本海歴史民俗学叢書 12 古代の越後と佐渡』 高志書院
- 古澤妥史 2002 『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書 第 1 集 町道上遺跡発掘調査報告書』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史ほか 2004 『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書 第 3 集 村下遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史 2005 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 1 集 庄内西道路』 新潟県阿賀野市教育委員会
- 古澤妥史 2012 『阿賀野市内の古代遺跡』『平成 24 年度 越後国確定 1300 年記念事業 記録集』 新潟県教育委員会
- 古澤妥史ほか 2014 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 8 集 下福岡遺跡』 新潟県阿賀野市教育委員会

- 古澤妥史 2014 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 桟日本道跡』 新潟県阿賀野市教育委員会
本間信昭ほか 1973 『下金田道跡』 新潟県水原町立水原博物館
満日郷上史編纂委員会 1977 『満日郷上史』 新潟県満日村
水澤幸一・吉村光彦 2001 『中条町埋蔵文化財調査報告 第22集 船戸桜田道跡2次』 新潟県中条町教育委員会
村上章久ほか 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第248集 山口野中道跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
安田町 1997 『安田町史』近世編一 新潟県安田町
榮瀬裕一 2009 『第2部 東日本編 房總の中世墓』『日本の中世墓』秋川真一編 高志書院
山口精一 1997 『第一章 第一節 社会組織 四 ムラの葬儀』『安田町史』民俗編 新潟県安田町
山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房
山元孝広 2003 『東北日本・沼沢火山の形成史:噴出物層序、噴出年代及びマグマ噴出量の再検討』『地質調査研究報告』第54巻 第9/10号
山本信夫 2000 『大宰府糸坊跡XV-陶磁器分類編-』 太宰府市教育委員会
湯原勝美ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第206集 西部道跡II』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉井雅勇 2002 『荒川町埋蔵文化財調査報告 第8集 鶴侍道跡』 新潟県荒川町教育委員会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉澤 悟 2013 『火葬土坑・火葬場』『事典 墓の考古学』土生田純之編 吉川弘文館
吉田東伍編 1902 『北蒲原郡』『增補 大日本地名辞書』第五卷 北国・東国 富山房
渡辺達郎ほか 2002 『笛神村文化財調査報告14 腰廻西道跡』 新潟県笛神村教育委員会
渡辺文男ほか 2004 『安田町文化財調査報告14 上野林J道跡・上野林E道跡』 新潟県安田町教育委員会
渡邊美穂子ほか 2006 『新発田市埋蔵文化財調査報告 第32 荒神裏B道跡』 新潟県新発田市教育委員会
渡邊美穂子・田中耕作 2001 『新発田市埋蔵文化財調査報告 第23-2 坂ノ沢C道跡』 新潟県新発田市教育委員会

觀察表

掘立柱建物（SB）観察表

機種 番号	型式	グリッド	開闊	有効	案内尺	合計行長 (m)	合計行間 長	案内行下限	行長	合計行長	有利行間長	行下限長	長幅 方向	面積 (m ²)		
														合	合	
SH1	斜面掘削	GP-5~7Q	4	6	北±2.75	6.00~5.70	3.00~2.78	2.12~1.00	16.0	10.7	3.06~2.52	2.52~1.82	N~W	49~W	66.00	14.52
SH2	斜面・開削型	5~6P, 5~7Q	1	6	北±2.58	5.90~5.38	5.90~5.38	—	西±14.0	—	—	—	N~E	W	81.67	81.67
SH3	斜面・開削型	7K	2	2	西±2.75	2.75~2.74	1.64~1.16	—	北±5.64	5.64~5.56	2.86~2.74	—	N~E	E	16.10	16.10
SH4	斜面・開削	5~6R	3	—	—	—	—	—	8.66	8.66	2.84~2.96	—	N~E	W	—	—
SH5	斜面・開削	5~6R~6S	3	—	—	—	—	—	8.32	8.66	2.66~2.88	—	N~W	—	—	—

SB1 柱穴 (P) 観察表

種類 番号	グリッド 座標	幅員(cm)			航高(m)	上層 風速 風向	出土遺物	説明
		左岸 標高	右岸 標高	幅員				
480: 7R7-8	N	56	53	50	32(3)	9.616	E	I: 上・土師器底3
49A: 7R3-4	N	(87)	(80)	36	(33)	9.621	E	I: 2脚: 土師器底2/1脚: 土師器頭(実測)
51: 6R15-20	N	71	70	67	34	9.468	E	I: 1脚: 風呂敷白土片1、土師器底24、黑色土器片1
52: 6R10-11、7R6-11	N	82	80	77	40	9.334	E	I: 1脚: 風呂敷白土片1、土師器底14、黑色土器片3
53: 7H1-2、6-7	N	97	60	57	34	9.463	E	I: 1脚: 瓦含心瓦輪片26
54: TQ22-23、7R2-3	N	110	90	70	45	9.330	E	I: 2脚: 瓦片33、瓦片(実測)1/1脚: 瓦含心瓦輪片3、土師 器底5
55: 7Q23	N	(51)	(60)	43	(37)	9.579	E	I: 1脚: 瓦含心瓦輪片5、黑色土器片1
56: 4R9-14	N	56	82	97	(30)	9.603	E	I: 2脚: 土師器底1/1脚: 土師器底4、黑色土器片1
56: 6R9-10	N	(77)	(75)	60	34	9.400	E	I: 2脚: 瓦(実測)1/瓦含心瓦輪片12
59: 7Q17	N	62	58	41	32	9.613	E	I: 1脚: 低窓盤1、土師器底15、黑色土器片1
60: 6H-5	N	(70)	(45)	63	33	9.405	E	I: 2脚: 瓦輪片21
61: 6H3-4	N	60	68	70	39	9.260	E	—
63: Q15-20、7Q216	N	76	70	67	49	9.480	E	—
64: 7Q11	N	(62)	(81)	(42)	(29)	9.512	E	I: 2脚: 土師器底1/1脚: 風呂敷白土片2、土師器底23、黑色土器片3
65: 6R2	N	(42)	(38)	(56)	(59)	9.363	E	I: 2脚: 土師器底1、土師器底2、黑色土器片1
66: 6Q22-23	N	79	73	(63)	33	9.391	E	I: 4脚: 土師器底1/1脚: 土師器底4、黑色土器片1
67: 6Q18-19	N	59	65	20	33	9.714	E	—
68: 6Q14-15	N	79	77	41	42	9.57	E	I: 1脚: 土師器底3、無柄碗(実測)1/瓦含心瓦輪片3
69: 9Q10	N	48	48	36	34	9.568	E	—
70: 6Q12-13	N	61	52	25	33	9.754	E	—
71: 6Q8-9	N	71	65	60	20	9.380	E	I: 2脚: 土師器底1/1脚: 土師器底3、黑色土器片1
73: 6-7	N	46	44	13	22	9.814	E	I: 1脚: 土師器底1
74: 6Q2-3	N	(78)	(52)	(63)	(34)	9.384	E	I: 1脚: 土師器底1
55: 6P23	N	57	47	55	24	9.455	E	—
60: 6Q16	N	(40)	(36)	(23)	(19)	9.182	E	—
200: 7H1-12	N	44	28	38	32	9.614	E	I: 1脚: 土師器底1
320: 5B5, 6Q11	N	(68)	66	45	24	9.511	E	I: 2脚: 土師器底1、飾片
322: 5A20	N	(68)	(62)	46	(27)	9.556	E	—
358: 25B, 6Q21	N	(77)	(66)	60	(34)	9.315	E	I: 2脚: 土師器底2、黑色土器片1
390: 6Q19-20、24-25	N	56	(39)	(39)	32	9.488	E	I: 1脚: 土師器底5、黑色土器片1
422: 7Q16-17、21-23	N	(51)	(47)	(34)	(25)	9.476	E	I: 2脚: 土師器底2/1脚: 土師器底4(実測)1

SB1 雨落溝 (SD) 觀察表

SB2 柱穴 (P) 觀察表

通路番号	グリッド番号	地點名	規格 (cm)			底面高さ (m)	底面形状	土上部物	寄り合ひ
			幅員 (mm)	厚さ (mm)	深度 (mm)				
81	6913-14	北	1700	491	231	211	9.471	E A	-
82	6919	北	1633	621	56	227	9.277	E A	SD3, SX11
83A	6925	北	75	66	90	27	9.291	E A	-
84	6925, 7921	北	1533	521	431	241	9.464	E A	PB3B
85	7921-6	北	1823	75	51	27	9.522	E A	-
86	7927-12	北	1900	761	721	251	9.260	E A	底面形状: 枝葉(表面)、葉(裏面)、葉脈(裏面)。底面右側に根跡有り。上端部切口24。薄手(上部) A2.1、中段(中央)含心葉脈切口2.1、上端部右側A1:根跡切口16、上端部左側A2:葉脈切口2.1
87	5915-10	北	52	432	52	21	9.648	E A	2層: 植被断片、上層部分?
88	6916-21	北	73	54	45	25	9.467	E A	-
89	6922-7	北	1450	411	381	201	9.410	E A	1層: 茎葉植物群(表面)1、上端部切口1
90	6928-13	北	76	74	69	30	9.201	E A	2層: 上緑葉群(上)1層: 低生植物群1、上緑葉群4
91A	6924-19	北	1621	481	47	251	9.478	E A	1層: 低生植物群1、上緑葉群1
92	6919-20	北	61	90	31	27	9.036	E A	2層: 上緑葉群1
93	697-8	北	1600	641	27	35	9.515	E A	-
125	6922, 6922	北	1571	561	561	238	9.495	E A	1層: 上緑葉群2

SB2 雨落溝 (SD) 観察表

番号	グリッド	地出 部位	規格 (cm)			底面標高 (m)	下端方向	底土色 調査分類	出土遺物	寸り合い	備考	
			上方上端長径	下方上端長径	深度							
111	Q213 - 18 19 - 23 - 24	N	(316)	(58 - 40)	(42 - 25)	16 ~ 12	9.874 ~ 9.835	N36°W	A	1層：黒色無釉白陶(実測) 1、土陣器片4	-SD23	-

SB3 柱穴 (P) 観察表

番号	グリッド	地出 部位	規格 (cm)			底面標高 (m)	上端地 形形状	底土色 調査分類	出土遺物	寸り合い	備考	
			上方上端長径	下方上端長径	深度							
187	7R3 - 4 - 9	N	(73)	(60)	37	9.433	E	A	1層：底面標高L、焼(実測) 合む土陣器片10 / 1層：土陣器片7	-SD11 (P49), SD1	-	
189	7R9	N	45	41	36	24	9.624	E	A	1層：底面標高1	-	-
190	7R9 - 10	N	54	45	60	35	9.479	E	A	3層：土陣器片1 / 1層：黒色無釉白陶(実測) 1、土陣器片9	-	-
196	7R13	N	28	27	16	9.914	A	A	-	-	-	
199	7R18 - 23	N	69	64	38	42	9.517	E	A	3層：土陣器片1 / 2層：土陣器片1 / 1層：土陣器片5	-SD11 (P200), SD10 P47	-
201	7R12 - 17	N	(64)	(55)	64	(38)	9.364	E	A	3層：土陣器片1 / 2層：土陣器片1 / 1層：土陣器片3	-SD11 (P200), SD10 P47	-
202	7R17	N	(54)	(53)	(36)	(28)	9.396	E	A	1層：黒色無釉白陶(実測) 1	-SD20	-
205	7R14 - 19	N	(40)	(40)	(24)	(30)	9.600	E	A	1層：土陣器片4、黑色土陣器片1	-SD20	-

SB4 柱穴 (P) 観察表

番号	グリッド	地出 部位	規格 (cm)			底面標高 (m)	上端地 形形状	底土色 調査分類	出土遺物	寸り合い	備考	
			上方上端長径	下方上端長径	深度							
371	6R23	N	(38)	(34)	34	9.656	A	A	3層：土陣器片2 / 2層：土陣器片1	-SD20	-	
377	6R11	N	51	44	44	20	9.565	E	A	-	-	-
378	6R17	N	68	65	63	31	9.457	E	A	1層：焼(実測) 合む土陣器片8、黒色土陣器片1	-	-
380	6R10	N	(45)	(29)	(42)	(24)	9.657	E	A	1層：土陣器片7	-SD22	-

SB5 柱穴 (P) 観察表

番号	グリッド	地出 部位	規格 (cm)			底面標高 (m)	上端地 形形状	底土色 調査分類	出土遺物	寸り合い	備考	
			上方上端長径	下方上端長径	深度							
369	6R22 - 23, 6S2 - 3	N	60	52	40	37	9.600	E	A	1層：土陣器片6	-	-
374	6R21 - 22	N	(58)	(40)	(22)	9.518	E	A	3層：土陣器片1 / 2層：土陣器片2 / 1層：土陣器片4	-SD20	-	
376	6R20, 6R16	N	55	45	54	18	9.525	E	A	1層：黒色土陣器片1	-	-
379	6R14 - 15	N	53	60	57	25	9.516	E	A	-	-	-

土坑 (SK) 観察表 (1)

番号	グリッド	地出 部位	形態			規格 (cm)	底面標高 (m)	上端地 形形状	底土色 調査分類	出土遺物	寸り合い			
			平面	断面	上部 上部 基部									
1	7R4	N	楕円形	楕円か ら	70	45	42	23	12	9.958	C	C N9°W - 2層：土陣器片1	-SK83 (P19), SD22	
19	5N5	N	円形	台形状	90	70	62	48	12	9.726	A	A N28°W -	-	
26	5P9 - 9	N	楕円形	台形状	(70)	(57)	(61)	(42)	11	9.783	A	A N34°E -	-	
27	5P9 - 5 - 9 10	N	楕円形	台形状	(200)	(163)	(162)	(81)	12	9.825	A	A N6°E - 2層：土陣器片1 / 1層：黒色土陣器片2、小瓶(実測) 合む土陣器片20	-SK11	
30	6P13 - 14 18 - 19	N	楕円形	台形状	(114)	(74)	63	49	14	9.507	A	A N82°W - 2層：土陣器片1 / 1層：黒色土陣器片2、主 要な有形土器(実測)、黒含む底面土器片5、土 陣器片44、無形土器片2、底面土陣器片1、近 代化粧土器片1	-SD9, SD11 SD24	
40	7Q7 - 8	N	(椭円)	台形状	(168)	(108)	(120)	(92)	25	9.893	A	A N30°E - 1層：有形土器(実測)、黒含む底面土器片5、土 陣器片44、無形土器片2、底面土陣器片1、近 代化粧土器片1	-SD18 (P66)	
100	6Q17 - 18 22 - 23	N	楕円形	台形状	1380	(90)	118	70	23	9.798	A	A N51°E - 1層：土陣器片3	-SD1 (P66)	
101	6P23 - 24 6Q3	N	(椭円)	台形状	150	(46)	(39)	(30)	(25)	9.746	A	A N63°W -	-SD3	
103	6R23 - 24	N	楕円形	台形状	(170)	(52)	(60)	(40)	18	9.931	A	A N27°W - 1層：小瓶(実測)、長瓶(実測) 合む土 陣器片9	-	
208	6S12 - 13 20 - 18	N	-	台形状	(119)	(80)	(107)	(70)	(26)	9.733	A	A N10°W - 3・4・6・7層：人骨片	-SK44 SD209	
210	5P22	N	楕円形	台形状	88	67	65	39	10	9.756	A	A N80°E -	-	
230	6P13 - 17 18	N	方形容	台形状	(192)	(145)	(166)	(155)	(10)	9.748	A	A N51°W - 1層：有形土器(実測)、黒含 む底面土器片5、土陣器片3	-SK10, SD12	
231	5Q25, 5Q16 - 21	N	方形容	台形状	(213)	(158)	(190)	(100)	30	9.747	A	A N69°E - 4層：土陣器片1 / 3層：有形土器(実測) 合む土 陣器片2、土陣器片5、無形土器(実測)、底面土 器片21、黑色土器片1 / 1層：黒色土陣器片2、 土陣器片6、底面土器片1 / 1層：黒色土陣器片2、 土陣器片6、底面土器片6、底面土器片6、底面 土器片6、底面土器片6、底面土器片6	-SK22, SD224 SD225 P58	
232	5Q24 - 25	N	(長方形)	台形状	(134)	(112)	(88)	(64)	(23)	9.867	A	A N69°E - 2層：楕円(実測) 合む土 陣器片3、黑色土器片1	-SK365	
233	5Q17 - 18 22 - 23	N	-	台形状	(204)	(192)	(167)	(138)	(30)	9.787	A	A N65°E -	-	
243	4P15, 5P6 - 11	N	(方形容)	-	直角底	(117)	(184)	(117)	(102)	(53)	9.416	A	C N10°E - 3層：近・隣代陶器片1 / 1層：黒含む底面 土器片2、土陣器片1、近・隣代陶器片6	-SK22
246	4V5 - 10	N	-	台形状	(100)	(90)	(66)	(50)	31	9.819	A	B N56°E - 1層：土陣器片1	-SD9	
248	4U19	N	円形	半円形	62	60	32	30	20	9.917	A	B N56°E -	-	
251	4U5 - 10	N	-	台形状	(94)	(70)	(74)	(56)	28	9.779	A	B N9°W - 1層：黒色土陣器片1、土陣器片2	-	
267	7U24	N	円形	台形状	(86)	(72)	(46)	(40)	22	9.668	A	B N62°E - 1層：土陣器片1	-SK150	
301	4C5 - 4 - R 9	N	円形	台形状	90	80	62	58	29	8.750	A	A N53°E -	-	
310	5P13 - 18	N	方形容	台形状	(125)	(117)	-	-	23	8.654	A	A N87°E - 2層：土陣器片2 / 1層：楕円(実測)、黒含む底 面土器片10、黑色土器片1	-SK220 -SD219	

観察表

土坑(SK) 観察表(2)

通路番号	グリッド番号	地出位置	地形	範囲(cm)						底面標高(m)	地盤構造	地盤方向	出土遺物	切り合い	
				平面	断面	立上がり	上端長径	上端短径	下端長径						
335	BT22	N	円形	台形状	直角度	56	55	(78)	(70)	15	9.918	A	N-49° E	1層：風化物質	-
341	BT16-21	N	円形	台形状	直角度	104	80	31	27	18	9.864	A	B-N-59° E	2層：土壁片	>SD137
359	TT21	N	円形	台形状	直角度	79	74	60	50	62	9.475	A	B-N-90° E	4層：黑色土壁片1/1層：土壁片	-
386	QQ19-20	N	(端内側)	台形状	緩やか	(130)	(98)	45	32	25	9.769	A	N-26° W	1層：風化物質1/2層：土壁片12、黑色土壁片1/3層：土壁片	>SK221-222
24-25															
394	AM18-20	N	端内側	台形状	緩やか	234	201	94	52	36	9.346	A	N-44° E	-	>SK395
395	AM14-15	N	端内側	台形状	緩やか	(206)	(160)	110	107	(14)	9.621	A	N-44° E	-	>SK394
396	AM14-15	N	端内側	台形状	直角度	(60)	(50)	(122)	(94)	18	9.543	A	N-10° W	-	>SD445
428	BT14-19	N	端内側	台形状	直角度	(78)	(42)	46	32	(45)	9.528	A	B-N-81° W	-	>SH225
1304	WZ22-23	W	端内側	半円形	直角度	74	48	(33)	(27)	34	9.496	B	B-N-20° W	-	>SD1301
816-17															
1321	BT21-22	V	端内側	圓形	緩やか	(130)	(232)	(180)	97	31	10.209	A	N-46° E	2・3・5層：中心に風化物質2、土壁片群80、2層1	-
BZ1-2															
1322	BY17-22	V	端内側	圓形	直角度	110	38	(77)	(28)	40	10.208	A	N-55° E	3層：風化物質2/2層：土壁片3	>SD1323
1336	WY6	V	端内側	圓形	緩やか	128	100	(121)	89	12	9.973	D	N-17° W	1層：風化物質塊片(実測)1、風化物質片(実測)2、土壁片7	P1334-1335
1355	WY7	V	端内側	台形状	緩やか	174	125	97	52	31	9.833	A	N-34° W	2層：風化物質片3、土壁片22	P1341-1344
1375	AV9-14	W	端内側	台形状	直角度	48	36	17	13	23	9.857	A	B-N-9° W	-	>SD1308
1576	BX1-6	W	端内側	半円形	直角度	68	59	37	27	21	9.937	A	B-N-64° W	-	-
1577	BX17	W	端内側	圓形	緩やか	67	64	(46)	38	12	10.055	A	C-N-49° W	-	>P1500>SD1309,P1519
1578	WZ23-24	W	端内側	圓形	緩やか	(123)	73	(96)	59	10	9.951	A	C-N-45° E	-	-
1579	TV20	W	端内側	台形状	直角度	97	89	67	52	18	9.919	A	C-N-78° E	-	-
1580	WZ16-21	W	端内側	圓形	直角度	(109)	(37)	(89)	(25)	(10)	9.977	A	C-N-4° W	-	>SD1149

井戸(SE) 観察表

通路番号	グリッド番号	地出位置	地形	範囲(cm)						底面標高(m)	地盤構造	地盤方向	出土遺物	切り合い	
				平面	断面	立上がり	上端長径	上端短径	下端長径						
225	BT14-15-19-2D	N	円形	森林	内傾	(190)	(185)	120	114	150	8.54	G	B-N-77° W	7層：風化物質(実測)1、板木・木製品(実測)2・木製品6、姿勢不明の頭骨片1/埋土：磁石(実測)1	>SK428>SD1305

溝(SD) 観察表(1)

通路番号	グリッド番号	地出位置	地形	範囲(cm)						底面標高(m)	地盤構造	地盤方向	出土遺物	切り合い	備考		
				平面	断面	立上がり	上端長径	上端短径	下端長径								
2	BL ~ N, 5 ~ TQ	N	海水(1936)	南北	(225~120)	(146~25)	南北	(32)	63	南北	9.596~9.181	B-N-7° W 海水	B-N-7° W 海水	-	-	>SD1110; SB2 (P81-82), SK30-31, <td>SD14-7-399 SD4-5-435</td>	SD14-7-399 SD4-5-435
3	6M ~ Q	N	(1588)	140~62	70~30	7~37	9.742~9.513	N-4° W	-	3層：風化物質4、土壁片19 2層：土壁片2/1層：風化物質 20、黑色土壁片1、土壁片2 1層：風化物質1、土壁片3	>SD1-10 >SD1-435, SN18						
4	4 ~ 6N	N	東西(1827) 南北(520)	55~40 35~14 45~35	18~30 28~13 28~34	東西 南北 南北	9.682~9.575 9.687~9.567 9.687~9.506	N-98° W N-98° E	C	1層：土壁片2、II(実測)1	-	-	-	-	-	>SD1-10 >SD1-435, SN18	
5	6-70	N	(376)	26~20	16~8	3~15	9.829~9.715	N-54° E	E	1層：土壁片1	-	-	-	-	-	>SD2	
7	SO-5 ~ TP	N	(3260)	(58~34)	(31~16)	16~(40)	9.688~9.485	N-82° W	E	2層：土壁片1/2層：風化物質 3層：土壁片2、1層：風化物質 4層：土壁片3、K-2~4、1層：土壁片1	>SK2-66, SD147, <td>SD2-147, SN42 SD1-10, SD1-11, SD1-12, P124-156</td>	SD2-147, SN42 SD1-10, SD1-11, SD1-12, P124-156					
9	BT-U-V, 9V	N	(2104)	(133~108)	(98~58)	20~40	9.930~9.740	N-77° W	B	2層：土壁片2/1層：風化物質 3層：土壁片1、黑色土壁片2、不明 不明石片(実測)1	-	-	-	-	-	>SD1-10 >SD1-435, SX18	
10	5 ~ 6N	N	(730)	(164~72)	(150~60)	18	9.733	N-87° E	C	2層：土壁片1/1層：風化物質 3層：土壁片1	-	-	-	-	-	>P160-423 >SD1	
12	5 ~ 6P	N	(768)	80~54	40~12	5~14	9.911~9.833	N-79° E	C	1層：土壁片2	-	-	-	-	-	>P160-423 >SD1	
13	5 ~ 6O	N	(1052)	55~42	42~16	5~9	9.736~9.707	N-60° E	C	1層：土壁片2	-	-	-	-	-	>SD1	
14	5 ~ 6Q	N	(1170)	60~33	32~14	16~25	9.876~9.745	N-81° E	C	1層：土壁片1/1層：風化物質 2層：土壁片1	-	-	-	-	-	>P388 >SD24	
15	TP23-24	N	(180)	26	18~10	5~(30)	9.887~9.847	N-78° W	-	2層：風化物質1、第1(実測)含 む土壁片42、到(実測)1/2層：風 化物質4、風化した土壁片4、土 壁片51、黑色土壁片2	-	-	-	-	-	>SD1 (SD21), SB3 (P201-202), SD1-203, <td>SD1-204, SD1-205 SD1-206, SD1-207, SD1-208 SD1-209, SD1-210, SD1-211, P91 (P274), P46-180-203-204</td>	SD1-204, SD1-205 SD1-206, SD1-207, SD1-208 SD1-209, SD1-210, SD1-211, P91 (P274), P46-180-203-204
20	6 ~ 8R	N	(2046)	190~87	149~60	14~30	9.914~9.777	N-83° E	B	1層：種、黄色むし虫頭骨4、土 壁片51、黑色土壁片2	-	-	-	-	-	>SD1 (P49-60), SD4 (P70-75), SD188, SD189, SD190, SD191 >SK1	
22	5 ~ 8R	N	(2460)	72~35	35~20	8~58	9.930~9.547	N-85° E	B	1層：種、黄色むし虫頭骨4、土 壁片51、黑色土壁片2	-	-	-	-	-	>SD1 (P49-60), SD4 (P70-75), SD188, SD189, SD190, SD191 >SK1	
23	5 ~ 7Q	N	(2580)	78~30	33~8	12~26	9.962~9.828	N-82° W	B	1層：種、黄色むし虫頭骨4、土 壁片51、黑色土壁片2	-	-	-	-	-	>SD1 (SD23), P64- P65, SD1-222, SB2 (SD11, P91), P961 >SD25-33	

觀察表

溝 (SD) 觀察表 (2)

観察表

溝 (SD) 観察表 (3)

遺構 番号	グリッド	地出 部位	規模 (cm)				底面標高 (m)	長軸方向	出土遺物	切り合い	備考
			長径	上端幅	下端幅	深度					
1323	RV17・18・ 23	VI	南北 210	58~22	30~5	14	北 10.347 南 10.272	N=21°・W	A 1層：黒色土層片1、磨合土層 器片4	-SD1358 -SK1322	
1329	RV13・18・ 18~20	VI	南北 330	158~40	121~18	24	北 10.259 南 10.164	N=57°・W	A 2層：土層器片3	-	
1358	RV23	VI (110)	50~46	31~29	16	-	N=52°・W	A 1層：黒色土層片2	-SD1323		
1376	RX22・23・ RY2・3	VI	247	100~51	49~26	33~23	北 9.855 南 9.822	N=28°・W	B 2層：黒色土層器片7/1層： 土層器片6	-SD1308 + 1309	
1378	TV19・20	VI	103	36~24	20~15	15~10	南 9.856 北 10.153	N=48°・W	B	-	H26遺跡区 東北端
1379	RV12・13・ 18	VI	324	35~27	26~12	8~14	南 10.068 北 9.968	N=11°・W	B 2層：土層器片2/1層：土層器 片1	-	H26遺跡区 に及びる (SD147と 同一起)
1149	RV10・16・ 20・25、 RV6・11・ 16・21、 R9・15・ 11・12・16・ 17・21、 22・RY3・2 -6-7	VII	2022	145~100	103~29	18~32	南 9.922 北 9.824	N=7°・W	B 3層：輪：磨合土層器片3/2 層：黒色土層器片40、 土層器片5/1層：黒色土 層器片4、樹・黒色土層片 器片むし土層器片100	-SD1580 + P1549 -SD1309	H26遺跡区 に及びる (SD128と 同一起)

槽 (SA) 観察表

遺構 番号	グリッド	地出部位	規模 (cm)				底面標高 (m)	堆土層形状	堆土色調分類	長軸方向	出土遺物	切り合い
			長径	短径	深度							
SA1581	7・8X	VII	1211				-	-	B	N=70°・E	-	-
P1460	8X10	VII	28	17	8	10.072	E	B	-	-	-	-
P1519	8X17	VII	38	(32)	11	10.029	E	B	-	-	-	-
P1520	8X12・13・ 17・18	VII	40	31	8	9.968	A	B	-	-	-	-
P1534	7X20・25	VII	26	23	7	9.947	A	B	-	-	-	-
P1526	8X16	VII	33	21	16	10.009	A	B	-	-	-	-
P1567	8X14	VII	29	25	12	9.979	E	B	-	-	-	-
P1568	8X13	VII	26	26	14	9.788	E	B	-	1層：土層器片2	-	-

道路状遺構 (SF) 観察表

遺構 番号	グリッド	地出部位	形態				底面 (cm)	底面標高 (m)	堆土層形状	堆土色調分類	長軸方向	出土遺物	切り合い
			平面	断面	ひら上り	上端斜傾							
1356	8X25・8Y5、 9X21・25、 9Y1・2	VI	-	弧状	緩やか	1088	196	-	-	12	西 10.113 東 10.105	-	B N=82°・E
1356-SOI	24・25・ 20・21	VI	-	弧状	金属性	(182)	-	-	-	20	西 10.005 東 9.973	A	B N=76°・E
1356-SKI	9X25	VI	橋内側	弧状	緩やか	43	23	29	10	6	10.077	D	B N=26°・E
1356-SK2	9X25	VI	橋内側	弧状	緩やか	49	26	24	13	7	10.059	D	B N=13°・E
1356-SK3	9X24	VI	橋内側	弧状	緩やか	75	31	54	17	12	9.979	D	B N=6°・E
1356-SK4	9X24	VI	橋内側	弧状	緩やか	(93)	39	60	15	11	9.983	D	B N=9°・E
1356-SK5	9X24	VI	橋内側	弧状	緩やか	(39)	(28)	(28)	10	8	10.042	D	B N=13°・E

性格不明遺構 (SX) 観察表 (1)

遺構 番号	グリッド	地出部位	形態				底面 (cm)	底面標高 (m)	堆土層形状	堆土色調分類	長軸方向	出土遺物	切り合い	
			平面	断面	ひら上り	上端斜傾								
8	ST14・19・ 24・25	VI	直形	直形	急傾度	(384)	(168)	(280)	(120)	(18~ 53)	9.606	A	C N=13°・W	-SD9-37, SK342
11	5・6・P・ 7	VI	不規形	直形	緩やか	(1570)	(640)	(1570)	(610)	(3~ 19)	9.811~ 9.517	D	C N=74°・W	
16	SP21・23・ 7Q1~3	VI	不規形	直形	緩やか	(610)	(330)	(565)	(327)	(10~ 18)	9.801	D	B N=77°・W	1層：陶質(実際)・瓦(実際) 2層：灰(実際)・瓦(実際)・瓦 3層：土層器片5、土層器片17、 黑色土層片13、泥炭層片11、 白色土層片10、黑色土層片9、 黑色土層片8
18	SN3・4・8・ 9	VI	(内形)	直形	急傾度	(224)	(162)	(208)	(112)	38	9.399	D	C N=22°・E	1層：泥炭層片1
31	23, 23Q1~ 3	VI	(外形)	直形	急傾度	(374)	(198)	(370)	(157)	31	9.784	A	A N=3°・E	2層：白色土層片1、土層器片3 3層：白(実際)・瓦(実際)・瓦 4層：白色土層片5、土層器片41、 黑色土層片1
39	24, 763・4・ 5, R51・2	VI	不規形	直形	緩やか	(862)	275~ 75	(818)	218~ 44	15~ 24	9.793	A	C N=88°・W	1層：白色土層片1、土層器片3 2層：土層器片1/1層：荷合化 3層：白色土層片5、土層器片30、 黑色土層片1
42	BS-T	VI	(近形)	直形	急傾度	(1225)	(330)	(1177)	(320)	7~27	9.931	A	B N=9°・W	1層：白色土層片1 2層：白色土層片1、土層器片3 3層：白色土層片5、土層器片41、 黑色土層片1
44	SP25, 5Q5, 6P1, 6Q1	VI	-	直形	緩やか	(242)	(153)	(223)	(132)	(15~ 21)	9.831	A	A N=45°・W	2層：白色土層片1、土層器片3 3層：白色土層片5、土層器片41、 荷合化黑色土 4層：白色土層片100、荷合化黑色土 5層：白色土層片1、荷合化黑色土 6層：白色土層片1、荷合化黑色土 7層：白色土層片100、荷合化黑色土 8層：白色土層片1、荷合化黑色土 9層：白色土層片100、荷合化黑色土 10層：白色土層片1、荷合化黑色土 11層：白色土層片100、荷合化黑色土 12層：白色土層片1、荷合化黑色土 13層：白色土層片100、荷合化黑色土 14層：白色土層片1、荷合化黑色土 15層：白色土層片100、荷合化黑色土 16層：白色土層片1、荷合化黑色土 17層：白色土層片100、荷合化黑色土 18層：白色土層片1、荷合化黑色土 19層：白色土層片100、荷合化黑色土 20層：白色土層片1、荷合化黑色土 21層：白色土層片100、荷合化黑色土 22層：白色土層片1、荷合化黑色土 23層：白色土層片100、荷合化黑色土 24層：白色土層片1、荷合化黑色土 25層：白色土層片100、荷合化黑色土 26層：白色土層片1、荷合化黑色土 27層：白色土層片100、荷合化黑色土 28層：白色土層片1、荷合化黑色土 29層：白色土層片100、荷合化黑色土 30層：白色土層片1、荷合化黑色土 31層：白色土層片100、荷合化黑色土 32層：白色土層片1、荷合化黑色土 33層：白色土層片100、荷合化黑色土 34層：白色土層片1、荷合化黑色土 35層：白色土層片100、荷合化黑色土 36層：白色土層片1、荷合化黑色土 37層：白色土層片100、荷合化黑色土 38層：白色土層片1、荷合化黑色土 39層：白色土層片100、荷合化黑色土 40層：白色土層片1、荷合化黑色土 41層：白色土層片100、荷合化黑色土 42層：白色土層片1、荷合化黑色土 43層：白色土層片100、荷合化黑色土 44層：白色土層片1、荷合化黑色土 45層：白色土層片100、荷合化黑色土 46層：白色土層片1、荷合化黑色土 47層：白色土層片100、荷合化黑色土 48層：白色土層片1、荷合化黑色土 49層：白色土層片100、荷合化黑色土 50層：白色土層片1、荷合化黑色土 51層：白色土層片100、荷合化黑色土 52層：白色土層片1、荷合化黑色土 53層：白色土層片100、荷合化黑色土 54層：白色土層片1、荷合化黑色土 55層：白色土層片100、荷合化黑色土 56層：白色土層片1、荷合化黑色土 57層：白色土層片100、荷合化黑色土 58層：白色土層片1、荷合化黑色土 59層：白色土層片100、荷合化黑色土 60層：白色土層片1、荷合化黑色土 61層：白色土層片100、荷合化黑色土 62層：白色土層片1、荷合化黑色土 63層：白色土層片100、荷合化黑色土 64層：白色土層片1、荷合化黑色土 65層：白色土層片100、荷合化黑色土 66層：白色土層片1、荷合化黑色土 67層：白色土層片100、荷合化黑色土 68層：白色土層片1、荷合化黑色土 69層：白色土層片100、荷合化黑色土 70層：白色土層片1、荷合化黑色土 71層：白色土層片100、荷合化黑色土 72層：白色土層片1、荷合化黑色土 73層：白色土層片100、荷合化黑色土 74層：白色土層片1、荷合化黑色土 75層：白色土層片100、荷合化黑色土 76層：白色土層片1、荷合化黑色土 77層：白色土層片100、荷合化黑色土 78層：白色土層片1、荷合化黑色土 79層：白色土層片100、荷合化黑色土 80層：白色土層片1、荷合化黑色土 81層：白色土層片100、荷合化黑色土 82層：白色土層片1、荷合化黑色土 83層：白色土層片100、荷合化黑色土 84層：白色土層片1、荷合化黑色土 85層：白色土層片100、荷合化黑色土 86層：白色土層片1、荷合化黑色土 87層：白色土層片100、荷合化黑色土 88層：白色土層片1、荷合化黑色土 89層：白色土層片100、荷合化黑色土 90層：白色土層片1、荷合化黑色土 91層：白色土層片100、荷合化黑色土 92層：白色土層片1、荷合化黑色土 93層：白色土層片100、荷合化黑色土 94層：白色土層片1、荷合化黑色土 95層：白色土層片100、荷合化黑色土 96層：白色土層片1、荷合化黑色土 97層：白色土層片100、荷合化黑色土 98層：白色土層片1、荷合化黑色土 99層：白色土層片100、荷合化黑色土 100層：白色土層片1、荷合化黑色土 101層：白色土層片100、荷合化黑色土 102層：白色土層片1、荷合化黑色土 103層：白色土層片100、荷合化黑色土 104層：白色土層片1、荷合化黑色土 105層：白色土層片100、荷合化黑色土 106層：白色土層片1、荷合化黑色土 107層：白色土層片100、荷合化黑色土 108層：白色土層片1、荷合化黑色土 109層：白色土層片100、荷合化黑色土 110層：白色土層片1、荷合化黑色土 111層：白色土層片100、荷合化黑色土 112層：白色土層片1、荷合化黑色土 113層：白色土層片100、荷合化黑色土 114層：白色土層片1、荷合化黑色土 115層：白色土層片100、荷合化黑色土 116層：白色土層片1、荷合化黑色土 117層：白色土層片100、荷合化黑色土 118層：白色土層片1、荷合化黑色土 119層：白色土層片100、荷合化黑色土 120層：白色土層片1、荷合化黑色土 121層：白色土層片100、荷合化黑色土 122層：白色土層片1、荷合化黑色土 123層：白色土層片100、荷合化黑色土 124層：白色土層片1、荷合化黑色土 125層：白色土層片100、荷合化黑色土 126層：白色土層片1、荷合化黑色土 127層：白色土層片100、荷合化黑色土 128層：白色土層片1、荷合化黑色土 129層：白色土層片100、荷合化黑色土 130層：白色土層片1、荷合化黑色土 131層：白色土層片100、荷合化黑色土 132層：白色土層片1、荷合化黑色土 133層：白色土層片100、荷合化黑色土 134層：白色土層片1、荷合化黑色土 135層：白色土層片100、荷合化黑色土 136層：白色土層片1、荷合化黑色土 137層：白色土層片100、荷合化黑色土 138層：白色土層片1、荷合化黑色土 139層：白色土層片100、荷合化黑色土 140層：白色土層片1、荷合化黑色土 141層：白色土層片100、荷合化黑色土 142層：白色土層片1、荷合化黑色土 143層：白色土層片100、荷合化黑色土 144層：白色土層片1、荷合化黑色土 145層：白色土層片100、荷合化黑色土 146層：白色土層片1、荷合化黑色土 147層：白色土層片100、荷合化黑色土 148層：白色土層片1、荷合化黑色土 149層：白色土層片100、荷合化黑色土 150層：白色土層片1、荷合化黑色土 151層：白色土層片100、荷合化黑色土 152層：白色土層片1、荷合化黑色土 153層：白色土層片100、荷合化黑色土 154層：白色土層片1、荷合化黑色土 155層：白色土層片100、荷合化黑色土 156層：白色土層片1、荷合化黑色土 157層：白色土層片100、荷合化黑色土 158層：白色土層片1、荷合化黑色土 159層：白色土層片100、荷合化黑色土 160層：白色土層片1、荷合化黑色土 161層：白色土層片100、荷合化黑色土 162層：白色土層片1、荷合化黑色土 163層：白色土層片100、荷合化黑色土 164層：白色土層片1、荷合化黑色土 165層：白色土層片100、荷合化黑色土 166層：白色土層片1、荷合化黑色土 167層：白色土層片100、荷合化黑色土 168層：白色土層片1、荷合化黑色土 169層：白色土層片100、荷合化黑色土 170層：白色土層片1、荷合化黑色土 171層：白色土層片100、荷合化黑色土 172層：白色土層片1、荷合化黑色土 173層：白色土層片100、荷合化黑色土 174層：白色土層片1、荷合化黑色土 175層：白色土層片100、荷合化黑色土 176層：白色土層片1、荷合化黑色土 177層：白色土層片100、荷合化黑色土 178層：白色土層片1、荷合化黑色土 179層：白色土層片100、荷合化黑色土 180層：白色土層片1、荷合化黑色土 181層：白色土層片100、荷合化黑色土 182層：白色土層片1、荷合化黑色土 183層：白色土層片100、荷合化黑色土 184層：白色土層片1、荷合化黑色土 185層：白色土層片100、荷合化黑色土 186層：白色土層片1、荷合化黑色土 187層：白色土層片100、荷合化黑色土 188層：白色土層片1、荷合化黑色土 189層：白色土層片100、荷合化黑色土 190層：白色土層片1、荷合化黑色土 191層：白色土層片100、荷合化黑色土 192層：白色土層片1、荷合化黑色土 193層：白色土層片100、荷合化黑色土 194層：白色土層片1、荷合化黑色土 195層：白色土層片100、荷合化黑色土 196層：白色土層片1、荷合化黑色土 197層：白色土層片100、荷合化黑色土 198層：白色土層片1、荷合化黑色土 199層：白色土層片100、荷合化黑色土 200層：白色土層片1、荷合化黑色土 201層：白色土層片100、荷合化黑色土 202層：白色土層片1、荷合化黑色土 203層：白色土層片100、荷合化黑色土 204層：白色土層片1、荷合化黑色土 205層：白色土層片100、荷合化黑色土 206層：白色土層片1、荷合化黑色土 207層：白色土層片100、荷合化黑色土 208層：白色土層片1、荷合化黑色土 209層：白色土層片100、荷合化黑色土 210層：白色土層片1、荷合化黑色土 211層：白色土層片100、荷合化黑色土 212層：白色土層片1、荷合化黑色土 213層：白色土層片100、荷合化黑色土 214層：白色土層片1、荷合化黑色土 215層：白色土層片100、荷合化黑色土 216層：白色土層片1、荷合化黑色土 217層：白色土層片100、荷合化黑色土 218層：白色土層片1、荷合化黑色土 219層：白色土層片100、荷合化黑色土 220層：白色土層片1、荷合化黑色土 221層：白色土層片100、荷合化黑色土 222層：白色土層片1、荷合化黑色土 223層：白色土層片100、荷合化黑色土 224層：白色土層片1、荷合化黑色土 225層：白色土層片100、荷合化黑色土 226層：白色土層片1、荷合化黑色土 227層：白色土層片100、荷合化黑色土 228層：白色土層片1、荷合化黑色土 229層：白色土層片100、荷合化黑色土 230層：白色土層片1、荷合化黑色土 231層：白色土層片100、荷合化黑色土 232層：白色土層片1、荷合化黑色土 233層：白色土層片100、荷合化黑色土 234層：白色土層片1、荷合化黑色土 235層：白色土層片100、荷合化黑色土 236層：白色土層片1、荷合化黑色土 237層：白色土層片100、荷合化黑色土 238層：白色土層片1、荷合化黑色土 239層：白色土層片100、荷合化黑色土 240層：白色土層片1、荷合化黑色土 241層：白色土層片100、荷合化黑色土 242層：白色土層片1、荷合化黑色土 243層：白色土層片100、荷合化黑色土 244層：白色土層片1、荷合化黑色土 245層：白色土層片100、荷合化黑色土 246層：白色土層片1、荷合化黑色土 247層：白色土層片100、荷合化黑色土 248層：白色土層片1、荷合化黑色土 249層：白色土層片100、荷合化黑色土 250層：白色土層片1、荷合化黑色土 251層：白色土層片100、荷合化黑色土 252層：白色土層片1、荷合化黑色土 253層：白色土層片100、荷合化黑色土 254層：白色土層片1、荷合化黑色土 255層：白色土層片100、荷合化黑色土 256層：白色土層片1、荷合化黑色土 257

性格不明遺構 (SX) 観察表 (2)

遺構 番号	グリッド	複数 部位	平面	規模 (cm)						底面高さ (cm)	埋土 色調 分類	長軸方向	出土遺物	割り合い
				前面	側面	立上 部	上端長 径	上端 幅	下端 長径					
149	7U12A, 7V4・13	N	長方形	台形状 緩やか	205	91	186	81	13	10.046	A	B N-31°-W	-	-
150	7U13・15- 24	N	長方形	台形状 緩やか	471	105	397	74	17	9.941	A	B N-26°-W 不明鉄製品	-	>SK267
216	5Q8・13	N	長方形	台形状 急斜面	110	86	65	55	20	9.778	A	B N-50°-W	-	>SX217
217	5Q13・14- 18-19	N	不規則	台形状 斜面	(170)	(167)	110	100	36	9.629	A	B N-44°-W 1脚：土師器片2、黒色土器片1	>P287	>SK216

ピット (P) 観察表 (1)

遺構 番号	グリッド	複数 部位	埋土 色調	規模 (cm)						底面高さ (cm)	埋土 色調 分類	出土遺物	割り合い
				上面長径	上端幅	深度	埋土 色調	埋土 色調 分類					
28	6OB-13	N	(35)	(36)	(17)	9.727	D	A	-	-	-	-	-
29	6N24	N	(32)	(36)	(14)	9.699	-	A	-	-	-	-	-
45	6P20・25, 7P16-21	N	55	55	40	9.474	E	A	1脚：土師器片1、黒色土器片1	-	-	-	-
46	7R16	N	(22)	(36)	(16)	9.760	-	-	-	-	-	-	>SD20
47	7R11-12	N	(79)	(87)	55	9.444	E	A	1脚：梅杏土師器片2	-	-	-	>SB1(P201)
48A	7R7-8	N	56	53	19	9.804	-	A	-	-	-	-	>SB1(P200)
49B	7R2-4	N	(67)	(60)	53	9.621	-	A	1脚：土師器片2	-	-	-	>SB1(P48B), SB3(P187)
62	6Q25	N	(53)	39	33	9.400	E	A	1脚：栗色土器片2、黒色土器片1	-	-	-	>P124-430
63A	6Q15-20	N	70	70	45	9.484	-	A	-	-	-	-	>SB1(P53B)
68B	6Q14-15	N	(35)	(30)	51	9.430	E	A	2脚：土師器片5	-	-	-	>SB1(P58B)
76	6P21	N	69	57	37	9.667	E	A	2脚：土師器片1、黒色土器片1	-	-	-	-
77	6P17-22	N	56	45	42	9.584	E	A	-	-	-	-	-
79	6P11-16	N	26	19	26	9.629	-	A	-	-	-	-	-
82B	6P25	N	75	65	(49)	9.391	-	A	-	-	-	-	>SB1(P38A)
91B	6Q14-19	N	(62)	(48)	(69)	9.172	-	A	-	-	-	-	>P124-430
94	6Q13	N	40	40	24	9.767	E	A	-	-	-	-	-
95	6Q7-12	N	50	49	14	9.852	E	A	-	-	-	-	-
96	6Q7	N	60	49	40	9.881	-	A	1脚：土師器片1	-	-	-	-
103	6Q20-25	N	52	49	31	9.699	E	A	1脚：土師器片1	-	-	-	>PL2
104	6Q20-25	N	58	57	46	9.506	E	A	-	-	-	-	-
106	6Q20	N	15	7	9.866	-	-	-	-	-	-	-	-
107	6Q20	N	22	14	50	9.768	-	-	-	-	-	-	-
109	6Q19	N	51	50	A	9.475	E	A	2脚：土師器片1	-	-	-	P109A-P109B
114	6Q15, 7Q11	N	(74)	(60)	25	9.705	E	A	1脚：土師器片1、突出面：アスファルト塊（実測）1	-	-	-	>SB1(P63B)
115	6Q13-14	N	41	36	27	9.726	E	A	2脚：土師器片1	-	-	-	-
117	6Q9	N	29	26	24	9.759	-	-	-	-	-	-	>SB1(P71), SD24
118	6Q8	N	(22)	(21)	19	9.817	-	-	-	-	-	-	-
121	7P21, 7Q1	N	(67)	(54)	(35)	9.475	E	A	3脚：栗色土器片3 1脚：無地白杯（実測）含む栗色土器片2、土師器片1	-	-	-	>SX16
124	6P8	N	(90)	(52)	(37)	9.434	E	A	-	-	-	-	>SD1, SX11
126	7Q22-23	N	(53)	(48)	29	9.809	E	A	-	-	-	-	>SD43
127	7Q17-22	N	55	55	25	9.766	E	A	1脚：土師器片1	-	-	-	-
128	7Q17	N	55	50	29	9.744	E	A	1脚：栗色土器片1、土師器片2、黒色土器片2	-	-	-	-
130	7Q17	N	32	26	12	9.743	D	A	-	-	-	-	-
131	7Q11	N	42	42	17	9.775	E	A	-	-	-	-	-
132	7Q6-11	N	55	53	55	9.401	E	A	1脚：栗色土器片1	-	-	-	-
133	7Q7	N	15	15	24	9.724	D	A	1脚：土師器片1	-	-	-	-
136	7Q8-9-13-14	N	49	48	27	9.918	E	A	1脚：無地白杯（実測）含む土師器片5	-	-	-	-
140	7Q1	N	(25)	(22)	(9)	9.786	-	-	-	-	-	-	>SD24, SX16
145	7P11-16	N	57	50	38	9.548	E	A	-	-	-	-	-
146	7P12-13	N	46	34	30	9.635	D	A	-	-	-	-	-
152	6P18-23	N	(79)	(55)	45	9.835	E	A	1脚：土師器片5	-	-	-	>SB1(SD10)
153	6P22-23	N	(64)	(60)	52	9.860	E	A	-	-	-	-	>P431, SX31
154	6P16-17	N	67	55	31	9.651	E	A	-	-	-	-	-
157	6P17-18	N	38	32	16	9.746	-	A	-	-	-	-	-
158	6P24	N	(35)	(33)	(15)	9.855	D	A	1脚：土師器片2	-	-	-	>SD8
159	6P15	N	57	54	29	9.691	E	A	-	-	-	-	-
160	6P15, 6P11	N	(25)	(22)	24	9.646	D	A	-	-	-	-	>SD12
161	6P11	N	(30)	(29)	(14)	9.694	-	A	-	-	-	-	>SX11
162	6P12	N	(60)	(57)	(45)	9.447	E	A	-	-	-	-	>SX11
163	6P13	N	(24)	(20)	(9)	9.777	D	A	-	-	-	-	>SX11
165	6P9	N	(33)	(32)	(6)	9.701	-	A	-	-	-	-	>SX11
166	6Q23, 6R3	N	48	44	17	9.745	E	A	-	-	-	-	-
169	6R10	N	29	26	27	9.739	D	A	1脚：土師器片1	-	-	-	>SB1(P67), P170-172
170	6R10	N	(27)	(20)	28	9.723	E	A	1脚：栗色土器片5 1脚：無地白杯（実測）1、梅（実測）含む土師器片3	-	-	-	>P172 >P169
172	6R10-10	N	(62)	(39)	29	9.658	E	A	2脚：土師器片1	-	-	-	>SB1(P57), P169-170
175	6R15	N	24	22	15	9.695	A	A	1脚：土師器片1	-	-	-	-
176	6R15	N	(90)	(89)	29	9.658	E	A	1脚：土師器片1	-	-	-	>SB1(P61)
178	6R14-15	N	79	71	21	9.836	E	A	1脚：土師器片1	-	-	-	-
180	6R15-20	N	(63)	(80)	18	9.861	E	A	-	-	-	-	>SD20
199	7R12	N	(25)	(18)	27	9.722	-	A	-	-	-	-	-
203	7R18	N	(50)	(50)	(14)	9.720	-	A	-	-	-	-	>SD20

観察表

ピット(P) 観察表(2)

道橋番号	グリッド	標出群位	概観(cm)	底面高さ(m)	堆土量	堆土色調分類	出土物	寄り合い
204 7R13・18	N	(53)	(42)	(13)	9.731	E A	-	>SD20
214 7S9	N	30	26	21	9.786	- B	-	-
215 7S15	N	36	34	33	9.681	- B	-	-
226 8P13・14	N	28	26	12	9.758	D A	-	-
228 8P24・35, 8Q4・5	N	58	55	38	9.602	E A	1群: 土脚部分1	-
229 8Q5・10, 8Q6	N	(50)	(38)	42	9.466	E A	2群: 土脚部分1, 1群: 傷むれ地質層内4	-
237 8R3	N	33	31	17	9.877	- A	1群: 地盤部分1, 土脚部分4	-
238 8R3	N	39	31	21	9.841	- A	-	>SD22
241 8V7	N	42	38	20	9.926	- B	-	>SD147
247 RU20	N	48	44	13	9.94	D B	-	-
250 9U16・21	N	-	(34)	(28)	(21)	9.805	- B	-
272 7U20・25	N	38	36	12	9.956	D B	-	-
282 7U11	N	34	31	11	9.964	-	-	-
283 7U11	N	20	18	8	9.990	-	-	-
286 7U11	N	25	24	25	9.858	- B	-	-
287 8U11	N	28	26	15	9.935	D B	1群: 土脚部分1	-
288 8U11	N	50	46	14	9.951	D B	-	-
289 8U11	N	42	40	15	9.944	D B	-	-
238 8U2	N	(32)	(24)	24	9.808	A B	-	-
334 RT22・23	N	30	22	10	9.958	-	-	-
350 7T18	N	27	24	44	9.659	- B	-	-
351 7T17・18	N	35	32	40	9.718	E B	-	-
356 7T16・21	N	29	28	36	9.708	- B	-	-
361 7Q12	N	(102)	(99)	79	9.400	E A	6群: 土脚部分1/5群: 土脚部分1側(実測)1/1群: 土脚部分1 片7: 土脚表面: 土脚部分6	>SB1(SD22), SD23
362 7Q12・17・18	N	(54)	(39)	36	9.643	E A	1群: 地盤部分(実測)1	>SB1(SD32)
363 7T2 - 3	N	24	20	15	9.907	D B	-	-
364 8S16	N	36	20	18	9.873	D B	-	-
365 8S6	N	38	30	20	9.821	- B	-	-
366 7S1	N	18	14	13	9.810	- A	-	-
367 7S6 - 7	N	22	22	16	9.795	D B	-	-
368 7S7	N	38	34	13	9.872	- B	-	-
370 6R22	N	30	30	13	9.884	- A	-	-
372 7S8	N	28	28	30	9.691	D B	-	-
273 7S12	N	(24)	(14)	25	9.729	- B	1群: 地盤部分白(実測)1	-
382 7S7	N	22	19	15	9.808	- B	-	-
383 8S6	N	(32)	(30)	(24)	9.612	D A	-	>SD22
384 8R7	N	42	40	36	9.670	E A	-	-
386 8S6	N	34	30	13	9.889	-	-	-
387 8Q14	N	(50)	(47)	43	9.613	E A	-	>SX217
388 8Q9・10	N	(51)	(47)	32	9.576	E A	1群: 地盤部分1, 土脚部分2	>SD14
391 7Q23, 7R3	N	(29)	(20)	41	9.999	E A	1群: 土脚部分5	>SB1(P54)
400 8M7・12	N	(31)	(30)	49	9.302	D A	-	>SD393
403 8K24, 4L4	N	30	28	20	9.952	A B	-	-
404 8L9	N	26	24	18	9.862	- B	-	-
407 8L4	N	(20)	(8)	(27)	9.484	- B	-	>SD400
408 8L9・9	N	(28)	(24)	(18)	9.552	- B	-	>SD400
409 8K21	N	30	30	44	9.156	E B	-	-
410 8K12・17	N	44	44	6	9.891	A A	1群: 扇台樹(実測)1, 小窓(実測)含む土脚部分3	-
411 8K30, 4R6	N	(28)	(26)	29	9.133	F E	-	>SD455
412 8S10・10	N	(19)	(12)	(10)	-	-	-	>SK1
413 7Q13・18	N	(30)	(30)	16	9.914	-	1群: 土脚部分3	>SB1(SD32)
415 8N18	N	26	24	24	9.556	- A	-	-
416 8Q20	N	(50)	(43)	26	9.703	D A	1群: 土脚部分(実測)1	-
417 8P22	N	33	30	37	9.635	A A	-	-
419 8P17	N	50	45	23	9.820	A A	-	-
420 8P13	N	(51)	(48)	47	9.429	E A	-	>P421 >SK13
421 8P12・13・18	N	(49)	(32)	42	9.561	F A	-	>SB12, P420
423 8Q15, 6Q13	N	(48)	(44)	63	9.274	E A	2群: 土脚部分1, 流岸1/1群: 土脚部分(実測)1	>SB1(P230)
424 8Q25, 7Q21	N	(35)	(30)	(37)	9.735	D A	-	-
425 8R3・4	N	(18)	(14)	(36)	9.549	E A	-	>SB1(P61)
426 8R14	N	(25)	(21)	51	9.532	A A	-	>SB1(P56)
429 8T19	N	28	25	13	9.849	- B	-	-
430 8G20	N	(47)	(47)	56	9.374	E A	2群: 土脚部分1	>SB1(P63)
439 8P22・23	N	(34)	(30)	29	9.696	D A	1群: 土脚部分1	>P153 >SK31
432 8P17	N	40	33	39	9.400	E A	-	-
434 8R9・14	N	(15)	(14)	(30)	9.684	D A	-	>SB1(P66)
1311 8Y24	V	36	34	10	10.021	E A	-	-
1312 8Z4・5	V	43	38	15	9.85	E A	-	-
1313 8Z5・10	V	38	36	20	9.784	E A	-	-
1314 8Z9・10	V	38	33	21	9.875	E A	-	-
1316 9Y16	V	40	36	49	9.611	E A	6群: 地盤部分1/2群: 土脚部分5	-
1317 9Y17	V	38	38	16	9.982	E A	-	-
1319 9Y22	V	35	33	24	9.757	E A	-	-
1320 9Y22	V	39	39	25	9.683	E A	-	-
1362 8Z8	V	42	40	17	9.936	E A	-	-
1375 8X25, 8Y5	V	43	20	24	9.896	E A	2群: 土脚部分1	-

土器觀察表(1)

発掘 場所	グリッド 番号	通遺 番号	層位	種類	時代/期	器種	分類	法量 (cm)			外面部調	内面部調	施主	底厚 切り落し	成形・調整	備考
								口径	底面 直径	底厚						
1	7Q12	S0322 (SB1)	1層	縦底盤	古代/古	無柄杯	A	12.6	2.9	0.8	7.5YR8/17/1	7.5YR8/17/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	小切削面
2	7Q18	S0322 (SB1)	2層	縦底盤	古代/古	無柄杯	A	12.2	2.7	7.6	10YR6/6/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	小切削面
3	7Q18	S0322 (SB1)	3層	土師器	古代/古	無柄杯	A	11.7	3.4	5.6	10YR6/6/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
4	7Q13	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	11.9	4.0	4.4	10YR6/6/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
5	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	12.4	2.8	5.6	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
6	7Q18	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	12.2	4.4	5.2	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
7	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	A	12.4	(3.2)	-	10YR6/6/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	5-60-P-N 1層と混合
8	7Q18	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	12.4	4.1	5.9	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
9	7Q13	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	A	13.0	3.2	-	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
10	7Q12	S0322 (SB1)	3層	土師器	古代/古	柄	A	13.0	(4.1)	-	SYK5/1	SYK7/6	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
11	7Q18	S0322 (SB1)	3層	土師器	古代/古	柄	A	13.4	(4.0)	-	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
12	7Q13- 18	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	13.4	3.9	6.2	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
13	7Q13	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	B	13.7	(2.5)	-	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
14	7Q13	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	13.4	3.6	5.8	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
15	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	A	14.0	(3.2)	-	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
16	7Q13	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	B	(15.0)	(3.9)	-	SYK5/1	SYK7/6	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
17	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	-	-	(3.6)	5.2	SYK5/1	SYK7/6	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
18	7Q18	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	17.2	6.1	6.2	SYK5/1	SYK7/6	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
19	7Q12- 13	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	B	17.0	5.2	7.2	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	No.20-21同 層と混合
20	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	B	(17.0)	(3.5)	-	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	No.19-21と同 層か?
21	7Q13	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	B	17.0	(4.4)	-	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	No.19-20と同 層か?
22	7Q18	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	15.7	5.7	5.8	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
23	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	柄	B	16.2	1.7	7.6	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
24	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代/古	無柄杯	A	13.0	2.7	5.7	2.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
25	7Q12	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	無柄杯	B	16.0	(3.3)	-	SYK5/1	SYK7/6	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	2Q12 P961.1 層上と混合
26	7Q12	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	無柄杯	B	(16.0)	(3.3)	-	2.5YR6/18/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
27	7Q12- 13	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	無柄杯	B	16.0	(4.2)	-	10YR6/18/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
28	7Q12	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	無柄杯	A	14.2	4.4	5.2	10YR6/18/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
29	7Q12- 13	S0322 (SB1)	1, 2層	黒色土器	古代/古	無柄杯	A	17.2	(3.6)	-	2.5YR6/18/2	2.5YR6/18/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
30	7Q12	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	無柄杯	B	19.1	(5.8)	-	2.5YR6/18/2	2.5YR6/18/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
31	7Q12	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	無柄杯	B	16.6	(5.4)	-	2.5YR6/18/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
32	7Q18	S0322 (SB1)	2層	黒色土器	古代/古	無柄杯	A	17.0	6.5	6.6	10YR6/18/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
33	7Q18	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	有柄杯	B	16.0	5.5	8.8	7.5YR8/16/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
34	7Q18	S0322 (SB1)	1層	黒色土器	古代/古	無柄杯	B	26.2	(10.5)	-	7.5YR8/17/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	
35	7Q12	S0322 (SB1)	1層	土師器	古代	小鉢		13.4	(2.8)	-	10YR6/18/1	SYK5/1	白色粒子	回転ヘラ削 り	内: ロクナダ 外: ロクナダ	

観察表

土器觀察表(2)

発掘 場所	グリッド 番号	通遺 番号	層位	種類	時代/ 時期	沿革	分類	底量 (cm)			外面部調 査	内面部調 査	測定 主	底厚 切り離し	成形・調製	備考
								口径	底面 直径	底厚						
36	7Q18	SD032 (SB1)	1層	土器部	古代	長削腹	C	23.2	(12.4)	—	2.5YR08/3	7.5YR08/2	砂礫	内：赤茶 外：白灰、ナラ 木目	内：ロクナヂ、 黑色處理 外：ロクナヂ	
37	7R9	SD021 (SB1)	1層	黑色土器	古代/BC	有白胎		13.8	4.4	9.2	2.5YR08/2	10YR黑褐3/1	砂礫	内：ロクナヂ、 黑色處理 外：ロクナヂ	底部穿孔	
38	6Q5	SD110 (SB1)	1層	土器部	古代/BC	無白胎	A	13.4	4.1	4.6	3YR07/6	5YR07/8	石英・砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
39	6Q5	SD110 (SB1)	1層	土器部	古代/BC	樹	A	13.0	(3.8)	—	2.5YR07/6	7.5YR07/6	砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
40	6Q14	P06A (SB1)	1層	黑色土器	古代	樹	A	(15.2)	(3.2)	—	10YR08/3	7.5YR08/1	砂礫	内：ロクナヂ、 燒紋、黑色處理 外：ロクナヂ、 燒紋、白色	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
41	6Q14	P06A (SB1)	1層	黑色土器	古代/BC	無白胎	A	14.6	(3.4)	—	2.5YR08/1	10YR黑褐3/1	砂礫	内：ロクナヂ、 黑色處理 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
42	7Q22	P422 (SB1)	1層	土器部	古代	長削腹	A	(22.8)	(3.6)	—	2.5YR08/3	7.5YR08/2	砂礫	内：ロクナヂ 外：カキヌ カキヌ	内：ロクナヂ 外：カキヌ	
43	6R10	P07 (SB1)	2層	土器部	古代	無	A	12.6	(2.2)	—	2.5YR08/3	7.5YR08/2	砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
44	7R4	P04A (SB1)	1層	土器部	古代	無	A	42.2	(7.9)	—	10YR07/6	7.5YR07/3	砂礫	内：ハナゼ 外：ナガマ	内：ハナゼ 外：ナガマ	内面部
45	6Q18	SD011 (SB2)	1層	黑底器	古代/BC	無白胎		11.8	3.0	8.4	7.5YR06/1	7.5YR06/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底	
46	6Q2	P09 (SB2)	1層	黑底器	古代/BC	無白胎		11.6	2.6	7.2	10BG青6/1	10BG青6/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
47	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	樹		—	(2.6)	14.0	5B青6/1	5B青6/1	石英・辰石	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
48	7Q1-6	P05 (SB2)	1層	黑底器	古代/BC	桿		11.3	(2.6)	—	2.5GYオリーブ 6R6/1	2.5GYオリーブ 6R6/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
49	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	桿		12.5	(2.3)	—	2.5YR08/2	2.5YR08/2	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底
50	7Q1-6	P05 (SB2)	1層	黑底器	古代	桿		(13.4)	(2.3)	—	5YR08/1	5YR08/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
51	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	無白胎		11.7	2.9	7.2	10YR05/1	10YR05/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底 7Q12-P061 1層と組合
52	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	無		13.4	(2.8)	—	5YR05/1	2.5YR05/1	石英・砂	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底
53	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	無白胎		—	(1.3)	6.5	10BG青6/1	10BG青6/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底
54	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	無白胎		12.3	2.9	6.6	5BG青6/1	5BG青6/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底
55	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	無白胎		12.4	2.9	8.2	7.5YR06/1	7.5YR06/1	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	全体化粧有し 物不明
56	7Q1-6	P05 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	無 瓶 蓋		25.2	(10.9)	13.2	NKG/6	NKG/6	石英・辰石	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底
57	5P20	P07 (SB2)	2層	黑底器	古代/BC	無		65.6	28.9	—	NKG/5	NKG/6	石英	内：ロクナヂ (1層) 外：ナガマ 内：ロクナヂ 外：ロクナヂ (1層)、タキヌ (瓶形)、無 蓋、NKG上と組合	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	質問現象、此 前出現、北 方系、外側黑色 紋
58	7R4	P187 (SB3)	2層	土器部	古代/BC	樹	A	15.4	(2.3)	—	2.5YR08/3	7.5YR08/3	砂礫・石英	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
59	7R4	P187 (SB3)	2層	土器部	古代/BC	無白胎	—	—	(2.4)	5.6	2.5YR08/2	7.5YR08/2	砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
60	6R17	P378 (SB4)	1層	土器部	古代/BC	無白胎		—	(1.3)	5.0	7.5YR08/3	7.5YR08/3	砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
61	5P9	SK27	1層	土器部	古代	長削腹	B	22.4	(3.9)	—	5YR07/6	10YR07/6	砂礫・石英	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
62	7Q8	SK40	1層	黑底器	古代/BC	無白胎		12.6	(3.0)	—	NKG/7	NKG/7	白色粒子・砂	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底
63	5P18	SK220	1層	黑底器	古代/BC	有白胎	—	(2.4)	8.5	5.0	10KG青6/1	10KG青6/1	石英・辰石	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	質問現象
64	6R24	SK183	1層	土器部	古代/BC	小椎		14.7	(5.9)	—	SYR12-29-9 6/3	SYR12-29-9 6/3	砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ カキヌ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ カキヌ	
65	6R24	SK183	1層	土器部	古代	長削腹	B	21.2	(6.6)	—	7.5YR06/3	2.5YR06/3	砂礫・石英	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	小凹頭底
66	5Q25	SK221	3層	黑底器	古代/BC	有白胎		11.6	2.9	7.0	10BG青6/2	10KG青6/2	白色粒子	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	5Q25-SK285 2層と結合
67	5Q25	SK221	3層	黑色土器	古代/BC	無白胎	A	14.0	5.3	5.8	2.5YR06/3	10YR黑陶2/2	砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ カキヌ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ カキヌ	
68	6Q21	SK221	1層	土器部	古代/BC	長削腹	A	(22.8)	(1.9)	—	10YR12-5-1 M67/4	10YR12-5-1 M67/3	砂礫	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
69	5Q25	SK221	3層	黑色土器	古代/BC	有白胎	—	—	(1.5)	5.6	2.5YR06/4	10YR黑陶3/1	砂礫・雲母	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	内：ロクナヂ 外：ロクナヂ	
70	5Q25	SK222	2層	土器部	古代	無白胎	—	—	(1.5)	5.6	SYR06/8	5YR06/8/3	砂礫	内：ロクナヂ 外：ヘラケヌ	内：ロクナヂ 外：ヘラケヌ	

土器觀察表(3)

発掘場所	グリッド番号	通巻番号	層位	種類	時代/期	目録番号	分類	測量(cm)			外面色調	内面色調	胎土	底面	切り邊し	成形・調製	備考	
								口径	腹高	底径								
71	SP1E	SK310	1層	縦底盤	古代/彌	杯	(12.0)	(2.3)	—	5PB青灰5/1	5PB青灰6/1	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ	小切削面				
72	SP1E	SK310	1層	上縦底	古代/彌	筒形杯	—	(3.8)	4.9	5YR赤5/8	5YR赤7/6	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ	小切削面				
73	SP1E	SK310	1層	上縦底	古代/彌	小瓶	12.9	(9.0)	—	7.5YR赤5/9 6/3	10YR浅黄褐 6/3	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
74	5Q20- 25	SK385	2層	縦底盤	古代	有柄杯	—	(3.3)	(7.0)	10Yオリーブ 3/2	7.5YRオリーブ 4/2	石英	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
75	5Q20- 25	SK385	1.2 層	黑色土器	古代/彌	桶	A	12.4	(3.6)	—	10YIG赤8/2	7.5YR黒2/1	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
76	6R19	SD320	2層	从動陶器	古代/彌	鉢	—	(1.6)	—	5Y浅黄8/3	5YR白8/2	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	K349室、TF4 SD325 2層と組合	
77	6R19	SD320	3層	土器鉢	古代/彌	鉢	B	40.7	(6.3)	—	2.5YR赤8/2	2.5YR赤8/3	砂礫・石英	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
78	7Q12	SD323	1層	黑色土器	古代/彌	耳皿	—	(9.6)	(2.9)	(5.3)	10YIG赤4/1	10YIG赤4/1	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
79	7Q12	SD323	1層	上縦底	古代/彌	筒形杯	A	16.2	3.6	6.0	7.5YR浅黄褐 8/3	7.5YR浅黄褐 8/4	砂礫・宝母	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
80	7Q12	SD323	1層	上縦底	古代/彌	鉢	B	38.1	(6.3)	—	2.5YR浅黄8/4	10YIG赤8/2	砂礫・宝母	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
81	7Q13	SD323	1層	上縦底	古代	鉢	B	40.0	(5.0)	—	10YIG浅黄褐 8/3	10YIG浅黄褐 8/3	石英・辰石・ 蛋白石	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
82	6Q24	SD324	4層	上縦底	古代/彌	無柄杯	—	—	(3.4)	4.7	7.5YR浅黄褐 8/3	7.5YR浅黄褐 8/3	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
83	7Q24	SD324	3層	深鉢形	中世	陶・日 7/3×中世	—	—	—	NKA/4	NKA/4	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
84	7Q13	SD325	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	12.4	2.5	7.2	5G明赤8/7	10YIG赤8/1	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
85	7Q13	SD325	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	12.7	2.9	7.6	NKA/15	7.5YR赤17/1	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
86	7Q13	SD325	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	12.0	3.0	6.8	5YR赤8/1	2.5YR白8/1	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
87	7Q13	SD325	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	13.4	3.2	7.8	7.5YR赤8/1	7.5YR赤8/1	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
88	7Q13	SD325	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	12.0	2.8	(7.6)	NKA/6	NKA/6	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
89	7Q13	SD325	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	(3.0)	6.5	7.5YR赤8/2	7.5YR赤8/1	石英	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
90	7Q13	SD325	1層	上縦底	古代/彌	無柄杯	A	12.0	3.6	4.3	2.5YR赤8/1-9 7/4	7.5YR赤8/1-9 7/4	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
91	7Q13	SD325	1層	上縦底	古代/彌	無柄杯	B	12.4	3.7	5.1	2.5YR浅黄褐 8/4	7.5YR浅黄褐 8/4	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
92	7Q13	SD325	1層	上縦底	古代	長脚杯	A	20.0	(12.7)	—	7.5YR赤8/1-9 7/3	7.5YR赤8/1-9 7/3	石英・砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
93	8T19	SS8	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	11.9	2.9	8.3	5Y深黄8/3	5Y深黄8/3	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
94	8T19	SS8	2層	白輪	中世	陶	—	(15.2)	(3.7)	—	10YIG赤8/1	10YIG赤8/1	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
95	8T19	SS8	2層	青磁	中世	陶	—	(3.1)	—	5GY明オリーブ 7/7	5GY明オリーブ 7/7	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
96	8T19	SS8	1層	深鉢形	中世	陶	—	33.6	(8.65)	—	5Y赤6/3	5Y7/25白	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
97	8T19	SS8	2層	縦底盤	古代	横底	—	(4.7)	—	5Y赤4/1	7.5YR赤8/1	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
98	6P15	SK11	1層	縦底盤	古代/彌	有柄杯	—	(2.3)	9.2	NKA/6/1	NKA/6/1	石英	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
99	7P22, 7Q2	SK16	1層	縦底盤	古代/彌	棒茎	—	—	—	10YIG赤8/1-9 8/3	10YIG赤8/1-9 8/3	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
100	7Q2	SK16	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	11.8	3.1	6.8	10YIG赤7/6	2.5YR赤7/2	白色粒子	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
101	7Q3	SK16	1層	縦底盤	古代	小瓶	—	(2.7)	6.4	5YR赤7/6	5YR赤7/6	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
102	7Q3	SK16	1層	縦底盤	古代	小瓶	—	(2.0)	—	2.5YR赤8/5	7.5YR浅黄8/6	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	
103	6P22	SK31	2層	上縦底	古代	樹	B	12.6	(4.2)	—	2.5YR赤8/5	7.5YR浅黄8/6	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
104	6P22	SK31	2層	上縦底	古代	樹	A	16.6	(4.8)	—	2.5YR浅黄8/6	7.5YR浅黄8/5	砂礫	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ
105	7S4	SK39	1層	縦底盤	古代/彌	無柄杯	—	12.6	3.0	6.8	NKA-9/7 5/1	NKA-9/5	石英	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ	内：ロクナダ 外：ロクナダ カキメ

觀察表

土壤觀察表 (4)

土器觀察表(5)

発掘 場所	グリッド 番号	通巻 番号	層位	種類	時代/ 時期	沿革	分類	法量 (cm)			外面部	内面部	胎土	底面 切り端	成形・調製	備考
								口径	腹高	底径						
141	2D10		表土	黒色土器	古代/9c	直		27.8	(3.2)	-	10YR46R4/1	10YR46R4/1	砂礫		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	
142	5Q23		5c 植	土器	古代	長削腹	A	20.4	(5.1)	-	7.5YR46R8/2	7.5YR46R8/2	砂礫・玉斑、 石英		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	
143	5-60-P-N		1層	土器	古代	長削腹	B	(23.8)	(6.6)	-	7.5YR46R8/2	7.5YR46R8/2	砂礫		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	
144	8U19		5c 植	土器	古代	小椎		-	(5.0)	7.4	BY46R6E/4	10YR46R8/2	砂礫・石英		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ	
145	4-5K-L		段丘	青白磁	中世	合子		7.0	1.7	4.2	10GY46R8/2	5YR19R6/1	器入少な く柱出			
164	8V21	SK1321	5層	黑色土器	古代/9c	無台輪	-	-	-	5.6	2.5YR46R8/1	2.5YR21/	砂	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 黑色地、體感 砂礫	
165	8V21	SK1321	3層	黑色土器	古代/9c	無台輪	B	15.0	(2.5)	-	2.5YR21/	2.5YR06R8/2	砂		内：ロクロナデ、 黑色地、體感 砂礫	
166	8V22	SK1321	3層	土器	古代	溝	A	45.0	(11.6)	-	7.5YR46R8/2	7.5YR46R8/2	砂礫		内：ロクロナデ、 黑色地、體感 砂礫	
167	8V17	SK1322	2層	黑底器	古代/9c	杯		14.0	(2.6)	-	10YR6/1	7.5YR06/1	白色粒子		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城
168	9Y6	SK1326	1層	黑底器	古代/9c	無台輪		11.9	3.3	7.0	7.5YR06/1	7.5YR06/1	白色粒子	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城
169	9Y6	SK1326	1層	黑底器	古代/9c	無台輪		-	(0.6)	-	10YR06/1	7.5YR06/1	石英	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城
170	9Y6	SK1326	1層	黑底器	古代	楕瓶		-	(18.0)	5/2	10YR06/1	2.5YR46R7/3	石英・灰石		内：てき具目 外：ロクロナデ、 タヌキ目、カヌメ、 自然地	
171	9V7	SK1355	2層	黑底器	古代/9c	無台輪		12.2	3.0	6.2	5B青05/1	5B青05/1	白色粒子	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 5B青05/1	小田原城、9Y7 SK1355-PL1 9V7-V7Mと 組合
172	9V7	SK1355	2層	土器	古代	長削腹	A	18.0	(6.2)	-	7.5YR12-5P-4 7/4	7.5YR12-5P-4 7/4	砂礫		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	9Y7-SF1355 組なしと合板
173	8AA10	SD1301	6層	黒底器	古代/9c	蓋		21.2	(5.4)	-	5PD青05/1	5B青05/1	白色粒子		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 タヌキ目	小田原城
174	8AA10	SD1301	4層	土器	古墳	壺		-	(3.2)	4.2	10YR46R8/2	10YR21/	砂礫		内：胎子目、ハク 目、黑色地 外：ロクロナデ、 タヌキ目、ハク 目	小田原城、10Y7 SD1301-PL1 10Z2-1段丘と接 合
175	8Z25	SD1303	1層	黒底器	古代/9c	無台輪		-	(2.4)	6.4	5B青05/1	5B青05/1	白色粒子	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 5B青05/1	小田原城
176	8Z23	SD1303	2層	土器	古代	溝	A	(32.9)	(2.4)	-	10YR12-5P-1 7/4	10YR12-5P-1 7/4	砂礫		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	質御遺跡
177	9Y9	SD1307	2層	黒底器	古代/9c	杯		(14.0)	(2.2)	-	10YR06/1	10YR06/1	2.5YR06オリ 7/4	石英	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城、9Y9
178	9Y24	SD1307	7層	黒底器	古代/9c	杯		13.0	(2.7)	-	5B青04/1	5B青04/1	白色粒子		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城
179	8X15	SD1307	2層	黒底器	古代/9c	有台輪		-	(3.4)	6.2	5B青05/1	5B青05/1	白色粒子		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 5B青05/1	小田原城、9Y1 SK1355-PL1 8X15 SD1309 1層と接合
180	9Y19	SD1307	1層	土器	古代	小椎		-	(1.7)	7.6	2.5YR12-5P-4 5/3	10YR12-5P-4 5/3	石英・砂礫	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	8X23 ND1358 1層と接合
181	9Y3-4- S-9	SD1307	2層	土器	古代	長削腹	C	30.0	(5.7)	-	7.5YR06/1	7.5YR06/1	砂礫		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 カヌメ	
182	SD1308	1層	黒底器	古代	折縁鉢		(10.6)	(2.7)	-	5B青05/1	5B青05/1	石英		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 5B青05/1	質御遺跡	
183	SD1308	2層	黒底器	古代	楕瓶		14.4	(3.6)	-	5B0/1	5B0/1	白色粒子		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	9Y7-V7Mと接 合	
184	8Y5- 8Y4	SD1308	1層	土器	古代	鍋	C	31.5	(4.7)	-	7.5YR12-5P-4 7/4	7.5YR12-5P-4 7/4	砂礫		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 カヌメ	内面コケ付養 カヌメ
185	SD1308	2層	土器	古代	鍋	C	29.6	(3.2)	-	7.5YR06/1	7.5YR06/1	砂礫		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 カヌメ	内面コケ付養 カヌメ	
186	8Y4	SD1308	1層	土器	古代	長削腹	A	20.8	(6.0)	-	10YR12-5P-4 7/4	10YR12-5P-4 7/4	10YR12-5P-4 7/4	石英・砂礫	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 カヌメ	内面コケ付養 カヌメ
187	9X13	SD1309	3層	黒底器	古代/9c	杯	-	(1.4)	(15.0)	10YR06R8/1	10YR06R8/1	10YR12-5P-4 7/4	白色粒子	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城	
188	9X17	SD1309	1層	黒底器	古代/9c	杯		12.8	(2.8)	-	10BG青04/1	10BG青04/1	2.5YR06オリ 8/1	白色粒子	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城
189	9X8	SD1309	1層	黒底器	古代/9c	杯		(13.0)	(2.3)	-	5B青05/1	5B青05/1	白色粒子		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城
190	9X11	SD1309	4層	黒底器	古代	鍋		44.0	(4.8)	-	10R青05/4	10R青05/4	石英		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 カヌメ	質御遺跡
191	8X17	SD1309	1層	土器	古代	鍋	B	(46.8)	(4.0)	-	10YR12-5P-4 7/4	10YR12-5P-4 7/4	砂礫・玉斑		内：ロクロナデ、 カヌメ、ハマメ、 カヌメ	
193	SD1310	4層	黒底器	古代/9c	杯	-	(1.4)	-	5B0/6	NBR/	5B0/6	白色粒子		内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城	
194	8Y10	SD1310	2層	土器	古代	長削腹	-	-	(6.1)	11.4	7.5YR12-5P-4 7/4	7.5YR12-5P-4 7/4	石英	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 カヌメ	
195	8Y23	SD1358	1層	黒底器	古代/9c	有台輪		12.6	3.0	6.6	7.5YR06R7/1	2.5YR06R7/1	白色粒子	回転ヘラ切 り	内：ロクロナデ、 外：ロクロナデ、 黑色地	小田原城

観察表

土器観察表(6)

発令 番号	グリッド 番号	通報番号	層位	種類	時代/期	基準	分類	法量(cm)			外面色調	内面色調	胎土	底厚 切り落し	成形・調整	備考	
								長	幅	厚							
196	8Y23	SD1358	1層	縦底盤	古代/BC	無	円筒	12.9	3.1	7.6	SGYオリーブ 806/1	10HG青806/1	白色粒子	削輪へり留 り	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	小切削面	
197	9W21	SD1149	1層	上縦盤	古代	無	B	(42.0)	(2.2)	-	2.5YRCに赤1等 7/4	7.5YRC赤2等 6/4	砂礫	削輪	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ		
198	9X1	SD1149	1層	黒土・縦	古代/BC	無	筒	-	-	(4.0)	5.6	SGY白806/1	2.5YR黑2/1	砂礫	削輪へり留 り	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	
200		9Y156	上縦盤	古代	長斜盤	C	28.6	(4.4)	-	10YR赤黄2等 8/4	7.5YR赤7/6	砂礫	-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ			
201	9Y16	P1310	6層	縦底盤	古代/BC	無	(13.0)	(3.0)	-	5GGR赤6/1	5Gオリーブ6/1	石英	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	質地斑駁			
202	8Y18	P1324	1層	上縦盤	古代	無	A	35.5	(10.8)	-	10YR赤1等 7/4	10YR赤1等/4 7/3	砂礫	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	下部削波底、カ ラキ		
203	8Y18	P1324	1層	上縦盤	古代	小底		16.8	(7.3)	-	7.5YR赤6/6	7.5YR赤7/6	砂礫	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	内面凹部付 外:ロクロナデ	
204	9W21	P1573	1層	上縦盤	古代	無	B	(36.6)	(4.0)	-	10YR赤1等 8/4	10YR赤1等 8/2	砂礫・泥塗	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	下部削波底、カ ラキ		
205	10Y21	青土	縦底盤	古代/BC	無	筒	12.8	2.8	6.6	10HG青806/1	10HG青806/1	白色粒子	削輪へり留 り	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	小切削面		
206	929	陶瓦	6層	縦底盤	古代/BC	無	筒	13.4	2.9	8.0	5B青灰5/1	10HG青806/1	白色粒子	削輪へり留 り	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	小切削面	
207	8Y10		3層	泥質系 陶器	中世/13 世	表	-	6.3	-	10H粘土赤3/3	10H赤4/3	石英	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	赤褐色斑駁			
208	9X18		表土	宋代	近代	無		16.0	(4.0)	-	5.5YR明灰4/1	10GY明灰4/1	無	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	表面系斑駁		

石製品観察表

発令 番号	グリッド 番号	通報番号	層位	種類	石種	長	法量(cm)			重積 (g)	通称状況	備考	
							長	幅	厚				
152	8T19	SK8	2層	研磨石	石英	12.85	10.80	7.50	1141.0	-	研打痕あり		
153	5Q23		N'層	研磨石	石英	4.90	4.30	3.20	64.0	砂面・顎面・裏面欠損	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ		
154	8T19	SK225	1層	研磨石	砂岩	6.15	3.90	2.35	52.0	-	研打	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	
155	7Q18	SH332	1層	研磨系 陶器	石英	12.60	6.95	6.00	358.0	-	研打	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	
156	5M		表土	研磨系 陶器	板状	4.55	2.50	0.80	11.0	-	研磨の跡現れ、表面欠損	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	赤褐色斑駁
157	8Y10	SH9	1層	不明	石英	3.35	3.20	3.45	27.0	上部少欠	研打・凹凸平均	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	

木製品・その他観察表

発令 番号	グリッド 番号	通報番号	層位	種類	木製品	木取扱	法量(cm)			重積 (g)	相	備考
							長	幅	厚			
146	6T19	SK225	G層	木製品	漆器柄	-	漆高(6.67)	無漆(1.6)	無漆(8.0)	-	タケナ	内:赤褐色、表面黒褐色・朱漆付(漆ぬ竹材)、 自然科學分析済
147	6T19	SK225	G層	木製品	板状木製品	板口	(8.1)	2.4	0.3	-	-	
148	6T19	SK225	G層	木製品	板状木製品	板口	(16.2)	2.8	1.0	-	-	
149	6T19	SK225	G層	木製品	板状木製品	板口	(16.9)	2.8	1.0	-	-	曲物の一端。151と同一?
150	6Q15	P114	神出面	アスファルト	曲物	-	9.2	12.2	4.5	121.4	-	自然科學分析済(黒褐色変形物)
151	6T19	SK225	G層	木製品	曲物	板口	89.0	75.8	36.6	-	3.4	井戸の木桶

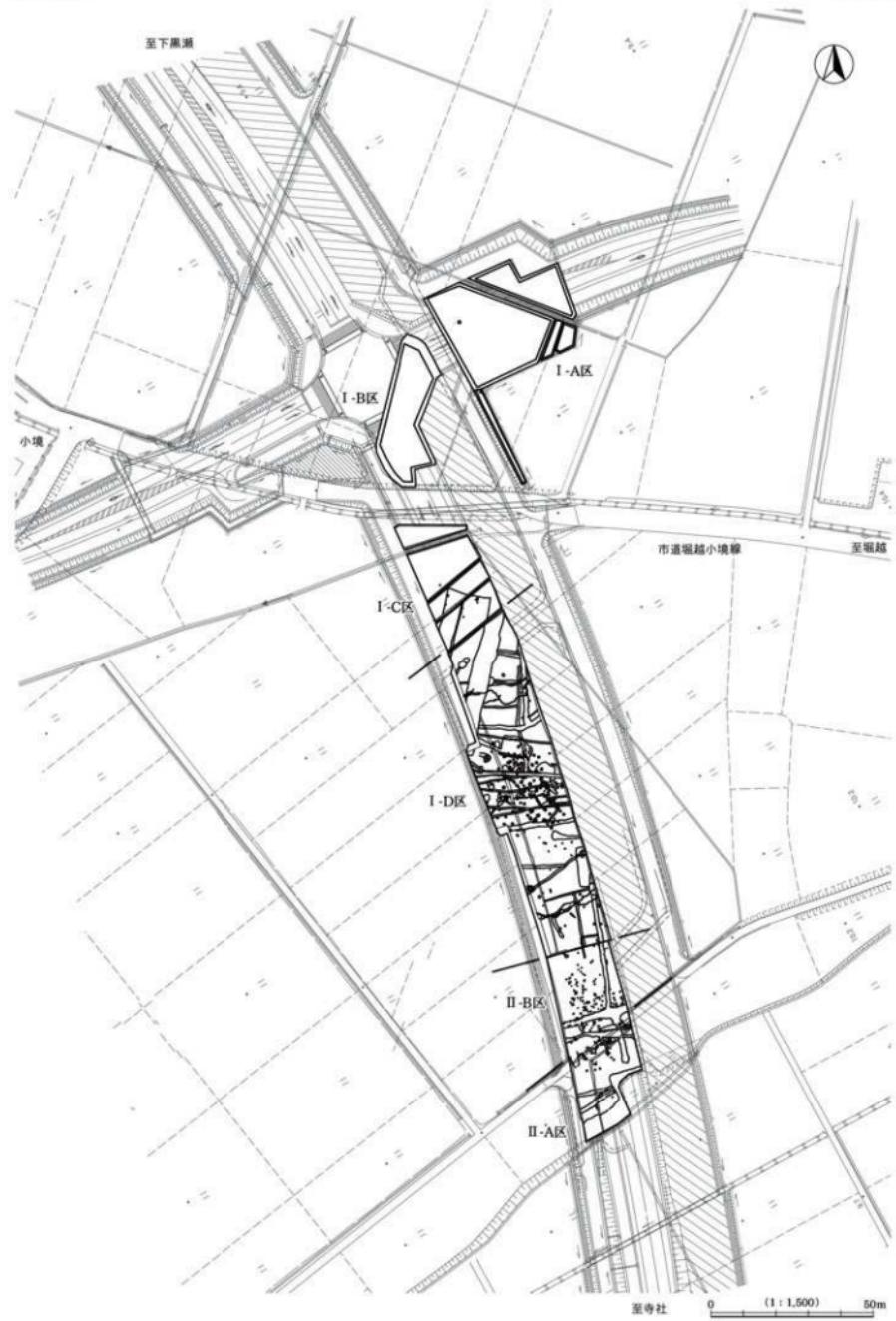
土製品観察表

発令 番号	グリッド 番号	通報番号	層位	種類	法量(cm)			重積 (g)	色調	備考
					長	幅	厚			
192	8X15	SD1309	3層	板用磨具	6.5	5.4	4.3	87.5	内:7.5Y赤1/ 外:7.5Y赤1/2	板用磨(月白漆)底面鋸歯切。内:ロクロナデ・IRH。
199	9W18	SD1149	1層	板用磨具	6.5	6.15	1.5	96.0	内:10YR赤1等6/2/ 外:2.5YR赤2等6/1	板用磨(漆)
200	9Y7	SK1305-P2	2層	上縦	4.0	1.3	1.15	5.5	2.5YR赤7/3	
210	9Y18	SD1307	1層	上縦	4.0	1.3	1.15	5.5	10YR赤1等6/2	
211	9AA	SP1304	1層	上縦	3.7	1.25	1.10	5.0	2.5YR赤6/3	
212	9AA		上縦	3.4	1.20	1.05	4.0	10YR赤1等6/2		
213	9AA		上縦	(2.9)	1.10	1.00	2.5	2.5YR赤6/2		
214	9AA		II縦	(3.3)	1.15	1.05	4.0	10YR赤1等6/2		

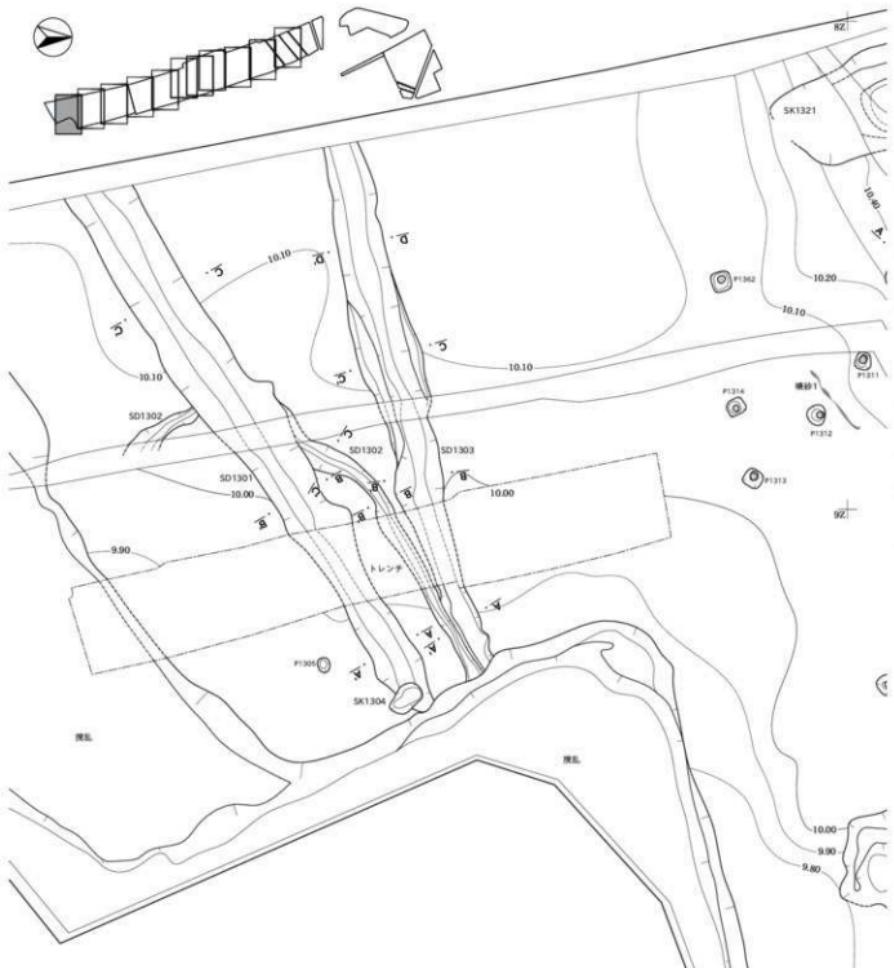
金属製品・その他観察表

発令 番号	グリッド 番号	通報番号	層位	種類	法量(cm)			重積 (g)	相	備考
					長	幅	厚			
158	TH20	SD1020	1層	釘	9.70	1.05	1.60	25.0	-	
159	8T19	SK8	1層	不明	6.20	1.70	1.10	14.0	釘の可能性あり	
160	6N8	SD14	1層	釘	2.05	0.60	0.45	0.5	-	
161	7U	SD1150	1層	釘	5.10	1.20	1.35	2.0	-	
162	7H16	SD1020	2層	跳洋	3.00	2.45	1.95	17.5	鉤形洋の可能性あり	
163	7H2	PD4	2層	跳洋	2.70	1.50	1.00	4.5	SH1ビット	
215	9Y23		1層	跳洋	2.55	2.55	0.50	6.4	-	
216	8Y21	SK1321	2層	刀子	5.30	1.10	0.30	6.9	-	

図 版



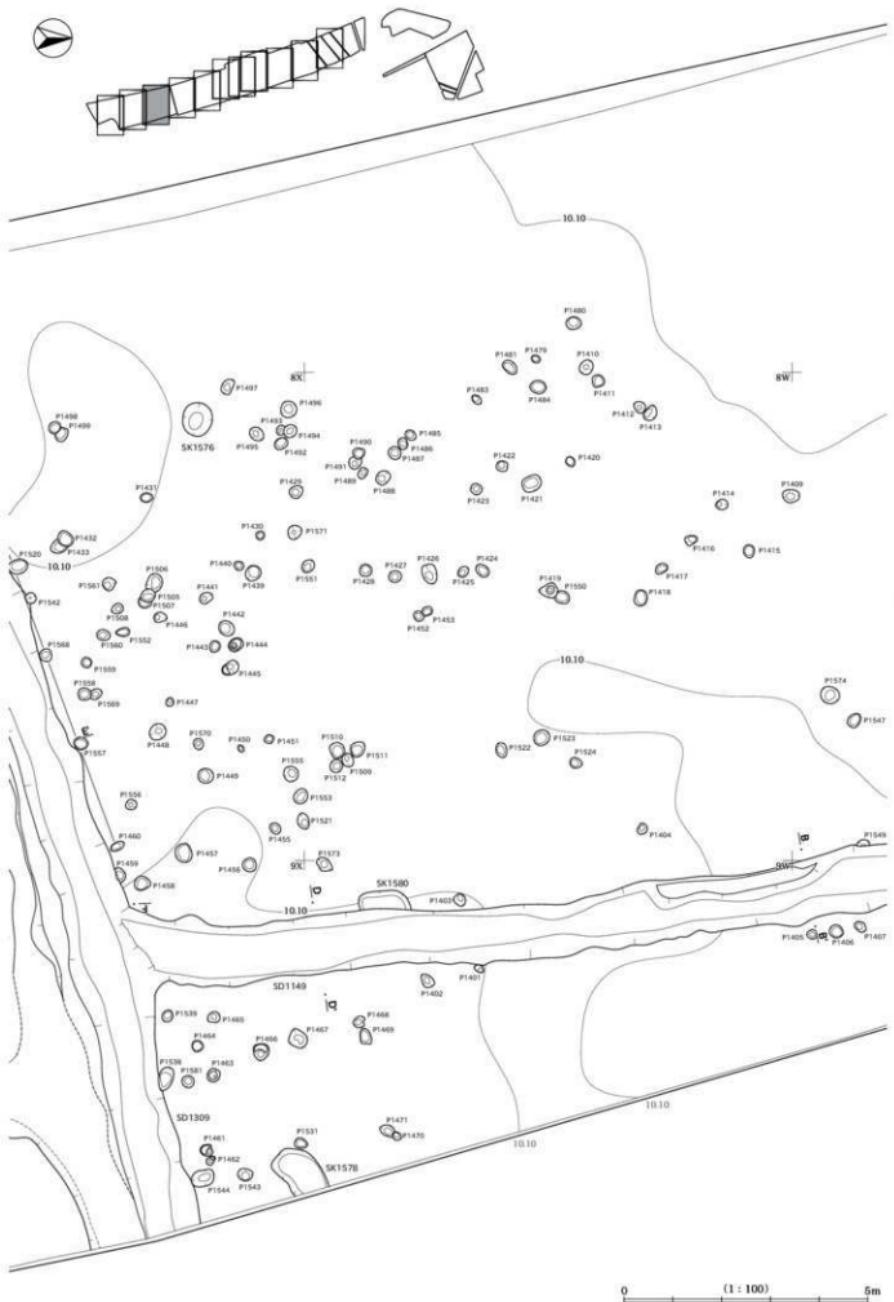




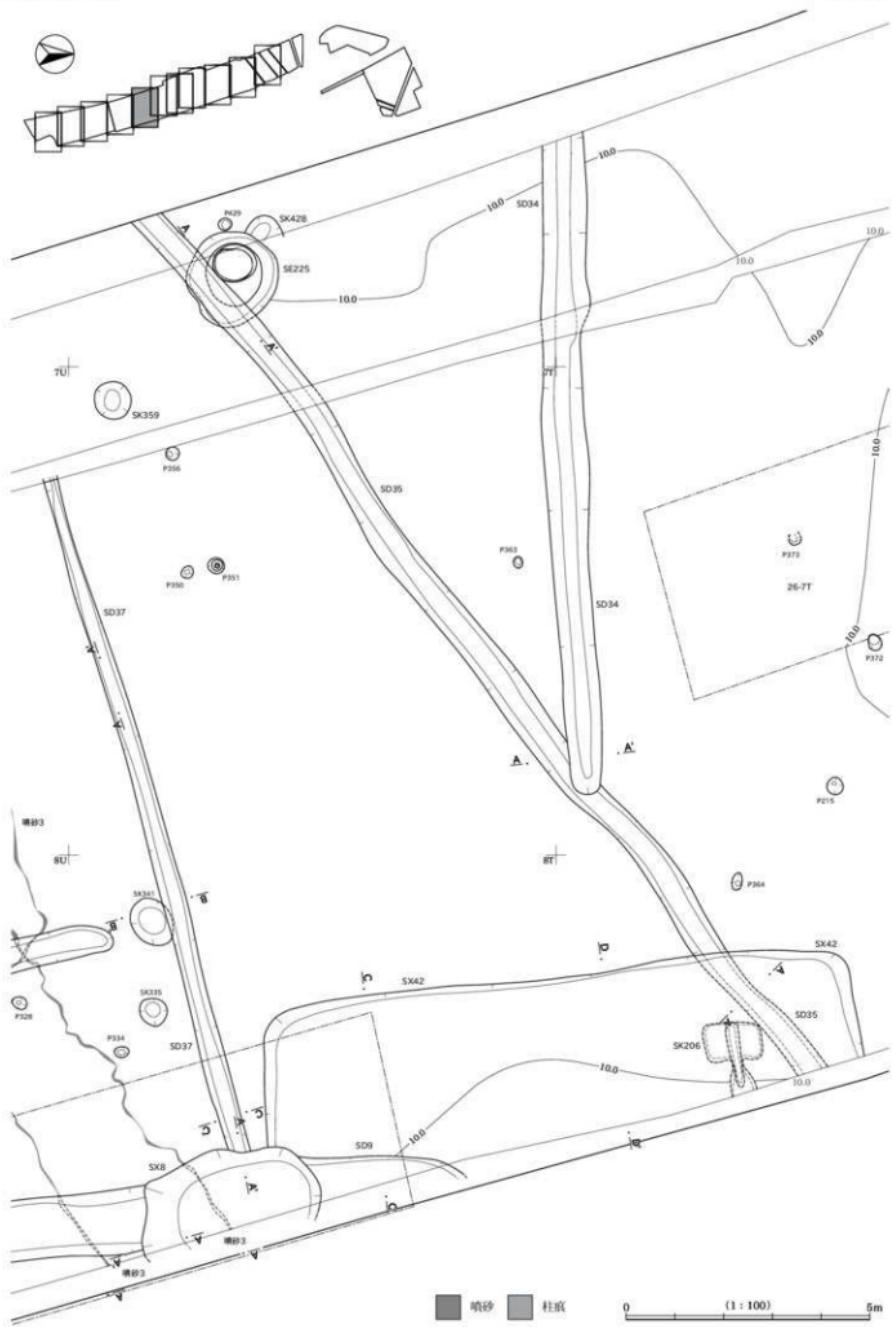


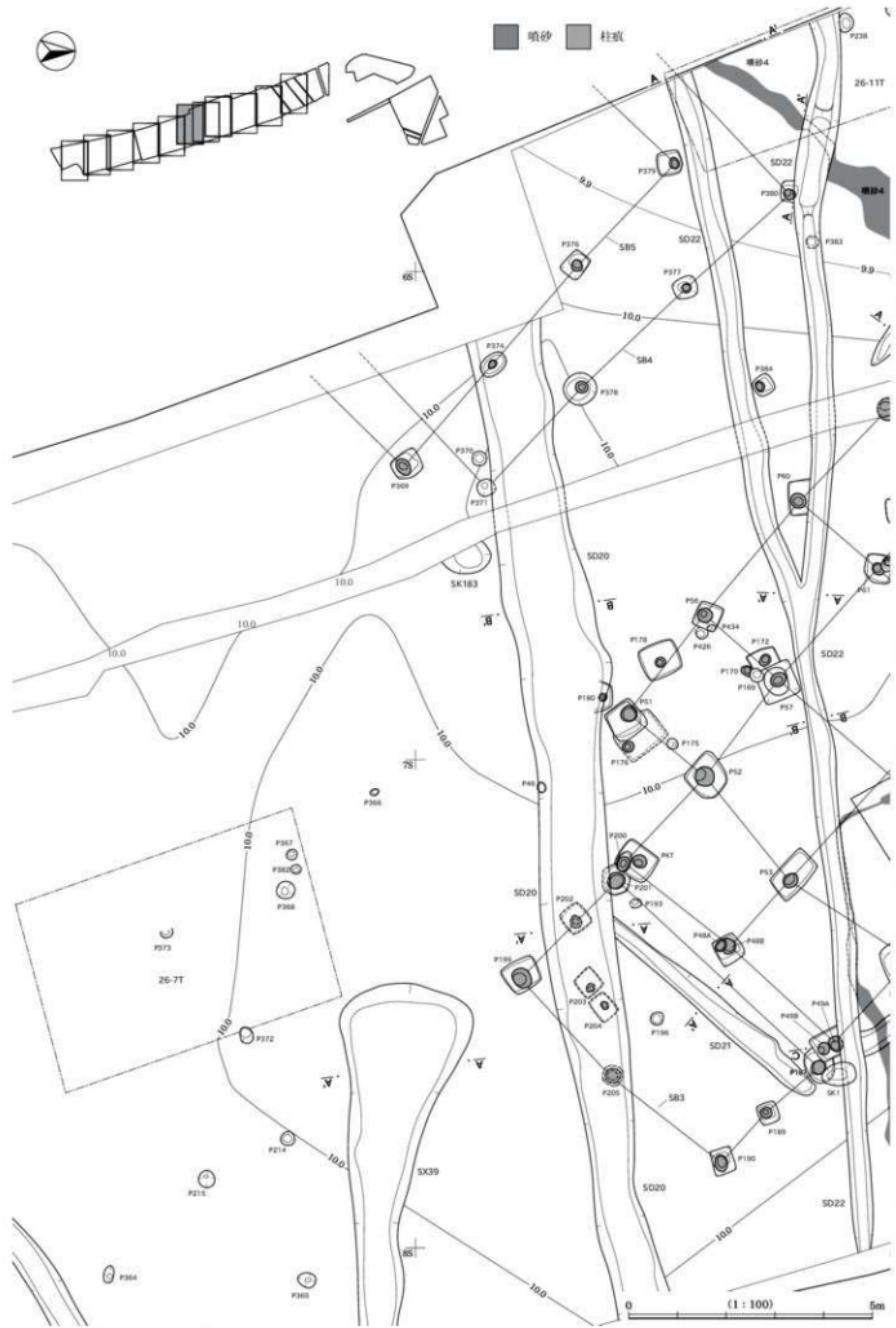
遺構分割図(3)

圖版 5



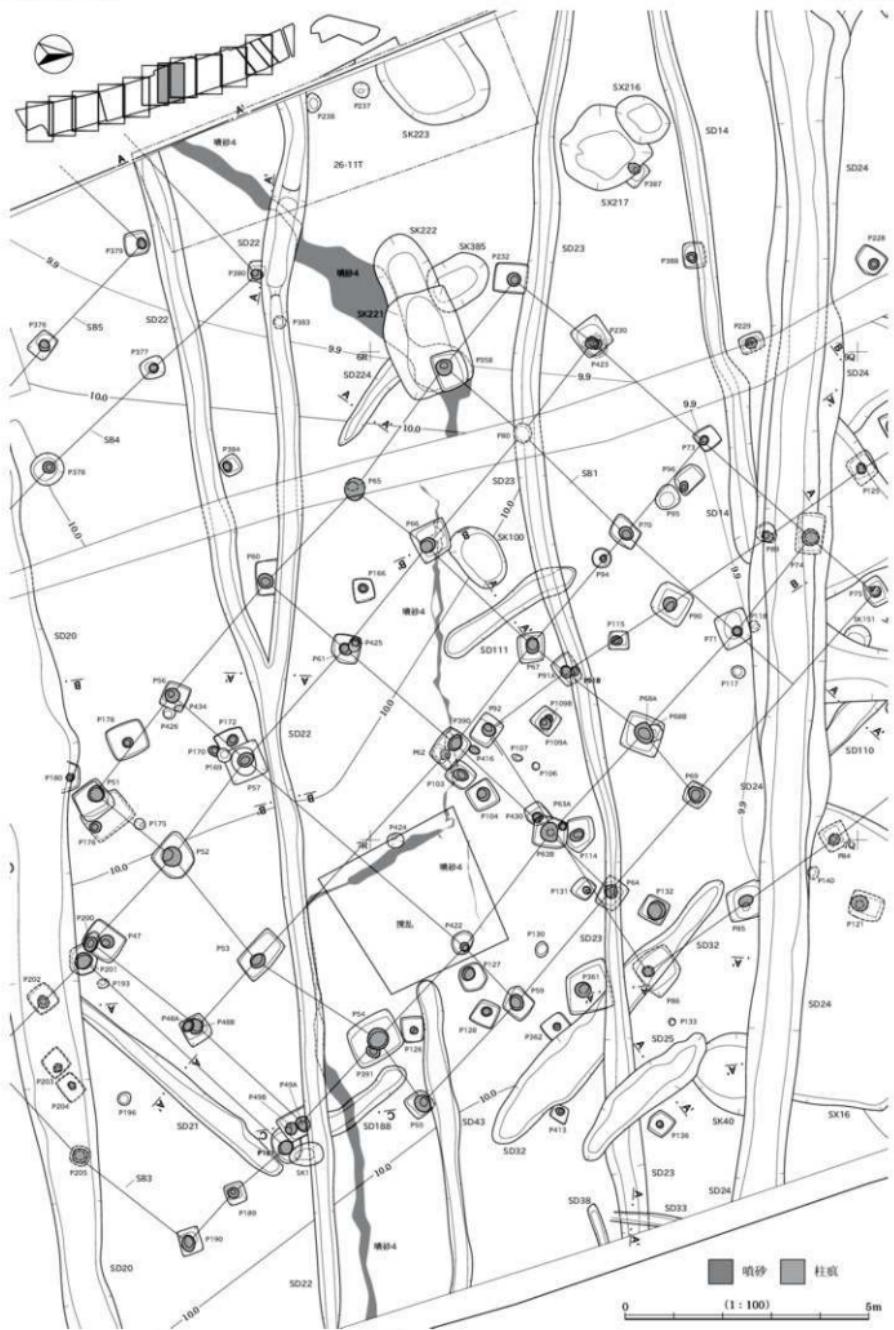


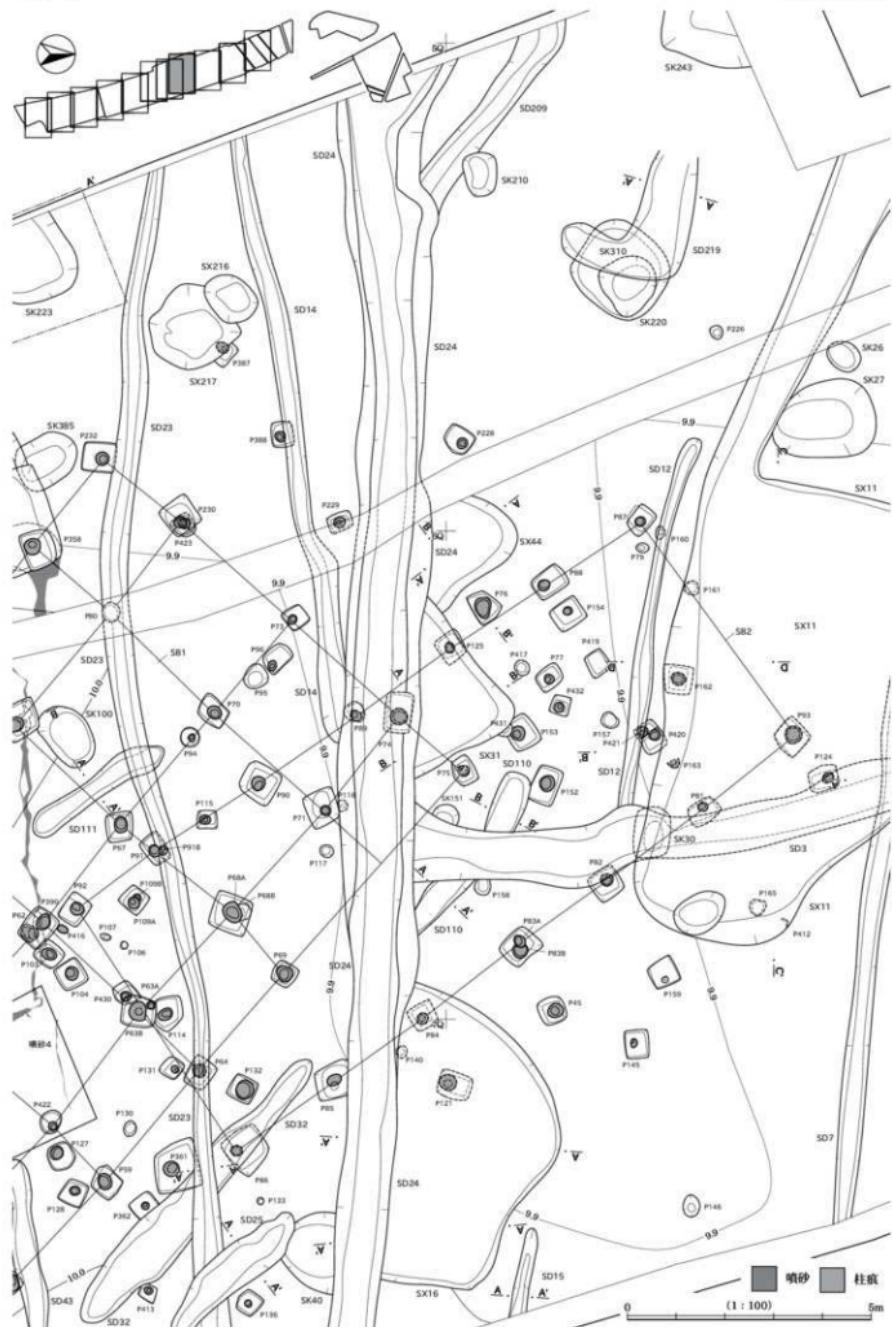




遺構分割図(7)

圖版 9





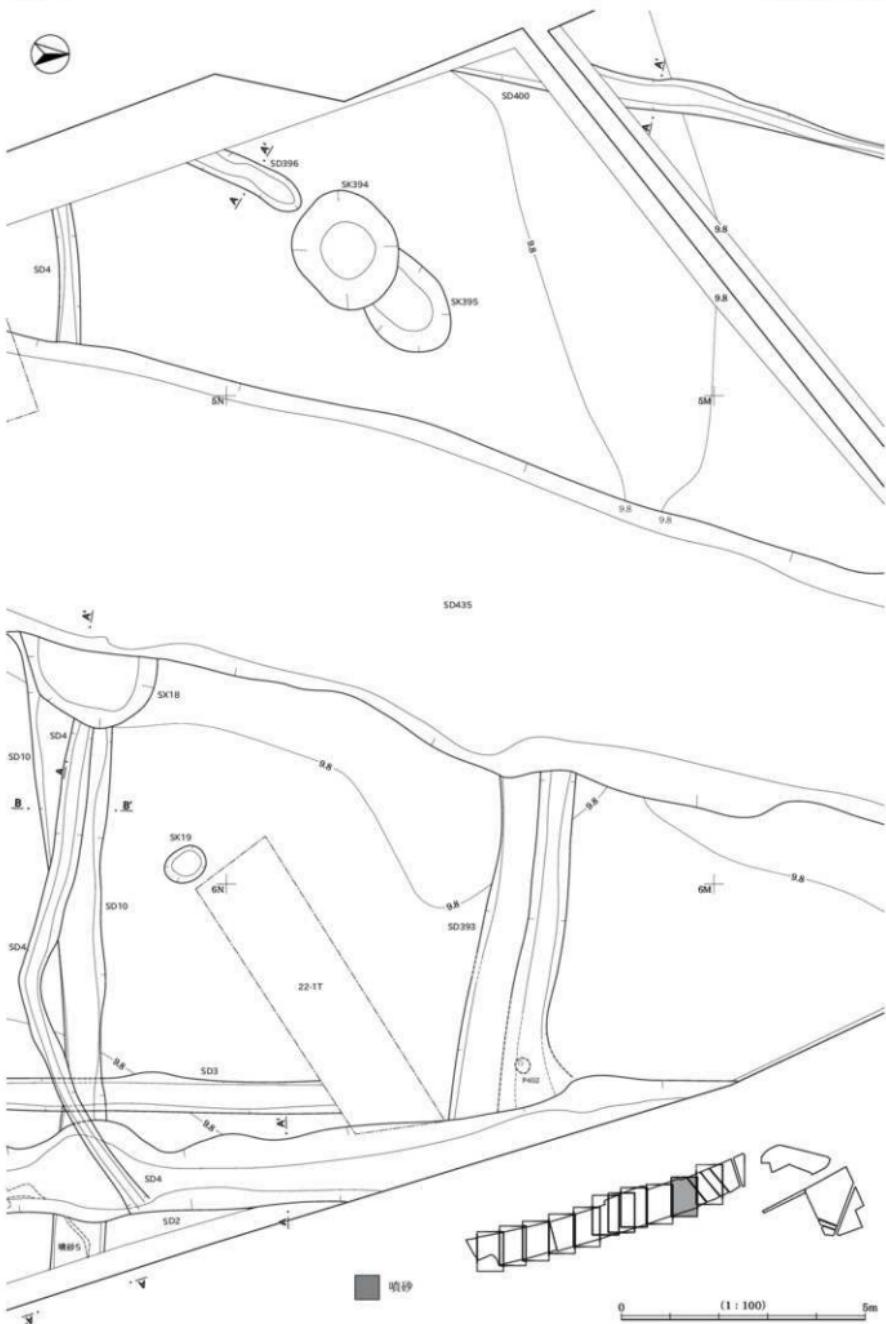
遺構分割図(9)

図版 11



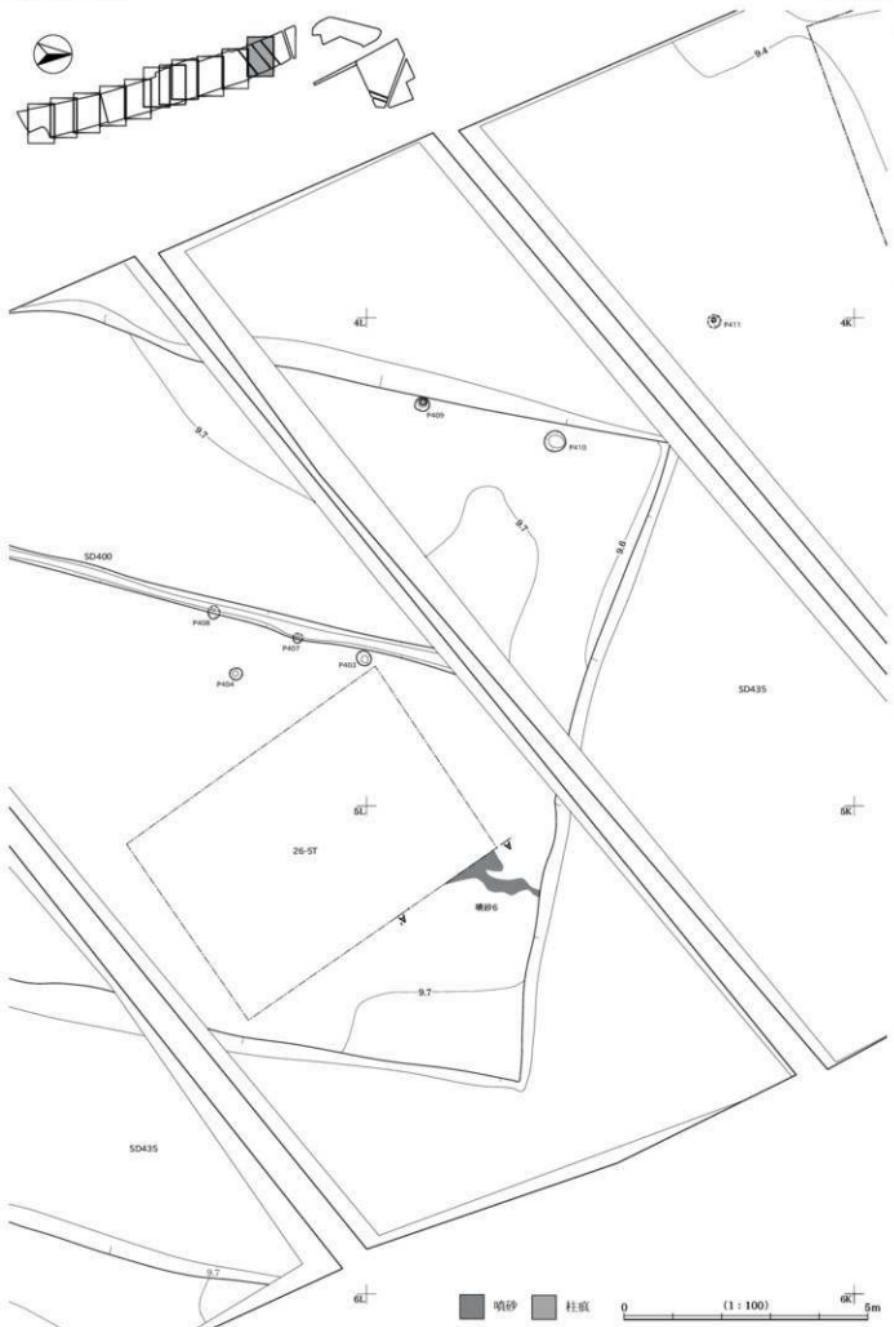
圖 版 12

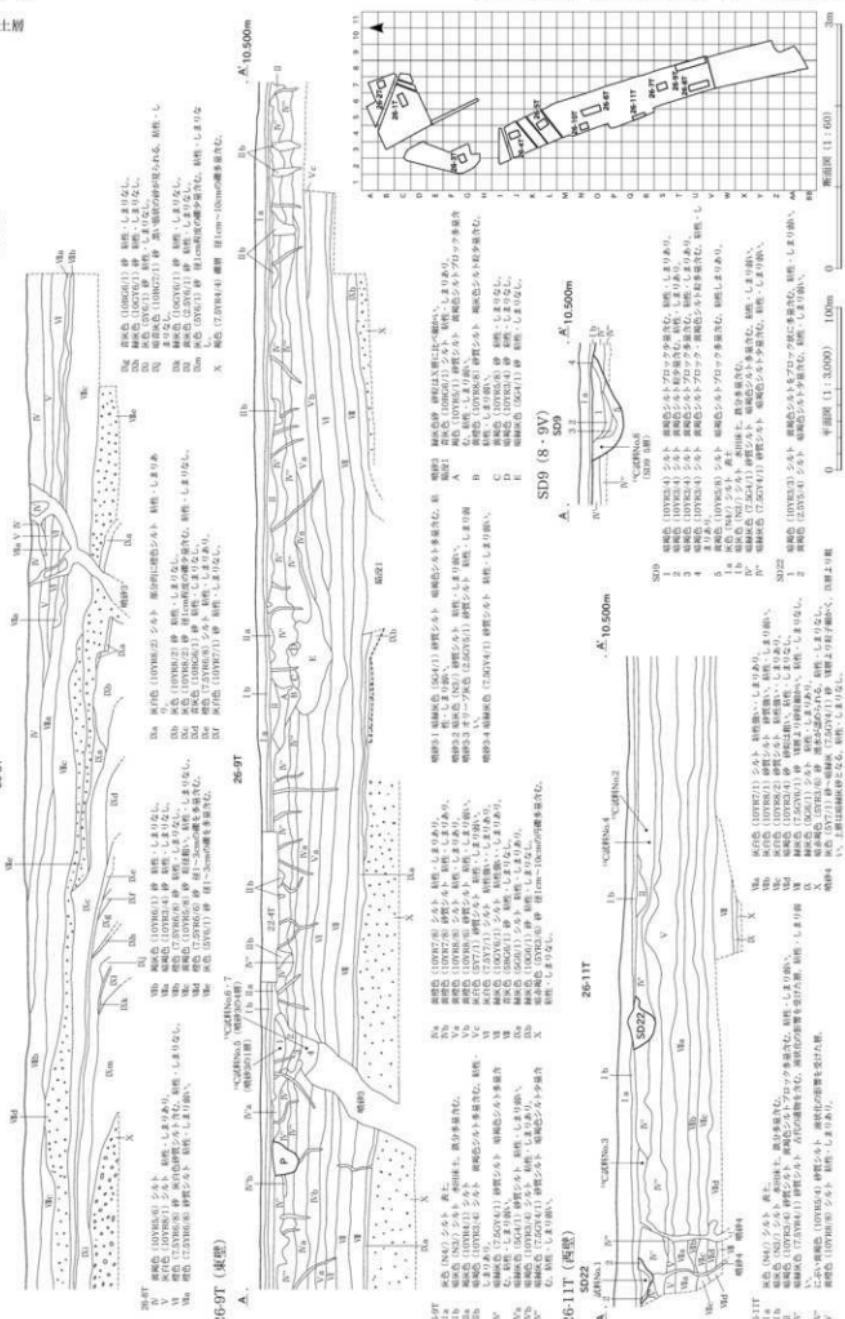
遺構分割図(10)

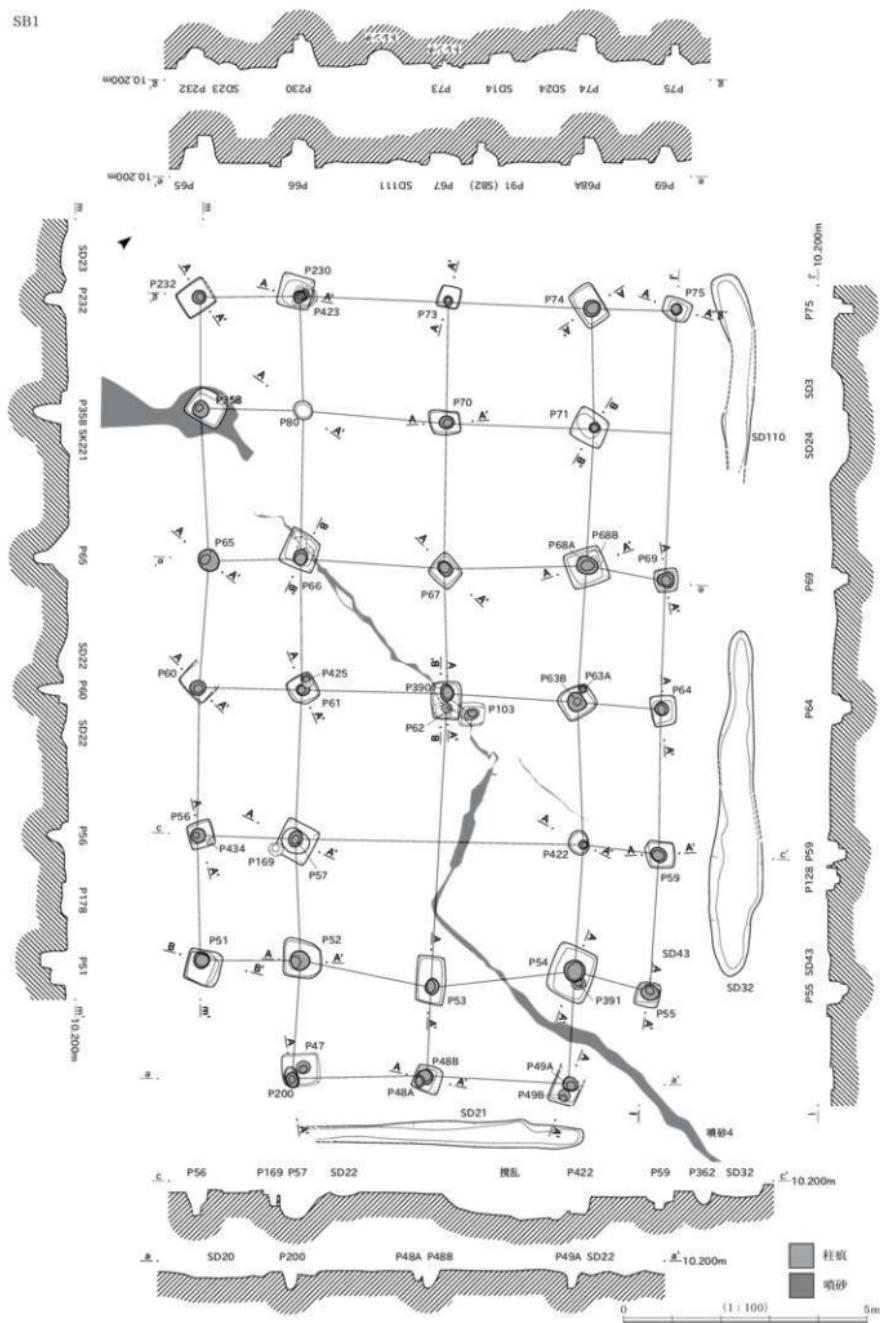


遺構分割図(11)

図版 13



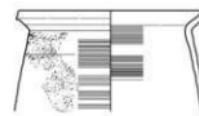
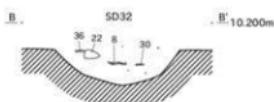




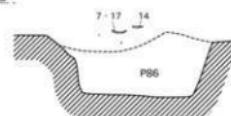
図版 16

2014 年度調査 遺構(2) SB1 (SD32)

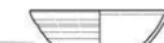
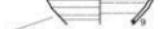
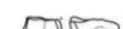
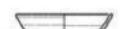
SD32



SD32

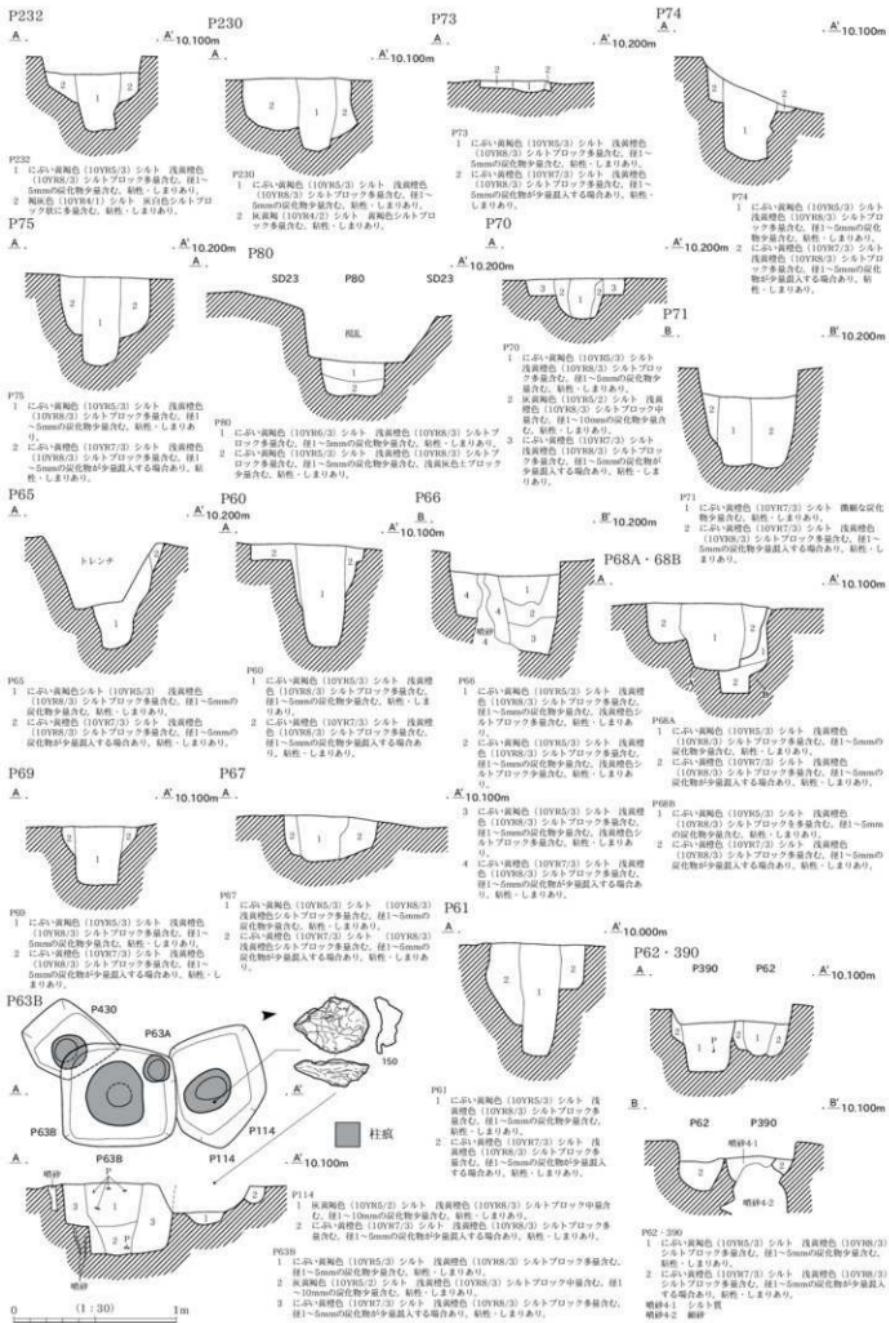


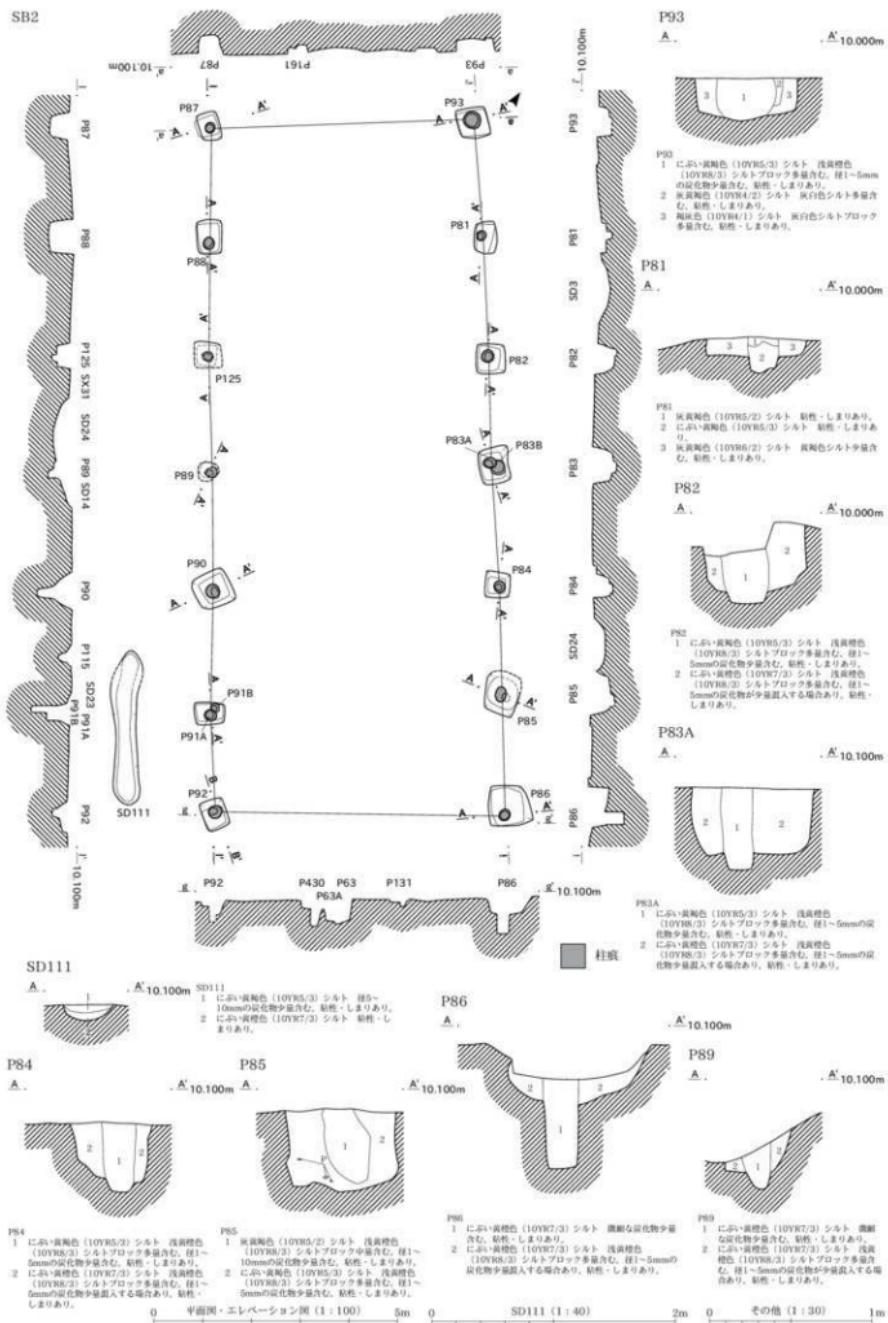
P362 SD32 .C. 10.200m



- SD32
- 1 に赤い黄褐色 (JOYR5/3) シルト・洗面槽色 (JOYR5/2) のシルト・洗面槽色 (1-10mm) が複数点存在し、軽微な上りあり。
 - 2 灰青褐色シルト (JOYR5/2) 洗面槽色 (100mm) が複数点存在し、軽微な上りあり。
 - 3 に赤い黄褐色 (JOYR7/3) シルト・洗面槽色 (100mm) が複数点存在し、軽微な上りあり。

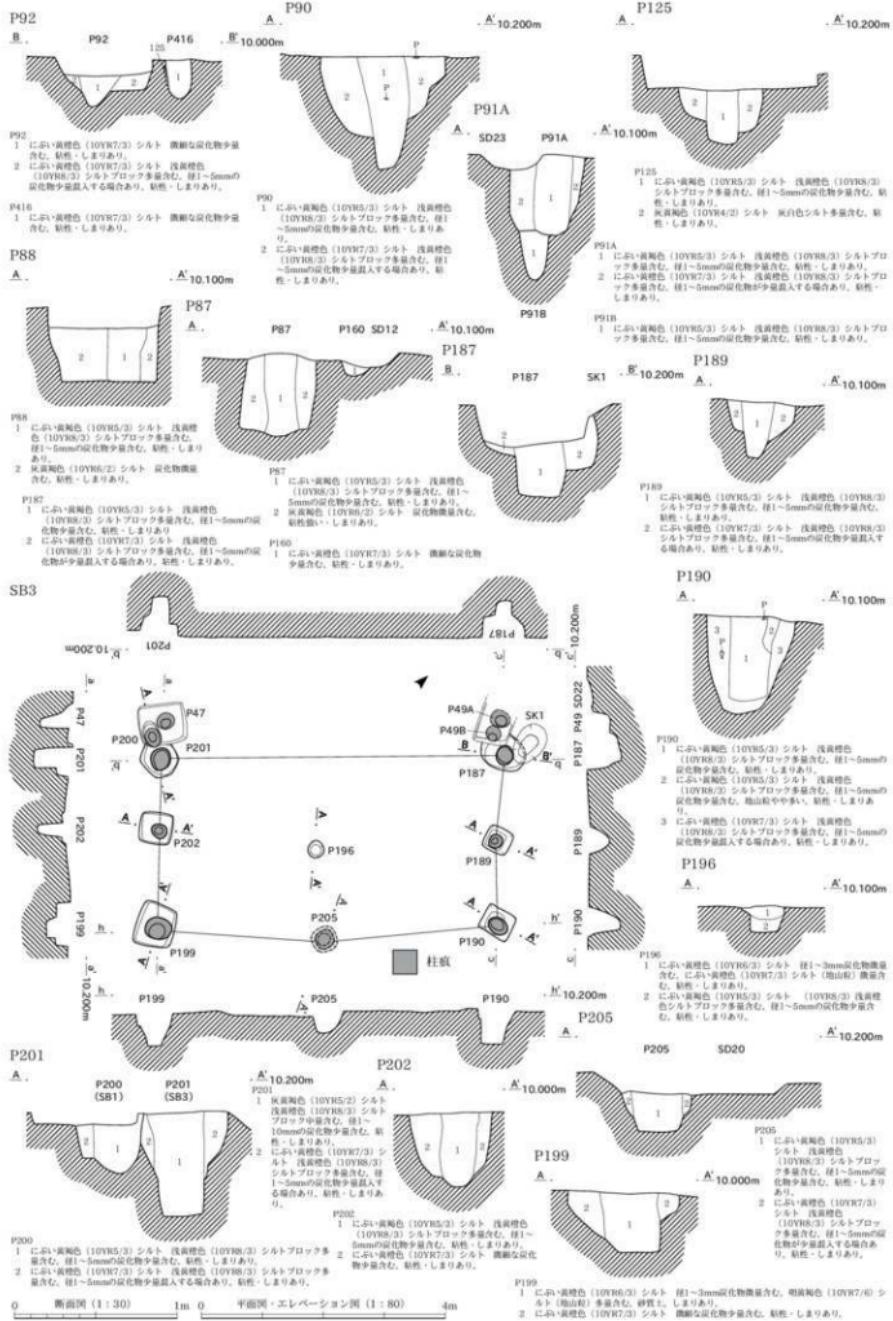
0 (1 : 30) 1m





圖版 20

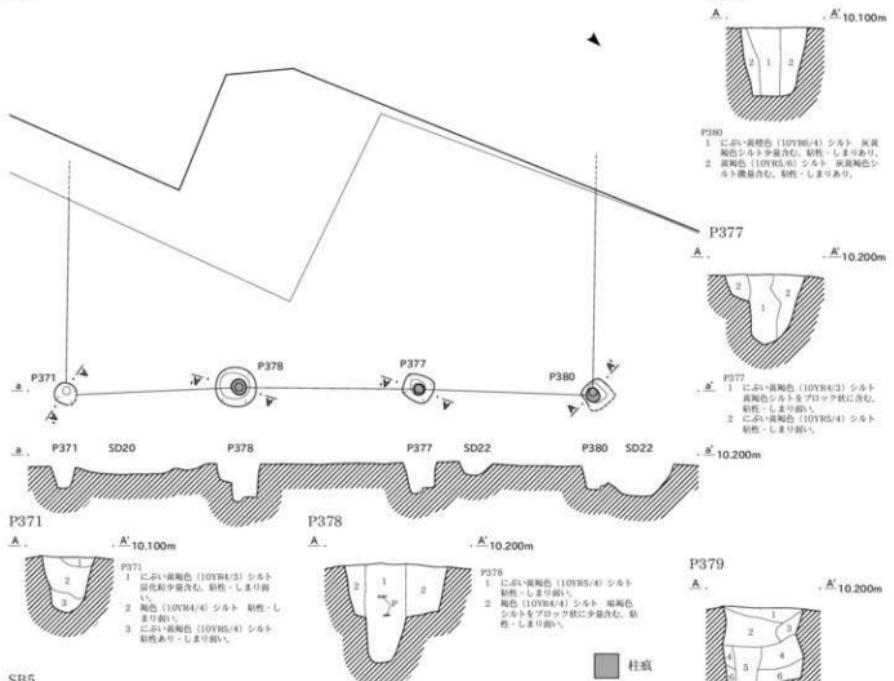
2014 年度調査 遺構(6) SB2(P87・88・90・91A・92・125・187・189),
SB3(P190・196・199・201・202・205), SB1(P200), P91B・160・416



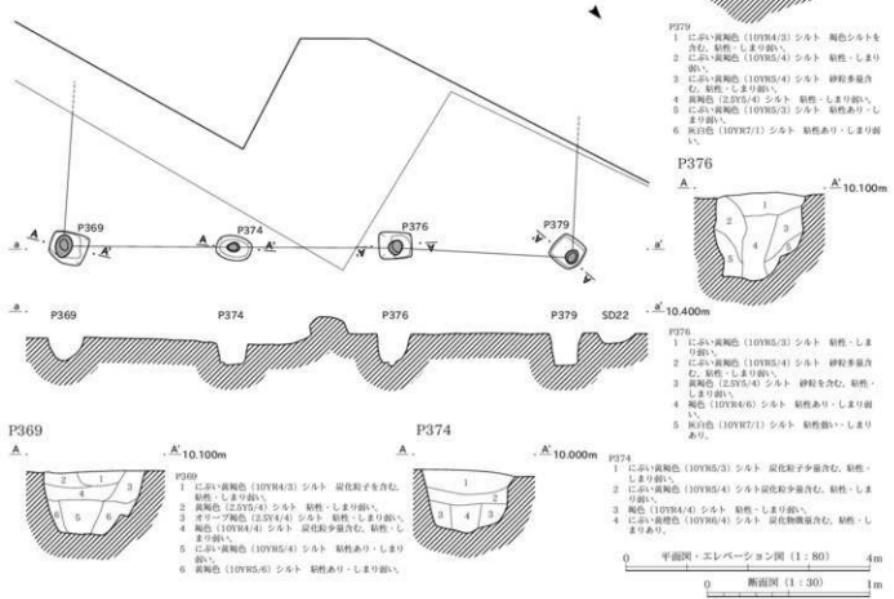
図版 21

2014 年度調査 道構(7) SB4(P371・377・378・380), SB5(P369・374・376・379)

SB4



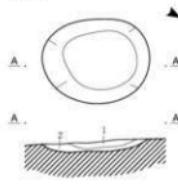
SB5



図版 22

2014年度調査 遺構(8) SK19・26・27・30・40・100・183・221・222、P358、SX11

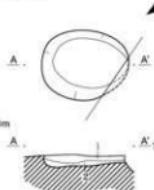
SK19



SK19

- 1 灰青褐色 (10YR4/2) シルト 黄褐色シルト少量含む。径1cm程度の炭化物多量含む。粘性・しまりあり。
- 2 黒褐色 (10Y3/2) シルト 径1cm程度の炭化物多量含む。黄褐色シルト少量含む。地上と鉛筆墨含む。粘性・しまりあり。

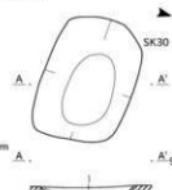
SK26



SK26

- 1 灰青褐色 (10YR4/2) シルト 径1~5mmの炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 2 灰青褐色 (10YR6/2) シルト 径5mm程度の炭化物多量含む。粘性・しまりあり。

SK30



SK30

- 1 灰青褐色 (10YR4/2) シルト 黄褐色シルト少量含む。炭化物多量含む。粘性・しまりあり。
- 2 黄褐色 (10YR6/2) シルト 灰青褐色シルト少量含む。炭化物多量含む。粘性・しまりあり。

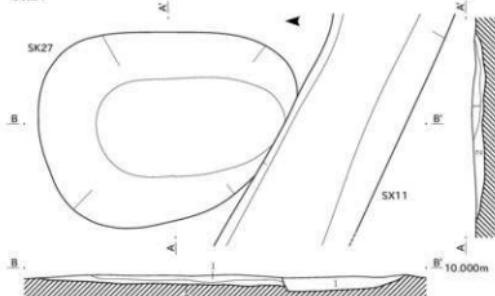
SK100



SK100

- 1 灰青褐色 (10YR6/3) シルト 炭酸塩化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 2 に赤い黄褐色 (10YR7/3) シルト 黄褐色シルト多量含む。粘性・しまりあり。

SK27



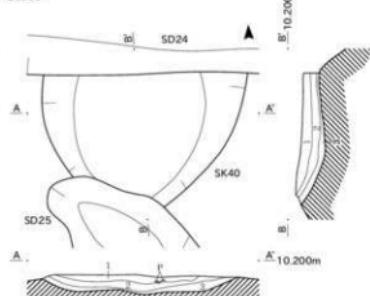
SK27

- 1 灰青褐色 (10YR6/2) シルト 径1~3cmの炭化物。径5mm程度の炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 2 黑色 (10Y4/6) シルト 径5mm程度の炭化物少量含む。粘性・しまりあり。

SK11

- 1 褐灰色 (10YH4/1) シルト 黄褐色シルト少量含む。粘性・しまりあり。

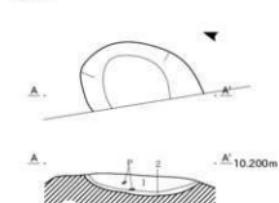
SK40



SK40

- 1 褐色 (10YR6/1) シルト 径1~2cmの炭化物。炭化物多量含む。粘性・しまりあり。
- 2 黑褐色 (10YR6/1) シルト 炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 3 黄褐色 (10YR5/6) シルト 黄褐色シルト多量含む。粘性・しまりあり。

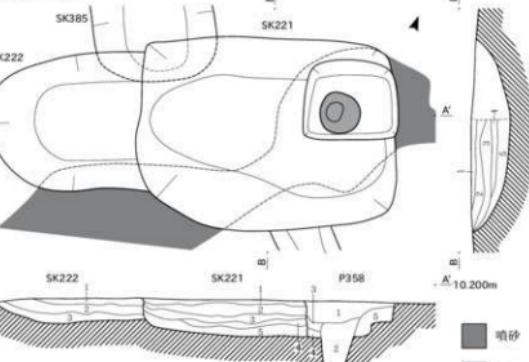
SK183



SK183

- 1 海色 (10YR4/4) シルト 地上層・炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 2 に赤い黄褐色 (10YR6/4) シルト 粘性・しまりあり。

SK221・222



SK221

- 1 灰青褐色 (10YR4/2) シルト 炭化物多量含む。黄褐色シルト多量含む。粘性・しまりあり。
- 2 黑褐色 (10YR4/1) シルト 黄褐色シルト多量含む。粘性・しまりあり。
- 3 黄褐色 (10YR5/1) シルト 黄褐色シルト多量含む。炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 4 黑褐色 (10YR6/2) シルト 炭化物・炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 5 に赤い黄褐色 (10YR6/3) シルト 黄褐色シルト少量含む。粘性・しまりあり。

P358

- 1 黄褐色 (10YH4/2) シルト 黄褐色シルト多量含む。炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 2 黑褐色 (10YR4/4) シルト 炭化物少量含む。黄褐色シルト少量含む。粘性・しまりあり。
- 3 黄褐色 (10YR4/1) シルト 黄褐色シルト多量含む。粘性・しまりあり。
- 4 黑褐色 (10YR6/1) シルト 黄褐色シルト多量含む。粘性・しまりあり。
- 5 黄褐色 (10YR5/6) シルト 黄褐色シルト多量含む。粘性・しまりあり。

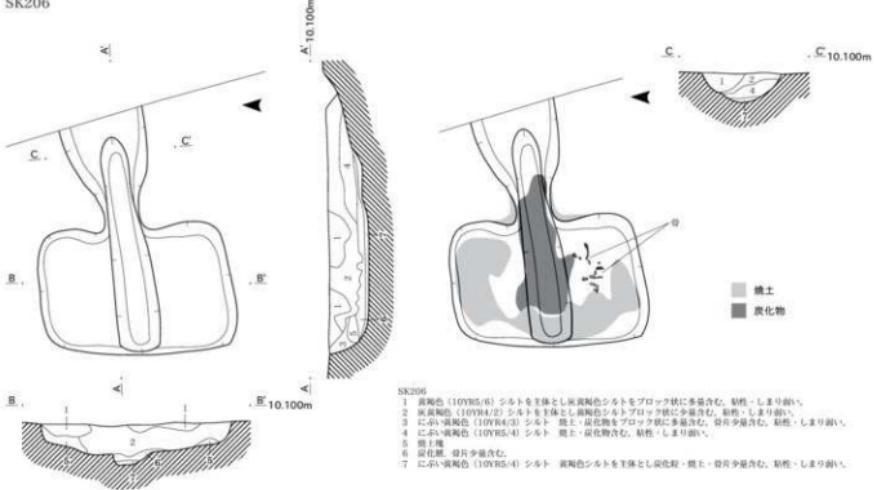
SK222

- 1 黄褐色 (10YH4/2) 土 炭化物多量含む。粘性・しまりあり。
- 2 に赤い黄褐色 (10YR6/3) 土 炭化物少量含む。地山部分少量含む。地山部分少量含む。粘性・しまりあり。
- 3 浅黄色 (2.5Y7/3) 土 基岩を土盤として褐色シルトブロック少量含む。炭化物多量含む。粘性・しまりあり。

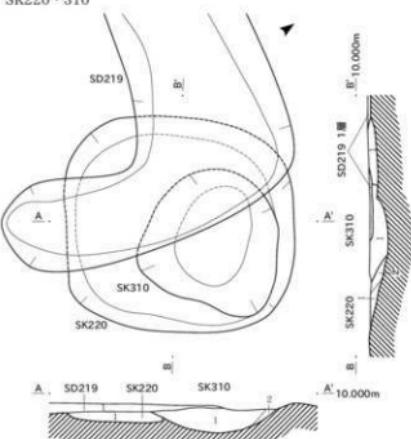
0 (1 : 40) 2m

2014 年度調査 道構(9) SK206・210・220・223・310, SD209・219

SK206



SK220・310

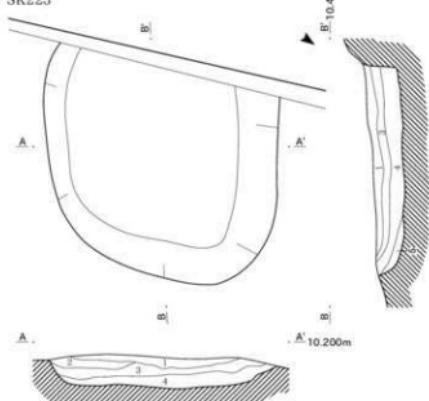


SK220
1 に少く黄褐色 (10YR7/2) シルト 炭化物少量含む。塊山ブロック多量含む。粘性・しまりあり。

SK310
1 に少く黄褐色 (10YR6/2) シルト 炭化物少量含む。塊山ブロック多量含む。粘性・しまりあり。
2 に少く黄褐色 (10YR7/2) シルト 炭化物少量含む。塊山ブロック多量含む。粘性・しまりあり。

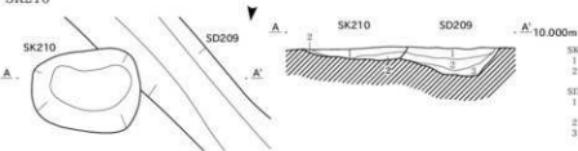
SD219
1 黄褐色 (10YR6/1) シルト 黄褐色シルトブロック多量含む。粘性・しまりあり。

SK223

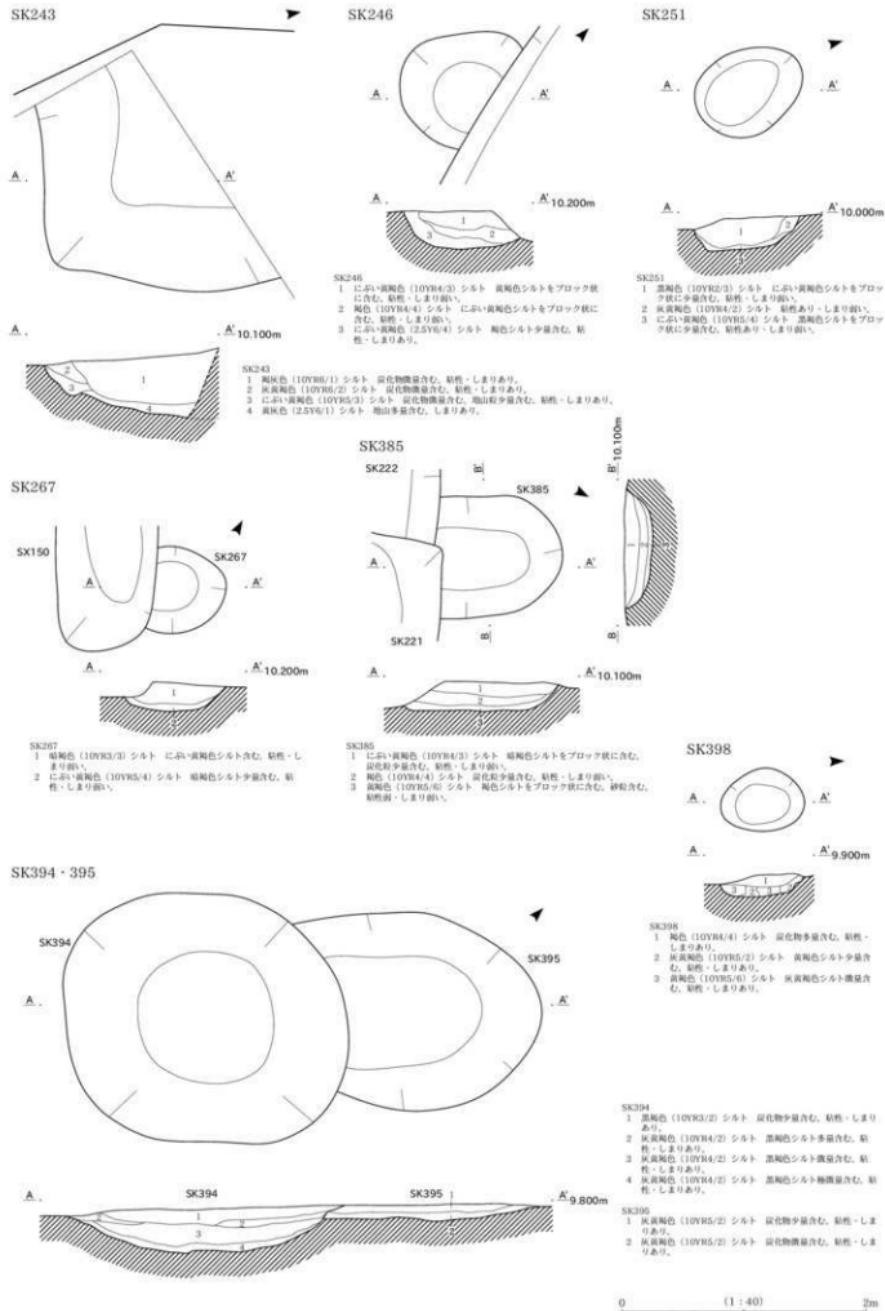


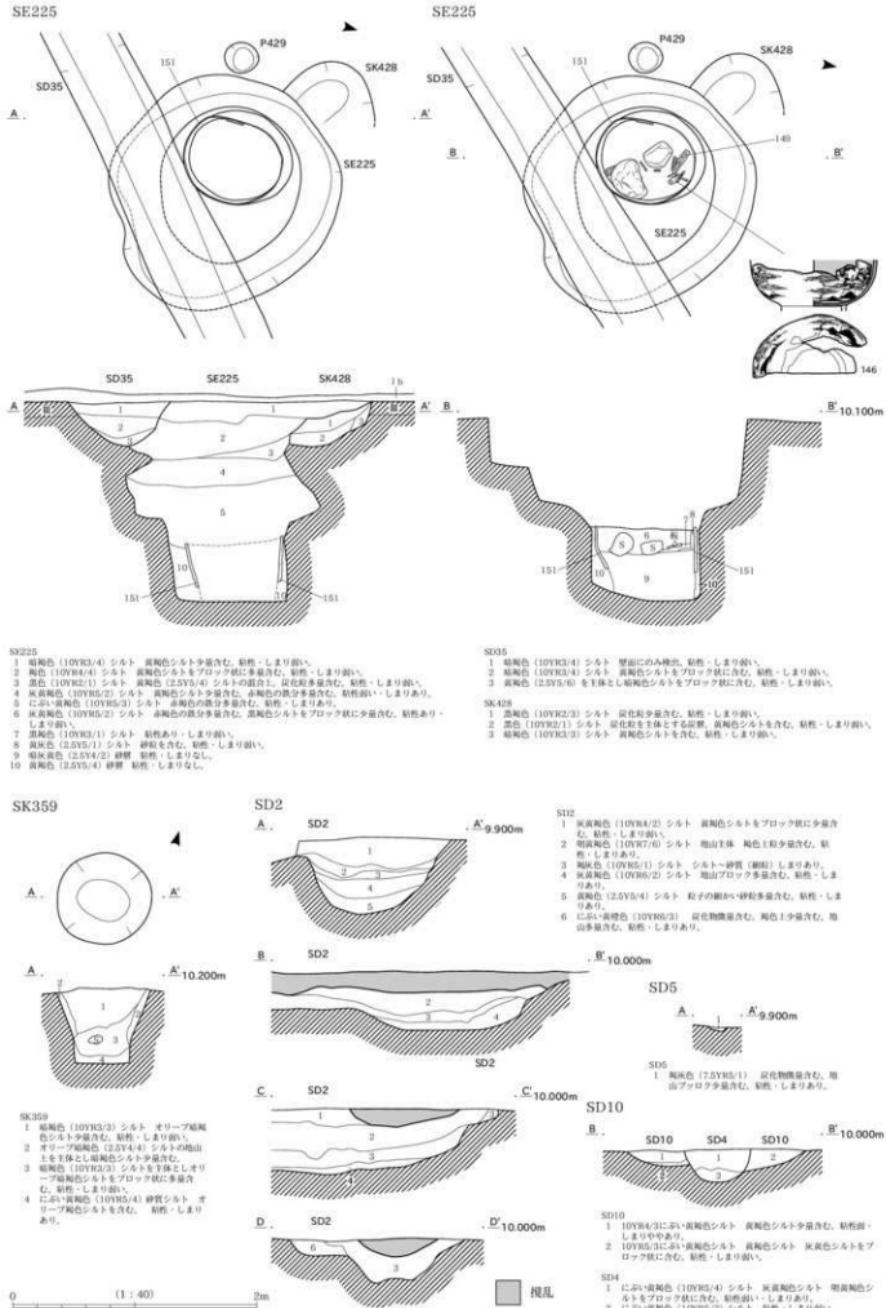
SK223
1 黄褐色 (10YR4/2) シルト 炭化物少量含む。黄褐色シルト微量含む。粘性・しまりあり。
2 黄褐色 (10YR5/2) シルト 炭化物少量含む。ブロック多量含む。炭化物微量含む。粘性・しまりあり。
3 に少く黄褐色 (10YR5/3) シルト 黄褐色シルトブロック多量含む。炭化物微量含む。粘性・しまりあり。
4 に少く黄褐色 (10YR5/4) シルト 黄褐色シルトブロック少量含む。粘性・しまりあり。5 黄褐色 (10YR6/4) シルト 黄褐色シルトブロック多量含む。粘性・しまりあり。

SK210



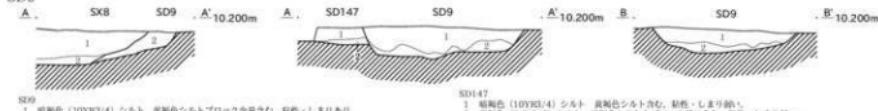
SK210
1 黄褐色 (10YR6/1) シルト 炭化物少量含む。黄褐色シルト微量含む。粘性・しまりあり。
2 黄褐色 (10YR5/1) シルト 炭化物少量含む。黄褐色シルト微量含む。粘性・しまりあり。
3 黄褐色 (10YR4/1) シルト 炭化物少量含む。黄褐色シルト微量含む。粘性・しまりあり。





図版 26

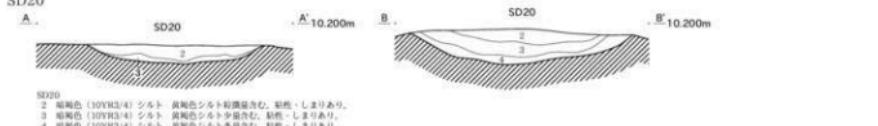
SD9



SD13



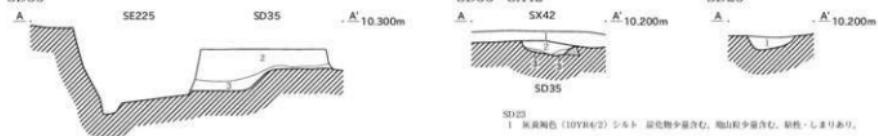
SD20



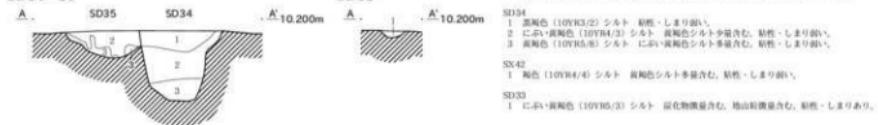
SD22



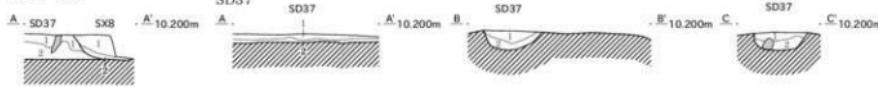
SD35



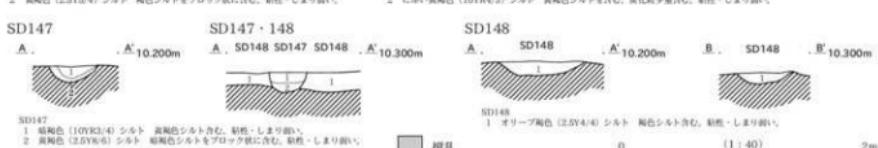
SD34・35



SD37・SX8

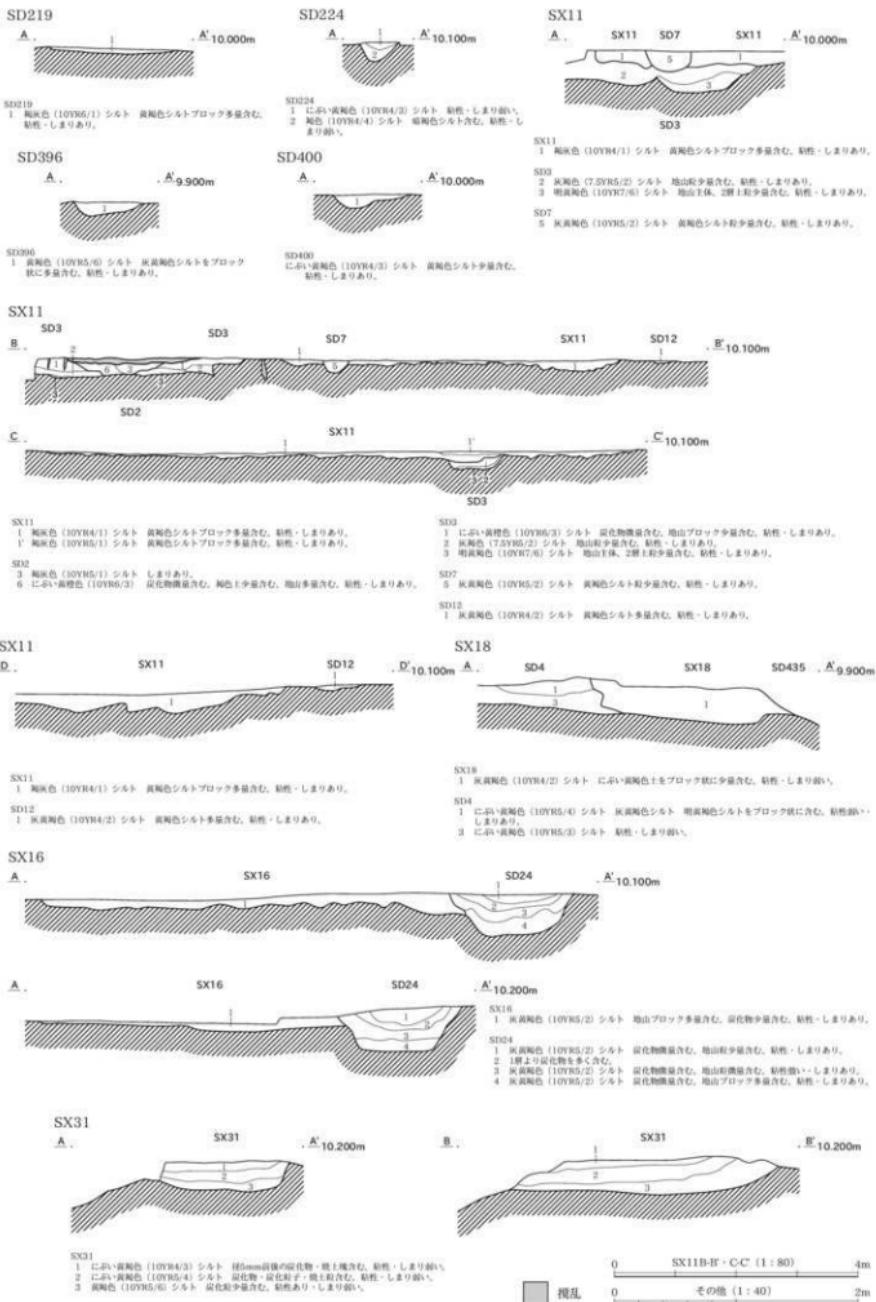


SD147

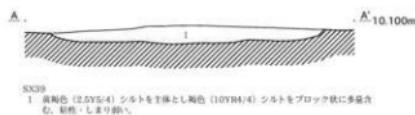


複疊

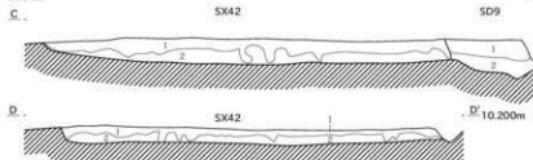
0 (1:40) 2m



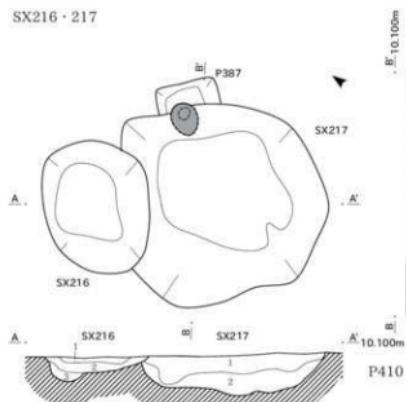
SX39



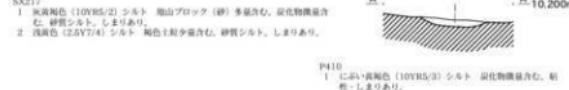
SX42



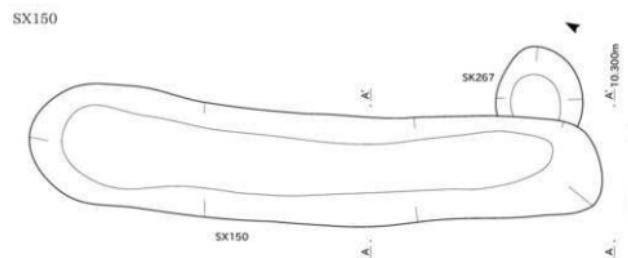
SX216・217



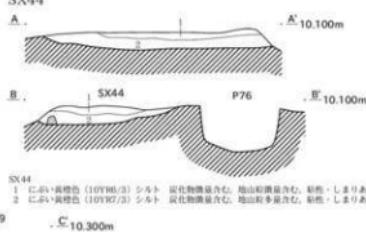
SX217



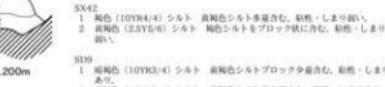
SX150



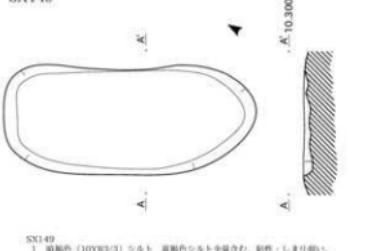
SX44



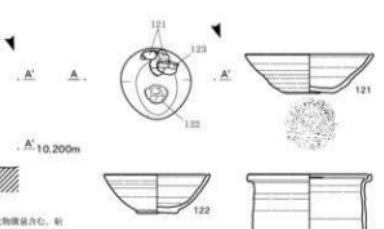
SD9



SX149



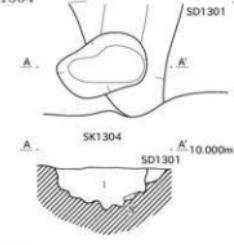
柱痕



擾乱

0 (1:40) 2m

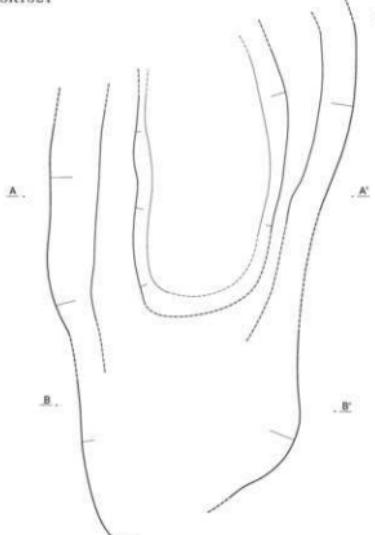
SK1304



SK1304

- 1 黒灰色 (10YR4/1) シルトと褐色 (10YR5/1) シルトと浅黄色 (2.5YR3/3) シルトのブロックが充填。粘性あり。しまり無し。往10mm以下の炭化物を含む。

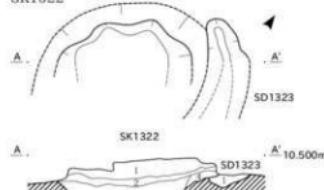
SK1321



SK1321

- 1 黒灰色 (10YR4/2) シルト 粘性あり。しまり無い。往5mm以下の炭化物を含む。
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト 粘性あり。しまり無い。往5mm以下の炭化物を含む。
- 3 黑灰色 (10YR4/2) シルトと粘性 (2.5YR6/1) シルトのブロックが充填。粘性あり。しまり無し。褐色 (7.5YR5/1) シルトの摂合が多い。往3mm以下の炭化物を含む。
- 4 黑灰色 (10YR5/1) シルトと浅黄色 (3.5YR3/3) シルトのブロックが充填。粘性あり。しまり無し。褐色 (10YR8/1) シルトのブロックが充填。粘性や無し、しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。
- 5 褐色 (3H7/1) シルト 粘性あり。しまりなし。浅黄色 (10YR8/4) シルトのブロックが充填。粘性・しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。

SK1322



SK1322

- 1 黒灰色 (3H2/1) シルト 粘性あり。しまりあり。浅黄色 (10YR8/4) シルトのブロックが充填。
- 2 浅黄色 (2.5YR3/3) シルトとにらめの薄い (2.5YR6/1) シルトのブロックが充填。粘性あり。しまり無し。
- 3 黑灰色 (10YR4/2) シルトと浅黄色 (2.5YR4/4) シルトのブロックが充填。粘性あり。しまり無し。褐色 (7.5YR5/1) シルトの摂合が多い。往3mm以下の炭化物を含む。
- 4 黑灰色 (10YR5/1) シルトと浅黄色 (3.5YR3/3) シルトと灰白色 (10YR8/1) シルトのブロックが充填。粘性や無し、しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。

SD1322

- 1 黑灰色 (10YR7/1) シルトと浅黄色 (10YR8/3) シルトを灰白色 (10YR8/1) シルトのブロックが充填。粘性・しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。

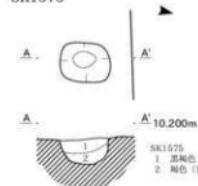
SK1336



SK1336

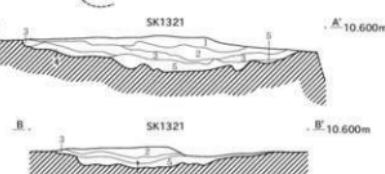
- 1 黑灰色 (7.5YR6/1) シルトと褐灰色シルトのブロックが充填。粘性・しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。

SK1575



SK1575

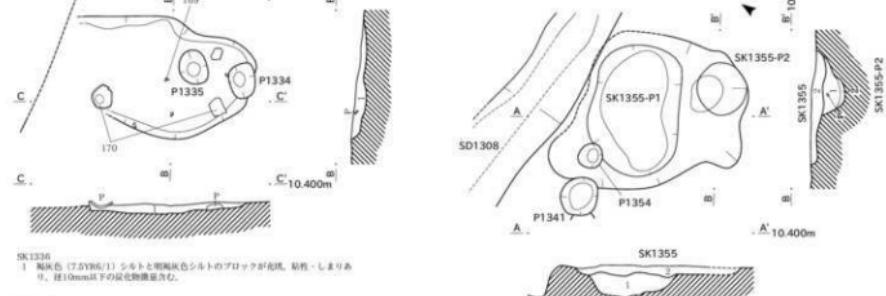
- 1 黑褐色 (10YR2/1) 硫質シルトに灰褐色シルトブロック含む。
- 2 黑色 (10YR8/2) 硫質シルト ブロック多量。褐褐色シルトを含む。



SK1321

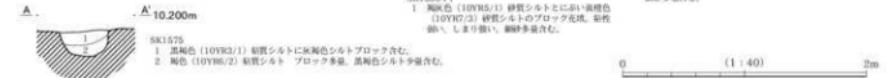
- 1 黒灰色 (10YR4/2) シルト 粘性あり。しまり無い。往5mm以下の炭化物を含む。
- 2 黑色 (10YR2/1) シルト 粘性あり。しまり無い。往5mm以下の炭化物を含む。
- 3 黑灰色 (10YR4/2) シルトと粘性 (2.5YR6/1) シルトのブロックが充填。粘性あり。しまり無し。褐色 (7.5YR5/1) シルトの摂合が多い。往3mm以下の炭化物を含む。
- 4 黑灰色 (10YR5/1) シルトと浅黄色 (3.5YR3/3) シルトのブロックが充填。粘性あり。しまり無し。褐色 (10YR8/1) シルトのブロックが充填。粘性・しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。
- 5 褐色 (3H7/1) シルト 粘性あり。しまりなし。浅黄色 (10YR8/4) シルトのブロックが充填。粘性・しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。

SK1355

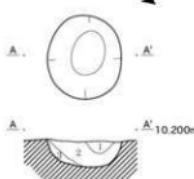


SK1355

- 1 黑灰色 (10YR6/1) シルトとにらめの薄い (2.5YR7/3) シルトのブロックが充填。褐灰色 (10YR5/1) シルトの摂合が高い。粘性・しまりあり。
- 2 黑色 (10YR2/1) シルトとにらめの薄い (2.5YR7/3) シルトのブロックが充填。褐灰色 (10YR5/1) シルトの摂合が高い。粘性・しまりあり。往5mm以下の炭化物を含む。
- 3 黑灰色 (10YR6/1) シルトとにらめの薄い (2.5YR7/3) シルトのブロックが充填。褐灰色 (10YR5/1) シルトの摂合が高い。粘性・しまりあり。往10mm以下の炭化物を含む。



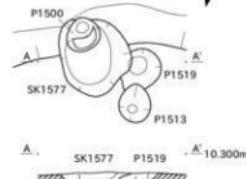
SK1576



SK1576

- 1 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 淡黄褐色シルト
トブロック微量含む。
- 2 黄褐色 (7.5YR3/4) シルト 淡黄褐色シルト
トブロック微量含む。
- 3 開褐色 (7.5YR6/2) シルト 淡黄褐色シルト
トブロック微量含む。

SK1577・P1519



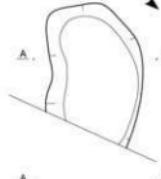
SK1577

- 1 黄褐色 (7.5YR3/4) 砂土 径2mmの淡黃褐色
土少量含む。
- 2 黑褐色 (7.5YR5/1) 砂土。

P1519

- 1 黑褐色 (7.5YR5/2) シルト質土 径2mmの
淡黃褐色土少量含む。
- 2 黑褐色 (7.5YR6/2) シルト質土。

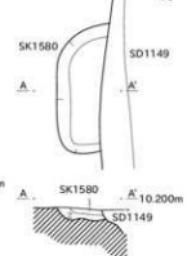
SK1578



SK1578

- 1 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質 程2mmの
灰褐色土少量含む。
- 2 淡褐色 (7.5YR6/2) シルト 径10mmの
灰褐色土少量含む。
- 3 黑褐色 (7.5YR5/1) 砂質。

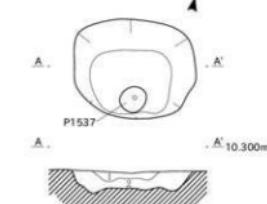
SK1580



SK1580

- 1 黑褐色 (7.5YR3/1) 砂質 程2mmの
淡黃褐色土少量含む。
- 2 黑褐色 (7.5YR5/1) 砂質 程2mmの
淡黃褐色土少量含む。

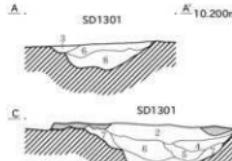
SK1579



SK1579

- 1 黑褐色 (7.5YR3/1) 土 径10mmの暗褐色土少量含む。
- 2 淡黃褐色 (7.5YR8/3) シルト 径5mmの暗褐色土少量含む。

SD1301



SD1301

- 1 黑褐色 (7.5YR4/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 2 淡褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 3 黑褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 4 黑褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。3
層に比べてやや色濃度高い。
- 5 淡褐色 (7.5YR4/2) 砂質シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 6 黑褐色 (10YR5/1) シルト 粘性弱く、しまりあり。径5mm
以下の化粧陶器微量含む。



SD1301

- 1 黑褐色 (7.5YR4/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 2 黑褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 3 黑褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 4 黑褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。3
層に比べてやや色濃度高い。
- 5 淡褐色 (7.5YR4/2) 砂質シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 6 黑褐色 (10YR5/1) シルト 粘性弱く、しまりあり。径5mm
以下の化粧陶器微量含む。
- 7 黑褐色 (7.5YR4/1) シルト 粘性弱く、しまりあり。
- 8 黑褐色 (10YR5/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまりあり。現
状に黒褐色 (7.5YR3/1) シルトトブロック微量含む。



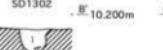
SD1301

- 1 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 2 黑褐色 (7.5YR3/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 3 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 4 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 5 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 6 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 7 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。
- 8 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。

SD1302



SD1303



SD1302

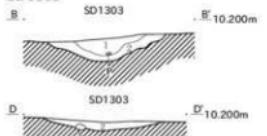
- 1 黑褐色 (7.5YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い、粒状少量含む。



SD1302

- 2 黑褐色 (7.5YR3/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり強い、淡黃褐色
(10YR8/4) シルトトブロック微量、細砂多量含む。

SD1303



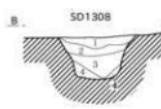
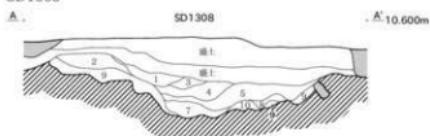
SD1303

- 1 黑褐色 (7.5YR5/1) シルト質土 粘性弱く、しまり弱く、粒状物微量含む。

- 2 黑褐色 (7.5YR5/1) 砂質シルト 色灰褐色、(10YR8/2) 砂質シルトが光沢、粘性弱く、しまりなし。D-D'部は細砂少量含む。

複疊

SD1308



SD1308

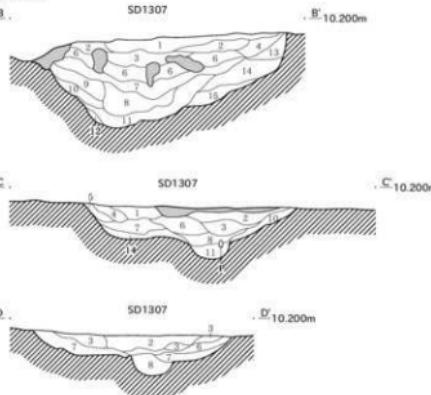
- 1 黑褐色 (10YR5/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 2 黑褐色 (10YR5/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 3 黑褐色 (10YR5/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 4 黑褐色 (10YR5/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 5 黑褐色 (10YR5/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 6 黑褐色 (10YR5/1) 砂質シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 7 黑褐色 (10YR5/1) シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 8 黑褐色 (7.5YR4/1) シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 9 黑褐色 (7.5YR4/1) シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色
- 10 黑褐色 (7.5YR4/1) シルト 粘性弱く、しまり弱く、C-C'は薄褐色

0 (1:40) 2m

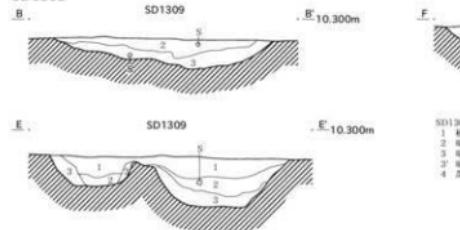
図版 32

2015年度調査 遺構(3) SD1307・1309・1310・1323・1325・1358・1378・1379

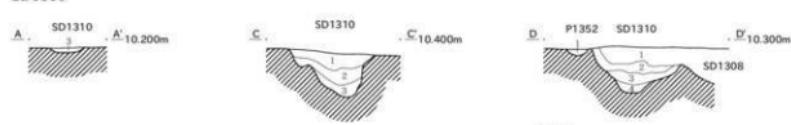
SD1307



SD1309



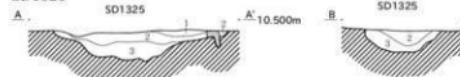
SD1310



SD1323



SD1325



SD1358



- SD1307
- 1 黄褐色 (10YR6/3) シルト・粘性あり、しまり強い、灰黃褐色 (10YR6/2) シルトブロック少量、
径5mm以下の炭化物少量含む。
 - 2 黄褐色 (7SYR6/3) シルト・粘性あり、しまり強い。
 - 3 黄褐色 (7SYR6/1) シルトと灰褐色 (7SYR6/1) シルト・多量、径10mmの炭化物含む、間に灰褐色 (7SYR4/1) シルトと灰褐色 (7SYR6/1) シルト少量含む、径1mmの炭化物含む。
 - 4 にかい褐色 (10YH6/2) シルト・粘性あり、しまり強い、にかい褐色 (10YH6/2) シルトブロック多量含む、間に灰褐色 (7SYR6/1) シルト・多量含む。
 - 5 灰褐色 (7DTB5/1) シルトと灰白色 (10YR6/2) シルトのブロックが充満、粘性・しまりあり。
 - 6 灰褐色 (7SYR4/1) シルト・粘性あり、しまり強い、間に濃褐色 (SYR2/1) シルト少量含む。
 - 7 灰褐色 (7SYR4/2) 砂質・粘性あり、しまり強い。上面の色調は褐色 (SYR5/1) で徐々に色調が暗
くなり、下部は黒褐色 (SYR5/1) で見える。
 - 8 灰褐色 (7SYR4/1) シルト・粘性あり、しまり強い。間に濃褐色 (SYR2/1) シルト少量含む。
 - 9 灰褐色 (7SYR4/1) シルト・粘性あり、しまり強い。
 - 10 灰褐色 (SYR2/1) シルト・粘性あり、しまり強い。にかい褐色 (10YR7/2) シルトブロック強
量、径5mm以下の炭化物微量含む。
 - 11 灰褐色 (10YH4/2) シルト・粘性あり、しまり強い。にかい褐色 (10YR7/2) シルトブロック強
量、径5mm以下の炭化物微量含む。
 - 12 灰褐色 (7SYR5/1) シルトと石けん (10YR8/2) シルトのブロックが充満、粘性・しまりあり、
砂質微量含む。
 - 13 灰褐色 (7SYR5/1) シルト・粘性・しまり強い、灰白色 (10YR8/2) シルトブロック少量含
む、径1mm以下の炭化物微量含む。
 - 14 灰褐色 (10YH5/1) シルトと浅青褐色 (7SYR8/3) シルトと灰褐色 (7SYR4/1) シルトのブロ
ックが充満、粘性・しまり強い。径1mm以下の炭化物微量含む。
 - 15 灰褐色 (10YH5/1) シルト・粘性・しまり強い、灰褐色 (7SYR4/1) シルトブロック微量、
灰白色 (10YR8/3) シルトブロック微量、細砂少量含む。



- SD1309
- 1 黄褐色 (7SYR6/3) ブロック土
 - 2 灰褐色 (10YR6/3) ブロック土
 - 3 始端灰土色・淡黄褐色 (7SYR8/3) 上プロック少量含む。
 - 4 始端灰褐色 (7SYR8/3) 上プロック中量含む。

- SD1310
- 1 黄褐色 (7SYR6/2) シルト・粘性あり、しまり強い、灰白色 (10YR8/2) シル
トブロック微量、径3mm以下の炭化物微量含む。
 - 2 黄褐色 (7SYR6/2) シルト・粘性あり、しまり強い、灰白色 (10YR8/2) シル
トブロック微量、径3mm以下の炭化物微量含む。
 - 3 黄褐色 (10YR2/2) シルト・粘性あり、しまりあり、灰白色 (10YR8/2) シル
トブロック微量含む。
 - 4 灰褐色 (7SYR7/1) シルト・粘性・しまり強い、灰白色 (10YR8/2) シルト少量含
む、径3mm以下の炭化物微量含む。

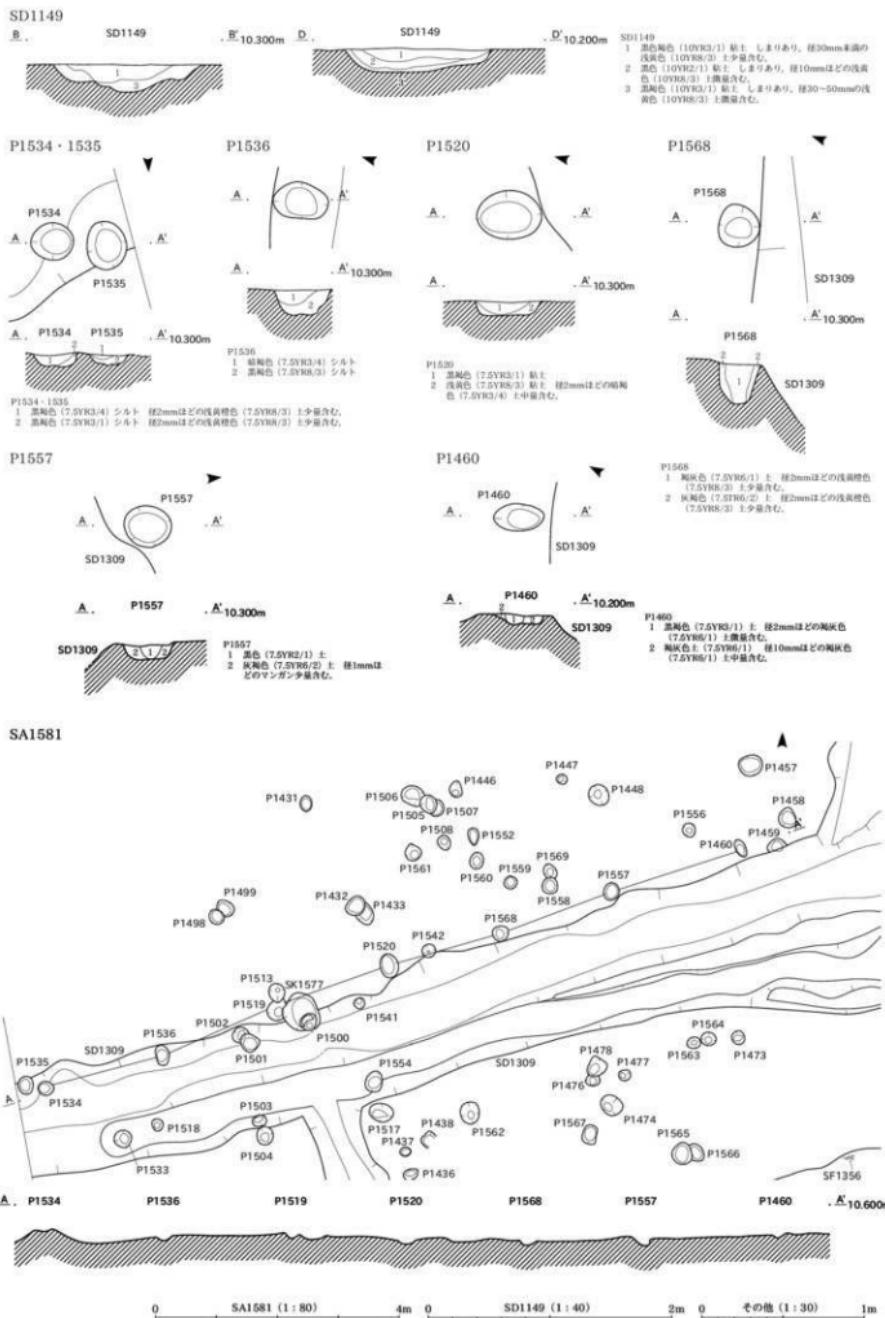
- SD1325
- 1 黄褐色 (10YR6/2) シルト・粘性あり、しまり強い、灰白色 (10YR8/2) シル
トブロック微量、径3mm以下の炭化物微量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR6/2) シルト・粘性あり、しまり強い、灰白色 (10YR8/2) シルトブロック充
満、粘性・しまり強い、細砂微量含む。
 - 3 黑褐色 (2SY7/1) シルト・粘性あり、しまり強い、灰褐色 (2SY7/2) シルトブ
ロック微量含む、径1mm以下の炭化物微量含む。

- SD1378
- 1 灰褐色 (7SYR6/4) シルト
- SD1379
- 1 黄褐色 (7SYR2/3) 粘土
 - 2 灰褐色 (2SYR3/3) シルト

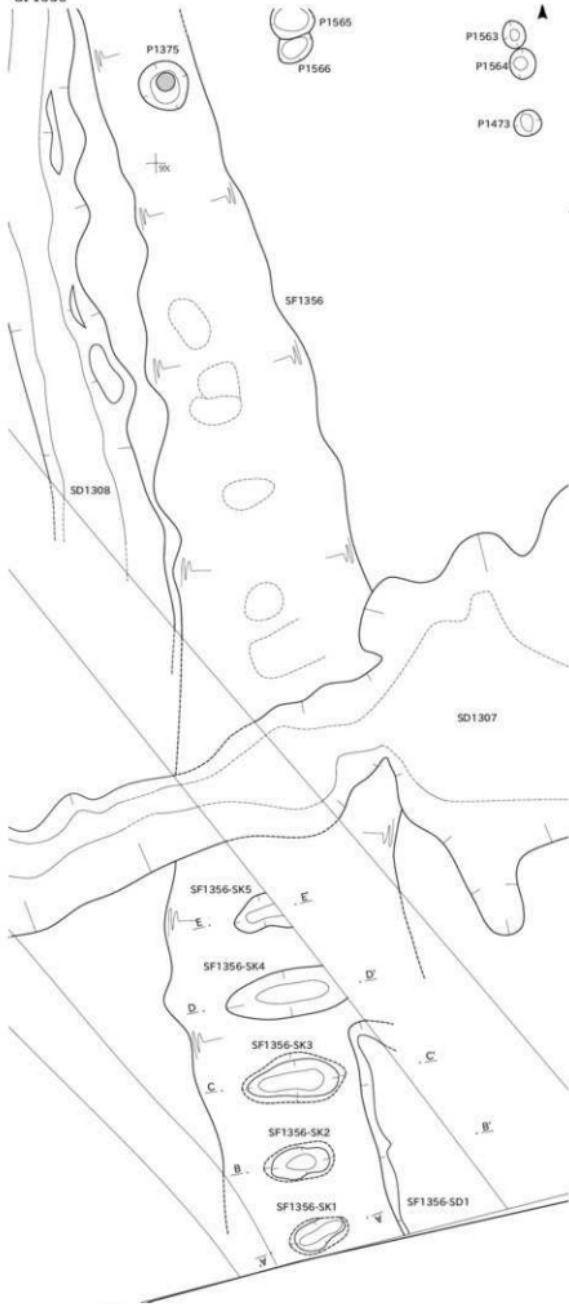


複疊

(1:40)



SF1356



A. SF1356-SK1, SF1356-SD1, 10.300m

SF1356-SK1
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性・しまりあり、剛軟色 (7.5YR5/1) 中等白色 (10YR6/1) のシルト ブロック層。1mm以下の小礫多量含む。マンガン粒や鉄錆、小礫多量含む。

B. SF1356-SK2, SF1356-SD1, 10.300m

SF1356-SK2
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性・しまりあり、剛軟色 (7.5YR5/1) シルトブロック層。灰白色 (10YR6/2) シルトブロック層。マンガントク付、鉄錆少量含む。
SF1356-SD1
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘性弱い・しまり無い、径1mmほど
の小礫含む。
2 黃褐色 (7.5YR3/3) シルト 粘性弱い・しまりあり、径1mm以下
の小礫微量含む。
3 黑褐色 (7.5YR3/1) 砂質シルトと剛軟色 (7.5YR4/1) 砂質シルト
とに分かれる。剛軟色 (10YR7/4) 砂質シルトのプロックが充填、粘性あ
り、しまり弱い。

C. SF1356-SK3, SF1356-SD1, 10.300m

SF1356-SK3
1 黒褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性・しまりあり、剛軟色 (7.5YR5/1) シルトブロック層。灰白色 (10YR6/2) シル
トブロック層。マンガントク付、鉄錆少量含む。

SF1356-SD1
1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 粘性弱い・しまり無い、径1mm
ほどの小礫多量含む。

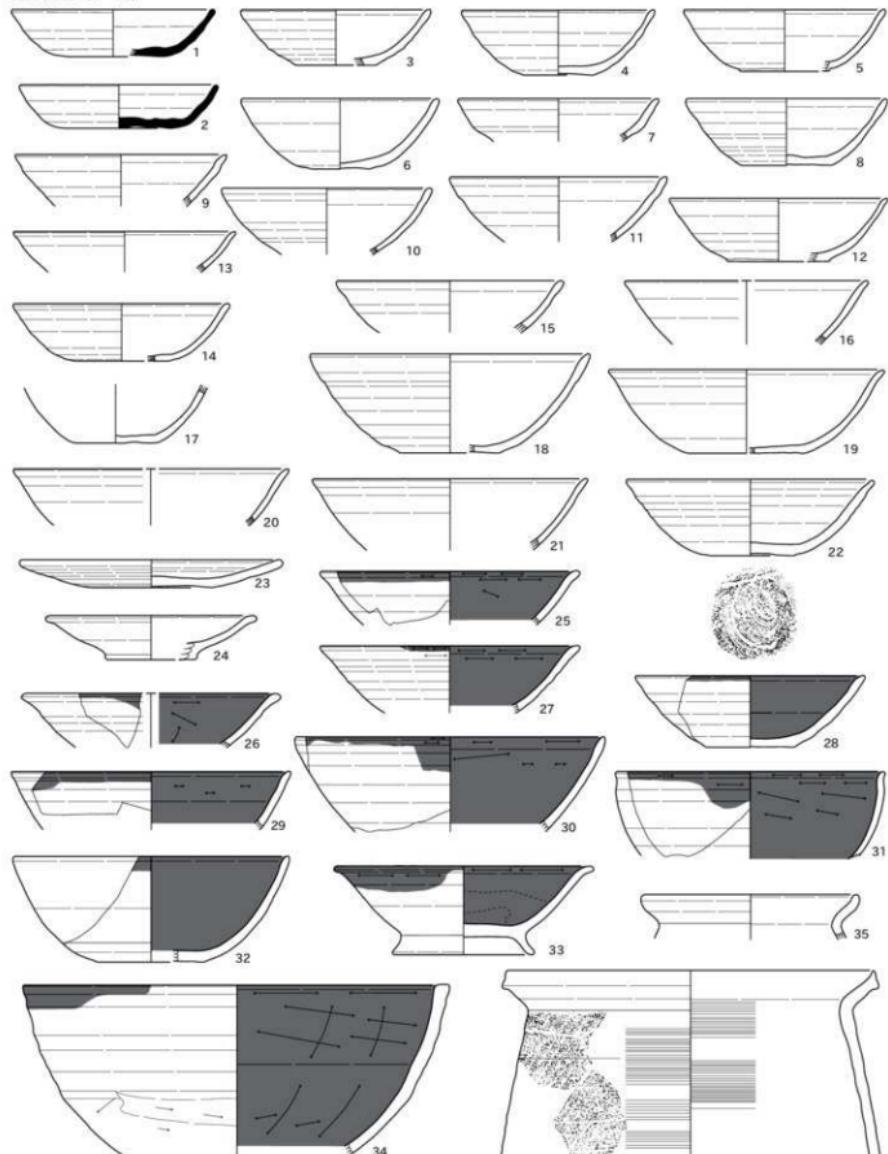
D. SF1356-SK4, 10.300m

SF1356-SK4
1 黄褐色 (7.5YR5/2) シルト 粘性弱い・しまりあり、灰白
色 (10YR6/2) シルトブロック層。マンガントク付、鉄
錆少量、小礫少量含む。

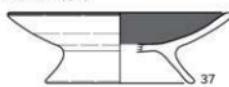
E. SF1356-SK5, 10.300m

SF1356-SK5
1 黑褐色 (7.5YR4/2) シルト 粘性弱い・しまり無い、
2 黄褐色 (7.5YR5/2) シルト 粘性弱い・しまりあり、白色
(10YR6/2) シルトブロック層。鉄錆少
量、(7.5YR6/1) シルトブロック層。径3mm以下の灰
化物微量、マンガントク付、小礫少量含む。

SB1-SD32 (1~36)



SB1-SD21 (37)



SB1-SD110 (38・39)



■ 黒色処理 0 15cm (1:3)

38 39

SB1-P68A (40・41)



SB1-P422 (42)



SB1-P49A (44)



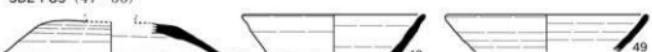
SB1-P57 (43)



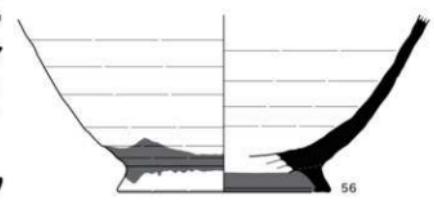
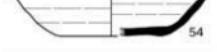
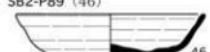
SB2-SD111 (45)



SB2-P85 (47~56)

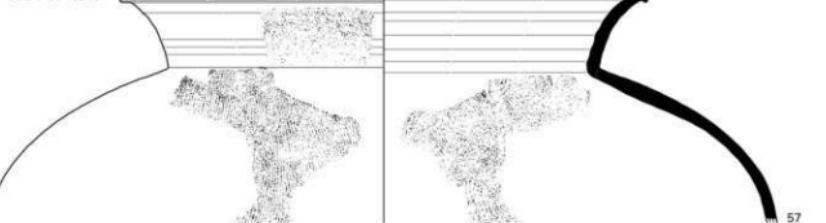


SB2-P89 (46)



■ 黒色付着

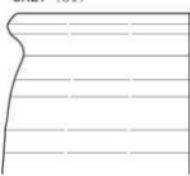
SB2-P87 (57)



SB3-P187 (58・59)



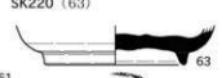
SK27 (61)



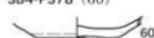
SK40 (62)



SK220 (63)



SB4-P378 (60)

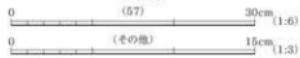


SK183 (64・65)



■ 黒色処理

■ 炭化物



(57)

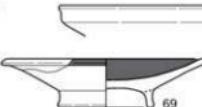
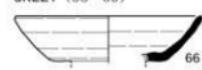
30cm (1:6)

0

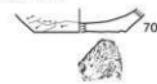
15cm (1:3)

(その他)

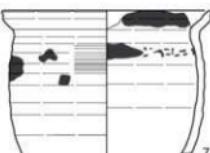
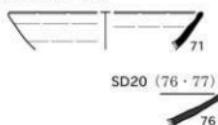
SK221 (66~69)



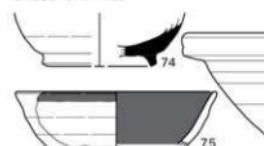
SK222 (70)



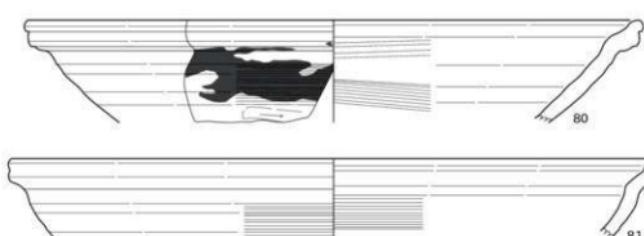
SK310 (71~73)



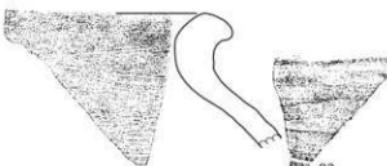
SK385 (74・75)



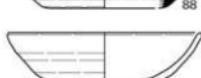
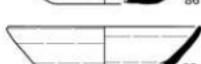
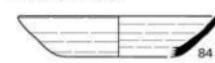
SD23 (78~81)



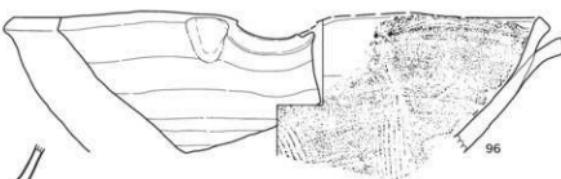
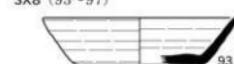
SD24 (82・83)



SD25 (84~92)



SX8 (93~97)

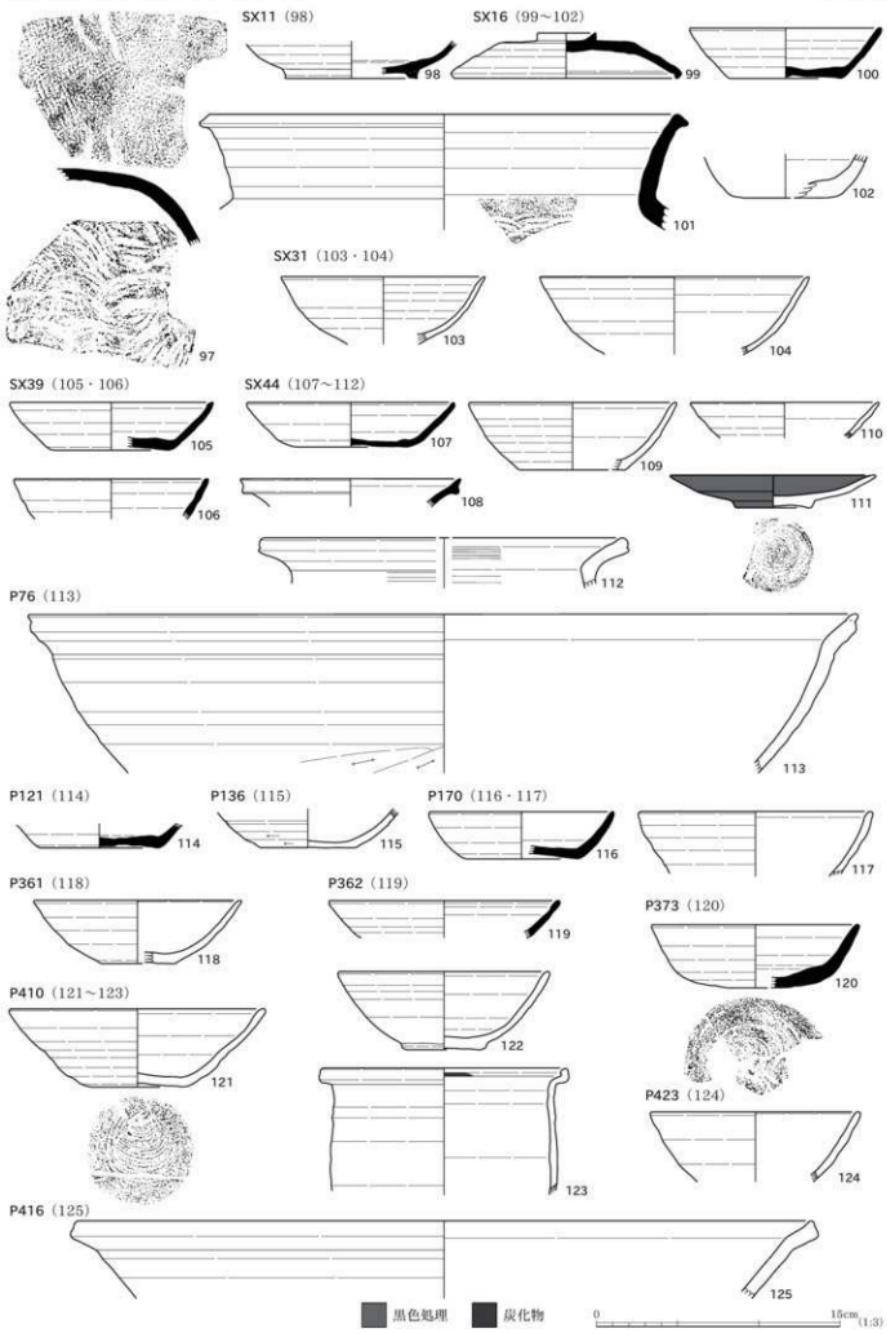


■ 黒色処理

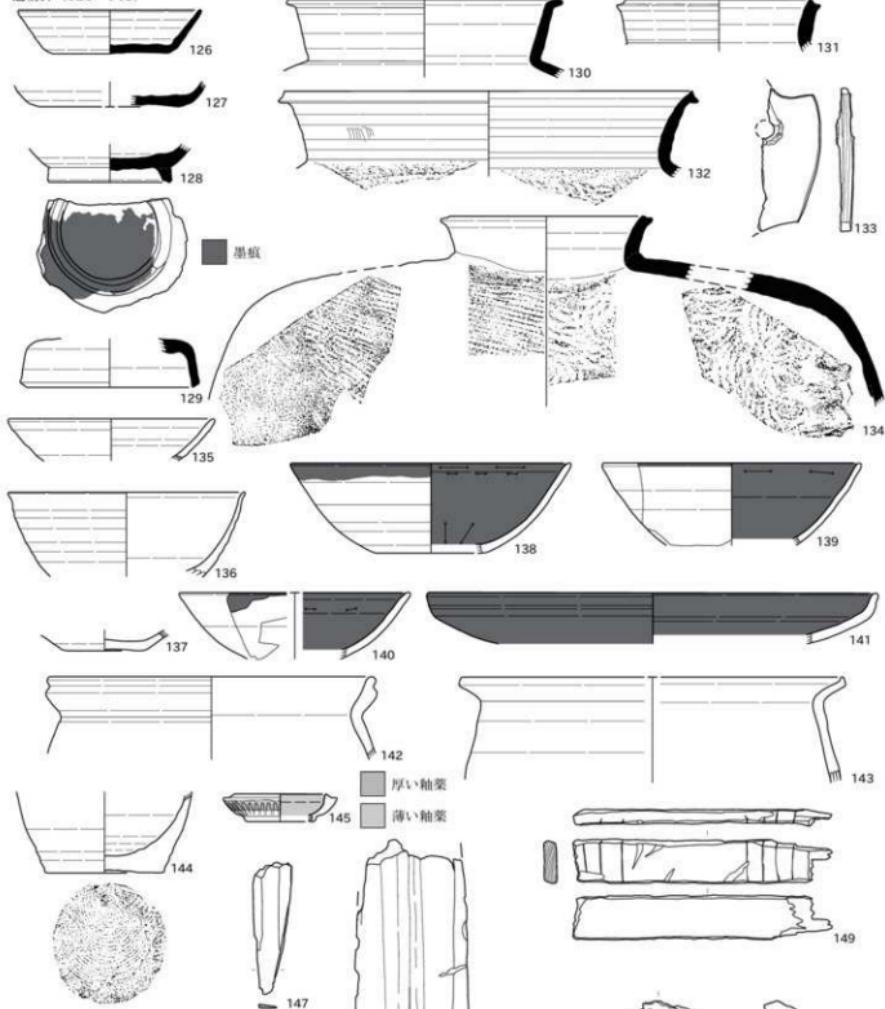
■ 炭化物

0

15cm (1:3)

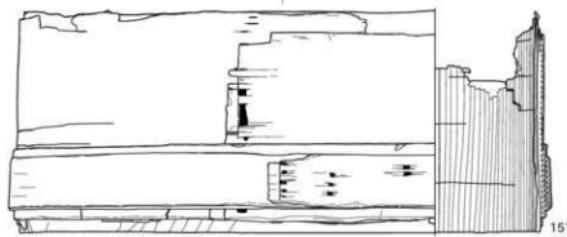
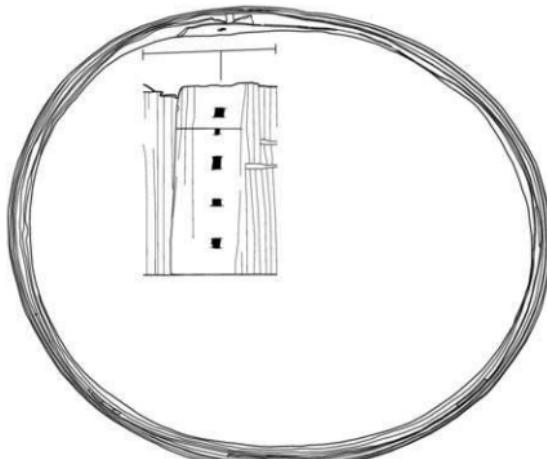


遺構外 (126~145)

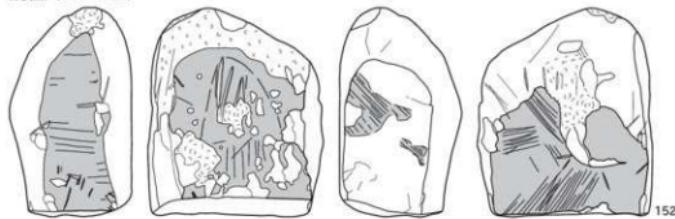


木製品ほか (146~151)

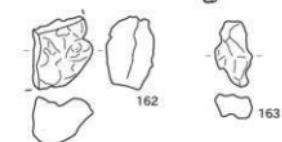
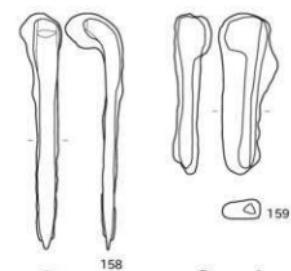




石製品(152~157)



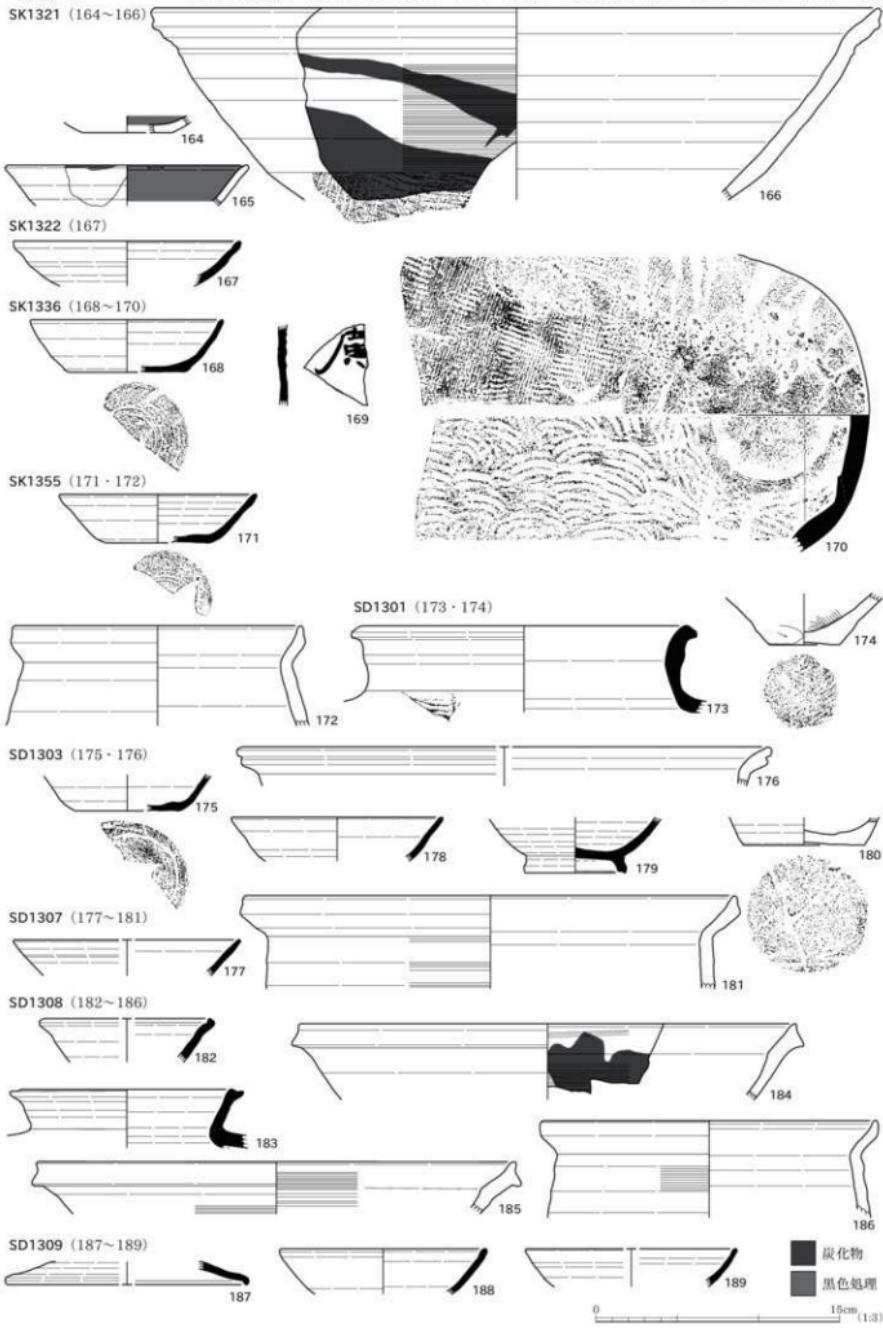
鉄製品ほか(158~163)

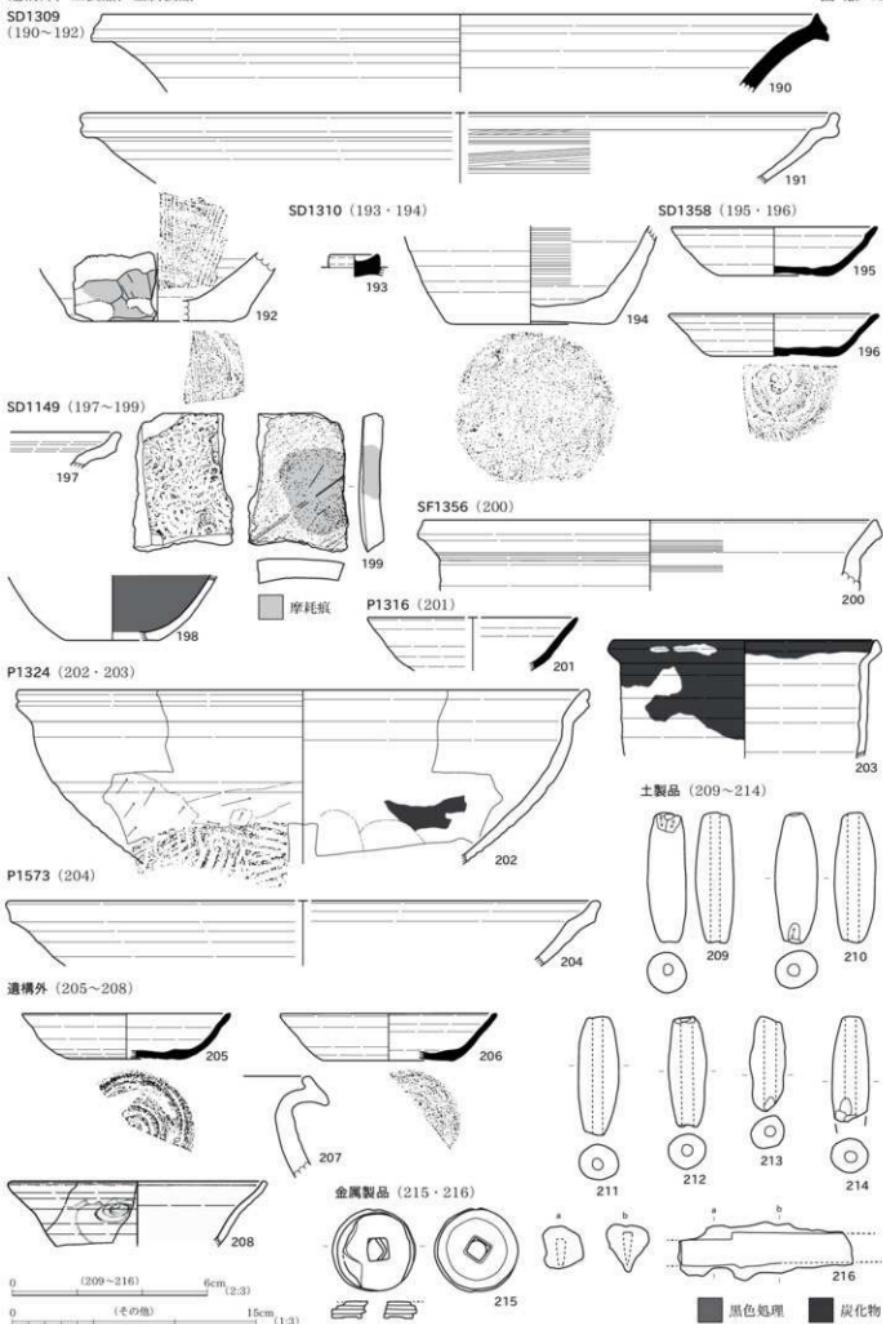


■ 摩耗痕
 0 (158~163) 10cm (1:2)
 0 (151) 40cm (1:8)
 0 (その他) 15cm (1:3)

図版 42

2015年度調査 遺物(1) SK1321・1322・1336・1355, SD1301・1303・1307・1308・1309







調査区遠景（南から）



調査区全景（上空から）





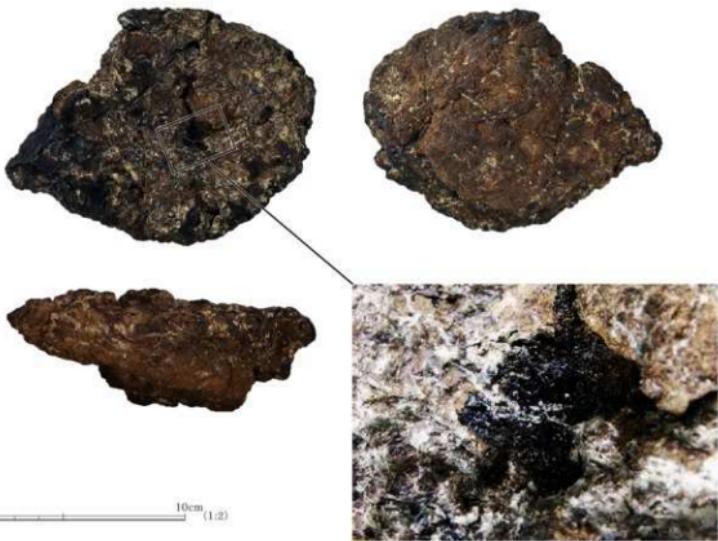
SK206 火葬土坑（西から）



SE225 漆器椀（146）出土状況（東から）



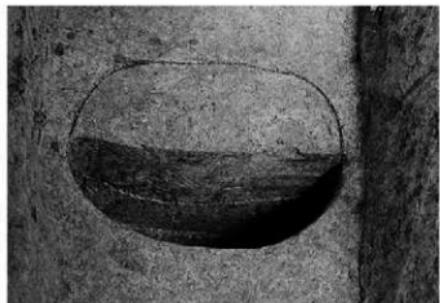
薪木道路出土古代土器集合写真



P114 出土 アスファルト塊 (150)



SB1 完掘(北東から)



P80 断面(南東から)



P70 断面(南東から)



P71 断面(南西から)



P66 断面(南西から)



P67 断面(南から)



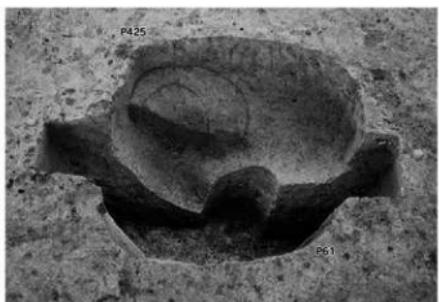
P68A 断面(南東から)



P68B 断面(南東から)



P61 断面(南から)



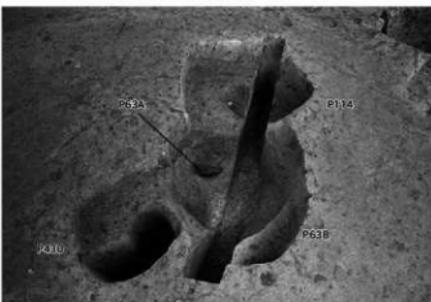
P425・61 断面(南から)



P390・62 断面(南西から)



P63B・114 断面(東から)



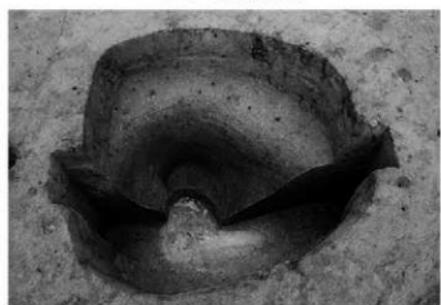
P430・63A・63B・114・完掘(南から)



P172・57 断面(南東から)



P422 断面(南から)



P52 完掘(南東から)



P53 断面(南西から)



P54 断面(南西から)



P232 断面(南から)



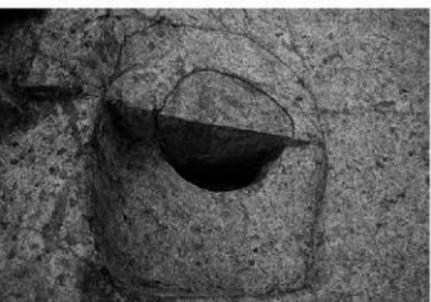
P230 断面(南東から)



P423 遺物出土状況(南東から)



P73 断面（南西から）



P74 断面（西から）



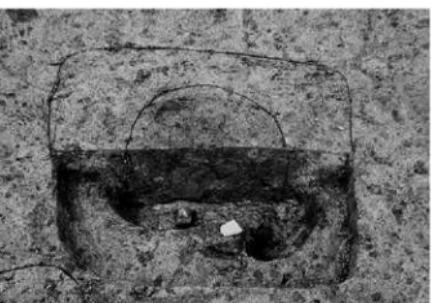
P75 断面（南東から）



P69 断面（南東から）



P64 断面（南西から）



P59 遺物出土状況（南東から）



P55 断面（南西から）



P49A・49B 断面（南西から）



P48A・B 断面(南東から)



P200・47・201 完掘(南西から)



P51 断面(南東から)



P56 断面(南東から)



P60 断面(南から)



P65 断面(南から)



P358 断面(南から)



P62・390、噴砂4 断面(東から)



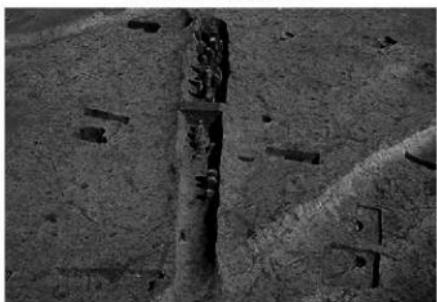
SD32 遺物出土状況（南東から）



SD32 遺物出土状況（南西から）



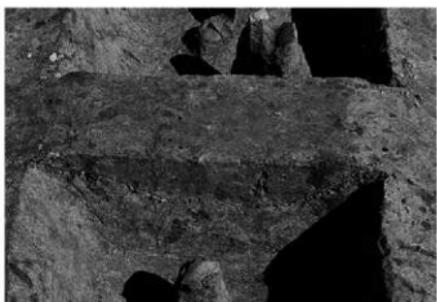
SD32 断面（南東から）



SD21 遺物出土状況（北東から）



SD21 遺物出土状況（北西から）



SD21 断面（南西から）



SD110 断面 B-B' (南東から)



SD110 遺物出土状況（北東から）



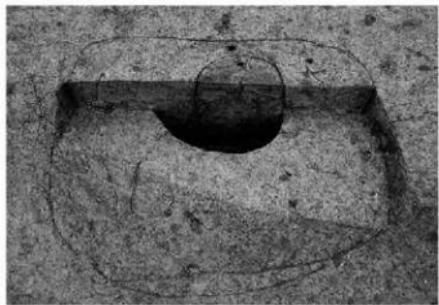
SB2 完掘(北東から)



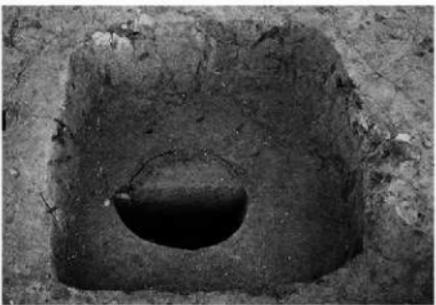
P87 遺物出土状況(南東から)



P93 断面(南東から)



P81 断面(北東から)



P82 断面(南西から)



P83A 断面(南西から)



P83B 断面(南西から)



P84 断面(南西から)



P85 遺物出土状況(南東から)



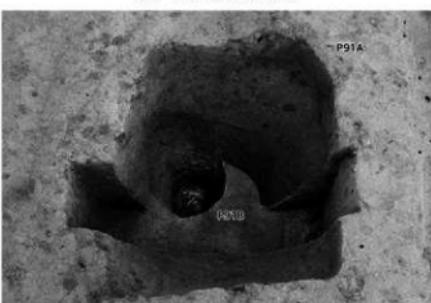
P86 完掘(南東から)



P92・416 断面(南西から)



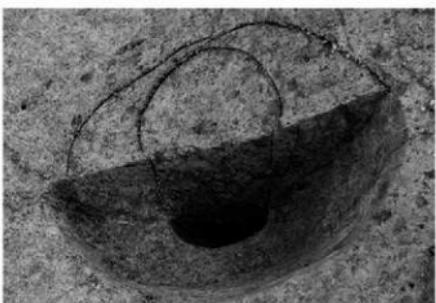
P91A 断面(南西から)



P91A・91B 完掘(南西から)



P90 断面(南東から)



P89 断面(西から)



P125 断面(南西から)



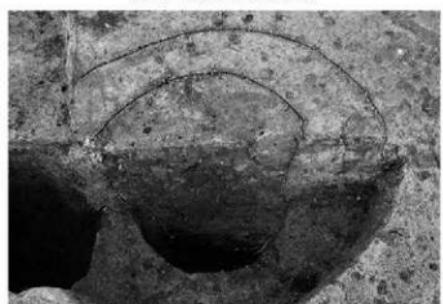
P88 断面(南西から)



SD111 遺物出土状況(西から)



SD111 断面(南東から)



P201 断面(南から)



P187 遺物出土状況(南東から)



SB3 完掘(南東から)



P189 断面(南から)



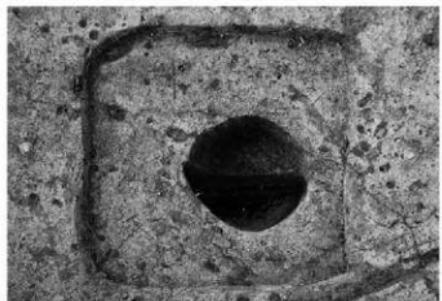
P190 断面(南から)



P205 断面(南西から)



P199 断面(南西から)



P202 断面(東から)



P196 断面(南西から)



SB4・5 完掘(東から)



P380 断面(北から)



P377 断面(西から)



P378 断面(南東から)



P371 断面(南から)



P379 断面(西から)



P376 断面(西から)



P374 断面(西から)



P369 断面(東から)



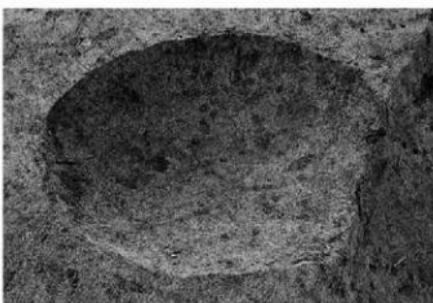
SK19 断面(北東から)



SK19 完掘(北東から)



SK26 剖面 (北西から)



SK26 完掘 (北西から)



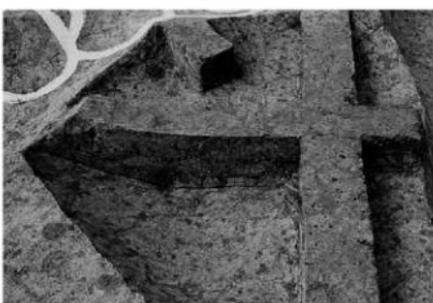
SK27 剖面 A-A' (南から)



SK27 完掘 (西から)



SK30 剖面 (東から)



SK40 剖面 B-B' (東から)



SK100 剖面 (南東から)



SK210, SD209 剖面 (北西から)



SK183 断面（西から）



SK183 遺物出土状況（西から）



SK206 断面（西から）



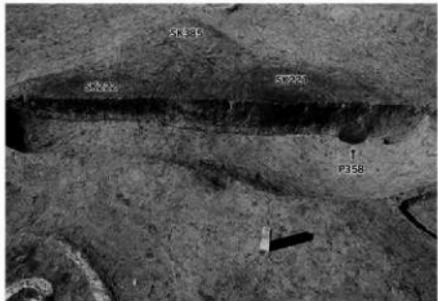
SK206 完掘（西から）



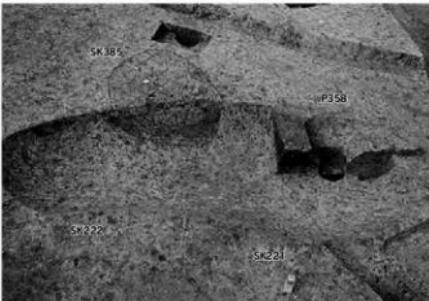
SK220・310 遺物出土状況（南東から）



SK220・310 完掘（南東から）



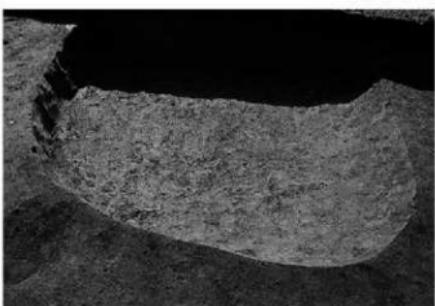
SK222・221、P358 断面（南から）



SK222・221、P358 完掘（北東から）



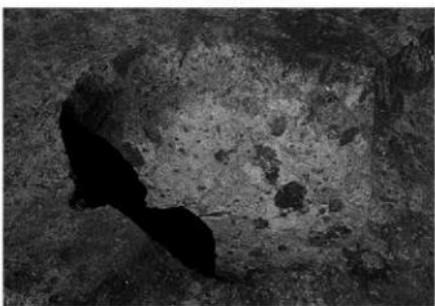
SK223 断面B-B' 遺物出土状況（南東から）



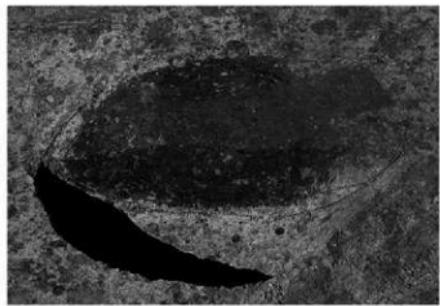
SK223 完掘（東から）



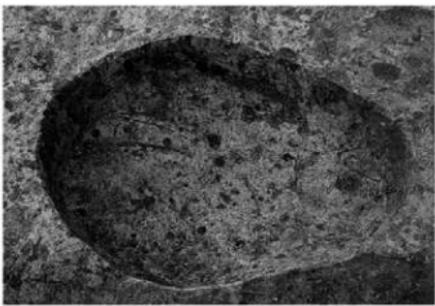
SK246 断面（南東から）



SK246 完掘（南東から）



SK251 断面（南東から）



SK251 完掘（南東から）



SK267 断面（南から）



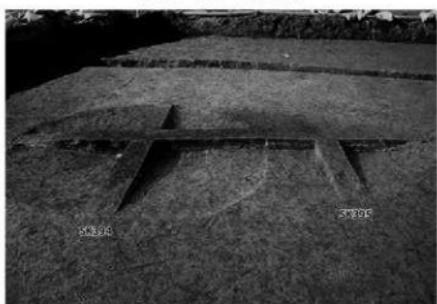
SK359 断面（南から）



SK385 剖面 A-A' (東から)



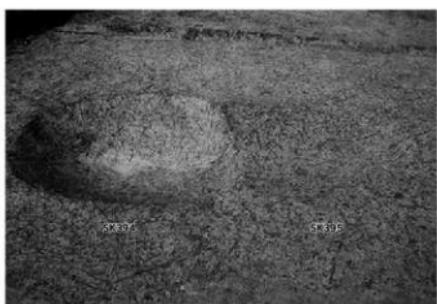
SK385 完掘 (東から)



SK394・395 重複状況 (南東から)



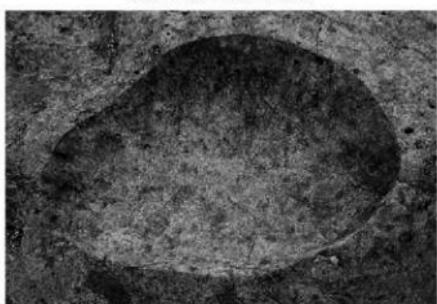
SK394 剖面 (南東から)



SK394・395 完掘 (南東から)



SK398 剖面 (東から)



SK398 完掘 (東から)



SD2 剖面 A-A' (北から)



SE225、SD35、SK428 断面（北東から）



SE225 水溜内遺物出土状況（北東から）



SE225 完掘（北東から）



SD3 断面 A-A'（北から）



SD5 断面（東から）



SD2 断面 B-B'・C-C' (北西から)



SD2 D-D' (東から)



SD4・10 断面 B-B' (東から)



SD3・7、SX11 断面 A-A' (西から)



SD9 断面 A-A' (北から)



SD13 断面 (東から)



SD15 断面 (西から)



SD20 断面 A-A' (西から)



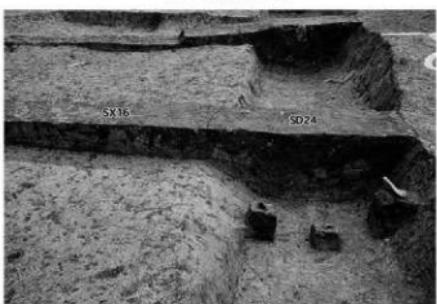
SD22 断面 A-A' (西から)



SD23 断面 (西から)



SX16 断面 (西から)



SX16、SD24 断面 (西から)



SD33 断面 (南から)



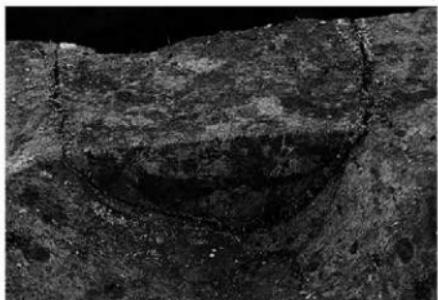
SD25 遺物出土状況 (西から)



SD35・34 断面 A-A' (東から)



SD37 断面 C-C' (南から)



SD38 断面（西から）



SD147・148 断面（南から）



SD147・148 断面（北西から）



SD188 断面（南東から）



SD219 断面（西から）



SD396 断面（東から）



SD400 断面（南から）



SX11 断面（西から）



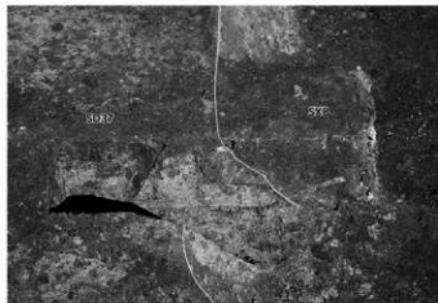
SX42・8 完掘(南から)



SX42 断面(南から)



SX42・8 断面(南から)



SD37、SX8 断面 A-A'(南から)



SD10、SX18 断面(北から)



SX31 遺物出土状況（南東から）



SX31 断面（南東から）



SX31 完掘（南東から）



SX39 断面（西から）



SX44 遺物出土状況（北東から）



SX149 断面（南から）



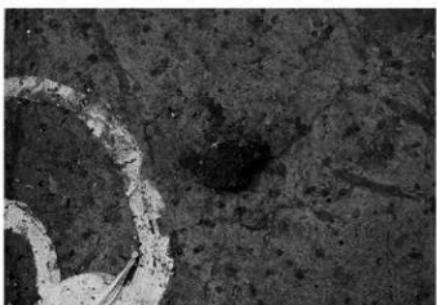
SX216・217 A-A'断面（南西から）



SX216・217 完掘（南西から）



SX150 剥離状況 (南から)



P114 アスファルト塊出土状況 (南から)



P114 アスファルト塊出土状況 (南から)



P410 遺物出土状況 (東から)



P410 剥離状況 (北から)



8U、7・8V 噴砂3 條出状況 (北東から)



下層確認 26-8T 噴砂3 剥離状況 (北東から)



下層確認 26-9T 噴砂3 條出状況 (西から)



5 ~ 7R, 5S, 7S 噴砂 4 検出状況 (西から)



7R 付近 噴砂 4 検出状況 (東から)



4 ~ 6O 噴砂 5 検出状況 (東から)



下層確認 26-10T 噴砂 5 断面 (東から)



5L 噴砂 6 検出状況 (西から)



下層確認 26-5T 噴砂 6 断面 (西から)



作業風景 (西から)



現地説明会 (南から)



噴砂5試料(site1・2) 採取状況(北から)



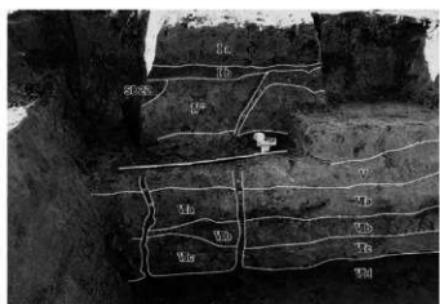
噴砂5試料(site1) 採取位置(西から)



噴砂5試料(site2) 採取位置(東から)



噴砂4試料(site3) 採取状況(東から)



噴砂4試料(site3) 採取位置(東から)



噴砂4試料(site4) 採取状況(北西から)



噴砂4試料(site5) 採取位置(西から)



噴砂3試料(site6・7) 採取状況(西から)



調査区遠景（北から）



調査区全景（上空から）



SK1304 完掘 (北東から)



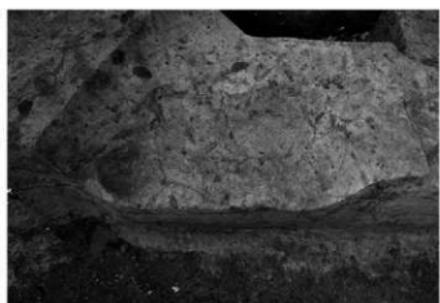
SK1304 断面 (北東から)



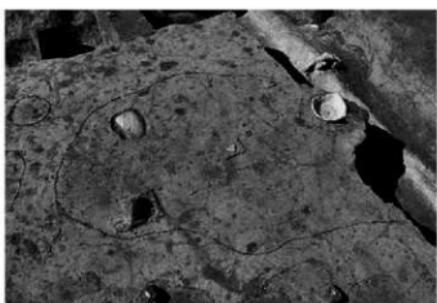
SK1322 断面 (南東から)



SK1322 遺物出土状況 (南東から)



SK1322 完掘 (南東から)



SK1336 掘出状況 (東から)



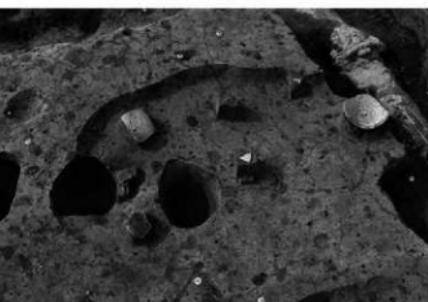
SK1336 断面 C-C' (南から)



SK1336 断面 A-A' (西から)



SK1336 P1334・1335 新旧関係 (東から)



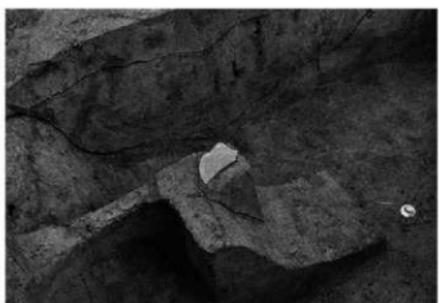
SK1336 完掘・遺物出土状況 (東から)



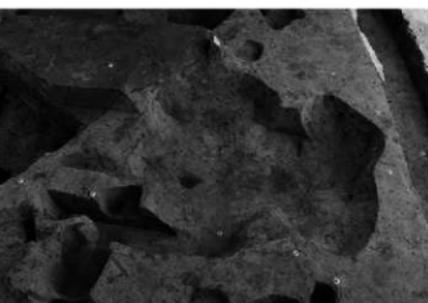
SK1355 断面 A-A' (南西から)



SK1355-P2 断面 B-B' (南西から)



SK1355 須恵器出土状況 (北西から)



SK1355 完掘 (南西から)



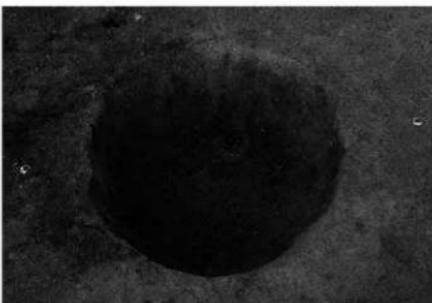
SK1575 断面 (東から)



SK1575 完掘 (東から)



SK1576 剖面（西から）



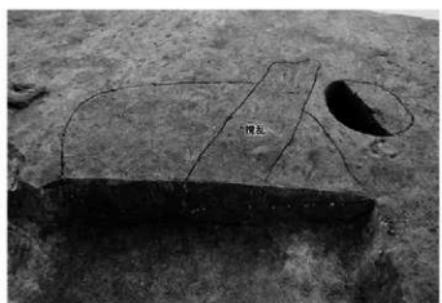
SK1576 完掘（東から）



SK1577 剖面（北から）



SK1577・P1500・1519 完掘（北から）



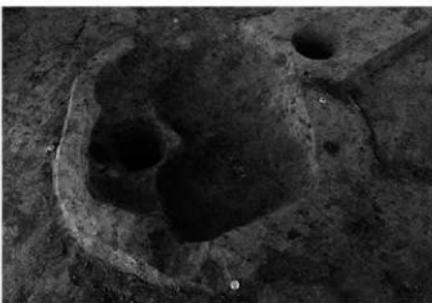
SK1578 剖面 A-A' (南東から)



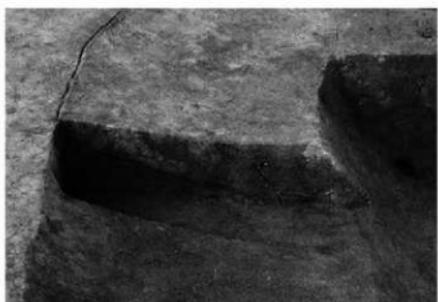
SK1578 断面壁面 (北西から)



SK1579 剖面 (南から)



SK1579 完掘 (東から)



SK1580 剖面 (南から)



SK1580 SD1149 新旧関係 (南から)



SK1580 完掘 (北西から)



SD1301・1302・1303 掘出状況 (北西から)



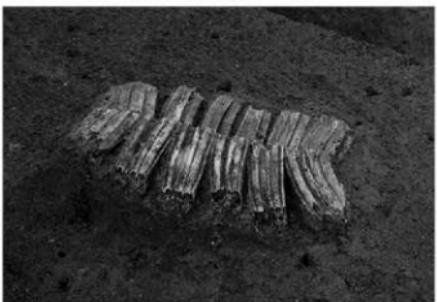
SD1301 剖面 A-A' (南西から)



SD1301 剖面 B-B' (南西から)



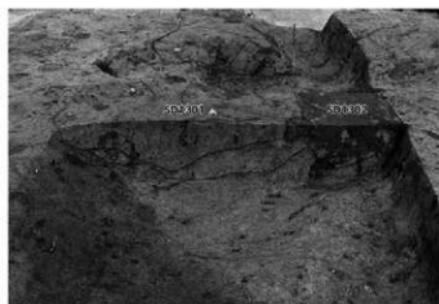
SD1301 剖面 C-C' (南西から)



SD1301 8AA13 馬臼齿出土状况 (南西から)



SD1301・1302・1303 完掘(北西から)



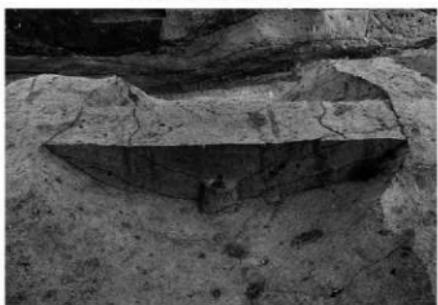
SD1302・1303 断面 A-A' (南西から)



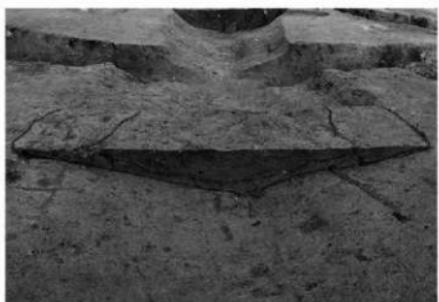
SD1302 断面 B-B' (南西から)



SD1302 断面 C-C' (南西から)



SD1303 断面 B-B' (西から)



SD1303 断面 C-C' (南西から)



SD1303 断面 D-D' (南西から)



SD1307 完掘 (南から)



SD1307 断面 B-B' (北西から)



SD1307 断面 C-C' (南東から)



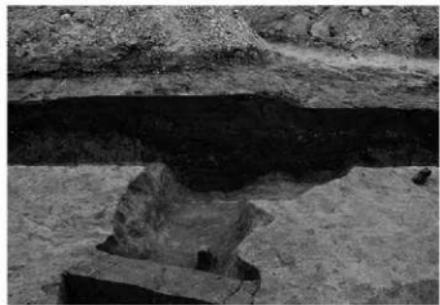
SD1307 断面D-D'(南東から)



SD1307 9Y 遺物出土状況(北西から)



SD1308・1309・1376 完掘(北西から)



SD1308 断面A-A'(南西から)



SD1308 断面B-B'(南から)



SD1308 断面 C-C' (西から)



SD1309 断面 B-B' (東から)



SD1309 断面 E-E' (東から)



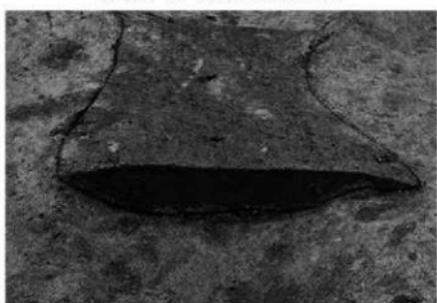
SD1309 断面 F-F' (西から)



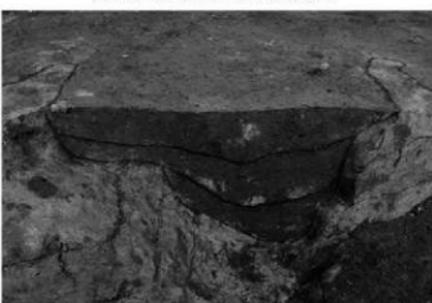
SD1309 BX 波板状落ち込み (北から)



SD1309 8-9X 遺物出土状況 (東から)



SD1310 断面 A-A' (南から)



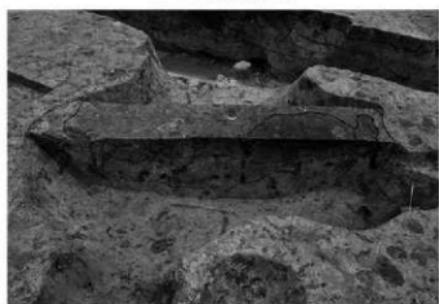
SD1310 断面 C-C' (南東から)



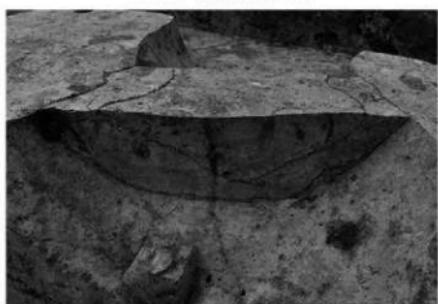
SD1323 断面(南から)



SD1325 掘出状況(南東から)



SD1325 断面A-A'(南東から)



SD1325 断面B-B'(南東から)



SD1358 断面(南東から)



SD1358 遺物出土状況(南西から)



SD1379 断面A-A'(北から)



SD1379 断面B-B'(南から)



SD1379 完掘(南から)



SD1149 断面 B-B' (南から)



SD1149 断面 D-D' (南から)



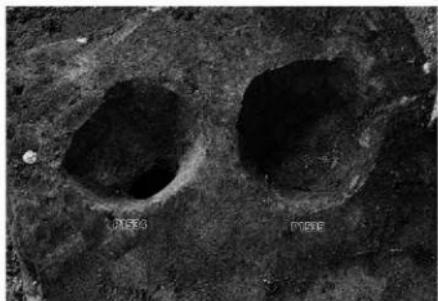
SD1149 遺物出土状況(南から)



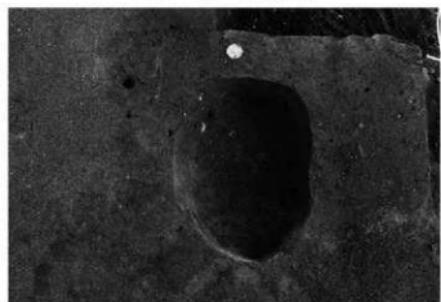
SA1581 完掘(南から)



SA1581-P1534 断面(北から)



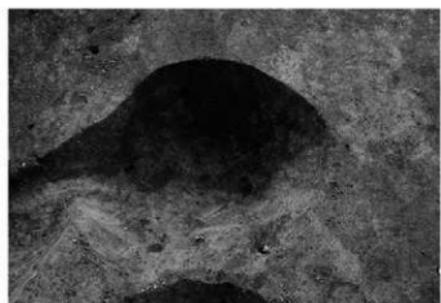
SA1581-P1534・1535 断面(北から)



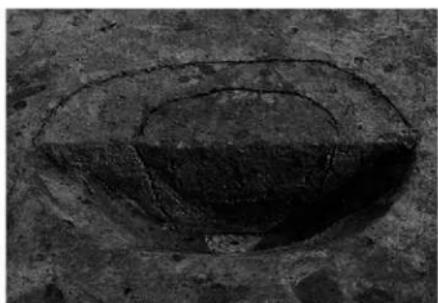
SA1581-P1536 完掘(北から)



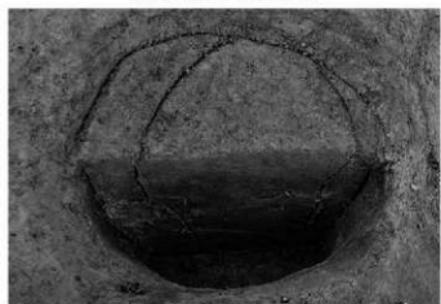
SA1581-P1519, SK1577 断面(北から)



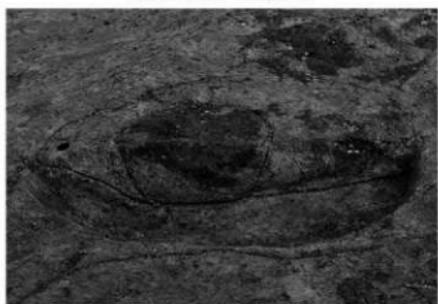
SA1581-P1519 完掘(北から)



SA1581-P1520 断面(西から)



SA1581-P1568 断面(西から)



SA1581-P1460 断面(西から)



SF1356 完掘(上空から)



SF1356 完掘(東から)



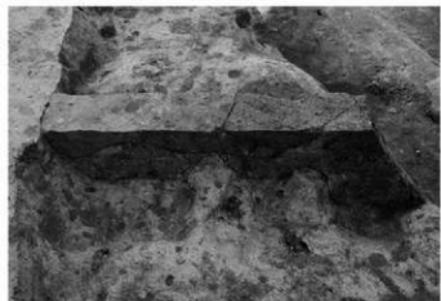
SF1356 掘出状況(東から)



SF1356-SK1 断面(西から)



SF1356-SK2 断面(東から)



SF1356-SD1 断面 B-B' (東から)



SF1356-SK3 断面 (東から)



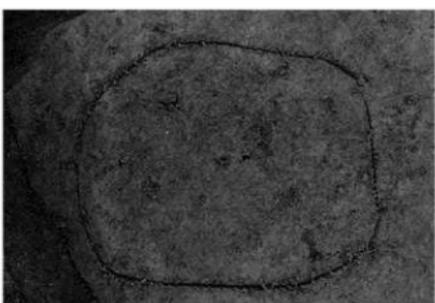
SF1356-SD1 断面 C-C' (東から)



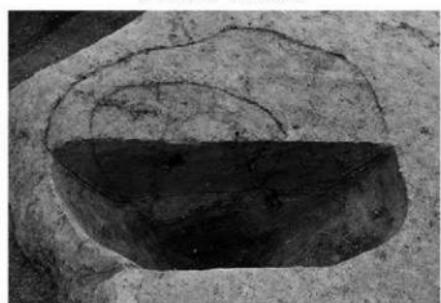
SF1356-SK4 断面 (東から)



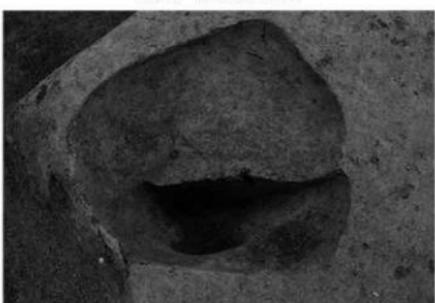
SF1356-SK5 断面 (東から)



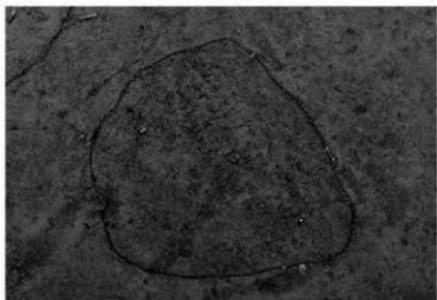
P1311 検出状況 (南から)



P1311 断面 (南から)



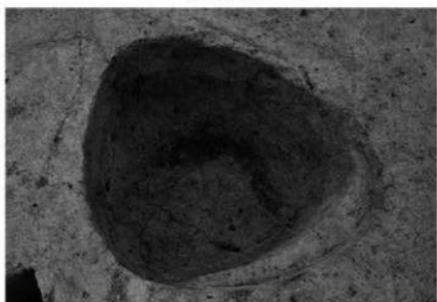
P1311 完掘 (南から)



P1312 検出状況（南西から）



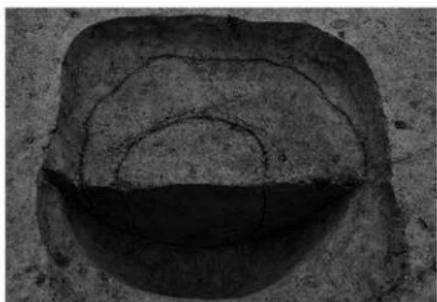
P1312 新面（西から）



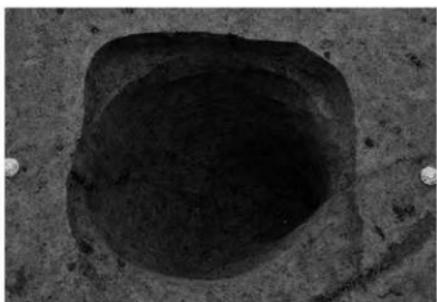
P1312 完成（南西から）



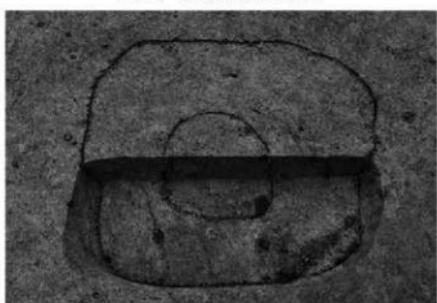
P1313 断面（南西から）



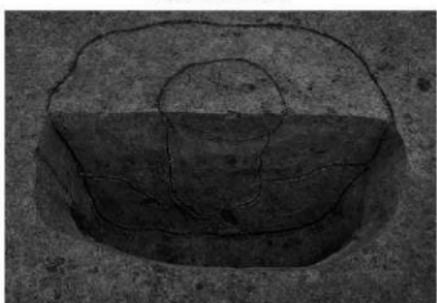
P1313 柱痕検出状況（南西から）



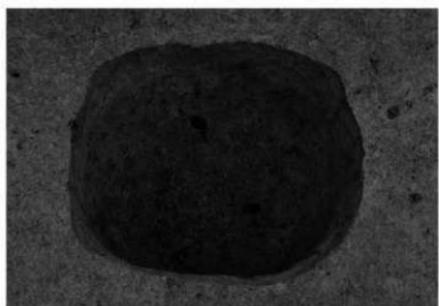
P1313 完成（南西から）



P1314 柱痕検出状況（南西から）



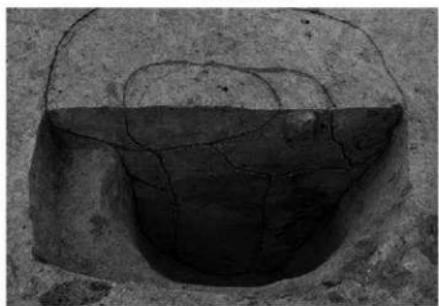
P1314 断面（南西から）



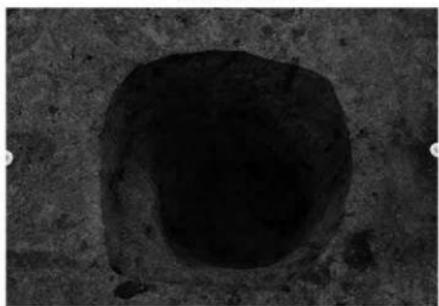
P1314 完掘(南西から)



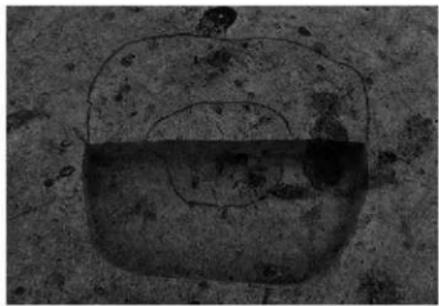
P1316 柱痕検出状況(南西から)



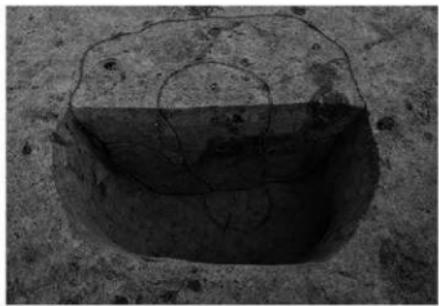
P1316 断面(南東から)



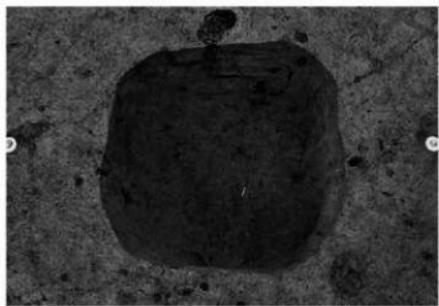
P1316 完掘(南東から)



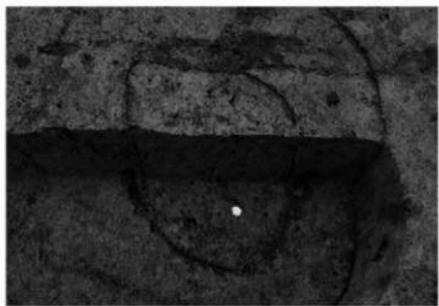
P1317 柱痕検出状況(南西から)



P1317 断面(南西から)



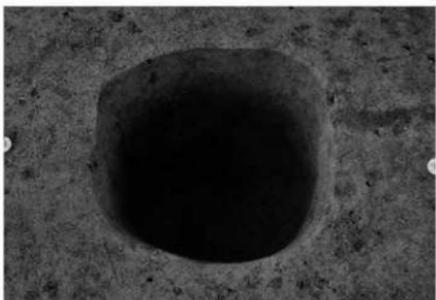
P1317 完掘(南西から)



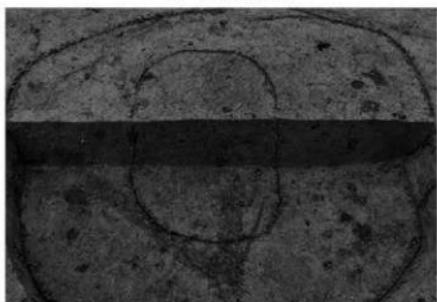
P1319 柱痕検出状況(南東から)



P1319 断面(南東から)



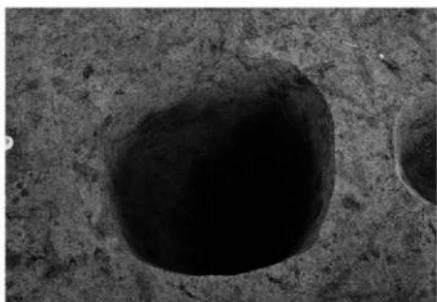
P1319 完掘(南東から)



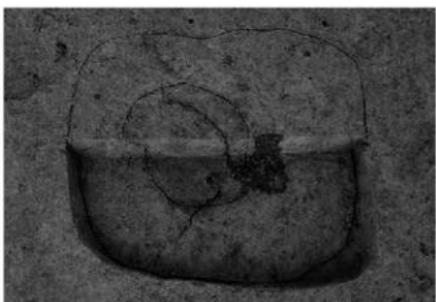
P1320 柱痕検出状況(南西から)



P1320 断面(南西から)



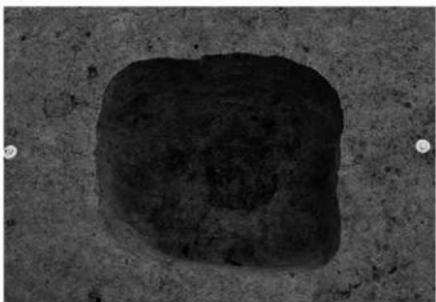
P1320 完掘(南西から)



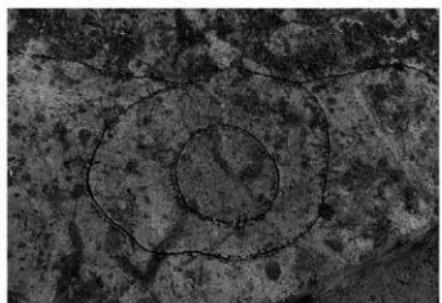
P1362 柱痕検出状況(南東から)



P1362 断面(南東から)



P1362 完掘(南東から)



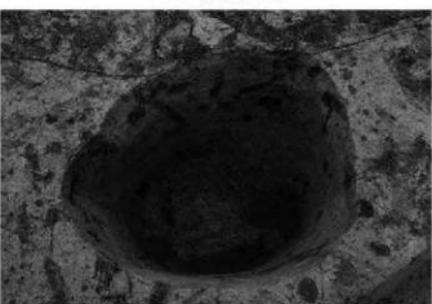
P1375 検出状況（北から）



P1375 断面（北から）



P1375 遺物出土状況（北から）



P1375 完掘（北から）



P1324 断面（北東から）



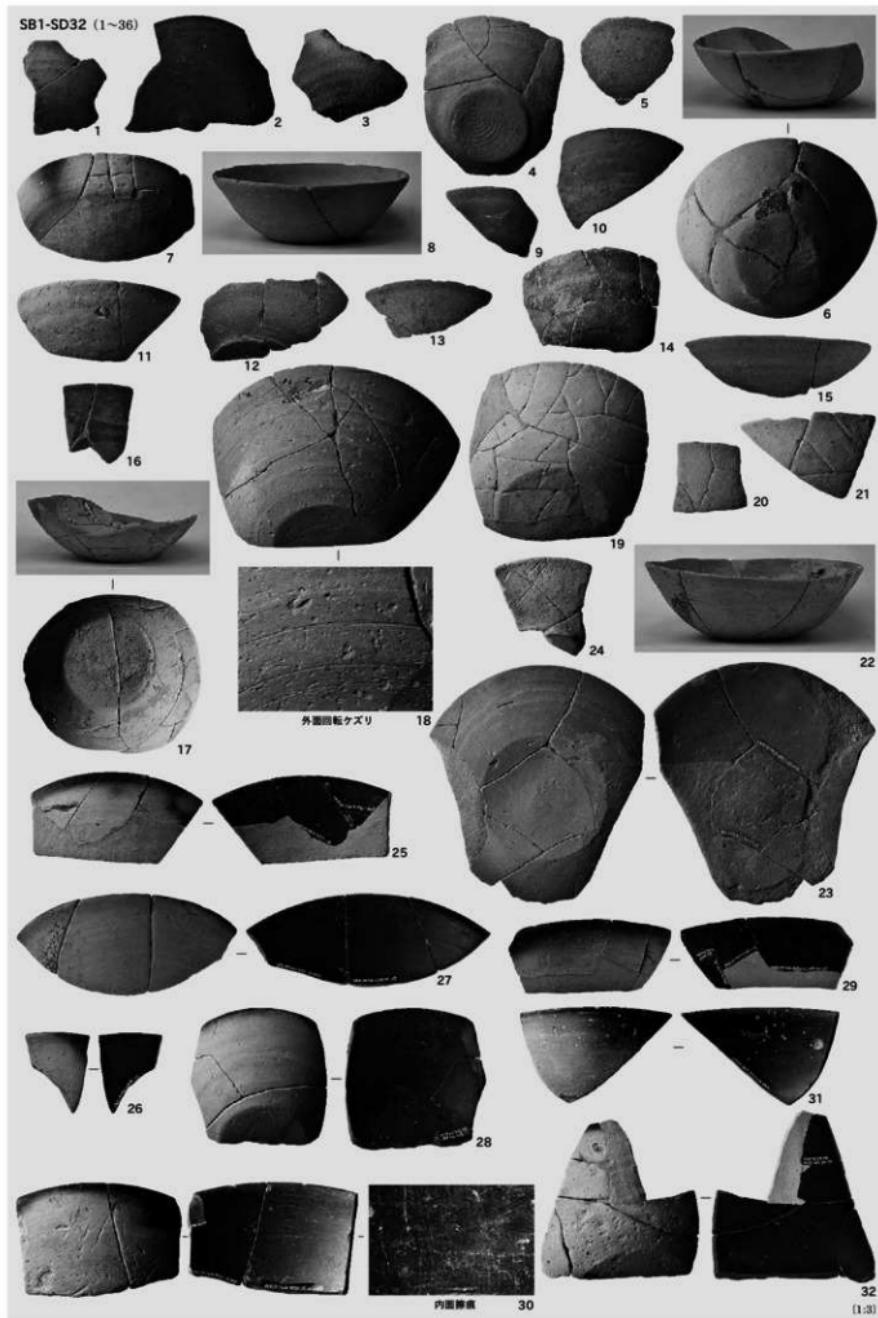
P1324 完掘（北東から）

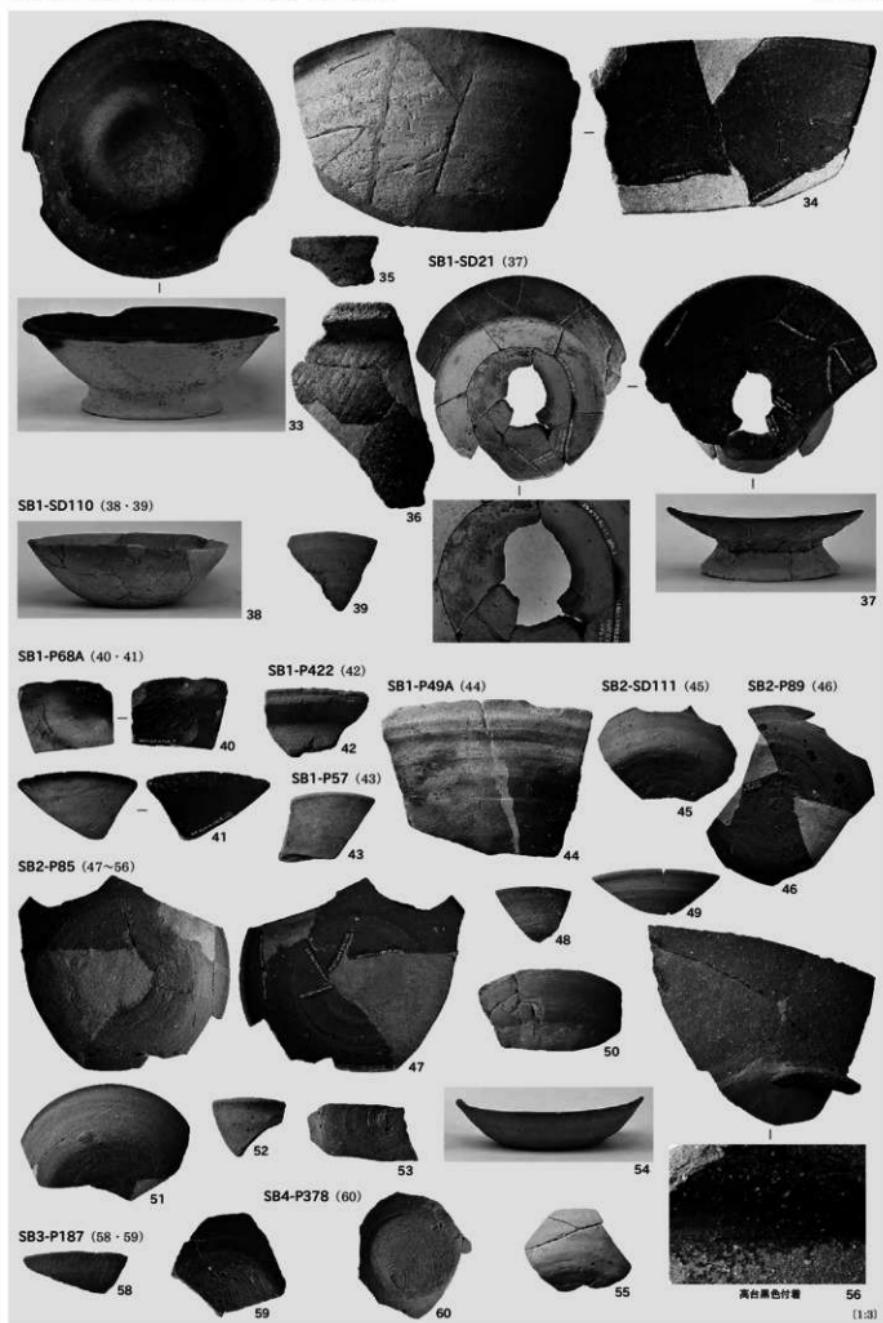


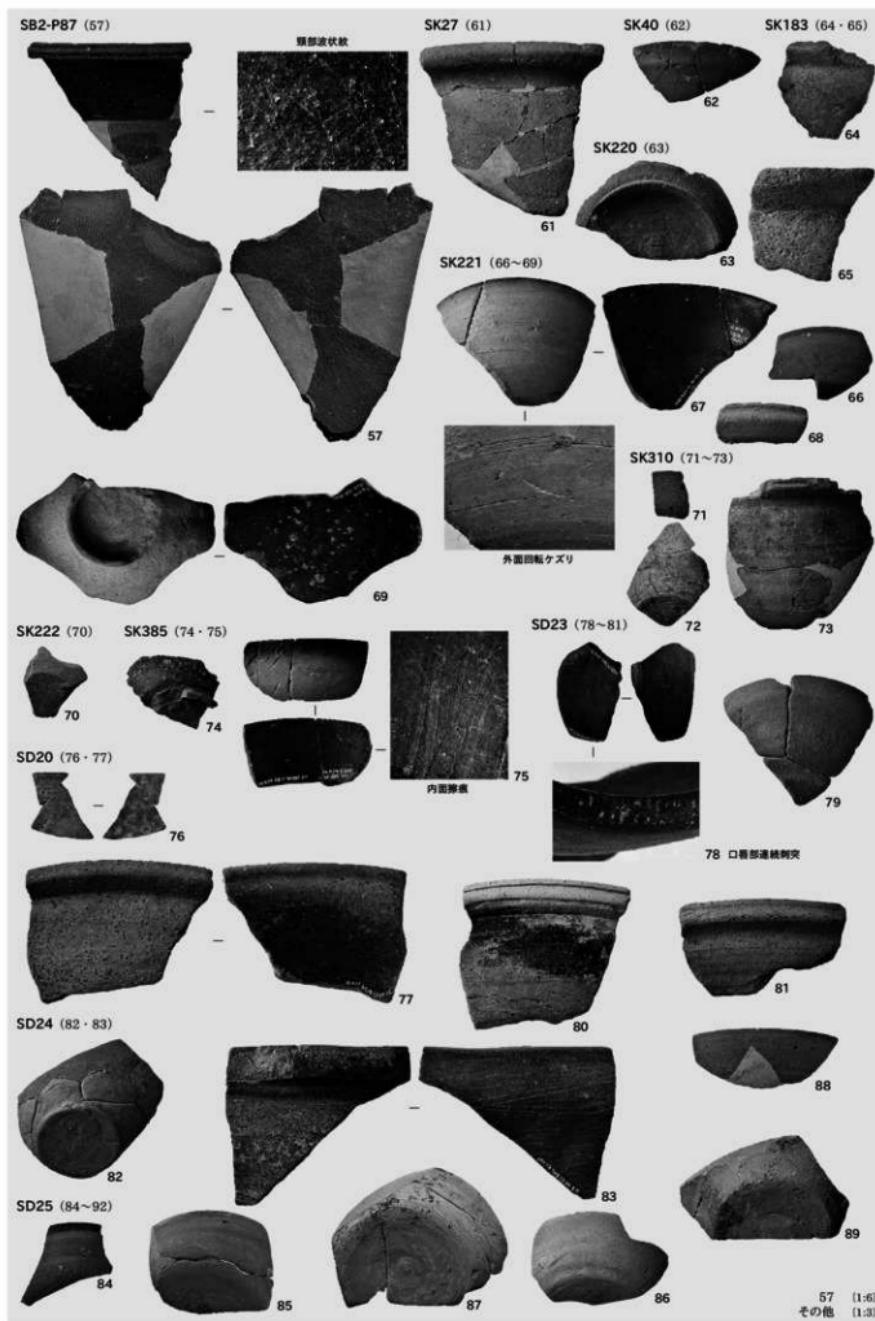
噴砂1 断面（北東から）

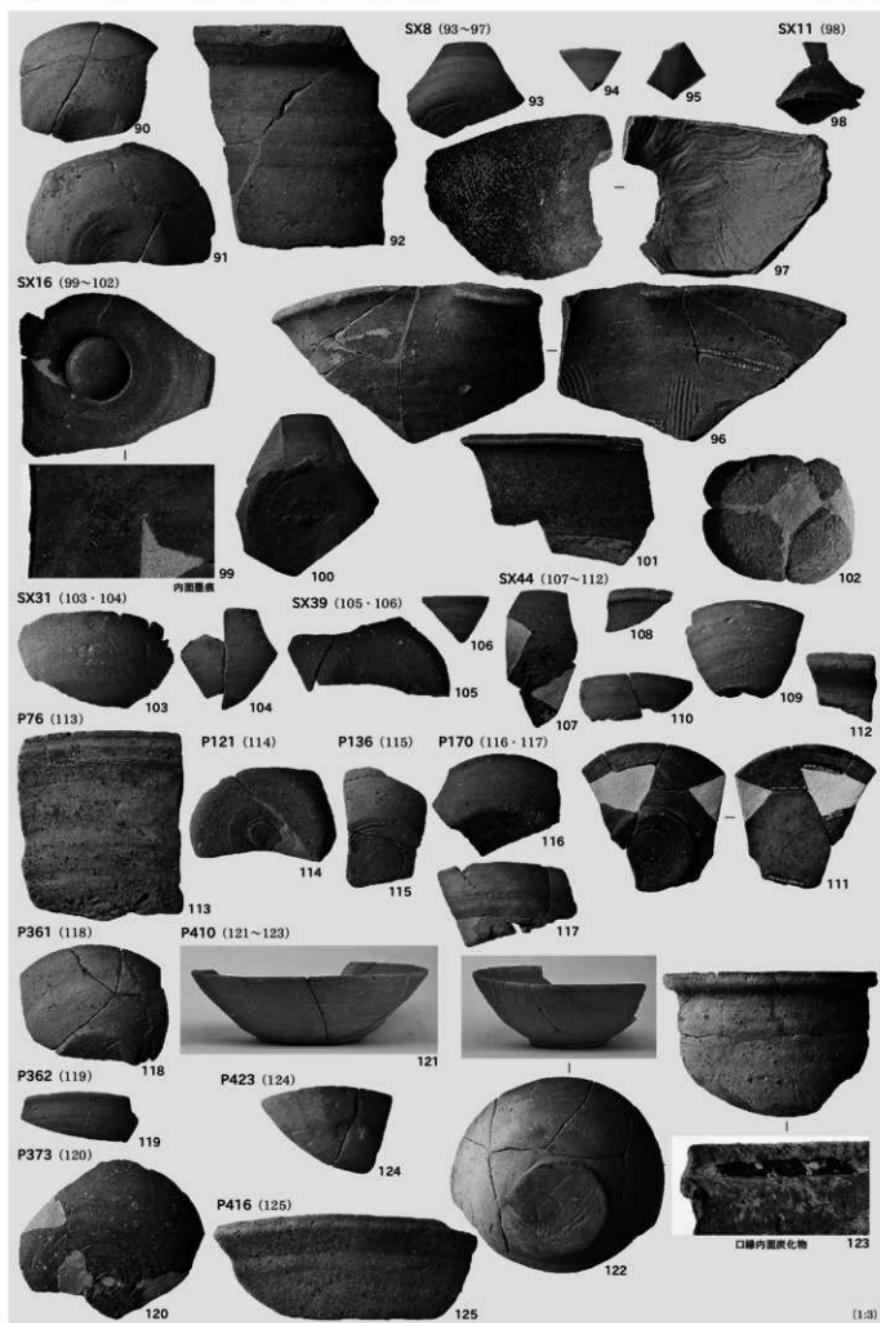


噴砂2 断面（北東から）

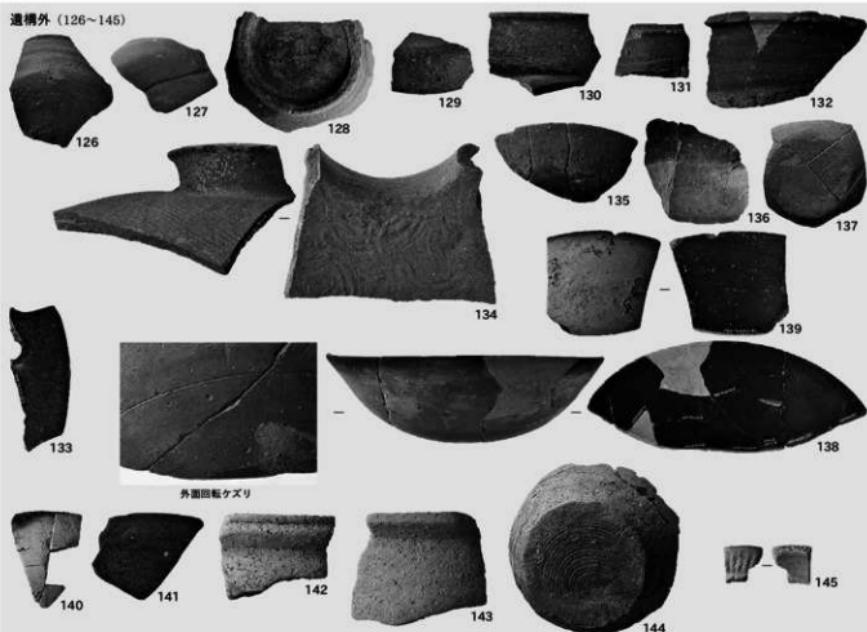




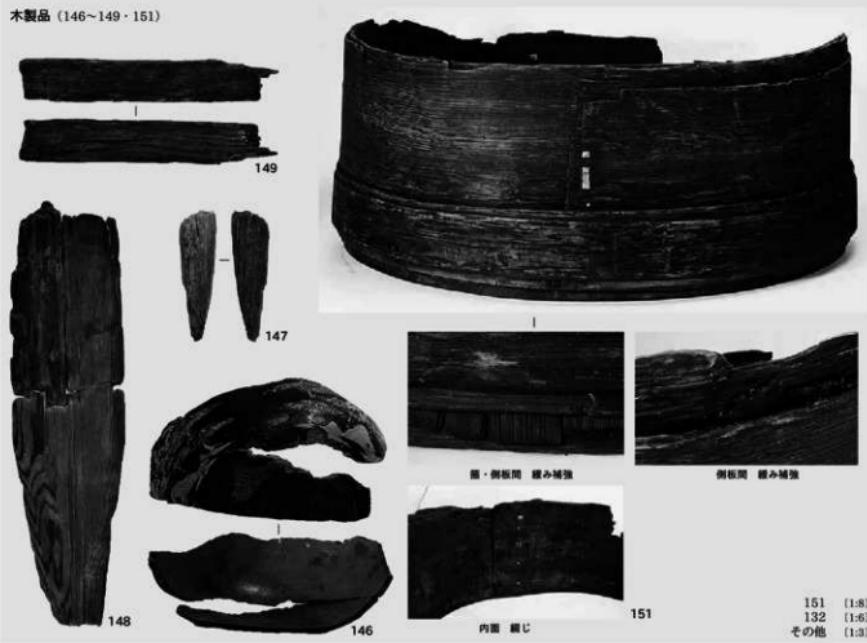




遺構外 (126~145)



木製品 (146~149・151)



石製品 (152~157)



鉄製品ほか (158~163)



SK1321 (164~166)



SK1322 (167)



SK1355 (171・172)

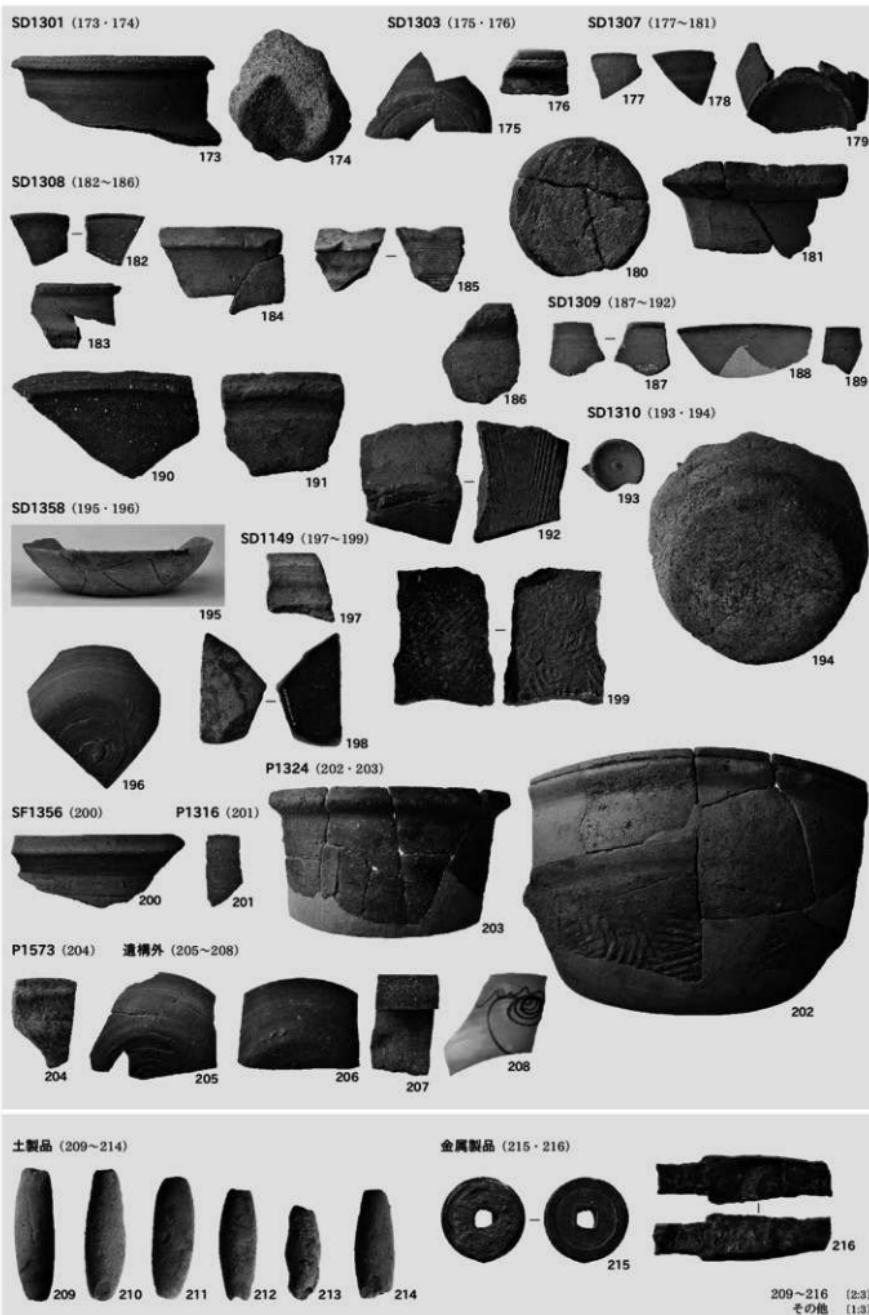


SK1336 (168~170)



158~163・169 (1:2)
170 (約1:3)
その他 (1:3)

図版 97



209~216 (2:3)
その他 (1:3)

報告書抄録

ふりがな	かぶらぎいせき						
書名	熊木遺跡						
副書名	一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書						
巻次	XIII						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第277集						
編著者名	鈴木俊成・荒川隆史(以上、埋文事業団)、石橋夏樹・村上章久・高橋均(以上、株式会社帆立組)、伊藤茂・安、昭煥・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林駿一・Zaur Lomtatidze・Inezza Jorjoliani・黒沼保子・中村賢太郎(以上、株式会社ハオ・ラボ)、齐藤紀行(パリノ・サーヴェイ株式会社)、酒井英男・石田桃子・中原吉紀(以上、富山大学理学部)、菅原明日香(青山学院大学文学部)、ト部厚志(新潟大学災害復興科学研究所)						
編集機関	公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	2018(平成30)年3月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
熊木遺跡	新潟県阿賀野市 大字福越字熊木 1974ほか	15223	405	37°48'38"E 139°13'15"S 139°13'17"S	20140728~ 20141130 20150907~ 20151117	延べ 6,963m ²	一般国道49号 阿賀野バイパス 道路建設
所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物			特記事項
熊木遺跡	集落	平安時代	掘立柱建物5・土坑・溝・ビット	須恵器: 灰陶杯・有台杯・杯蓋・壺蓋・壺・甕・双耳瓶・甕・横瓶・墨書き土器・土師器: 無台碗・有台碗・有台皿・無台皿・盤・小盤・長胴甕・鍋・黒色土器: 無台碗・有台碗・鉢・有台皿・盤・耳皿・灰釉陶器: 盆・その他: アスフルート塊			面積140m超の 大型掘立柱建物 ・墨書き土器「廣」 ・黒色土器有台耳皿
	集落	鎌倉・室町	井戸1・土坑・火葬 土坑1・溝・ビット	珠洲焼: 片口鉢・甕・壺器系陶器: 甕・ 木製品: 曲物・漆器椀・石製品: 砥石・硯・ 金属製品: 刀子・釘・鉢・貨幣・土製品: 土鍋・ 中・近世: 陶磁器			
	生産域	中世~近世・近代	掘込田・土坑・溝				
要約	遺跡は海岸から約20kmの越後平野東部にあり、阿賀野川右岸の標高10m前後の沖積地に所在する。調査区の南隣りには古代期に流路化していたであろう阿賀野川の支流が存在し、遺跡はこの支流の右岸自然堤防微高地に立地している。調査では古墳時代から近・現代までの遺物が出土したが、遺構は古代以降のもので、中心時期は平安時代(9世紀後葉)である。古代は5棟の掘立柱建物を検出し、なかには140m ² を超える大型建物が存在する。遺物は土器器種を中心に須恵器の各器種や黒色土器に混じり、稀少品の耳皿・灰釉陶器皿・アスフルート塊などがわずかに出土したが、建物が大きいことから検出した建物群は、郡(沼重郡)の閑連施設ではない在地有力者の居宅などが想定される。また、立地要因については、当時機能していた阿賀野川支流に近く、内水面交通の要所として位置づけが可能か否か、周辺地区的調査に期待するところが大きい。中世以降は田畠を中心とする生産域と考えるが、13~14世紀頃の井戸や火葬土坑の検出は、近くに集落の存在を考えさせられる。						

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第277集

一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 XIII

熊木 遺跡

2018(平成30)年3月20日印刷

2018(平成30)年3月30日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒956-8570 新潟県新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製作 株式会社ウイザップ

〒950-0963 新潟県新潟市中央区南出来島2丁目1番25号

電話 025(285)3311

新潟市埋蔵文化財調査報告書 第27号 「鶴木道路」 正面

ルート番号		付送合	地	地
34	13	鶴丘 (155)	鶴 (155)	
35	1	由東平野	北東平野	
38	10	山脚	山脚	
39	21	山頂	S21JR	
39	19	山頂付近化物を多量に	山頂付近化物を多量に	
39	24	水路 (147)...	水路 (151)...	
30	8・9	SH1-251, SH1-SH10, SH2-PH2, SH30, SH2・4・7・10・12・13・14, SH31, SH1-50116, SH2-PH1・81, SH30・131, SH2・4・7・10・12・13・24, SH11, SH14・156		
回数25	1段目左	平糸内キャブション「P1334」	平糸内キャブション「P1334」	
回数16	2段目左	SH102・1303 斜面A-A' (南西から)	SH1301・1302 斜面A-A' (南西から)	